

ハード・ガンズ①

《特務機関E X X P》

著：秋月しょう一郎



第1下巻

目次

第七章 拉致？	
第一節	2
第二節	17
第三節	21
第四節	27
第五節	39
第六節	46
第七節	54
第八章 貨物船で	
第一節	60
第二節	65
第三節	70
第四節	75
第九章 脱出、そして追撃	
第一節	82
第二節	87
第三節	88
第四節	91
第五節	101
第六節	109
第十章 コンテナ置き場での死闘！？	
第一節	114
第二節	121
第三節	124
第四節	129
第五節	133
第六節	140
第七節	142
第八節	145
第九節	156

エピソード	
エピソード	170
自認認証：表明表記	
自認認証：表明表記	182

第七章 拉致？

第一節

予測できない不測の事態、その出来事が起こったのは、正月三箇日を過ぎて一月四日の潜入捜査第四日目、午後六時四十分頃であった。

いま、用務員室の部屋の角に隠れて、関谷莞爾がまのあたりにしている光景は、気を失って連れ去られる高崎ナオと二階堂ゆかりの姿である。

それを彼が目撃したのは、盗聴器のイヤホンから応接室での会話を聞いたその数分後、一人は屈強そうな筋骨隆々とした大男、もう一人は、やせ型の顔の頬がこけた髭面の男、この二人が、ナオとゆかりをそれぞれの肩に担ぎあげて、今どこへともなく連れ去ろうとしている。

そして、その男達と共に、このストリップ劇場のオーナー宮坂と支配人の新見川が、その顔に不敵な笑みを浮かべながら、早足でついていく。

一体、奴らは、これからどこへ行くのか？

彼らは、関谷が居る用務員室の横を素通りし、店の裏通路を抜けると、意識のないナオとゆかりをこのストリップ劇場の裏の従業員用駐車場まで運びこみ、そのままその駐車場に停車していた一台の銀色のトラックに二人を担ぎこみ、次には手際よくロープでその体を縛り上げ、荷台の中へと寝かし込んでいた。

だが、その一部始終を、関谷は用務員室から出て気付かれる事なく接近しながら、今、建物の物陰に隠れて、その顔にだいぶ焦りの色を見せつつ、その現場の光景を確かにその目で見ていた。

これは、明らかに拉致だ！

その光景を目撃したとき、特務隊員としての彼は、その心臓に高鳴りを覚える。

この状況を、一体どうすればいいのか？

このままでは、ナオとゆかりが連れ去られてしまう。

そう思うと、関谷は、職務も忘れてオロオロとする以外、他に方法がなかったかの様だ。

しかし、今、何故このような状況になっているのか？

その事を話すには、まず、時間をさかのぼって語った方がいいだろう。

始めは、今日一月四日の朝九時半、ナオ、ゆかり、関谷の三人は、何時ものように第四日目の潜入捜査に乗り出すにあたり、ストリップ劇場から少し離れた場所にある小さ

な空き地の覆面車輛の中で、今現在、張り込み隊の池沢元警部補と他の捜査員を交えて事前確認が行われていた。

その事前確認の中で、ナオ、ゆかり、関谷の三人には、池沢元警部補の方から盗聴器の使用に関する説明がある。

「元さん、これがその例の盗聴器ね？」

いま、二階堂ゆかりが手にとって見ているのは、超小型のマイク型盗聴器だ。

黒く手のひらにすっぽりと収まってしまうほど小さく、そして軽い。

その盗聴器を、手で持っていじくりまわしながら、ゆかりは池沢の顔をしげしげと見る。

すると池沢は、

「そうだよ」

といて、ゆかりに短く答えていた。

そして、

「それはね、ゆかりちゃん、特務機関の上層部が用意した高性能盗聴器だ。今日は、それをストリップ劇場の重要と思われる場所に設置して、君たちに勅使河原や店の従業員の会話を盗聴してもらいたいと思っている。この盗聴器の使用が認められるのは、特務機関の人間だけだ。だから、君たちは、今日からこの盗聴器を有効活用して、潜入捜査をすすめてもらいたいと思っているんだ。それに、受信機はこれだよ、このダイヤルを回すと、十個あるうちの好きな盗聴マイクからの声が拾える。使い方は判るね、さっき説明した筈だから。今日は、これを持って潜入捜査にあたってもらいたいと思っている。でも、くれぐれも気をつけてくれよ、盗聴器をセットするときには、店の従業員に悟られないようよろしく頼む。それじゃ、今日の潜入捜査、頑張ってくれ、オレたちも、バックアップ頑張るから」

池沢元警部補はそう言うと、ゆかりを含め、ナオや関谷にも士気を鼓舞する言葉を投げ掛けていた。

特務機関の潜入部隊、ナオ、ゆかり、関谷の三人に、盗聴器の使用が認められたのは、十二月三十一日に、勅使河原に関する余罪の一端が明らかになっていたからだ。

勅使河原に、偽ブランド商品販売の疑いがある。

その報を受けると、警視庁と特務機関の責任者は、もっと詳細な情報を得たいと会議の席で決定し、潜入捜査に盗聴器による会話の傍受を敢行する事を推奨したのであった。

潜入捜査に、盗聴器を導入する案は、この潜入捜査が始まる前から持ち上がっていた案であった。

しかし、最初のうちはナオやゆかり、関谷をストリップ劇場に潜入させ、様子を見、その後の捜査状況次第で、盗聴器の使用を認めるという案に落ち着いたのだ。

そこで今回、勅使河原の余罪に関する重要な情報がもたらされたことにより、両機関上層部は潜入部隊に、盗聴器の使用を特に推奨したという経緯がある。

だから今日ナオたちは、仕事の合間に、その手渡された盗聴器を使って、ある意味、諜報活動をしなければならない。

今日から更に、本格的な潜入捜査が、始まりを迎えるということでもあった。

午前十時四十分、ストリップ劇場の従業員を集めて、朝礼が行われた後、さっそくナオ、ゆかり、関谷は、仕事の合間を盗んで盗聴器の設置に乗り出していた。

盗聴器を設置する上で、重要な場所がいくつかある。

それは、従業員が集まる事務室と、ストリップの踊り子たちが使っている楽屋の控え室、それにもっとも盗聴の必要性が感じられる応接室だ。

応接室は、宮坂義行こと勅使河原が支配人の新見川と何やら何時も話している場所だけに、重要な情報が得られる可能性が高い場所と言っている。

盗聴器の設置に関しては、ここはナオとゆかりの立場、つまりパートの清掃員として掃除をすると称すれば、いつでもそれら事務所や踊り子の控え室、そして応接室まで入り込めるので、盗聴器を仕掛けるのは簡単だった。

その為、ナオやゆかりは、今、掃除に精を出しながら、その片手間に各室内の目立たぬ場所に盗聴器を次々に仕掛ける算段を始めている。

彼女たちが最初に盗聴器を仕掛けたのは、事務所だった。

ナオとゆかりは、仕事始めそうそう便所掃除を行った後、それからさっそく事務所の掃除に入る。

事務所には今のところ、二人の事務員以外だれも居ない。

二人はそれを確認すると、その事務所の事務機の裏に一つの盗聴器をセットしていた。

これで、事務所に集う、従業員の会話が盗聴できる筈だ。

盗聴器は、高感度マイクなので、小声で話していようとその会話の内容は手にとるよりに判る筈である。

そして次は、踊り子の控え室。

今の時間は十一時過ぎだ、その為、もう既にストリップの開演を迎えており、控え室では慌ただしく殆ど半裸の女性たちが集まり、踊りの出番を待って顔のメイクなどを念入りに直している光景が目についていた。

そんな中を、ナオとゆかりは失礼して、やはり掃除を始める。

踊り子達が集う、この控え室は広いので、盗聴器は二個設置することになっていた。

その部屋には、鏡台が壁にそって五つと、椅子がやはり五つ置いてある。

そして見れば判るが、室内の半分は大理石じみた白い床の広間になっており、それから奥の残り半分は畳座敷として使用され、今は、そこで数人の踊り子達が出番を待ちながら雑談している最中でもあった。

二人は、その控え室の掃除を徐に始めると、盗聴器を仕掛ける場所を探して辺りを物色し始める。

そして、ナオは、一つの盗聴器を控え室入り口付近の棚の裏にセットし、ゆかりは座敷で雑談している踊り子達の目を盗んで、衣裳ケースのやはり裏側にもうひとつの盗聴器をセットしていた。

その後、二人は控え室の掃除を早々と切り上げると、次は応接室に向かう。

問題の応接室は、ストリップ劇場店内のホールの裏口から通路を抜けて直ぐのところにある。

その部屋、自体は、中位の大きさで、あまり広くはない。

ナオとゆかりは、その応接室に入ると、さっそく室内を見渡す。

今は、幸いにして、応接室には勅使河原や支配人の新見川の姿はなく、ナオとゆかりの二人だけがそこに居るだけだった。

どうやら、彼らは、劇場の店内で店の従業員と話をしているらしく、今が盗聴器を仕掛ける絶好の機会であった。

二人は、室内を見渡すと、盗聴器を仕掛ける場所として、向かい合った二つの長椅子の間に挟まれて置かれてある、木製のテーブルの底板にマイクをセットすることに決めていた。

そこならば、怪しまれずに済むだろう。

そして、早速、マイクをセットすると、その盗聴器が正しく機能するかを確かめるために、一時便所へ駆け込んで、まず最初に踊り子の控え室の盗聴を試みていた。

ゆかりは、池沢から渡された盗聴用のイヤホンを耳にはめると、小型の受信機を手にとってそのダイヤルの周波数を、控え室の盗聴器のそれと合わせて耳を澄ませていた。

すると、ダイヤルを、二三度右に回した後、そのイヤホンに音声が入る。

どうやら、控え室の盗聴器と、通信が繋がった様子だった。

『ねえねえねえ、好恵ったら最近太ったんじゃない？　あなたダイエットした方がいいと思うわよ。食べ過ぎには注意しなさいよね』

『ええっ、そうかしら、私それほど太ったとは思っていないんだけど、それって気のせいよ。私だって、踊り子として自分のプロポジションを保つために、努力しているのよ。カロリーの高いジュースは飲まないで烏龍茶にしているし、食事に関しては野菜中心のメニューだし、だから太るわけじゃない』

『えーっ、でもあなたのお腹辺り大分たるんでいるわよ。エステにでも通った方がいいんじゃない？　それに歳も歳だし……』

『あー、それってわたしの事、年増だといっているのね。確かにもう私は二十五だけど、あなただって私と一歳しか変わらないじゃない。人のこと言えるの？』

それは、他愛もない会話であった。

ゆかりの耳に聞こえてきたのは、確かに控え室で踊り子達が雑談している話の内容である。

これで盗聴はバッチリだろう。

確実に盗聴器は、控え室の音声を拾っている。

ゆかりはそれを確認すると、ナオにニヤッと笑ってその会話の内容を聞かせていた。

そして、

「どうナオ聞こえるでしょ？　これで盗聴の準備はOKね。でも、関谷くんの方は、どうなっているかしら。彼、店の店内に、盗聴器を仕掛けるはずでしょ。その作業はもう終わったかしらね」

ゆかりは、盗聴器のイヤホンを耳にあて、通信の有無を確認しているナオに対しそう言うと、関谷の今現在の動向を聞いてきていた。

だがそれを受けてナオは、

「そうね、彼も一応有能だから、上手くやっているんじゃない？　それほど心配することじゃないわよ」

と、素っ気なく、ゆかりの言葉に応えただけであった。

時間は午後十二時十五分、ナオ、ゆかり、関谷の三人は、今現在、昼食の真っ最中であった。

ストリップ劇場におけるストリップショーは、十一時から一時、三時から五時、七時から九時にわたって、三回行われることになっている。

だから踊り子達の昼食は、一時過ぎになるわけだが、パートの清掃員としてのナオやゆかり、それに用務員の関谷には、それほど関係のないことであった。

ナオとゆかりは当初、このストリップ劇場に入ったその日から、ストリップショーの開演中に、客に飲み物やおつまみを出す仕事を言い付けられたこともあったが、それは初日だけで、今は名目どおりパートの清掃員としての仕事しかしていない。

ナオとゆかりにしてみれば、やりたくない仕事をしなくて済んだことになるが、しかし、今後、またそのような仕事を言い付けられるかもしれない状況になるのかは判らなかった。

だが今は昼食だ、そんな話は今の三人にとってはどうでもいいことなので、先程から頻りに箸を動かして弁当をばくついている。

昼食は、コンビニの弁当だが、三人は店の最奥にある用務員室で、その食事をとっているところであった。

その用務員室には、丸ストーブが一台置かれ、中は暖かい。

入り口のドアは閉められ、この三人以外の人間がここへ入ってくる心配もないので、先程からはやはり任務の話に話題は集中していた。

ゆかり：「ねえ関谷くん、あなたの方は上手く盗聴器仕掛けられたのかしら？ 私たちの場合は、何も問題なく盗聴器のセットは完了したけど、そっちの方はどうなの？ 上手くいった？」

関谷：「ああ、二階堂、その事なら心配ないよ。店の店内には二ヶ所設置したし、後はそれ以外の場所に二つ、支配人室と従業員の休憩室さ。いずれにしても気付かれずにすみやかに盗聴マイクのセットは完了したから、後は、重要な話が聞ける機会を待つだけだね。盗聴器がうまく作動するかテストはもうしてあるから大丈夫だよ、これで準備万端さ」

ナオ：「でも、盗聴器は無事セット完了したけど、後は盗聴を聞くのは関谷くんの仕事ね。私たちは、清掃員としての仕事これから山ほどあるから、なかなか盗聴器に耳を傾けている機会がないけど、関谷くんの場合はそれほど忙しくないんでしょう？」

関谷：「確かにそうだね、ナオちゃん。オレは、一応、ここの用務員として入ったけど、用務員と言う仕事はそれほど忙しくないしね。仕事を言い付けられるまでは、意外と暇だから、オレはこの用務員室で盗聴器での傍聴受信確認に勤しむことにするよ。まあ君たちも忙しいと思うけど、頑張ってくれ」

ナオ、ゆかり、関谷が三人で、そんな会話をしていると、早くも弁当を食べ終わった関谷が、徐に立ちだし、用務員室に備え付けの水道に立って手を洗い出していた。

すると、

「あっ！ やっちゃったよ。通信機の腕時計、水で濡らしちゃった。こりやまずいな、壊れていないかな？」

関谷は、不本意げに舌打ちすると、濡らした通信機の水を払っていた。
「ちょっと関谷くん、気をつけなさいよ。大事な通信機壊したら、重要なとき外との連絡がとれなくなるんだから、もしもの時困るわよ」

ゆかりは、そんな関谷を一瞥すると、まるで先輩が後輩に注意を促すような口調でそう言って、その美しい眉を顰めていた。

だがその直後、突然、用務員室のドアがたたかれる。

コンコンコン、コンコンコン

「あっ！ はい」

ゆかりは、それに気付くと、慌ててそのドアを開ける。

すると、開けて直ぐその目の前には、支配人の新見川がごく自然な形でそこに立っていた。

そして新見川は、用務員室に居るナオとゆかりを見据えると、こんなことを言っていた。

「やあ君たち、赤越くんに黒川さん。今、食事中で悪いんだが、その昼食が終わったら、宮坂オーナーの居る応接室に来てくれないか、ちょっと君たちに、重要な話があるんだ。だから、食事が終わってからでいいから、応接室の方まで来てくれ」

それを受けるとゆかりは、怪訝な表情をその顔に浮かべて、新見川に問いただす。

「ええっ、新見川さん。宮坂オーナーが、私たちに一体なんの用なんでしょう？ 仕事ならちゃんとやっている心算なんですけど、何か問題が生じたんでしょうか？」

ゆかりは、突然、呼び出しを食らって少々面食らいながらも、自分たちは仕事をしっかりやっているのだと主張してそう言っていた。

「いやね黒川さん、別に君たちの仕事はどうのって言うことではなく、ちょっとしたお願い事があって話がしたいだけなんだ。とにかく、応接室に来てみれば判ることだから、食事が終わったら直ぐに来てくれ。それじゃ、俺は、先に応接室に行っているけど、頼んだよ、待っているからね」

新見川は、それだけを言い残すと、その場を徐に立ち去って、店の方へ歩いていってしまっていた。

その直後、ナオとゆかりは新見川が居なくなったことを確認してから、二人して顔を見合わせて首を傾げている。

一体、なんの用事なのだろう？

新見川は確か、先ほどちょっとしたお願いがあるといていた。

しかし、それが何の事なのかは、ナオとゆかりには判らなかった。

だが、別に怒られる訳ではなさそうだ。

二人はそう思うと、関谷の方にふりかえり、また怪訝な表情をその顔に浮かべて首をもう一度、傾げて不本意な態度を顕わにしていた。

それから十分後、ナオとゆかりは新見川の言い付けを守り、昼食を終えると、宮坂オーナーが待つ応接室へと入室する。

ちなみに、この部屋に入る前に、ゆかりは、関谷に対しこの応接室での会話を盗聴す

る様に言っている。

別に、勅使河原の余罪に関する重要な情報が聞けるわけでもないと思っていたが、一応、ナオと自分が宮坂に呼び出されたことに、少し不審なものを感じていたからだった。

室内に入室すると、早速、宮坂が黒い皮張りの長椅子に腰掛けて、二人を待っていてくれた。

当然、先ほど二人を呼びにきた、支配人の新見川もそこに居る。

新見川は、椅子には腰掛けず、宮坂オーナーの横に突っ立っているだけだ。

しかし、応接室に入室して来た二人を見ると、そそくさとしてナオとゆかりに宮坂オーナーの前に、座るように促してきていた。

「さあ赤越くんは黒川さん、その椅子に腰掛けてくれ。今から、オーナーの方から君たちに、話がある。別に、緊張はしなくていいんだよ、ちょっとした話だからね」

支配人の新見川は、そう言うと、ニッと笑ってナオとゆかりを見据えてきていた。

その笑いに、どういう意味があるのかはその時点では二人には判らなかったが、それは妙に馴染めない少しいかがわしい笑いだったので、ナオとゆかりの二人は少し不気味に思いながらも、言われるがままに宮坂を目の前にして、徐に勧められた長椅子へ腰を下ろし、次にはオーナーの言葉を少し恐縮しながら待っている様子だった。

そして、宮坂が、徐に話を切り出す。

「さっそくだが、君たちをここに呼んだのは、私どもとしては君たちにお願ひ事をする為に呼んだことなんだ。君たちは、一応、パートの清掃員としてここで働いているわけだが、実を言うと、今後から、別の意味でこのストリップ劇場で働いてみてはどうかと思ひ、その話をしようと思うんだけど、これからそれを伺いたいんだ、どうかね？」

宮坂は、顎に手を当てると、それをしゃくりながら二人を見据えてそう言っていた。「あの宮坂オーナー、別の意味で働くというのは、一体、どういう意味なんです？ 私たちがここでパートの清掃員として働くことに、何か問題があるとでも言うのでしょうか？」

宮坂が、不可解な言葉を口にした後、そういった質問をしていたのは、ゆかりであった。

彼女は、宮坂の少し遠回しな言葉に対し、自分たちがパートの清掃員をしていることに、何か不都合な点でもあるのかと勝手に憶測して、そう言っていたのであった。

ゆかりは、宮坂の言葉に対し怪訝に思う。

別な意味でこの店で働くとは、一体、どういう事なのかが判らなかったからだ。

しかし宮坂は、ゆかりの言葉に対して頷くわけでもなく、涼しげな顔をして微笑むと、次にはナオやゆかりにとって、突拍子もない事と思える事を口走り始めていたのだ。

「あのね黒川さん、それに赤越くんもだけど、これは私どもの勝手なお願ひなんだが、君たちには、今後、パートの清掃員ではなく、このストリップ劇場の踊り子としてこの店で働いてみてはどうかと思っているんだよ。これは、突然の頼みなんだけどね、それに関して君たちはどう思うかが聞きたいんだ。この話しどうかね？ これは、いい話だと俺としては思うんだけどね・・・？」

「「ええーっ！」」

その宮坂の言葉を聞いた直後、目玉が飛び出るくらいの驚きの声を上げていたのは、当然のごとくゆかりとナオであった。

彼女たちは、間抜けなぐらい口を大きくハの字型に開けると、ひどく面食らったように不恰好な表情のまま、一瞬の間ピタリと硬直してしまう。

それは、一応、二人とも花も恥じらう乙女としては、その時、とても不注意に滑稽な姿を人前に曝したわけだが、それだけ宮坂の言葉が二人にとって意に介せぬ、突発的な驚きであったからだ。

「あ・・・あの、ちょっと、ちょっと待ってください。もしかして、オーナーは、私たちにこの店で裸踊りをしろと言っているのでしょうか？ あの・・・あの・・・私達、とてもそんな事できる訳がありません。ご・・・ご冗談を、言わないで下さい・・・」

だが、少しその口調が怪しいながらも、その時、そう言って抗弁していたのは、やはり二階堂ゆかりであった。ゆかりは、宮坂の言葉に承服できぬ言葉を投げ掛けつつも、自分の髪型や清掃員の制服の乱れを慌てて直し、その後、ナオと顔を見合わせて絶句する。

それもそうだろう、突然、踊り子にならないかと言うような事をいわれて、それに驚かないほうがおかしいと言える。

しかし宮坂は、そんな二人の様子を見据えながらも、いやに真面目腐った顔でその眼差しを二人に向けてくる。

それは、冗談など言っていないという、意外と真剣な顔つきでもあった。

「おいおい、別に二人とも、そんなに驚くことではないじゃないか、聞くところによると面接の時、赤越くんは、このストリップ劇場の仕事に興味があると言うような事をしていたようだけど、それは嘘だったのかい？ 一応、この店の踊り子になれば、パートの清掃員などよりは比べものにならないほど高い給料は約束されているんだ。だから、この話は、それほど悪い話ではないと思うんだけどね。君たちの返事次第では、高収入も夢じゃないんだよ」

宮坂は、そう言うと、支配人の新見川と顔を見合わせて、ニヤッと意味不明な笑いを一頻りもらしていた。

するとその時、ナオがやはり真面目な顔をして、宮坂に言う。

「あのね宮坂さん、私達はパートの清掃員として働くために、ここに来たんですよ。それなのに、踊り子になれとはどういう事なんです。私達に、裸になって踊ってくれと言っているんでしょ。そんなの出来る訳ないでしょう。かりにも私達は、特務きか・・・い・・・いえ、ごく一般の恥じらい深い女なんです。それを裸になって踊れだなんて、心外にも程があるわ。冗談言わないで頂戴・・・」

ナオは、少し、憤慨をにじませた言葉を吐きつつも、ご機嫌斜めな様子で、宮坂を見据えていた。さすがにナオとしても、踊り子にならないかと言われたことに、至極抵抗があるらしく、別に緊張しているわけではないのだが、顔が強ばって見えている。

しかし、それもそうだろう、ストリップ劇場の踊り子として働くなんて、考えもつかない別次元のことだと思っていたのだ。それをまさか、自分たちに勧められるとは、よもや思うことはないだろう。

だが、そのナオの言葉を受けても、宮坂は知れっとしていた。

彼としてみれば、二人が踊り子になるということは、それほど驚くほどのことではないと思っているようにも見える。

それを見るとナオは、やはりこの男はストリップ劇場のオーナーを勤めているような

男だけあって、何の経験もない素人女性に白々しく裸踊りをすすめる事に、何の躊躇いもなく思っているのだなど、その時つくづく実感して嘔み締めてしまっていた。

それは普通の常識では考えられない、まさに青天の霹靂のような事に思えていたからだ。

だからナオは、その後、極力嫌な目付きで宮坂を睨み付けてやっていた。

それは、ある意味、ナオとしての、拒絶的意志表示とも言える。

その表情には、ありありとそんな話し私達にしないでと、暗に指し示している態度のようにもとれていたのだから、この場の空気が、一瞬、険悪になるのではないかとさえ感じられていた。

だが、すると、そのようなナオの態度を受けて、宮坂は少しばかり気まずく思ったのか、次にはナオとゆかりの二人に、諭すかのようにこんなことを言ってきた。

「あのね君たち、赤越くんは黒川さん。私としてはね、別に無理にとは言っていないんだよ。これはあくまで君たちに、やる気があればの事を前提にして話をしているんだ。だから、返事は今直ぐとは言わない、今日は、君たちにはこのままパートの清掃員としての仕事を続けてもらい、また暫くしたらここへ呼び出すから、その時、返事をしてもらえればいいと思っているんだ。だから、私達のお願いも話したことだし、もう下がってくれていいよ。突然、こんな事言われて驚いている気持ちも判るが、考える時間をやるから、とにかくいいように物事を考えてくれ。君たちにも、都合というものがあるだろうからね」

するとナオはともかく、ゆかりは、その宮坂の言葉に応じて「はああ？」と間の抜けた返事を一つ返して、惚けただけであった。

そしてその後、二人は宮坂に何も言えず、応接室の室内を後にしたのであった。

「まったく、冗談じゃないわ。あの男、一体、私達を何だと考えているのかしら？　ねえ関谷くん、聞いていたでしょう？　その事に関してどう思う？　あなたの率直な意見を、ここで聞きたいわ」

ところ変わって、ここはまた用務員室の一室、昼すぎの休憩時間を利用して、ナオとゆかり、関谷の三人は、また顔を突き合わせ、先程から話をしているところであった。

「ウーン、それはちょっと難しいことだね。君たちが裸になって踊るところを、俺としてはちょっと見て見たい気もするけど、一応、オレたちは潜入捜査という任務でこのストリップ劇場で働くことになったんだ。だから、その話は、断ったほうがいいんじゃないかな、ちょっと残念だけど」

関谷は、ゆかりの言葉を受けて、そう冗談交じりに言うと、ニヤッとその白い歯を見せてにやけてみせていた。

するとゆかりは、

「ちょっと関谷くん、それはどういうことなの、私達の裸が見たいって、そう言っているの？　それって、すごく嫌らしいわよ。結局、あなたも、スケベな男達とたいして変わりはないのね。私、幻滅したわ、あなたって、意外と真面目だと思っていたのに、馬鹿みたい」

ゆかりは、そう言って、関谷の言葉に不快の色を見せると、腕組みをしてフンとした

態度でそっぽを向いてしまっていた。

(まったく男って、なんて嫌らしいのかしら?)

ゆかりは、一人そう思う。

そもそも、なんでこんな時にこの話が、二人に持ち上がったのかということが、ゆかりにはちょっと疑問でならなかった。

まさか、ストリップ劇場の踊り子にならないかだなんて、正に寝耳に水の話である。

それと同時に、かなり侮辱されたようにも感じていた。

真面目なゆかりにしてみれば、踊り子なんて言う職業を選ぶ女性は、大体自分自身の裸を自ら率先して男性に見せたがる、まったく恥じらいの無い如何わしい人種の人なのだという思いがある。

つまり、自分とは、まったく別種の価値観を持つ連中なのだと言ってもいいくらいだ。

しかし、それをまさか、自分がやるのであれば、大問題であるといってもいい。

ナオは、その事に対して、どう思っているのかは知らなかったが、たとえナオであってもまさかこの話を快く承諾はすまい。

先ほど宮坂に対し、裸踊りなんて心外だと言って怒っていた事もある。

だから、二人にしてみれば、これは受け入れがたい、話であるのは言うまでもなかった。「でも、私達に、踊り子にならないかななんて、一体、どういう了見なんでしょうね。私達は、ただのパートの清掃員なのに・・・それに踊り子は、この店にいっぱい居ることだし、人員が不足しているとはとても思えないわ。それを考えると、ある意味、不思議よね。そんなに私達がここの踊り子として踊ることに、何かしらのメリットがあるのかしら? ねえ、その事に関してどう思う、ゆかり不思議よね?」

そんな中、怪訝な顔をしてそう言っていたのは、ナオである。

彼女は、宮坂つまり勅使河原の思惑が、一体どこにあるのかが気になるらしく、先ほどから柄にもなく考えに没頭している様子でもあった。

それに答えて、ゆかりが言う。

「あのねナオ、そんな事、おそらく、確実に言えるのであれば、金儲けをするためと決まっているじゃない。私達が、踊り子としての才能があるかどうかはともかくとして、勅使河原は、裸の女性をいっぱい囲っておきたいんじゃないの。私としては、そんな事、真っ平御免だけど、この話、私は絶対承諾しないからね。ナオあなたもその心算なんでしょ?

まさか、踊り子になるだなんて言いださないでしょうね?」

ゆかりは少々興奮しながらも、ナオに、ある意味、同意を求めている。

まさかナオにしても、踊り子の仕事をやるだなんて、言うとは思っても見なかったからでもある。

しかし、そのゆかりの思いに反し、ナオは、意外にもこんなことを言いだしていた。

「ゆかり、でも私よく考え直してみたんだけど、この話、意外といい話だと思えるのよね。パートの清掃員の仕事だけじゃ、大した収入にもならないけど、踊り子になれば宮坂オーナーが言うように、高収入も約束されるようだよ。だから、私やってみてもいいんじゃないかと思ったりして。その事に対してどう思う、駄目かしら?」

「えッ?」

だがしかし、その言葉を受けて、やはりゆかりが猛反発を示す。

「何言っているのよナオ。あなた、裸になって胸をだして踊る心算なの？ そんなの、とても信じられないわ。私は、そんなの嫌ですからね。踊りたければ、あなた一人でやりなさいよ。あなた、ちょっと頭おかしいわよ。信じられない・・・」

しかし、それを聞いて、ナオは、

「やだ、ゆかり、これは冗談で言った心算なのよ。そうあからさまに、私を責めないでほしいわ。まったくあなた、最近、冗談が通用しなくなったわね。そんな事だと、顔に皺が増えるかもしれないから気をつけなさい。ねえ、そうよね関谷くん、そう思うでしょ？」

ナオはそう言うと、両手でジェスチャーをするように戯けてみせていた。

それから彼女たちは、休憩時間を終えると、また、ストリップ劇場の掃除に勤しみます。

盗聴器による盗聴は、用務員としての関谷が行っているだろう。

しかし、彼は、今のところ、ナオとゆかりに何も言ってこないところを見ると、その盗聴によって、それほど重要な情報が得られたとは言えない状況なのだとはいえた。

もちろん、ナオとゆかりも、盗聴器の受信機は持っているのだが、今は工作中だ、それをおろそかにして、盗聴器のイヤホンに耳を傾けられている場合ではなかった。

今の段階では、関谷に任せておけばいい。

無理して、自分たちが盗聴をする必要性もなかったもので、そうする事にしておいていた。

だが、パートの清掃員としての仕事は何の滞りもなく進む中、時間は早くも六時十五分を回っていた。

ナオとゆかりは、仕事の途中、手元の腕時計を見ると今現在の時間を確認する。

彼女たちの勤務時間は、時と場合によるが、大抵、午後の七時までだ。

今日の仕事も、後少しで終わりを迎える。

そしてまた、今日も真面目に働いた。

その為、腹はぺこぺこである。

今夜の夕食は、何がいいだろう？

カツ丼かな、それとも手打ち蕎麦かな、そんな事を思いつつ仕事に精を出す二人。

しかし、ナオやゆかりがそんな風に今日の夕飯は何にしようかと考え始めた頃、その時、支配人の新見川から、二人に対し二回目の呼び出しがかかっていた。

どうやらその呼び出しは、今日の十二時十五分ごろに第一回目の呼び出しがあった際、二人に踊り子にならないかと言った件に関する、再確認の為に呼ばれたらしかった。

その事を、再び確かめるために、宮坂が応接室で待っている様子だ。

その為、ナオとゆかりの二人は、支配人の新見川に呼ばれると、念のため一時盗聴器の受信機を更衣室のロッカーに入れたあと、再び宮坂が待つ応接室に入室する事になっていた。

二人が、応接室に入室して最初に気付いたのは、宮坂、以外に二人の見慣れぬ男が、その場に居合わせていたということであった。

一人は、屈強そうな筋骨隆々の逞しい男、もう一人は、やせ型の髭面をした頬の少しこけた男である。

この二人の男が、宮坂の座る長椅子の横に従うように立つと、徐に室内に入室して来たナオとゆかりの二人を見据えて、迎え入れていた。

どちらも、見たところ、無愛想な男達である。

ナオとゆかりは、その男たちの存在に、怪訝な表情を浮かべながらも、また宮坂の目の前に腰を下ろして話を聞くことにしていた。

宮坂が、徐に話し始める。

「さあ、どうかね君たち、考えは決まったかね？ 昼すぎから今まで、時間を大分とったのだから、決心を決める時間は十二分にあっただろう。さっそくだが、その答えをここで、今、聞きたいのだが、どうなんだい？」

宮坂は、ナオとゆかりの顔を面白がるような素振りで見ると、その質問に対する返答を、期待するかのような目で促してきていた。

その横では、支配人の新見川も、宮坂と同じようにして食い入るように見つめてくる。

どうやらこの二人は、相当、この話について、興味といえるものをそそられている様子でもあった。

「あのですね、私達はよく考えたのですが、今回のその話の件については、断ろうと思っていますんです。これは、私とリエの二人の意見なんですけど、私達には、とても踊り子なんて出来る訳ないと思いますし、その仕事をするにあたっては、才能というものも必要になってくると思っていますんです。ですが、私達には、踊りの経験も一切ないし、才能があるとはとても思えません。ですから、せっかくのお願いであるのですけれど、お断りさせて下さい。パートの仕事なら、一生懸命やりますから、どうかご容赦を……」

ゆかりの宮坂に対する意見は、尤もであった。

一口に踊り子と言っても、大変な仕事である。

もちろん二人にとって、裸で踊るなんていう事はとんでもない事であるのだが、踊り子になるならば、見世物にたる踊りの技術を習得しなければならないのだ。

それに人前で踊るときの、度胸とセンスも問われる。

残念とっていいのかどうかは判らないが、ナオとゆかりの二人には、そのどれも欠けているような気がする。

それに、自分たちはここに任務で潜入している立場だ、別にこの店の正社員となる必要性もないので、その事も踏まえつつ結論をだした結果だった。

だが、それを聞くと、宮坂がこう答える。

「あのね君たち、才能がどうのこうのと言っているけど、別にそれに関しては問題はないんだよ。たしかに、踊りの技術をマスターするには、時間も手間もかかる。それに、君たちの言うように、才能も必要となってくるだろう。でもね、私どもとしては、それほど踊りに執着しなくてもいいと思っているんだ。見たところによると、君たちはスタイルも良いし顔も良い。だから、多少、踊りが下手でも、赤越くんと黒川さんが人前で脱いでくれることさえ決心してくれれば、それほど問題じゃないんだ。もし、君たちが、この話を承諾してくれるのなら、踊りの方はしかるべき先生を付けて指導することも出来るし、一度コツをつかんでしまえば、意外と簡単なんだよ。それに、後は君たちの気

持ちの問題さ。人前で脱ぐことを恥ずかしいと思わず、自分の綺麗な体をどう艶めかしく見せるかということに執着さえしてくれれば、結構、様になるものさ。だから、そんな事言わずに、この話し引き受けてみてくれてはどうだい？ 二人とも、必ず、売れっ子になれると思うんだけどね・・・」

その宮坂の言葉は、妙に、真剣に二人に決意を促し掛けるかの様な、誘いの内容の言葉でもあった。

先程、ゆかりの方から、この話を断るといふように言われていたが、そんな事、聞いてもいなかったように、踊りについての講釈を並べると、再度、ナオとゆかりに意志確認をしてきていた。

彼としてみれば、なんとかして、ナオとゆかりに、この話を承諾させたいのだろう。

そのポーカークフェイスのような表情からは、意外にも、それが如実に窺い知れていた。「でも宮坂さん、私達、どうしても決心が付きません。どうか今回のところは、その話は、なかったという事にして頂けませんか？ 私達としても、これ以上、勧められても、その答えに困るだけです。ですから、たびたびですがご容赦ください」

「ほーう、そうか？ 黒川さん、君の意見はわかったよ。でもそれじゃ赤越くんはどうなんだい？ 君も、黒川さんと同意見なのかい？ もしそうだとしたら、非常に残念なんだけどね」

宮坂はそう言うと、今度は、赤越リエことナオにそう言って問いただす。

彼としてみれば、ゆかりの意見だけでなく、ナオにも直接聞いてみたかったのだと思われる。

するとナオは、

「あのですね宮坂さん、私としては踊り子の仕事も結構やりがいがあると思いますけど、でもですね、結局ストリップショーって裸を見せて金をとる商売でしょう？ 私その事についてちょっと抵抗があるの、だから悪いけどこの話、断るわ。悪く思わないで下さい」

そのナオの言葉は、少し刺のある言い方であったので、それを聞いた宮坂と新見川支配人は、その時、少しむっとした態度を表した様子だった。

「なるほど、結局、二人とも駄目っていう事かい？ それならこれではどうかな、君たちがこの店の踊り子になってくれれば、月給として月に二百万それぞれに出そうじゃないか。それならばどうかね？ これは、悪い話ではないと思うが、君たち次第だよ」

「ええっ、二百万ですか!？」

その時、その言葉に驚きを示したのは、ナオではなくゆかりであった。

別に、金に目が眩んだわけではなかったが、二百万といえば大金だ。

一月に、それだけの収入があれば、かなり楽な生活が出来るだろう。

だが、ゆかりは驚いた反面、やはりその待遇を蹴ってでも、ここは断ることに決めていた。

やはり、人前に肌を曝すことに、大いに抵抗があったからだ。

「宮坂さん、せっかくですけど、その話は、やはり断らせて頂きます。たとえ月に二百万をもらえるといっても、私達の心は変わりません。だから、申し訳ないけど、あきらめて下さい。私達は、パートの清掃員で満足ですから・・・」

ゆかりは、そう言うと、軽く宮坂に対して丁寧に頭を下げていた。

何も、自分たちが、悪いことしている訳ではないのだが、ここは礼儀を示してそうした態度をとったのであった。

「そうか、それじゃ、どうしても駄目みたいだね。君たちならば、いい踊り子になれると思ったんだが、そこまで頑なに断られると、こっちとしてもこれ以上は何も言えないからね。しかし、残念だよ、実を言うと、君たちがこの話を受け入れてくれば、手荒な真似はせずに済んだのだが、この際だから仕方がない、君たちにはウォンさんとの商談のネタになってもらうことにするよ、まったく残念だね……」

宮坂は、ナオとゆかりに対し、途中、意味不明なことをぼろりともらずと、次には何か二人の後に向かって合図している様子だった。

それは、唐突だったので、ゆかりとナオにはなんのことか判らなかったが、次の瞬間、踊り子にならなかったことを、後悔することになった。

突然、ナオとゆかりが座る長椅子の後から、二つの手が伸びると、その直後、ほぼ同時にして、ナオとゆかりの鼻と口が何かの布のようなもので塞がれていた。

その挙動に驚き、二人が後をふりかえる様にして、目線を送る。

するとそこには、先程、宮坂の隣に立っていた二人の男が、いつのまにかナオとゆかりの後に移動していて、二人の顔を押しさえてやはり布で息ができないくらい強く押しさえて付けて来ていたのだ。

だからその時、二人は驚いて抵抗を試みる。

しかし、それはもう遅かった。

ナオとゆかりが、その事に気付いて、暴れようとした頃、唐突に意識が遠退いていく感覚が、二人の体を襲っていた。そして次には、体中に力が入らなくなり、手足を脱力した態勢のままで、そのまま一瞬のうちに意識を失ってしまっていた。

どうやら二人は、男達に布に染み込ませられた、何かの薬品を嗅がされていた様子だ。それで二人は、深い眠りへと誘われる。

それは、突然の出来事であり、不測の事態に慣れている、特務機関の隊員であっても、この場合は、どうすることも出来なかったのは確かであった。

「宮坂さん、本当にいいんですか？ 踊り子になることは断られたとはいえ、この二人は相当の上物ですよ。それをウォンさんに売り付けるなんて、何か、勿体ないような気もするんですけど、よく考え直しませんか？」

気を失って、意識のない長椅子にもたれ掛かるナオとゆかりの二人を見下ろして、そう言っていたのは、支配人の新見川であった。

彼は、さも残念そうに顔を顰めると、宮坂に対してそう異論を呟いてみせた。

すると宮坂は、

「仕方がないだろう、踊り子にはどうしてもならないと言うのだから。それに、ウォンさんの船が、予定より早く港に入港することになったんだ。その為には、あと二人の欠損を埋めなければならない。だから、予定は変更だ。少し残念だが、この二人をウォンさんへの手土産にする。だから、外へ運びだす準備をしろ、ぐずぐずしてはられないぞ！」

そう言うと宮坂は、先程の二人の男に指示を出して、赤越ことナオと黒川ことゆかりを、どこへともなく運びだすように命じていた。

(ウォンさん？ それに港と船？)

その頃、ストリップ劇場の店の裏側奥の用務員室で、盗聴器のイヤホンに耳を傾けて応接室の会話の様子を覗いていた関谷は、一人、そう口ずさんで、怪訝な表情を浮かべていた。

ナオとゆかりの声が、突然、聞こえなくなった。

それに、宮坂や支配人の口調の変化、これは明らかに何かあった様子だ。

それを察すると、関谷は、いてもたっても居られなくなっていた。

すると、また徐に、イヤホンから会話が聞こえてくる。

『しかし、この女いいケツしてるよな、まったく惚れ惚れするぜ。あとで一発お願いしたいもんだぜ。宮坂さんに内緒でやっちまおうか？』

『へへっ、確かにそうだな。このショートカットの黒川って女も、なかなかのもんだぜ。多少、胸は小降りだけど、いい悲鳴をあげそうで、犯しがいいがあるぜ。よう、港まで運んだらお前の言うとおり、この二人とやっちまおう。かなり具合が良さそうだぜ！』

『そうだな、バレなけりゃ、こっちのもんだ』

その会話はどうやら、二人の男が、卑猥な話をしている現場の声であった。

それを耳にすると関谷は、その時、ヤバいと思っていた。

関谷の脳裏には、ナオとゆかりが裸にされて、男に玩ばれている光景が思い浮かんでいた。

ブルブルと関谷は、頭を横に振る。

こんな時に、何を考えているのだと、その時、関谷は自分を恥じていた。

しかし、盗聴器からの声が気になって、もう一度、そのイヤホンに耳を澄ましていると、どうやら声が聞こえなくなってしまっていた。

おそらく、彼らは、部屋を出たのだろう。

すると、暫くして、関谷がいる用務員室の方へ、四人の男達が早足で歩いてくる。

店のオーナーの、宮坂だ。

それに支配人の新見川、そして何かを担いだ二人の男達、

関谷は、その二人の男達が担いでいるものを見て、絶句していた。

ナオとゆかりだ。

彼女たちは、今、気を失っている様子で、男達の肩に完全に身を預けたまま脱力している。

それを見ると関谷の心臓は、早鐘のように、高鳴っていた。

時間は午後六時五十分、今現在、関谷の目の前では、ナオとゆかりが銀色のトラックの荷台に乗せられているところが再現されている。

二人の男達が、ナオとゆかりの体を縛ったあと、トラックの荷台の奥へともう一度丁寧に寝かせているのだ。

そして、その作業が終わると、男達は荷台から降り、その荷台の扉を閉めてロックしていた。

まずい、このままでは、どこかに二人は連れ去られてしまう。

だから関谷は、オロオロしつつも、一応トラックのナンバーを確認、
だが遠くて、そのナンバーは確認できなかった。

その為、関谷は、気づいて腕にはめた腕時計型の通信機を操作して、池沢元警部補に緊急の連絡を入れようとしていた。

しかし、そこにきて、思わぬ事態に遭遇する。

通信機が、ウンともスンとも言わないのだ。

(なんでこんな時に繋がらないんだ、一体どうなっているんだ！)

関谷はその時、焦って、何度も何度も通信機のスイッチを押す。

しかし、結果は先程と同じだった、やはり繋がらない。

だがその時、関谷はあることを思い出す。

(そう言えば、昼食の後、手を洗った時に、この通信機を不用意に水に濡らしてしまったんだ！ まさか、あの時壊れたのか！？ クソッ！)

関谷は、そう思うと、自分の拳を壁に叩きつける。

その時、関谷の拳には、ジーンとした鈍い痛みが走っていた。

しかし、そんな事をしていると、ナオとゆかりを乗せたトラックは、もうすでに日が落ちた夜の路上へと走りだしている最中であつた。

トラックは、ストリップ劇場の裏の駐車場から表通りに出ると、そのままどこへともなく走り去っていく。

それを見ると、関谷は、慌ててそのトラックの後を追いつけようとしていた。

しかし、人間の脚ではもう既に、加速して時速五十キロ近くのスピードに達したトラックには、追いつくことは出来なかった。

関谷は、懸命にその後を追ったが、結局、その努力も虚しく引き離され、しまいにはそのトラックは見る見る街中の交通に紛れて、どこへともなく消えて行ってしまっていた。

車のヘッドライトやテールランプ、街のネオンサインが苛立つように瞬き目に映る。

そして立ちどまって、唇を噛み締める関谷――――

その直後、彼は、ストリップ劇場の用務員としてのその仕事も放り出して、無我夢中で駆け、池沢元警部補のいる近くの空き地へと走っていた。

しかし、その後、ナオとゆかりの行方は、ようとして知れなかったのは後の祭りなのである。

第二節

時間は、午後八時二十分、場所は、特務機関の三階の会議室、そこで関谷莞爾は、今、その室内に顔を揃えている、警視庁幹部と特務機関の責任者を前にして、今日の潜入捜査における、高崎ナオ、そして二階堂ゆかりに関する拉致事件の事後報告を行っている最中であった。

関谷の前に備え付けられたテーブルの奥には、先程も言ったように、警視庁および特務機関のお偉い方が顔を揃えて、スチール製の椅子に腰をかけているわけだが、彼らは、今現在、特務隊員である関谷にまるで信じられぬといった表情を呈し、疑問気な眼差しを向けると、皆、一様に青い顔をして、頻りにウ〜ンと唸り声を発している様子だった。

しかし、それもその筈、それらのお偉い方には、先程、関谷の方から潜入捜査を担当していた二人の特務隊員が、ストリップ劇場の経営者、勅使河原洋二とその仲間等に拉致されて、連れ去られてしまったとの報告を受けていたからだ。

その事実を聞くと、このお偉い方達が青くなるのも無理はなかった。

そもそも、今回のストリップ劇場の潜入捜査に、そのようなシナリオは無かったからだ。

まさか、潜入捜査に当たっていた高崎ナオと二階堂ゆかりが、拉致されるとは、だれも思うまい。

これはある意味、考えられぬ不測の事態が、生じてしまったといっても過言ではなかった。

その為、この会議室内は、重苦しい緊張感が漂う葬儀場のような様相を呈しているようにも思えた。

二人が攫われてしまったという現実には、痛感さを隠しきれなかったからでもある。

だが、しばらくすると、その静寂を破るかのように、関谷に対して、一人の警視庁幹部から徐に質問事項が飛び出していた。

それは、こういう質問である。

「えー、関谷くん？　ところで、高崎くんと二階堂くんは、どのようにして拉致されたんだね？　私ども上層部としては、そこが解せないんだよ。日頃、特別な訓練を受けた特務機関の隊員が、そうやすやすと拉致されるとは、とても思えないのでね、そのことに関して詳しく説明してくれないか？　どうだね、判るかい？」

その質問を受けて、関谷は答える。

「あのですね、私が見た限りでは、彼女たちは、何か気を失わされてそのまま拉致されたように思えました。彼女たちは、今回の潜入捜査で捜査対象となっている勅使河原と、店の応接室で話をしていたんですが、自分は、その会話を盗聴して聴いていたんです・・・」

「会話をかね？」

「ええ、そうです。高崎隊員と二階堂隊員は、実を言うと、店のオーナー勅使河原に、ストリップ劇場の踊り子にならないか、という話を持ち掛けられていて、それで応接室に呼び出されたのです。しかし、二人は、その話を断り辞退したのですが、その直後、突然、盗聴器に二人の声が届かなくなり、暫くすると彼女たちは二人の男に担ぎあげられて、そのまま店の裏駐車場へと運ばれ、銀色のトラックに乗せられ、体をロープで縛られて夜の街へ消えて行きました。自分が、見たのは、そこまでです。あとは、トラックを走って追い掛けたのですが、とても追いつけなくて、仕方なくストリップ劇場の張り込

みをしている池沢元警部補のもとへ走り、緊急報告をしました。お分かり頂けたでしょうか？」

「ウ～ン・・・」

その報告を聞くと、また両機関の幹部たちは、唸るように腕組みをして頭を悩ませている様子だった。彼らとしてみれば、この、突然の拉致事件は、寝耳に水の事であるらしい。

関谷が見た限りでは、この上層部の面々は、今後、どのように対応をすればいいか苦慮しているようにも思える。

しかし関谷としては、早く報告を終わらせて、ナオや二階堂を捜しだす手筈をとってくれるように、お願いしたかったが、やはりしっかりとした報告もなしに対策を練ってもしようがないという思いに至り、その事は口にだしては言わないでおいていた。

だが、その思いを、知ってか知らずか、また関谷には質問事項が飛び出す。

その質問を発したのは、両機関の上層部の一人として、この会議室に顔を出していた、佐渡一課長からのものだった。

「それで関谷、それじゃ、ナオと二階堂は、特務機関の隊員であるということが勅使河原等にバレて、拉致された訳じゃないんだな？ その事については、どうなんだ？ その点をはっきりしてくれないか？」

佐渡は、そう言うと、関谷の顔を見つめる。

そして目で関谷に対し、早く答えろというような、ニュアンスの合図を送って来ていた。

それを受けて、関谷は、やはり真面目に応答する。

「あのですね、その事に関してなんですが課長、その可能性はまったくないと思います。オレたちは、真面目にパートの清掃員と用務員の仕事をこなして、ストリップ劇場の職場にとけこんでいましたし、勅使河原や店の従業員がオレたちを疑っているような素振りは微塵だにもありませんでした。それに、盗聴器で応接室の話の内容を聞くかぎりでも、ナオちゃんや二階堂が、自分たちの正体をバラした発言は、一切していないし、疑われる筈もないと思います。だから、二人が拉致されたのは、他に理由があるとオレとしては思うんです。勅使河原の話していた内容では、ウォンという男が、それに関わっているのではないかとオレとしては感じましたけどね」

関谷は、そこまで言うと言をつぐむ。

そして、佐渡の顔を見てうなずき返していた。

「ウォン？」

だがその時、佐渡を始め他の両機関の上層部の幹部たちは、関谷の話に惹き付けられて身を乗り出すように顔を向けて来ていた。

そして、警視庁側の幹部の一人が、関谷に問いたです。

「ウォンて君、確かに勅使河原は、ウォンという男が今回の拉致事件に絡んでいると、そう言っていたのかね？ それは、信憑性のある事なのかい？」

その質問に、また関谷は答える。

「ええそうです。勅使河原は、その時、高崎隊員や二階堂隊員をウォンさんの手土産にすると言っていました。それに、これはまた別の男達が言っていた事なんですけど、拉致

した二人を、港へと運ぶとも言っていたような気がします。何でも、近々、港にウォンという男の船が入港するという予定があるみたいで、そのウォンに、二人を売り付けるというようなことを言っていたと思います」

それを聞くと、この会議室に集まった上層部の幹部たちは、一斉にざわつき始めていた。

どうやら関谷の今の発言に、とても重要な意味が、含まれていたらしかったからだ。

彼らは、お互いの顔を見合わせて何か確認の言葉を、二言三言交わすと、次には一人の特務機関側責任者から、一つの言葉が飛び出していた。

「これはおそらく、人身売買の疑いがあるね？」

「ええっ！！」

その言葉を聞いたとき、関谷の心臓は、胸から飛び出すぐらいの衝撃を受けていた。

「人身売買?!」

関谷は、そう言う顔と顔を極端に歪めて、その聞き慣れない言葉の意味する事を、即座に理解する。

彼としては、勅使河原の話盗聴した時には、気付かなかったが「港」と「ウォン」それに「二人を売り付ける」、という言葉を経合すれば、言われてみるとこれは人身売買の疑いがある可能性が高い。

そう思うと関谷は、今までその事に気付かなかった自分は、一体何を考えていたんだと、ある意味、反省しなければならなかった。

しかし、人身売買となると、これはマズい事になる。

二人は、港に運ばれるという事だから、おそらく海外に売り飛ばされるのではないかと推測できる。

しかも、その売り付け相手が、ウォンという名の男。

そこから考えると、もしかしたら中国か？

ウォンという名は、明らかに中華系の名のような気がする。

そう思うと、関谷の心臓は、また早鐘のように高鳴りだしていた。

二人がもし海外などに連れ去られてしまえば、ある意味、万事休すだ。

日本を離れ、海外などに行方を晦ませられれば、二人を助けだす事さえまならない。警視庁や特務機関が、いくら血眼になって探しても、領海を越えてしまえば、なかなか手出しが出来ないのだ。

だから、そうなる、この拉致事件の問題に関しては、早急に手を打たなければならないような気がする。

それを察すると、関谷は、いてもたっても居られなくなっていた。

だから関谷は、次には警視庁と特務機関の上層部の面々が顔を揃えているのにもかかわらず、まず、自分の上司である、佐渡一課長に早くナオとゆかりの行方を捜す手筈をとってくれと上申しようとしていた。

だが、関谷がそんな事を思い、佐渡に口を開こうとした時、この会議室での話し合いの打ち切りが警視庁幹部の一人の男から徐に告げられたので、その機会を逸し、彼は結局いえずじまいで、強く唇を噛むことになってしまっていた。

それで関谷は、その後、退室を促され、その会議室をあとにした訳であるが、この後

の両機関の高崎ナオと二階堂ゆかりの拉致事件に対する対応が、どうなるのかという事が胸につかえて離れなかったのは言うまでもない。

第三節

薄暗い部屋、それにガランとした内装、冬の寒風が隙間から吹き抜けてきそうな殺風景な一室で、その時ナオは目覚めていた。

彼女が、その目覚めてまもない不鮮明な意識を混濁の中から引き剥がし、明瞭にしようとして努力しながら目を開けてみると、最初に、目に飛び込んで来たのは煙草のヤニで黄色く薄汚れた天井の光景だった。

(一体、ここは、どこなのだろう?)

徐々に、回復する意識を奮い立たせ、ナオは、ふとそんな事を思いつつ、おもむろに体を起こそうとする。

すると、そこで思わぬ抵抗を感じていた。

手が動かない。

腕と腕どうしが密着して、離れない違和感――――

どうやら彼女の腕は、後ろ手にして、麻縄のような少し刺々しいロープで縛られている様子だった。

しかも、それと同時に、今はやはり小汚いベットの上に寝かされているという事に気付く。

横を向いたナオの鼻先には、すえたシーツの匂いが、ツンと鼻についたからだ。

その時、ナオは、今なぜ自分がこのような見たこともない、小汚い部屋の一室に居るのかと、ふと疑問がわいて来ていた。

(どうして自分は、こんな処に居るのだろうか?)

その為、ナオは、自分の記憶を辿って考えてみる。

すると、ある事を思い出す。

(そうだ、自分は確か、ストリップ劇場のオーナー、つまり勅使河原と応接室で話をしていた、突然、気を失ってしまったのだ。でも、ここは、一体何処なのか? そう、そう言えばゆかりは、どうしたのだろうか?)

そう思うとナオは、ベットの上に寝転がった状態になりながらも、辺りの様子を覗うために体の反動を利用して、再度身を起こそうと試みていた。

だが、その行為は、あえなく失敗に終わる。

足の自由も、効かなかったからだ。

ナオは、足元にも違和感を感じて、その先を身を屈めるようにして覗いてみた。

すると、やはり足首にも、ロープがご丁寧に巻き付けてあった。

「チッ！」

ナオは舌打ちし、試しに力任せにして、足と腕に巻かれたロープを振りほどこうともがいてみた。

しかし、それで解けるほど、ロープの力は貧弱ではなかった。

仕方がないので、ナオは、ベットの上に寝転がったまま、体を回転させて部屋の様子にうかがいを立ててみる。すると、ナオの今寝ているベットと、丁度、隣り合う形で、もう一つのベットが置いてあり、その上に一人の女性がナオと同じように、手足を縛られ寝かされている光景が目飛び込んで来ていた。

その女性は、見覚えのある服を着ている。

そう、ストリップ劇場の、清掃員としての服装だ。

パンツが、スカートからはみ出しているから、一目瞭然である。

だから、部屋は薄暗かったが、それだけで、その女性が二階堂ゆかりであるということが、判っていた。

しかし、それを見てナオは、何故だか判らないが、自分たちが気を失っている内に、この部屋に連れて来られて、縛られているのだと少し遅れ馳せながら悟っていた。

(でも、どうして手足を、縛られているのだろうか?)

ナオは、不審に思う。

自分たちが、こうなった経緯が、いまいち掴めていなかったからだ。

「ぐう・う～ん」

だがその時、となりに寝ていたゆかりが、微かに声を上げていた。

ナオは、それに気付くと、ゆかりに声をかける。

「ねえゆかり？ ゆかり起きて・・・起きてよ、ゆかり・・・起きなさい、ゆかり！！」

「・・・」

しかし、ゆかりからは、何の反応も返っては来なかった。

「ゆかり？ どうしたの、まさか死んでいるの？ ゆかり・・・起きなさいよゆかり！！」

・・・・・・・・

「うッ・ううーん・・・だ・誰よ、うるさいわね・・・」

すると、二回目の呼び掛けに、ゆかりから反応が返ってきた。

どうやら、ゆかりは、目をさました様子だ。

だが、彼女は寝呆けているのか、すぐには明瞭な意識を回復する事はなかった。

ナオは、それを察すると、またゆかりに対し呼び掛けを行う。

「ねえゆかり、ちょっと寝呆けていないでシャキっとしなさい！ 早く起きないと、あなたの胸が、ぺちゃパイだってみんなにバラすわよ！！」

—————！

「・・・な？ ・・なんですって！？」

その言葉を受けると、突然、先程まで虚ろな声を上げていたゆかりが、本能的にナオの方に首をめぐらすと、まるで夜叉のような形相で彼女を睨み付けて来ていた。

だが・・・

「あ・・・あら？ 一体、どうなっているの？ 何、やだ、体の自由が利かないじゃない。これってどういうこと？」

二階堂ゆかりは、突然、目をさますと、自分の置かれている状況が把握できず、頻りに手足を動かそうとして藻掻いていた。

すると、ナオが、ゆかりにこんな事を言う。

「ゆかり、あなたね？ 今、自分が手足を縛られているっていう事を、自覚しなさいよ。ほ・・・ほらそんなに暴れると、ベットから落ちるわよ・・・あっ！」

「きゃっ！」

ドスッ・・・

ナオが、ゆかりに対し、注意を呼び掛けたその直後、案の定、ゆかりはベットから下の堅い床の上に落ちていた。

「い・・・いたあ～い・・・」

「大丈夫ゆかり？」

一応、その時ナオは、ゆかりの身を心配して、声をかけていた。

が、(ベットから落ちるなんて、なんてドジなんだろう)

ナオは内心、ゆかりを馬鹿な奴と思い、舌を出していた。

「ちょっと、ナオ、どうにかして、胸がつぶれて苦しいわ。起き上がれないのよ・・・」

ゆかりは、苦しそうにそう言うと、ナオに助けを求める。

だが・・・

カチャカチャ・カチャカチャ・・・

その時、二人が居る部屋の外で、何か金属をいじくる音がしていた。

二人は驚いて、一時沈黙する。

その直後————ガチャというドアの開く音がしたと思うと、次の瞬間、天井の蛍光灯が何の前触れもなく点灯していた。

床に俯せになっているゆかりと、ベットの上にいるナオが、その蛍光灯の光を受けて眩しく目を細める。

そして、その後、ゆかりはともかく、ナオがなんとか半分ベットから身を起こしてドアの方を覗いてみると、そこには、一人の男がニヒニヒと顔がゆるんだにやけた表情をして、何事もないように立ち、こちらの方を見てる光景が目飛び込んで来ていた。

・・・・・・・・・・

ナオと、その男の目が、ぴたりと合う。

すると、ナオは、その男と目が合うなり、少し険悪な顔をしてこう言っていた。

「あんた誰？」と・・・

十分後、ナオとゆかりは、手足を縛られていたロープを解かれ、今は、足の細い四脚の丸椅子に腰を落とし、目の前の男達に不審気な表情をぶつけていた。

ナオとゆかりの目の前にいる、男達は、四人だ。

一人は見たことのある顔、そう宮坂オーナーである。

そして、ストリップ劇場の支配人、新見川と、その他二人の男達であった。

その他二人の男とは、名前は知らなかったが、ナオとゆかりがストリップ劇場の応接

室で宮坂と話をしていた際、その彼に従っていた男達だ。

一人は筋骨隆々の大男、もう一人は頬のこけたやせ形の髭面の男である。

この男たちは、ナオとゆかりの鼻と口を塞いで何か薬品のようなものを嗅がせ、気絶させた男達であるのだが、それらの男達を、今、目の前にして、ナオとゆかりは至極機嫌が悪かった。

それもそうだろう、自分たちが、今、ここにいる、何の理由で手足を縛られていたということが判らなかつたからだ。

だからナオは、細心の注意を払いながらも、宮坂に対し、きつい眼差しを差し向けていた。

「おいおい、そんな刺のある目で、オレを見ないでくれないかな。確かに、君たちが怒るのも無理はないと思うが、勘違いしてもらっては困るね。今の君たちの状況は、一目瞭然、我々の手の内にあることを自覚してもらいたいね」

その時、ナオとゆかりに対して、言葉を発していたのは、宮坂こと勅使河原であった。

彼は、特にナオに対して、辛辣そうな眼差しを向けると、彼女の鋭い視線をかわしながら、にやけ笑いを浮かべてそう言っていた。

だが、今、何故、ナオとゆかりが、この四人の男達を前にして、椅子に座っているのかというと、それはこう言う事だった。

先ほど、ナオとゆかりは、目を覚ますと、そこへ、一人の男が、室内のドアを開けて入って来ていた。

そして、その男は、ナオとゆかりが意識を取り戻しているのを確認すると、宮坂を徐に呼んで、二人が目覚めたことを告げたのであった。

すると、少ししてから、この室内に宮坂が顔を出す。

そして、開口一番、こう言ったのであった。

『やあ君たち、やっと目覚めたかい？ 君たちが目覚めるのを、待っていたんだよ』

・・・

だが、今、その宮坂たち四人の男を目の前にして、ナオは、無性にあることを聞きだしたくてうずうずしていた。

それは、何故、自分たちが、今、この部屋に居るのかという事だった。

先ほど、目覚めたと思ったら、見たこともない小汚い一室で、手足を縛られベッドの上で寝かされていたのだ。

普通、このような事になれば、その事を経緯を知りたいと思うのは、当然のことである。

だから、ナオは、険悪な眼差しを向けながらも、宮坂に対して、その事を暗に示すような態度をとると、こう言ってそれを聞いたでしていた。

「あのね、宮坂さんでしたかしら？ あなたは、一体、何故、私たちをここに連れてきたの？ しかも、私たちを、気絶させて知らないうちに運ぶなんて、それは、どういう見なのよ。これは、ある意味、誘拐といってもいいんじゃない？ まずは、その事を、伺いたいわね。一体、どういう事なのよ！」

ナオは、その時、敵愾心を剥き出しにして、宮坂に対し吠えていた。

薬を嗅がされて気を失わされたことが、相当、癪に障っていたのだろう。

だから、ナオの口調は、少し刺のある険悪な口調だったのは言うまでもない。

すると、宮坂は、それに薄ら笑いで答え、次にはこう言ってナオの問い掛けに応じていた。

「どうも君たちは、今、何故、ここに居るのかを、知りたがっているようだね？ まあ、それは当然のことか？ 私たちは、ある意味、君たちを拉致したと言ってもいいんだからね。しかし、まあいいだろう。君たちが、何故、ここに居るのかという事が知りたいのなら、教えてしんぜよう。ようするに、君たちは、私どもの金の生る木なのだよ……」
「金の生る木？」

その時、ナオは、怪訝な顔をして問いただしていた。

「そう、君たちはね、率直に言えば、いわば商品なんだよ。これは、ここだけの話なんだが、近々、港には、ウォンという中華系の男の船が入港することになっていてね、それである取引が行われるんだ。それは、日本人の若い女性を、そのウォンというブローカーに買ってもらうという事なんだが、その若い女性のなかに、君たちも含まれていてね。だから、君たちには、その時の商品として、商売のネタにしたいというのが私どもの思惑なんだ。だから、気の毒だけど、君たちは売られていく運命にあるということだ。まあ、気を悪くしないでくれよ」

そこまで言うと、宮坂こと勅使河原は、まるで、二人を値踏みするような目付きで、見つめて来ていた。

すると、それに反発して、ナオが言う。

「それじゃ、これってもしかして、私たちは、人身売買の商品にされていると言う事なの？ それって、冗談なんでしょ？ なんで、私たちが、そのウォンて言う男の商品にならなければならないのよ。貴方達、頭おかしいんじゃないの？」
「……………」

だが、そのナオの言葉には、宮坂は答えなかった。

しかし、その代わりに、支配人の新見川が、口を差し挟み次のようなことを言う。
「あのね君たち、赤越くんに黒川さん？ これはある意味、君たちが悪いんだよ。君たち二人が、ストリップ劇場の踊り子になる件を承諾してさえいれば、こういった事にならなくて済んだんだ。しかし、もう君たちを、ここに連れて来た以上、あとには退けないんでね。だから、覚悟して、あきらめてくれ。私どもとしても、金を入手できる絶好の機会なんでね……」

それは、ナオとゆかりにとって、とても納得のいく言い分ではなかった。

何故、ストリップ劇場の踊り子になる件を断っただけで、自分たちが、人身売買の商品にされてしまうのかが、どうしても腑に落ちなかったからだ。

これでは、ある意味、二人は不運な捨て猫みたいではないか。

飼い主の、勝手な判断で捨てられる猫、そして、自分たちは、この宮坂こと勅使河原の勝手な言い分で売られる立場、これは、まさに、不運としか言いようがない。

だから、ナオとゆかりは、その表情を更に険悪にして、この目の前の男達を殴ってやりたい、という心境になっていた。

だが、それを察したのか、宮坂が、二人を宥めるような口調で、次にはこう言って来ていた。

「まあ、まあ、まあ、君たち、そう険悪な顔せずには気を静め給え。君たちは、ある意味、売られて行くといっても、そう悪くはない待遇を受けることはできるんだよ。ウォンさんはね、買った日本人の女性たちを、愛妾として、中国や北朝鮮の大富豪、そして貴族階級の軍人に売り付けるんだ。だから、命の危険はなく、多少、体を玩具にされるかもしれないが、食うには困る状況にはならないと思うからね、安心し給え。海外での生活も、良いかもしれないよ」

・・・・・・・・

しかし、それは、何の慰めにもなってはいなかった。

なぜなら、愛妾として売り付けられるのなら、貞操の危機にさらされるのではないか？

しかも、彼の話によると、中国や北朝鮮の訳の判らぬ大富豪や貴族になんて売り渡されるのなら、たまったものではない。

ゆかりはともかく、ナオとしては男性潔癖性としての持病をもつ。それなのに、見ず知らずの異国の男に、体を玩ばれるなんて、真っ平御免である。

だからこんな話、頼まれても、承服などできる訳がなかった。

「ちょっとね、貴方達、それは大分勝手な話なんじゃないの？ よりにもよって、なんで私たちが知らない男の愛妾になんかにならなければならないのよ。馬鹿な事言っていると、ただじゃおかないから、覚悟しなさいよ！！」

ナオは、宮坂の言葉を聞くと、無性に腹が立って、椅子を蹴って立ちだすと拳を振り上げていた。

それも、その筈だろう。

目の前では、宮坂がふてぶてしいにや笑いを浮かべて、ナオたちを見据えていたからだ。

だから、それに憤慨しないほうが、嘘になる。

その為、ナオは、宮坂が憎たらしくて、このまま殴ってやろうと拳を振りかぶっていた。

しかし・・・・・・・・

その直後、ナオは、宮坂に従っていた筋骨隆々とした大男に、腕を掴まれ押さえ込まれてしまっていた。

「チッ！」

舌打ちする、ナオ、

そして、それを小馬鹿にするような目付きで見据える、宮坂、

その、二つの視線が交錯する中、その後、結局この話はお開きになっていた。

それは、もう話は終わったとばかりに、宮坂が、立ちだしていたからだ。

彼は、やはり、ふてぶてしい態度で、ナオとゆかりを一瞥してから部屋をでると、ストリップ劇場の新見川支配人に、何か言い置いてそのまま何処へともなく去って行ってしまっていた。

そして、その後、新見川は、何人かの男達を新たに呼び付けると、「女たちを連れてこい！」とあって、やはり部屋を出て行ってしまっていた。

すると、暫くしてから、五人ほどの男達が、手に手錠をかけられ縄で一列に並ばされた十人近くの女たちを、ナオとゆかりの居る部屋にまで連れてくると、そのまま、その

部屋に押し込んで、手錠を外してから部屋の鍵を閉めてしまっていた。

そして、「大人しくしているよ！」と一人の男が、そう捨て台詞をはくと、男達は、一斉に踵を返して部屋を後にし、やはりどこかへ消えて行ってしまっていた。

あとに残され、少し憤慨するナオとゆかり。

しかし、いま連れて来てこられた女達からは、すすり泣きのような声が漏れ出て来ていた。

それを受けて、ナオとゆかりは、困った表情をその顔に浮かべていた。

一体、どうしたら、いいものかと・・・

第四節

あれから、どれくらいの時間が過ぎただろう？

もちろんその時間とは、宮坂こと勅使河原が、この部屋に現れて話をした時からである。

あれから、大分、時間は経っているはず――――

今現在、居る、この部屋は、一体、どこにあるのかは判らなかったが、唯一、一つだけある鉄格子付きの高窓からは、朝の日差しと思われる光と、鳥のさえずる声が肌寒い空気の蔓延する中、この一室に届いているのが判っていた。

今は、一夜明けて、朝方なのだろう。

しかし、いま、ナオとゆかりの目の前には、うな垂れて膝を抱え座り込む女性たちがいる。

彼女たちは、皆、一様に、薄汚れた服を着ており、先程からはただ黙ってその場に虚ろな表情を浮かべながら、何かどうしようもない悲痛に苛まれているかの様でもあった。

その女性たちは、よく見ると、皆それなりに美人で顔立ちもよく、そしてスタイルも良い。

はたから見ると、その中には、芸能人やモデルなどにも負けないくらいの、顔の整った器量の良さそうな娘もいる。

大体、彼女たちは、ナオやゆかりと同年代か、それよりも若い年齢の娘もいるようだったが、今は、この状況で暗く落ち込んでいる様子だった。

それも、その筈である。

先程、ナオとゆかりが、この十人の女性たちに話を聞いたところ、彼女たちもナオとゆかり同様、ウォンという男にその体を身売りされるために、宮坂に捕まってここへ連れて来られたという事であったからだ。

そして、その中の一人の娘、美緒という女性はこう言っていた。

「私が最初に、ここへ連れてこられたのは、約一カ月前ぐらいでした。その当時、私は、ファミリーレストランで、アルバイトの仕事をして働いていたのですが、ある日、そのレストランに、二人連れの方が現れたのです。その男達は、ウエイトレスとしての私に、店の店内で声をかけると、こう言ったのです。『君、こんなレストランで働くよりも、もっとお金になる仕事があるんだが、聞いてみないか』と・・・

それで、私は、その話に興味を示してしまい、その話を聞いてしまったんです。それは、こういう話でした。彼ら二人は、雑誌の編集社で働いていて、いま雑誌のモデルになる娘を探しているのだと言ったのです。そして私に、そのモデルの仕事をしてみないかと・・・

私はそれで、一瞬、舞い上がってしまいました。なぜなら、私は前々から、そういった仕事に憧れていて、いつか雑誌のグラビアなどに顔を出せるようなタレントにでもなりたいと、思っていたからです。そこで、私は、まんまとその男達に騙されたのです。彼らは、その話をすると、二日後にまた夜公園かどこかで会おうと言ってきました。しかし、そこで断ればよかったのですが、私は、その後どうなるのかという事も考えず、会う約束をしてしまったのです。そして、いざ会って話をしてみると、突然、人気のない場所にまでうまく連れ込まれて、その後気を失わされて、気付いてみたら見たこともない部屋に寝かされていたんです・・・」

それから、その美緒という娘とは別のもう一人の娘はこう言っていた。

その娘は、路乃辺飛鳥という女性である。

「私の場合は、こうでした。私は、ある金融会社のOLとして勤めていたのですが、半月前の夜、その日は一人で会社帰り駅前の飲み屋に足を運んだんです。

私はその日は、むしゃくしゃして、お酒を大量に飲んでいました。

それは、仕事上、嫌な上司に、毎日のように嫌がらせを受け、その鬱憤を晴らすためでした。

しかし、その日、私は一人の男と出会うのです。

その男は、酔った私に、人の良さそうな顔をして近付いてくると、世間話でもするつもりで話し掛けてきたのです。私はその時、丁度、道連れになる、話の判る相手を求めていたので、思わずその男と話し込んでしまいました。そして、その後、酔った勢いでその男とホテルへ、ふけこんでしまい、その後は、気付いたら美緒さんと同じようにこの場所に連れて来てこられたのです」

そして、もう一人、中里志保という娘も、こんなことを言っていた。

「私の場合は、明らかに誘拐でした。私は、二カ月ほど前から、ある行為に悩まされていたんです。それは、ストーカーまがいの行為でした。私の勤めていたのは、ある小さな街角にある喫茶店なのですが、朝、その店に出勤する時や、日中の営業時、それに帰りの道すがら等々、夜寝ているときにまでも、私は、何者かに、見張られてつけ回されているような感覚を受けていたのです。

でも、それは、最初の頃は気のせいか、錯覚だと思っていたのです。自分を、つけ狙って常時監視している人なんているわけがないと思っていました。しかし、十日位が過ぎた頃、その男達は、私の目の前に堂々と顔を現すようになったのです。

最初に、その兆候が出たのは、やはり喫茶店からの帰り道でした。店を出てから、私の跡を付けてきたらしい男は、私の目の前に現れるとこう言ったのです、『オレたちが、お前に付きまとっていることを警察に言ったら殺すぞ』と……

その時、私は、身震いしました。

そう言った男の目が本気だったからです。

そして、私は、それから警察や友人にも、何も言えず、怯える日々を過ごしたのです。

ストーカーまがいの行為を、続ける男達は、朝・昼・夜の区別をつけず一日中、私のことを監視し、観察しているようでした。それは何か、値踏みでもしているようにさえ思えて、私は恐かったのです。そしてある日、突然、その時は訪れました。私は、その日は勤め先の仕事の関係上、夜遅くなって帰宅の徒に着いたのです。私は、怪しい男達に監視されているということを知りながらも、一人で、歩き慣れた帰り道を歩いていました。すると、ある路地裏の一本道にさしかかった時、数人の男達が、突然、現れて私を取り囲んだのです。そして、私にナイフを突き付けてこう言いました。『これから、オレたちと一緒に来てもらうぞ、下手な抵抗をしたら殺す！』と……

そこで私は恐くて、叫び声も上げられず、そのまま男達に無理矢理誘拐されて、知らない場所に運び込まれてしまったのです……」

ナオとゆかりが、それらの話を聞くと、皆、それぞれに、いろんな事情があつてここへ連れて来られたのだという様子だった。

これは一つの、由々しき問題でもある。

だが、ここで、一つはっきりと判ったことがあつた。

それは宮坂、つまり勅使河原には、もう一つ裏の顔があつたということだ。

彼は、ナオとゆかりの推測によると、ストリップ劇場の経営や、まだ確かではないが、偽ブランド商品の販売にも手を染め、その上に、人攫いまがいのこともして人身売買に必要不可欠な女性たちを集めていたということだった。

それを思うと、彼の余罪はまた更に増えたことになる。

しかし、どこまであの男は狡猾な奴なのか、とナオはそんな事を思う。

何の罪もない女性を攫ってきて、しかも、人身売買の商品に仕立て上げるなど、まともな人間のすることではない。

おそらく、彼らは、その行為によって、黒峰会の資金源を前々から調達しているのだという推測も成り立つのだが、あまりにもこれは見過ごすことの出来ない事態であると言えた。

このままでは、他に、さらなる余罪が、叩けばまだまだ出てくるのではないかと思われるほど、彼、勅使河原は、犯罪にどっぷりと浸かっている男のように思える。

まあ、黒峰会の準幹部の地位にいるような男だから、それも当然といえば当たり前の様な気もするが、これでは余りにも酷いといえる一言につきる。

だから、ナオとゆかりにとっては、これらの事をそう易々と容認することは出来なかったのだ。

しかし……

いざ、考えてみると、ナオとゆかりの二人は、その彼の犯罪行為の一犠牲者になろうとしているという現状に直面しているという事であった。

二人も、人身売買のネタとして、ここに居る十人の女性たちと同じ立場に立たされているという現実があるのだ。

腑甲斐ない話だが、二人は、特務機関の隊員としての身でありながら、今は、囚われの身に成り下がっている。

そして、それと同時に、ある意味、このような状況をいかにして乗り切れればいいのかという良い方法は、考えつかない状態にあるといってもよかった。

だから、ここに来て、ひどく悩む……

一体どうすれば、良いのだろう。

これは、やはり、この十人の女性たちに聞いた話なのだが、勅使河原が言っていた人身売買のブローカー《ウォン》という男は、あと三日、および四日もすれば、この日本の港に到着するということらしい。そうすると、ナオたちが海外へ売られていくという日も、そう遠くない時期に迫って来ているということの意味しているのだった。

そう考えてみると、こんな処で、のんびりしてられない状況とっていい。

ウォンという男が現れて、人身売買の商談が成立する前に、この危機的状況を脱しなければならぬだろう。

では、一体、どうすればいいのか？

はっきり言ってしまえば、ここから逃げ出せばいいのであった。

しかし、そこが問題でもある。

先程から、ナオとゆかりは、話を終えた女性たちをよそに、いま自分たちが監禁されているこの室内や、外の様子を悉さに調べてみている。

そして、判ったことが幾つかある。

それはこう謂う事だ。

まず第一に、この部屋には出入り口は、一つしかないという事だった。

それは、北側にあるのか、南側にあるのかは判らないが、いま、彼女たちの目の前にある鉄の扉がそうであるということだ。

その扉は、頑丈に出来ていて、そう易々とぶち壊せそうにない代物である。

それと同時に、鍵が当然のごとく掛けられていて、一步も外に出ることは儘ならなかった。

そして、第二に、この部屋の扉越し隣には、もう一つ部屋らしきものがあって、そこには見張り役の男が一人、常時そこに侍ってテレビを見ているという事だった。

しかし、何故、その事が判るのかというと、この部屋の扉には四角い鉄格子付きの窓が口を開けていて、そこから隣の部屋の様子が見て取れるからだ。

だから、それらの点から考えてみると、どうすれば、この部屋を脱出して逃げ出すことが出来るのかという事は、とても困難なように感じられていた。

だが、それでもここを、手際よく、脱出しなければならないだろう。

そこで、ナオとゆかりは、二人で話し合っ、先程から懸命になりその脱出方法を考えだしていた。

二人は、あれこれと、今おかれている状況を分析し、色々な脱出方法を検討する。

まず、最初に思い浮かんだのは、食事が運ばれてきた時にその隙をついて逃げ出すという方法だった。これは、ナオやゆかりと同じくここに捕らわれている、その女性たち

に聞いた話なのだが、自分たちには定期的に食事の時間になると食べ物が入り入れられるということが判っていた。

もちろん、それは、大事な商品を飢え死にさせる訳にはいかないという、配慮があって、差し入れられている食事であるそうだが、その時を狙って、脱出を図ればいいのではないかと思えたからだ。

これも、聞いた話なのだが、食事時になると、三人の男達が現れて食事を運んでくるという。

その間、部屋の扉は開け放たれたままで、逃げだす隙はあるらしい。

それを、教えてくれたのは、やはり十人の中の一人の女性、葛城幸恵という女性だった。

彼女は、前々から何度も食事の時、逃げ出そうと、他の女性たちと話し合わせて計画を練っていたということだった。しかし、それは、未だに果たされぬままズルズルと今日まで逃げ出せずに来てしまったという事だった。

それは何故か？

彼女たちに、その理由を聞くと、みな様に恐いからだということだった。

実は、食事を運んでくる男達は、その胸に銃を携帯しているという。

その為、彼女たちは、まだその銃が使われる場面には遭遇したことはなかったが、もし逃げ出してそれに失敗したときは、その銃で撃ち殺されてしまうのではないかという危惧があったからのようだ。だが、それを聞いたとき、ナオとゆかりは確かにこの方法は危険であるという見解を示していた。

男達が銃を持っているのならば、やはり、逃げ出せば撃たれてしまう可能性は高い。

大事な人身売買の商品を、果たして撃ち殺したりするだろうか、という意見もあるかもしれないが、違う見方をすればこうだ。

もし、逃げ出されて、銃を撃たなかったら、逃げた女たちを捕まえられず、そのまま取り逃がしてしまうことになる、その女たちが警察に駆け込んで、たれ込むかもしれないという危険性がある。

その為、そうなのは、彼らとて一大事だろう。

そうなる、そうならない為にも、手際よく、始末をつけるのではないかという見方がある。

ゆかりは、どう思っているかは知らないが、やはり、ナオとしても逃げ出したあと後からズドンと一発お見舞いされたら嫌なものだ。

彼女とてまだ若い、今すぐ死ねといわれれば、断るだろう。

だから、そんな事もあり、この案を実行にうつすのは、多分にリスクが大きすぎる。そうなる、この方法は、どうしようもなくなった時の最後の手段としてとっておくことにして、あえなく却下するしかなかった。

では、他に良い方法はないか？

そこで、もう一つ思いついたのが、隣の部屋で一人テレビにうつつを抜かしている見張り役の男を騙して脱出する方法であった。

幸いにも、見張り役は、いつも一人であるという。

だから、例えばの話、突然、この部屋の誰かが苦しみだして、病気になったとその見張り役の男に訴えかければ、その男は、驚いてこの部屋の鍵を開けるのではないかとい

うものだ。

そして、その隙をついて、男を騙し、脱出する方法である。

これならば、それほど危険性はないだろう。

これは、単純で原始的な妙案だが、意外と良い考えのような気がする。

見たところ、見張り役の男は、あまり頭の良さそうな男ではなさそうだ。

このような単純な方法に、すぐ、引っ掛かるのではないかと思える。

そうなれば、これは試してみる価値ありだ。

ナオとゆかりは、しばらくの間、他の女性たちと一緒に何やら話し込むと、全員一致で、その計画を実行に移すことにしていた……………

男は、テレビを見ていた。

朝のワイドショー番組である。

アンテナ付きの小型テレビの画面には、今、タレントの姿が大写しになっている。

そのテレビを見ながら、男は、更にジュースとスナック菓子を頬張っている。

それは、まるで見張り役としての緊張感のない、気がゆるんだ光景だったが、男は大分、寛いでいる様子で、顔はテレビに夢中になり至極間抜けな表情を呈しているところであった。

「うぐ……………うう……………ヴうー」

だがその時、彼のいる隣の部屋からは、何やら人の苦しように呻きを洩らす声が聞こえてきていた。

「ぐ〜っ……………誰か？ 誰か助けて苦ししい……………」

それは、女性の声である。

隣の部屋に監禁しているはずの女性の一人から漏れでている声であったが、その時、男は、それに気付くと、テレビを見つつも怪訝な表情をその顔に浮かべて、内心独語していた。

(一体なんだ?)

その後、男は立ちだして、隣の部屋の様子に窺いを立てようとする。

そして、その隣の部屋へとつづく扉の鉄格子付きの窓から、顔を覗かせ中を覗き込むと、今度は、不審気な表情をその顔に浮かべて問いただしていた。

「一体、どうしたんだ？ なに声を上げている？」

男が、その部屋を覗き込むと、一人の女性が、苦しようにベッドの上に横になって、喘いでいる姿が目飛び込んでくる。

それを見て男は、首を傾げ、疑問気に顔を顰めてみせていた。

なんで、苦しように喘いでいるのだろうか、そう思ったからかも知れない。

「ねえちょっと、この娘がさっきからお腹が痛くて苦しんでいるのよ。お願いだから、こっちへ来て様子を見てみてよ。突発性の病気かもしれないわ」

その時、扉越しに、女たちの居る部屋を覗いていた男に、そう言って呼び掛けていたのはナオであった。

彼女は、ベッドの上で横になり、苦しようにしている女性を、介抱する素振りを示し

ながら、見張り役の男に振り返ると、その男に彼女の様子を見てくれるようにと頼んでいた。

もちろん、その時ナオは、さも心配そうな顔をして、その苦しんでいる女性に付き添っているのだが、その二人を取り囲むように心配気な顔をして見据えるゆかりと他の女性たちも、男に悟られぬ様に演技を上手くこなしていた。

すると男は、

「なんだ、腹が痛て一のか？ それならいい薬があるから、それを飲んで大人しくしている。今、テレビがおもしれ一所なんだ、あまり、俺に、手を掛けさせるなよ」

そう言うと、彼は、今居る部屋の備え付けの戸棚から、常備品の薬箱を取り出して、もぞもぞその薬箱の中身を引っ掻き回し始めてしまっていた。

「おっ、あったあった、これだ！」

しばらく薬箱を引っ掻き回して、男は、目的の薬を手にとると、そのまま水道へいって一つのコップに水を入れそれを扉の前に運んでくる。

そして、その薬と水入りのコップを扉越しの窓から差し出して、ナオたちや苦しんでいる一人の女性を見据えてこう言っていた……

「さあ、この薬飲んで大人しくしている。この薬はな、富山の名薬だ。腹痛て一のなんか、五分もすれば治るから、これ飲んだら寝ちまえ。病気の時は、それが一番だからな……」

しかし、それは、ナオやゆかり達にとって、予期していなかった男の行動であった。

ナオたちの計算では、常識的に見れば、苦しんでいる女性を見たら男は部屋の扉を開けて様子を見に来ると思っていた。しかし、男のとった行動は、ただ薬を差し出すという安易な行動だけである。

それは、さすがにナオやゆかりを含め他の女性たちにとっては、計算外の行動であったのは言うまでもない。

その為、ナオは、なんとかして、その見張り役の男を自分たちの居る部屋に誘い込もうとして、次にこう言って呼び掛けていた。

「ねえ薬より、この娘の様子をこっちにきて見てみてよ……」

しかし、その男は……「見るまでもねえ、ただ腹こわしただけだろう」と言って、その呼び掛けにはまったく応じず、薬を手渡したあとさっそくテレビの前に腰掛けてしまい、それっきり隣の部屋の様子など気にもとめず、テレビのワイドショーにうつつを抜かしてしまうという始末であったのだ。

その冷たい態度には、さすがにナオやゆかり達も、思わぬ失敗を認めざるおえなかった。

当初の計画では、男が扉を開けて中に入った瞬間に、ゆかりがその男の頸椎に手刀をたたき込んで気絶させる予定であったのだ。

だが、これでは、他に何も為しようがないということはあからさまだ。

せっかく練った計画が、ここで頓挫するとは思ってもよらなかったのは言うまでもないのだ。

「ねえ、どうするナオ？ これじゃ、計画がぶち壊しよ。まさか、薬を差しだしただけで、中の様子を見にこないなんて、非常識にも程があるわ。こうなると、次の手を考えなければならぬわね。次はどんな手で攻める、あなたにいい考えはあるかしら？」

見張り役の男が、テレビの前に座って、ワイドショーを再び見だした頃、その隣の部屋では、またナオとゆかりそしてその他の女性たちが、二度、寄り集まって、次なる計画を話し合っているところであった。

仮病作戦が失敗に終わり、男が部屋の扉を開かないとなると、他にどのような方法をもちいれればいいだろうか？

その部屋に集っている女たち十二人は、真剣な顔つきで、再検討を始める。

彼女たちには、どうしてもその見張り役である男に、部屋の扉を開けさせたいのだ。

ナオたちが監禁されているこの部屋の鍵を外さないかぎり、脱出は不可能である。

だから、上手く男を部屋に誘い込む方法を、考えださなければならない。

その為に、女たちは、それから三十分近く意見を交わし合い、話し合っていた。

そして出た答えは、ナオとゆかりにとっては、気が進まなかったが、お色気エロ作戦で男を誘い込むということに、全員一致でそれが決定していたのであった。

最初の作戦が失敗した一時間後、まだ見張り役の男は、テレビの前に座って今度はビデオテープを回して映画を見ているところであった。

しかし、そんな所に、また隣の部屋から声が聞こえてくる。

それは、こんな声であった。

リエ：「嫌、やめて昌代。アン・・駄目よ・そんなことしちゃ感じちゃうじゃない・・・」

昌代：「ふふ♥ 何言っているのリエ、本当はもっとして欲しいんでしょ？ ほらこれならどう、もっと感じるでしょ？ 私の言うこと聞かなくちゃ駄目よ・・・」

リエ：「あっ・・あああ・・駄目だったら。そんなとこ触られたらすごく感じちゃう。イヤ〜ん・・・ダメよ・・・」

昌代：「うふふ・・リエの胸ってとても柔らかいのね。それにほら、こんなにもう濡れてきてはしたくない娘ね。でも優しくしてあげる・・・」

ゴクッ・・・

その時、その声を聞き付けた見張り役の男は、生唾を飲み込んでいた。

彼は、今、ビデオを見ていたのだが、今の彼には、もうそれはどうでもいいことになっていた。

見張り役の男は、隣の部屋から聞こえてくる、とても嫌らしい声に耳を傾けると、ビデオそっちのけで扉の前に移動し、その扉の窓越しから隣の部屋の様子を覗くと、窺いをたて始めていた。

彼が、女たちの居る部屋を覗き込むと、そこでは、今二人の女性が全裸に近い格好でベッドの上で絡み合っている。

その女二人は、頻りにお互いの胸や体を密着させると『ああん』とか『イヤ〜ん』と行って、気持ち良さそうに、喘ぎの声を洩らしているのであった。

つまり、その二人とは、パートの清掃員としての制服を脱ぎ捨て、ブラとパンツだけの恥ずかしい格好となった、ナオとゆかりの二人である。

彼女たちは、今ナオが下になり攻められる方を受け持ち、ゆかりがその上にのしかかる形で、しきりに女性の感じる場所を攻め立てていた。

それを見た男は、扉越しに突っ立って、更に中の様子を覗き込むように窺う。

そして、またゴクリと生唾を飲み込むと、二人の女性が絡み合う光景を食い入るように見つめていた。

リエ：「ああ、イヤよ昌代ったら。そこだけは触っちゃダメ・・・そこは大事なところだから、あなたでもいけないわ・・・」

昌代：「リエ、どうしてダメなの？ 女同士なんだから、いいじゃない。そう勿体ぶらないで、させて・・・」

リエ：「えーっ、だってそこは男の人じゃないと感じないわ。あ～あ、でもここに男の人が居てくれれば、もっと感じられるのに残念だわ・・・」

昌代：「何言っているのリエ？ 女の私でもいいじゃない。私を感じさせてあげるわ・・・」

すると、そこへ、先程からその部屋の様子を覗いていた、見張り役の男が、たまらず声をかけていた。

「おい、ちょっと待て、男ならここに俺が居るぞ。ヒヒ・・・今お前の事を可愛がってやるから、そこでじっとしている」

そう言うと、男は、腰のホルダーから鍵を取り出すと、ナオやゆかりの居る部屋の鍵を、ガチャガチャと音をたてて外し始めていた。

そして彼は、好色な笑みを浮かべつつ、扉を開けて中に入ってくると、締めりのないデレデレとした表情をその顔に浮かべて、下着姿で絡み合っていたナオとゆかりの傍へ擦り寄ってきていた。

「さあ、君は赤越リエって言う名前だったよな？ 今から、俺がたっぷり相手にしてやるから、そこでじっとしているんだ。きっと、気持ちいいことが出来るぜ」

そう言うと、見張り役の男は、昌代こと二階堂ゆかりを脇に押し退けて、自分がはいているズボンのファスナーを下ろし始めていた。

そして、その中から、汚らしい一物を取り出すと、リエことナオに対し誇らしげに見せ付けていた。

「きゃっ！ あなたのって結構大きいのね？ でも、私との相性いいかしら？ 私って、大きいサイズの実験てないのよね・・・？」

「おお、そうかそうか、それじゃ、早く、俺が可愛がってやるぜ。まずは、最初に、これをその口で元気にさせてくれよな・・・」

男は、そう言うと、ナオが寝ているベットに上がり込み、彼女の目の前にその一物を突き出してきていた。

だが・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

次の瞬間、ナオは一瞬の隙をついて、目の前の男の一物を力一杯掴み取ると、そのまま情け容赦なく、上方に捻りあげていた。

「うげえええええええええっ！」

それを受けると、男は、情けない苦鳴を上げて顔を歪ませる。

そして、仰向けにのけぞると、その痛みに悶絶していた。

するとそこへ、ゆかりが足を振り上げ、すかさず男の頸椎を狙って重い蹴りの一撃を

見舞う。

ぐへっ・・・

その直後、男は、眼球が頭蓋骨から飛び出るくらい、大きくカッとその目を見開くと、そのまま前のめりに倒れこむ様にして、白目を剥き、意識を失い気絶してしまっていた。(してやったり・・・・・・・・)

ナオとゆかりの作戦は、この二度目の計画を以て、成功していたのだった。

今、ナオとゆかりは、見張り役がテレビを見ていた室内から、外の様子を覗っていた。そこは、小さな部屋だ。

ナオやゆかりを、含め、部屋に閉じこめられていた女性たちは、その監禁状態から解放され、今は、その小部屋に潜んで、他に見張り役となっている男達が外で巡回などをしていないか、確かめていた。

しかし、その小部屋から外の様子を覗くと、今、自分たちが居る部屋は、丁度建物の二階にある場所に位置しているのだということが判っていた。

部屋の外は、一階から、吹き抜けの鉄骨が剥き出しになった倉庫――――

しかも広い。

何らかの資材や、物資が大量に放置され、管理されているところであるらしかったが、今、居る場所の二階からは、下の様子的一部だけしか見て取れなかった。

だが、二階には、人の気配はしない。

これは、逃げ出す、絶好のチャンスであるらしかった。

最初に、その小部屋から、先陣を切って飛び出していたのは、ナオだった。

彼女は、二階の小部屋から、鉄材で組まれた、同じく二階の通路を鉄骨の柱伝いに身を隠しながら移動すると、階段のある付近まで身を伏せて近付く。

そして、辺りを注意深く見渡すと、人が見ていないことを確認して、ゆかりや他の女性たちを呼んでいた。

一同は、階段付近で身を伏せると、更に一階の様子を覗う。

先程も言ったように、二階の大部分は一階からの吹き抜けになっているので、ここから一階の様子を覗うと、一階の倉庫にはやはり人の気配は見当たらなかった。

それを察すると、ナオとゆかりは、二人して、まず最初に一階へ降り逃走ルートを確認する。

この大きな倉庫の出入り口は、二階からの階段を下りて、真っすぐ正面に見えていた。

あとは、脱兎のごとく、その出口に走り野外へ逃げ出せばいい。

女性全員は、恐る恐る一階に降り立ち、緊張しながらそのタイミングを計っていた。

しかし・・・

そこに、思わぬ、声が掛けられていた。

「お、おい、お前たち、ちょっと待て。そこで、一体、何をしているんだ!？」

それは、唐突な、男の声であった。

一階にも、人の気配がないと思っていた矢先、そこで、一人の男に女性たちは呼び止められたことは、予期せぬ出来事であった。

(これはまずい・・・・・・・・)

今や、逃げ出そうとしている女性たちに、一瞬の緊張が走り抜ける。

すると、次の瞬間、先ほど呼び止めた一人の男が、今気付いたように慌ててこう叫んでいた。

「お、お前たち！　まさか、二階から逃げだしてきやがったな！　畜生、ふざけたまねしやがって・・・」

その直後、その声を聞き付けたであろうと思われる、別の男達が、資材や物資の山積みになった倉庫内の陰から、ナオたちがいる階段付近の辺りを覗き込む様に顔を出すと、瞬間的に顔色を変えて次々に叫びだしていた。

「まずいぞ、そいつらを逃がすな。小城、竹島、武田、早く捕まえるんだ！！」

「おう、判った。逃がしはしねー。逃げられたら、たまったものじゃねーからな」

「やろう、逃げられると思ったら大間違いだぞ！」

「くそう、どうやって逃げ出したんだ・・・」

・・・・・・・・・・

その声を受けると、さすがにナオたちは慌てていた。

まさか、人が居るとは、思っても見なかったからだ。

「まずいわ、このままだと捕まる。ゆかりどうする？」

男達に見つかった直後、ナオはそう言うゆかりに対し意見を求めていた。

すると、ゆかりは、

「判ったわ、それじゃ、ここからはみんな、散々になって逃げましょう」

そう言って、他の女性たちに、倉庫内の各所へばらばらになって逃げようと、指示を出していた。

そこから捕り物劇と逃走劇が、始まりを迎えたのである。

女たちは、男達の目を掻い潜って、資材や物資が山積みになっている迷路のような通路の合間を縫って、逃走をはかる。

しかし、それをさせじと、男達は、女たちの逃げる方向を予測して、回り込み、それを阻止しようとする動きを見せていた。

男達の数は、全部で十五人近くいる。

彼らは、先程まで物資の在庫管理の調べものをしていたらしく、山積みにされた荷材の陰に姿が隠れ、ナオたちの目には見えなかった為、初めその倉庫内には誰も居ないと思っていたのは、間違いであるらしいということが判っていた。

その為、その男達が、倉庫内を駆け回って逃げた女たちを捕まえようと奔走すると、女性たちは、慌てて逃げ道を探しパニック状態にもなっていた。

男達は、女に逃げられでもしたら、一大事だと思っているらしく、必死になって女たちの姿を探し倉庫内を駆け回る。

しかし、なかなか、捕まえられるものではない。

相手は、女たちとはいえ、広い倉庫内の荷材の裏に隠れたりして、身をひそめられるので、その捕り物劇は困難を極めていた。

だが、男達は、なんとか女たちの姿を見付けると、数人係で挟み撃ちをしたり、待ち伏せて捕縛を始める。女たちは、捕まると、悲鳴を上げ暴れるが、捕まった以上逃げられずどうすることも出来なくなっていた。

そんな中、ナオとゆかりは、今やっと、倉庫の出入り口近くに来ていた。

出口は目の前だ。

このまま外に逃げ出せば、捕まる可能性が低くなる。

しかし、ここに来て、二人には迷いが生じていた。

それは、先程から、ナオとゆかり以外の他の女性たちが、男達に捕まり始めているからだ。

ナオとゆかりは、仮にも、特務機関の隊員である。

その二人が、再び捕まってしまった女性たちを、このまま見捨てて、逃げてしまってもいいものかと思ったからだ。

逃げれば、確かに、人身売買の商品にされず、海外に売り飛ばされることは免れることが出来るだろう。

だが、二人の立場上、自分だけが助かりたいという我が侬は、この場合許されなかった。

「ゆかり、どうする？ このまま、捕まった彼女たちを、おいてはいけないわ」

「確かにそうね。でも、誰かがこのまま逃げて、警察や特務機関にこの事を報せなければ、意味がないのも事実よ」

「それじゃ、ゆかり、あなたが一人で逃げて。私は、このままここに残り、捕まった女性たちの身の安全を図るその役をかってでるから・・・」

「でもそれじゃ、今後、そう簡単に逃げられなくなるわよ。それでもいいの？」

「まあ大丈夫でしょ。あなたが、報せてくれれば、私も含め他の娘も助かるんだから・・・」

「そうね、確かにそうかも知れないわ。それじゃ、私はここを逃げ出すから、あとはよろしく頼むわね。くれぐれも宮坂には気をつけるように」

「ええ、判ったわ、あとは任せて。助けが来るまで、大人しくしているから・・・」

ナオは、ゆかりとのやり取りを終えると、さっそく彼女を外へ逃げるように促していた。

長居は無用だ、そうと決まれば、早くゆかりだけでも、ここを脱出した方が良いのである。

しかし・・・

そう言って、二人が話していると、その時、突然、何の前触れもなくガラッと倉庫の出入り口の扉が開く。

そして、そこから徐に、二人の男が姿を見せていた。

・・・・・・・・・・

ナオとゆかりが、その直後、驚きに目を丸くする。

(まずい、あの二人だ・・・)

彼女たちが、見た先には、見覚えのある男達が二人、にやけた顔をしてそこに立っている姿が目映っていた。

宮坂の部下らしい、筋骨隆々の大男と、髭面の頬のこけた痩せぎすな男である。

彼らは、突然、倉庫の出入り口に現れると、手に何やら黒光りするものをかざして、ナオとゆかりにそれを向けてくる。

そして「動くな！」と、一言そう言って来ていた。

銃だ。

彼らが、手にしていたのは、リボルバー式の拳銃である。

それで、ナオとゆかりの二人は、それを見ると硬直し、顔を強ばらせてしまっていた。

どうやら、このまま逃げれば、それで撃ち殺されてしまうらしい。

これでは、逃げ出すどころか、万事休すの状態だったといえるのだった。

「まったく携帯で、すぐ連絡を受けて来てみれば、下着姿の女が二人今にも脱出をはかろうとしてるとは、呆れたぜ」

二人いる内の、筋骨隆々とした男がそう言うと、手元の拳銃を小突いて降参するように仕向けてくる。

その銃の照準は、ナオとゆかりにしっかりと向けられていた。

不穏な行動をすれば、撃たれる可能性が高い。

二人にとって、それは、どうしても避けたかった事態だ。

「このまま逃げれば、お前たちを撃ち殺すからな・・・」

男は言う。

男のその言葉の意味をそく悟ると、不本意だったが、ナオとゆかりの二人は、それに観念し、そのまま手を挙げて降参の色を示すしかなかった。

もう逃げられる道もなく、機会もない・・・

その為、彼女等は、悔しそうに手を握り締めると唇を強く噛み締めて、うな垂れ辛酸を舐めるがごとく、その意に従っていたのは言うまでもない。

この倉庫からの、脱出は失敗に終わったのである。

それは、絶好の脱出のチャンスを逃してしまったという事でもあり、警察や特務機関に、勅使河原の余罪に関する情報を、報せに走るといふことさえも逸してしまったといふべき事でもあった。

第五節

古い言葉に、こんなものがある。

「長蛇を逸する」

この言葉は、惜しいところで、丁度いい機会を、とりにがしてしまうという事の喩えであるが、ナオとゆかりにとっては、それはまさに、今回その長蛇を逸してしまった状況にあった。

先程、監禁されていた倉庫の二階の部屋から、まんまと逃げ出したナオ、ゆかり、そして、その他の女性たちであったが、今はまた、そのもとの監禁室といえる部屋の一室にへと戻され、苦汁を嘗めることとあいなっている。

その為、彼女たちは、せっかくの脱出のチャンスを逸してしまい、今現在、一言も言葉を発せず、その監禁されている部屋の壁に、背をもたれかけるような格好でうな垂れている様子が目についている。

結局、逃げた女性たちは、その後、ナオとゆかりを含め、全員男達に捕らえられ、強制的に施錠を受けてしまったのだ。

いま女性たちは、みな手に、手錠をはめられ、その自由が奪われた状態にあるといってもいいすぎではない。それは、また女性たちが、馬鹿な気をおこし、逃げ出さないことを配慮に入れられた措置だったが、彼女たちにとって、それは不運としかいいようがなくなっていた。

「ねえナオ、これからどうする？」

そんな監禁室の部屋の中で、今、二階堂ゆかりは、隣で膝を抱えうな垂れているナオに、声をかけると、困ったようにそう聞いてきていた。

彼女、ゆかりとしては、今後のことが心配であるのだろう。

脱出に失敗し、また監禁され、この部屋に閉じこめられているのだ。これからの、自分たちは、一体どうすればいいのか、疑問に感じるのも無理はなかった。

しかし・・・

「どうするって、そんな事、私にも判らないわよ・・・」

ゆかりの言葉を受けて、ナオは、そう言って素っ気なく答える。

彼女は、膝を抱え、座ったまま室内の扉の方に目を向けると、隣の部屋の監視室で、見張り役をつとめている男達の様子を覗き、また落胆したように膝頭に顔を埋めていた。

今回から、隣の監視室で見張り役をつとめる男は、三人になっている。

それは、もう二度と、女たちを監禁室から逃さないための処置であったが、ナオたちにとっては、いい迷惑のなにもものでもなかった。

だが、先程、お色気作戦で、気絶させた最初の見張り役の男は、今は、隣の部屋にはいない。

彼は、ナオとゆかりの脱出作戦に、まんまと引っ掛かり醜態を曝したことで、あの宮坂の部下である筋骨隆々の大男と頬のこけた髭面の痩せた男に、こっ酷く叱られ、お役御免の憂き目にあっていたからだ。

それもそうだろう、彼は、女たちが男たちに捕まって、この監禁室に戻されるまで、一人この二階の部屋で、汚らしい一物をズボンからはみ出したまま気絶していたのだ。怒られて、当然でもあるといえた。

その為、隣の部屋の監視室には、何度も言うように、三人まで見張り役が増やされていた。

彼らは、先程から、女たちのいる監禁室を扉の窓から覗くと、不審な行動をとっていないか、頻繁に目を光らせている様子でもあった。

それら三人の男は、やはり、宮坂の部下であるらしいが、その中に見張り役の一人には、整髪料を頭髮に塗りたくって、髪を固めている長身の男がいた。

彼は、市ヶ谷信一といい、歳は三十過ぎの神経質そうな男であるのだが、見張り役の男の中でも、そのまとも役を任された立場の男でもある。

そして、あとの二人は、野坂と清水という街角で見かけるような、ちんぴら風情の男である。

彼らは、先程から卑猥な話に花を咲かせており、頻りにナオたちが捕らえられている監禁室で蹲っている女たちの値踏みをして、時折、その部屋を覗いては好色な笑みを浮かべている様子で、ある意味、下種な男たちと同等の品のないありふれた男たちであった。

しかし、こうなると、ナオがゆかりにこの後どうすればいいかと聞かれて、そんな事判らないと答えたのも、無理なからぬ事であったといえるだろう。

何せ、見張り役が三人まで増えたのだ、これで、ますます嚴重に監禁されてしまったといってもいい。また、先程と同じような手を使って、ここから逃げ出すことは、もう出来ないといっても言いすぎではなかった。

今、思えば、先程ナオとゆかりが男たちの手から逃れて、倉庫の出入り口付近の目前に到達したとき、何の躊躇もなく、そのまま脱出していけばよかったと、今更ながらに思う。

再び捕まってしまった女性たちの、今後の身の心配をしたばかりに、逃げるのが遅れて、あの二人の男たちに、銃を突き付けられるというタイミングの悪い状況に、出くわしてしまったからであった。

だから、結局、一度目の脱出が失敗して、二度目はもうチャンスはないと言ってもいいような気がしてくる。

男たちとて、馬鹿ではない。

女たちが、一度逃げたとなると、もう二度と逃がさぬように、監禁の態勢を強化するのは、否めない状況であったからだ。

そんな事もあり、ナオは、今、非常に不機嫌であった。

監禁室の部屋の壁にもたれ掛かり、体育座りをして、その膝に顔を埋めてはいるが、内心では脱出が失敗して、非常に落胆もしているのは事実であった。

それに、今、ゆかりも含めて、ナオとその二人は、酷く寒気を覚えている。

それもその筈だろう、ナオとゆかりの二人に関しては、ブラとパンツの裸に近い格好をしていたからだ。

何故、二人が、未だに、そのままの格好で、監禁室に居るのはこういう事だ。

彼女たちは、先程、逃げるために、下着姿になって見張り役の男を、この部屋にまんまと誘い入れた。

そして、その男を、ゆかりが蹴りの一撃で気絶させて、逃げ出したわけだが、その時、彼女たちは、急いでいたので、服を着ずにそのまま下着姿の格好で他の女性たちと一緒に脱出していたのであった。

しかしその後、女たちは全員捕まってしまう、この部屋に戻されたわけだが、結局、その後、誰がこの脱出計画を指揮して実行にうつしたかという責任追及の話が持ち上がり、ナオとゆかりは素直に、自分たちが率先して、脱出をしようと言いだしたのだと男たちに白状していたのだった。

それで、結局、ナオとゆかりの二人が、その罰を受けて、パートの清掃員としての服を取り上げられ、未だに下着姿のままこの部屋に監禁されてしまったということなのである。

だから、今は、非常に寒気を感じていた。

この部屋が、密閉された空間だとはいえ、今は一月初旬の冬の時期だ。部屋の中で、服を着ていても、暖房がないので寒い状況にある。それなのに、下着姿のままでいさせられるのは、かなり酷い仕打ちを受けているのだということが露骨に判っていた。

それに、新しい見張り役の野坂と清水という男は、先程からナオとゆかりの体を、物欲しそうに嫌らしい目で見ているのだ。

だから、それにも嫌悪感を感じて、鳥肌が立つ状況にもあいなっていた。

だが・・・

そんな状況がつづく中、ナオとゆかりは、こんな時に、先程から空腹を感じてしょうがなかった。

そう言えば昨日、ストリップ劇場で気を失って以来、何も食べてはいない。

その為、腹が減っても、当然の状態であった。

聞くところによると、食事は朝・昼・晩と三食、男たちが用意するという事になっている。

しかし、今朝は、脱出騒ぎで時間を費やしたため、朝食は準備されず、口に出来なかったのは皆同じであった。

だが、今は、おそらく昼時だろう、脱出作戦に失敗して再びこの監禁室に閉じこめられてから、かれこれ四時間近く経過しているようにも思える。

ナオたちは、時計を持っているわけではないので、正確な時間は判らなかったが、彼女たちの体内時計からすると、もうそんな時間帯であるのだろうという推測が出来ていた。「でもナオ、さすがにお腹減ったわね？ 一体、食事の時間はいつなのかしら。こんな状況でも、少しは食べ物をお腹に入れておかないと、腹が減っては戦はできぬって言葉もあるから、実際大変よね。もうすぐ、食事にしてくれてもいいと思わない？」

そんな折り、先程まで無言のままただ漠然と時間を過ごしていた二階堂ゆかりが、その時、ナオに対して焦れたような口調で問いただすと、頻りに同意を求めてきていた。

確かに、二回分も食事抜きの状態では、お腹が空くのも否めない状況といえるだろう。

今は、ゆかりの言うように、何でもいいから、腹に収めておいたほうがいいように思える。

しかしナオは・・・

「ゆかり、ちょっとあなた、はしたないんじゃない？ 仮にも敵に施しを望むなんて、針の穴に三本杉の毛が生えた末代までの恥よ。もっと、特務機関員としての、誇りをもちなさいよね」

そう言って、また、小声で意味の判らない語録を口走ると、ゆかりに対し、少し怒ってきていた。

「でもねナオ、このまま何も食わず、居られるわけでもないでしょ？ だから、食事だけでも、しっかりととっておかなくちゃ、今後、何があるか判らないわよ」

ゆかりの言葉は、正論である。

いざというときに、空腹であっては、適切な判断力も鈍ったりするかもしれない。

それに、一度目の脱出作戦が、失敗におわったとなると、これから長期戦になるかもしれないのだ。

おそらく、監禁は、ウォンという男の船が、港に着くまで続くと思われる。

それを考えると、今後、どうなるかは別として、しっかりとした体力だけは、温存しておかなければならないと言えたのである。

「ウーン、確かにそうかもしれないけど。私としては、いくらお腹が減っても、あんな男たちの用意した食事に、手なんか付けられる気分じゃないわ。私は、あくまで抵抗するから、食事が来たらあなた一人で食べなさいよ・・・」

ナオの、意地を張った発言、

彼女としては、どうしても、犯罪者たちの施しなど、受け入れる気にはなれなかったのであった。

しかし・・・

それからかれこれ、更に一時間がして、ようやく昼の食事が運ばれてくる時間になっていた。

隣の監視室には、慌ただしく三人の男たちが現れ、配膳らしい準備が始まりを迎えようとしていた。

それと時を同じくして、ナオたちが監禁されている監禁室の部屋にも、おそらくスープの匂いだと思われる香が、プーンと匂いたってくる。

その匂いを嗅ぐと、美味しいかどうかは別として、腹がグウッと唸るのも無理はなかった。

食事の準備は、ナオたちと一緒に捕らえられている他の女性たちが言っていたように、三人の男たちによって運ばれてきていた。

その男達は、どれも若い男たちだ。

いずれも、宮坂の部下であるようにも思われるが、彼らは、やはり胸元に拳銃を携帯しており、スーツの上着からそれがちらついてかいま見えていた。

男たちは、監視役の三人の男たちに、監禁室の扉の鍵を開けてもらおうと、そのままトレーに食事を乗せたまま部屋の中に入ってきていた。

そして素っ気なく「飯だ」と一言言うと、女性たちの一人一人に、その食事をトレーのまま無造作に差し出し、無愛想にそのまま部屋を出ていってしまった。

その後、見張り役の男たちが続いて部屋に入ると、食事が食べられる様にと女性たちの手にはめられていた手錠を外し、腕の自由を解放している。

ナオとゆかりも、手錠を男たちに外してもらおうと、彼らが監禁室の部屋から出ていくまで待って、徐に食事に手をつけ始めていた。

食事は質素なものだ。

カチカチのフランスパン二切れに、野菜スープ、そして付け合わせとして二本のソーセージが銀色のトレーの上に乗っているだけだ。

まさか、豪華な食事が出てくるとは期待していなかったが、捕まっている以上、このような食事でありつけるだけでも上等であるというしかなかった。

しかし、その中で、最初にその食事に手を付けていたのは、ナオであった。

彼女は、先程ゆかりに「食べないわよ」、等と言っていた割りには、そんな事すっかり忘れてしまったかのように、食事をはやくも頬張り始めている。

それを見ると、ゆかりは、一頻り苦笑いしたが、自分もスプーンを右手に持ちまだ温

かいスープを啜りだしていた。

「しかし不味いわね、この食事、一体誰が作っているのかしら？」

そんな中、ナオは、一人機嫌の悪そうに悪態を吐いている。

どうやら、スープの味が、お気に召さなかった様子だった。

だが結局、食事が終わってみると、ナオは、トレーの上にあったすべての食事を綺麗に平らげ、程なく空腹は満たされた状態になっている様子だった。

ある意味、ナオは、現金なのかもしれない。

そしてその後、監禁されている以上、何もすることはなく、食事が終わるとまた無言で時間が過ぎるのをただ待つだけになっていた。

「ねえ、それにしてもゆかり、ここだけの話なんだけど、私達が宮坂に誘拐されて連れさられたって言うこと、特務機関や警視庁は把握しているのかしら？ あの彼、関谷くんは、その事に気付いて、課長に連絡は入れてくれたとは思うけど、ある意味、わたしたちが、ここから自力で脱出できないとなると、特務機関や警視庁が、この場所をつきとめて助けにきてくれることを願う以外、他に方法がないような気がするのよね。その事に関して、あなたどう思っている？」

ナオは、徐に口を開くと、そう言ってゆかりに話題をふっていた。

「確かにそうね、このまま私たちが監禁されたままだと、最悪の場合、私たちは海外の見も知らぬ国へと売り飛ばされてしまうかもしれないしね。これから、脱出の機会がめぐってこなければ、万事休すだわ。だから、助けが来れば一番いいのは事実だけど、特務機関本部と連絡を取る手段もないし、どうすればいいか私には判らないわ。事がいい方に運んでくれることを願うしかないわね」

ゆかりは、ナオの言葉を受けてそう言うと、何やら複雑な表情をして、押し黙ってしまっていた。

彼女にしてみれば、なんとかもう一度、この監禁室から脱出を試み、逃げ出したいのは山々であったが、果たしてその脱出が可能であるかどうかは疑問でもあった。

見張り役が三人に増え、しかも、一度脱出に失敗して男たちに捕まっているのだ。

男たちが、二度目の逃走を警戒し、目を光らせているのは事実なのである。

だから今度は、そう簡単に、逃げ出すことは出来そうにはなかったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おおお、お前ら、さすがに大人しくしているな。いい心掛けだ、また逃げ出すことなんか考えるなよ。今度逃げたら、ただじゃおかねえからな・・・」

だがその時、監禁室の扉の方で、男の声が聞こえてきていた。

女たちがその声に気付き、扉の方へ顔を向けると、一人の男が、にやけた顔をして扉の窓から部屋を覗き込んでいる光景が目につく。

あの男だ・・・筋骨隆々とした筋肉馬鹿みたいな男、

その男が、やはりもう一人の痩せた髭面の頬骨のこけた男と一緒に、今、ニヒニヒと下種な笑いをその顔に浮かべこちらを覗いている。

ナオはそれを見たとき、その男達の挙動に嫌悪感を感じながらも、彼らと視線が合わないように膝に顔を落とし、無視を決め込みそ知らぬ顔でそれに応じていた。

男たちの視線に、陰湿なものを感じ取ったからだ。

彼らの視線は、自分とゆかりの下着姿の格好に釘づけになっており、どうやらその二人の男は、先程からナオとゆかりを物色するような目付きで見て物欲しそうにしていたからであった。

何やら、嫌な予感がする。

すると・・・

「おいおい、そこのねーちゃん、赤越に黒川だったか？ オレたちを無視していないで、ちょっとこっちに来てみろよ。何か、話でもしよーぜ。ただ、膝を抱えてうな垂れていても、つまらねえだけだぞ。なあ、こっちへ来いよ・・・」

男たちはそう言うと、ナオとゆかりに誘いの言葉を掛けて、また、ニヒヒと卑猥な笑いを繰り返して、下種な男の本能というべきスケベ心を丸出しにしていた。

「話？ あんたね・・・私たちは、あなたたちと話しすることなんか何もないわよ。それよりも、私たちの服返してくれないかしら？ もう罰は十分でしょ。私たちが、風邪ひいたらどうするのよ。熱出して気持ち悪くなったら、ここにゲロ吐き出してやるからね、そのつもりでいなさいよ」

「そうよ、仮にも私たちは女性なのよ。それを、こんな格好のまま、何時までもいさせられるなんてちょっと酷い仕打ちといってもいいんじゃないかしら？ もっと、女性の扱いには、気をつけてもらいたいわね・・・リエの言うとおりに、早く服を返しなさいよ。でないと警察に訴えるから・・・」

男たちの言葉を受けて、ナオとゆかりは少しいきり立つと、そうやって男たちにあれこれと文句を付け出していた。

彼女たちとしてみれば、何時までも下着姿の格好のままいさせられるのは、ある意味、羞恥に近い屈辱を受けているといってもいい。

だから、寒さしのぎの意味もあるが、一刻も早く、身に纏うものを返してほしいのは山々であった。

しかし・・・

「ほー、それじゃお前ら寒いのか？ だがな、それはお前たちが悪いんだぜ。お前たちが、馬鹿な気を起こしてここから逃げ出すからそんな目に遭うんだよ。もし、服を返してほしいんだったら、今ここで裸踊りでもしてみろ。そうすれば、返してやらねーわけでもないぜ。それが出来ればの話だがな・・・ヒャハッハッハッ」

筋骨隆々の男は、そう言うと、意地悪く惚けた面をして、ナオとゆかりに笑ってみせていた。

それは、無理な要求をして、ナオとゆかりの二人を困らせることに喜びを感じているような、下種な男の笑いのようにも思えて、その時ナオとゆかりは眉を顰めたのは言うまでもない。

「ところでよ鎌田、この女たちを頂くのはどうするんだ。オレ、もう我慢できねーんだよ。幸い、今は宮坂さんもいねーことだし、この際だから今からたっぷりいたぶって頂いちゃおうぜ。売り飛ばしちまった後じゃ、こんないい女と一発出来ねーからな。よう、どうするよ？」

だがその時、今まで筋骨隆々の大男の脇で黙っていた頬のこけた髭面の男が、ナオとゆかりの体をジロジロと嫌らしい目で見ながらそう言うと、鎌田と呼ばれた大男に対し

て焦れたように催促を始めてしまっていた。

彼は、先程からナオやゆかりには判らなかったが、彼女たちの下着姿を見ながら、扉のすぐ近くで頻りに股間の辺りを弄っている。

それは、卑猥な行為であったが、男は相当女にちゃちを入れたくてうずうずしている様でもあり、その股間を弄る手を休めようとはしない様子だった。

「確かにそうだな磯貝。それじゃ、今、丁度嫌らしい格好をしている所だし、あのブラジャーとパンツをはぎ取って、その下の体を拝ませてもらうのもいいかも知れねーな。一発お願いするか・・・？」

鎌田といわれた男は、磯貝という髭面の男に同意を示すと、二人してニヒヒと下種な笑いをもらして、何やら見張り役の男に指示し、女たちがいる監禁室の部屋の鍵を開けると命令している様子だった。

その男達の会話を聞いて、その時、ナオとゆかりは嫌な予感を胸に抱き、その体を強ばらせたのは言うまでもない。

ここにきて、この二人に身の危険が迫ったことは、不運であったが、事の成り行き上、その後のナオとゆかりの運命は果たしてどうなるのかは疑問を差し挟む余地があったという事を、今、ここに明確に記しておこう。

第六節

しなやかに、すらりと伸びる手足、そしてよく括れた腰付き、胸は丸く、形よく整い、ブラのカップによって、中央へと寄せられたその豊かな谷間は、男たちの獣欲をそそらせるにはたる、一品とも言えた。

白い、吸い付きそうな肌は、きめ細やかで、身につけているものは、上下の下着一枚だけ。

そんな二人の姿を目にすれば、どんな男でも一度はものにしてみたいと思う、それが、心情かもしれない。

女性特有の、優美な体の曲線は、欲情をわきたたせる罪な要素もある。

そんな事もあり、今ナオとゆかりは、男たちを目の前にして、至極、身の危険を感じる状況に直面していた。

目の前には、にやけた顔の鎌田と磯貝がいる。

鎌田とは、筋骨隆々とした男の事で、その下の名は、隆治と言う大男であった。

それに、髭面に、頬がこけた痩せ形の男。

この男は、磯貝一樹といい、見るからに女好きな色餓鬼である。

二人は、見張り役の男たちに、監禁室の部屋を開けさせると、その顔にだらしのないにやけた表情をさらしながら、ナオとゆかりの前に迷う事なく近付いてきていた。

そして、ナオとゆかりの目の前にまで来ると、下品な言葉づかいで、好色そうに顔を歪ませ、誰の耳も憚らず、こんなことを言ってまた卑猥な笑いを一頻りもらすのであった。「さあ、赤越に黒川だったかな、これからお前たちには、そこのベッドで一仕事してもらうから、早くその下着を脱げ。これから、オレたちが、たっぷり可愛がってやるから、言うことを聞けよ。でないと、力づくでもお前たちを、丸裸にしてやるからな・・・」

その言葉を受け、ナオとゆかりの表情に、険悪の兆しがさす。

それは、その要求を素直に受け入れる気は、さらさらないといい表情でもあり、二人の男たちを、極端に拒絶した態度でもあった。

「ほ～う？ お前等、オレたちに、逆らえる立場だと思っているのか？ どうせ、お前たちは、このままウォンさんに売られて、異国の男の愛妾として生きていかなければならない運命なんだ。その前にちっとばかり、オレたちを楽しませてくれてもいいだろう。そんな嫌らしい体しているんだ、さぞ、あっちの方も、具合がよさそうだろうと思うぜ。だからそんな顔せず、早くその下着を脱いで、これからオレたちに奉仕するんだ。オレたちが、たっぷりお前たちを調教して、その可愛いおっぱいを心いくまで揉んでやるから、素直に言うことを聞くんだな。こう見えても、オレたちは、そっちの方に関しては達人なんだ。だから、楽しみにしていな、きっと後悔はさせやしねーよ・・・」

その言葉を聞くと、ナオは、

「冗談でしょ？ 誰が、あんた達なんかと・・・私はね、男嫌いで有名な女なのよ。たとえ、あんたが達人であろうと、ただの筋肉馬鹿みたいな男に、嫌らしいことされるくらいなら、猿と一緒に寝たほうがまだましよ。だから、さっさとそのケツまくってこの部屋から出ていきなさい。でないと、あなたの脳天に踵落としお見舞いして、魚の餌にしてやるから、そのつもりでいなさいよ・・・」

そう言うと、ナオは身を振って壁ぎわに退避し、男たちの手の内から避けようとして、その体を両手で抱く様にして身を庇っていた。

その直後、ゆかりもナオに習うかのように、男たちの前から身を退き、壁ぎわに移動する。

二人は、嫌悪感の為、その肌に鳥肌が立っているらしく、腕には細かいぶつぶつが垣間見えて、極端な気色の悪さを感じ取っている様子だった。

すると、男たちは、口で言うだけではダメだと思ったのか、次には、鎌田という大男の方が、近くにいたゆかりの腕に手を延ばすと、半ば、強引な形で床に座り込んでいた彼女を、その上に立たせようと無理矢理引っ張っていた。

「ちょっと止めなさいよ、私に触らないで！！」

それを受けて、ゆかりが男に対して抵抗を示す。

すると、それを見たナオは、突然、立ち上がると、鎌田という大男に対して素足のまま回し蹴りをお見舞いしようと、身を振って足を振り上げていた。

だが・・・

鎌田は、その一撃を、平然として避ける。

ナオは、まさか、男がそれを避けるとは思っても見なかったので、回し蹴りを仕掛け

た直後、その回転の勢いでバランスを崩し、部屋の床に尻餅を付き、そのままそこへおケツをつける状態になってしまっていた。

「おうおう、ずいぶん威勢のいいねーちゃんだな。突然、回し蹴りなんか仕掛けてくるなんて物騒だぜ。しかしまあいい、最初はこっちのショートカットの女からだ。野坂、清水、お前たちは、そこの赤越って言う女が暴れねーように押さえ付けている。この女を可愛がったら、お前たちにも、少しはいい思いさせてやるから、決して暴れさすんじゃねーぞ。これから、いよいよ裸にして、一発お見舞いしてやるんだからな」

鎌田はそう言うと、見張り役の野坂と清水に厳命し、ゆかりの腕を掴んだまま、やはり強引にその体を自分の方へと引き寄せていた。

大男に、命じられた野坂と清水は、ナオのもとに走り、即座に彼女の腕と肩を掴んでその体を押さえ付ける。

二人の男に押さえ付けられて、それには、さすがにナオでも、身動きがとれない状態になっていた。

「あっ、ちょっと何するのよ、放して。腕が痛いじゃない、乱暴はよしてよ」

そんな中、ゆかりは、大男に腕を捕まれ暴れている。

しかし、鎌田という大男の力は、尋常ではなく、ゆかりは暴れた代わりにかえって強く押さえ付けられてしまっていた。

「さあ、これからが楽しみだ。まずは、そのブラをはぎ取って、その下の中身を味わってやるぜ。ちょっと小振りだが、うまそうな胸しているから、結構楽しめるかも知れねーしな。くれぐれも、じっとしていろよ、動くんじゃねーぞ」

そう言うと鎌田は、ゆかりの両腕を掴み、そのままベッドの脇へと連れていくと、その上にのしかかる様にして、彼女を背中側から押し倒し、そのまま仰向けの状態でベッドに押さえつけてしまっていた。

それを受けて、もう一人の男、磯貝が、ベッドの反対側から腕をのばし、ゆかりを動けないように更に押さえこむ。

そして磯貝は、よだれを垂らすようにして、ニヒヒと下品な笑いを一頻りもらしていた。

「グーっ、ちょっと放しなさい！ 放してよ！ 私は、あんた達なんかの言うことなんて、絶対に聞かないから。女性に、乱暴するなんて非道よ！！ その顔に、唾ひっかけてやる！」

ゆかりは、ベッドの上に仰向けになりながらも、必死になって身を振り、抵抗を試みる。

しかし、大の大人の男二人にかかるとは、細身のゆかりの力では、どうすることも出来ない。暴れば、暴れるほど、強い力で押さえ付けられ、ゆかりは腕を自分の頭の上に上げたままの状態、無防備にもブラで包まれた胸を男たちの目の前に曝してしまっていた。

「さあ、それじゃ、さっそく拝ませてもらおうか。お前の胸は、どんな形しているのかな？

乳首の色は赤か？ それともいやらしく、ピンク色しているわけじゃねーだろーな……」

そう言うと鎌田は、ゆかりの胸元に手を延ばし、その胸をおおっている下着に手を掛

けようとする。

するとナオが、ゆかりの危機を察知して、声のあらん限り叫んでいた。「ちょっと、やめなさいよ！！ そんなことして、ただで済むと思っているの！？ その汚い手を、引っ込めなさい。でないと、あなたのキンタ〇、豚の餌にして、掃き溜めのなかに放りこむわよ。それが嫌なら、すぐ昌代を解放しなさい、でないとただじゃ済まないわよ・・・！！」

ナオにとって、ゆかりの身の危機は、看過できない一大事でもあった。

彼女は、仮にもナオにとっての親友なのだ。

そのゆかりが、自分の目の前で汚らしい男の手に掛かり、玩ばれる姿は見たくはない。だからナオは、二人の男に押さえ込まれながらも、必死になってゆかりを助けようと、その拘束から身を振って暴れだしていた。

しかし・・・

「おい、その女うるせーから、これで口を塞いでおけ。せっかくこれから楽しめるのに、ギャーギャー喚かれたんじゃ、邪魔だからな。いいか、きつく縛るんだぞ。これで少しは大人しくなるだろう」

鎌田は、ナオを拘束している見張り役の野坂と清水に、ポケットから大きめのハンカチを取り出すと、それを放り投げ二人に渡していた。

それを、野坂という男が受け取ると、彼は、鎌田の言葉にうなずいて、ナオの口元に無理矢理ハンカチを噛ませ、そのまま口を塞いでしまっていた。

それで、ナオは、ウーウーと唸るだけで、声の出せない状態になる。

いくら叫ぼうにも、声にならない状況に、なってしまっていた。

「おい鎌田、早くしろよ。オレはもう我慢できねーぜ。あっちの方はもう、ピンピンに立ってきてるんだ。だから、この女の身ぐるみ、とっとと剥がしちまおうぜ。その後は、オレたちの玩具だ、心いくまでいたぶってやるぜ！」

その直後、磯貝が鎌田に対し、焦れたように催促を始めている。

それを受けて鎌田は、やはり下品に笑うと、磯貝の言葉にうなずき、ゆかりの正面に向き直っていた。

「よしそれじゃ、まずはブラからだ。こいつは上物だから、なかなか期待できるぜ。よく見ているよ、いまから丸裸にしてやるからよ・・・」

鎌田は、そう言うと、気を取り直しゆかりの胸に手を延ばして、その下着に手を掛ける。

そして、両手を使って、その下着をゆかりの胸の双丘にそって、上方へと捲り上げていた。

「い、嫌！ ちょっとやめて！ ダメっ！！」

するとその直後、ゆかりが身の危険を感じてか、堰を切ったように暴れ出す。

しかし、押さえつけられている以上、男の手を止めることは出来なかった。

「嫌、嫌、嫌、やめて触らないで！ やめろって言っているでしょ！！」

ゆかりの抵抗は、更に続く。

だが、鎌田は、それを無視して、期待のこもった薄ら笑いを浮かべると、そのまま無造作にゆかりの着けていたブラをたくし上げ、一気にはぎ取ってしまっていた。

「・・・・・・・・」

その直後、小刻みにその乳房を揺らして、男たちの目の前にゆかりの胸の双丘が顕わになる。

それは小振りだが、少し先の尖った、形の良い丸い綺麗な乳房であった。

それを見ると、男たちは、更に色めき立っていた。

「おお、たまんねーぜ、さすがに上物だ。見ろよ、乳首がピンク色して立ってるぜ。ケッ、何だかんだ言って、まだ何もしてねーのに、感じているんじゃねーのかこの女。まったく、はしたねー奴だぜ。これじゃ、下の方も、グショグショだったりしてよ？　しかし、はぎ取る楽しみが増えるぜ。待ってろよ、今すぐ気持ち良くさせてやるからな・・・」

「ケケケケケッ」

男たちは、ゆかりの胸に釘づけになると、陰湿な笑いを洩らして、よだれを垂らしていた。

「ィ・・・嫌ッ！」

それを受けると、ゆかりは、羞恥の為に顔を真っ赤にして、横を向いてしまっていた。

彼女としては、男たちの前に自分の胸を曝してしまったことに、ショックで声もでない状態に陥っているらしく、その目は涙目になっていた。

だが、それを見た男たちは、逆に喜び、興奮している様子だった。

「ザー・・・ザー・・・ザー・・・」

ナオが、それを見て、抗議の為か、ハンカチを口にくわえさせられたまま唸る。

しかし、それは、男たちに聞こえていないらしく、あえなく無視されてしまっていた。

「それじゃ、今度はどんな感触か、じっくり試してみるぜ」

筋骨隆々の男、鎌田は、ゆかりのブラを剥がした後、嬉しそうにそう言うと、今度は彼女の上に馬乗りになり、その胸に手をのぼしはじめる。

そして、意味不明な、喜悦の笑いを繰り返した後、そっとその胸に手を触れていた。

「いや・・・いやめてよー！！」

鎌田は、ゆかりの胸に触れると、次にはゆかりの叫びも無視して、その柔かい感触を確かめる様にして、ゆっくりと手を這わせる。

それからやがて、彼女の乳房を玩ぶ様にして、もみしだき始めていた。

最初は、ゆっくりだった。

彼は、親指と他の四本の指を器用に使って、こねる様にもみしだく。

ゆかりは、それを受けると、苦痛を感じるようにその綺麗な顔を歪めて歯を食いしばる。

こんな屈辱は、初めてだ。

ナオとて同じことだが、ゆかりは、今の今まで、その体を男に触れさせたことはない。

しかし、今、下種な男の手によって、いいように玩ばれてしまっている。

これは、彼女にとって、最大の屈辱のなにものでもない。

(こんなのって嫌・・・！！)

それが、ゆかりにとって、今現在の正直な気持ちであった。

鎌田は、ゆかりの胸を玩ぶと、今度は更に興奮してきたのか、ぐっと適度な力を込めて鷲掴みにし始める。

それを受けると、ゆかりの綺麗な胸は、大きく変形し、形をかえ悲鳴を上げるかのようになんて歪んでいた。

すると、その光景に、磯貝は、やはり興奮を隠しきれなくなったのか、ゆかりの素裸な上半身へ身を乗り出す様にしてその顔を近づけると、彼女の肌の匂いを嗅ごうとして、その鼻面を胸の近くへと押しつけて、頻りに嗅覚を研ぎ澄まそうと懸命になっている様子でもあった。

「もうやめて！ や、止めてって言っているでしょ！！」

その直後、ゆかりは、男たちのその理不尽な行為に、耐えきれなくなったのか、一際大きな声を出して拒絶の姿勢を明らかにする。

しかし男たちは、平然としてゆかりを嫌らしい目で見ると、その行為をやめようとはしなかった。

「へへっ、叫んでもダメだぜ。しかし、結構小さい割には、弾力のある胸だな。どうだ、俺の手の動きで感じてくるだろ。気持ち良かったら、声をあげてもいいんだぜ。そっちの方が、オレたちとしても興奮するからよ」

鎌田は、そう言うのと、得意げに手を動かし、翳るような目でゆかりを凝視して更にその手に力を込めながら、嫌がる彼女をいのように玩んで、屈辱を味あわせ続けていた。

それを受けると、ゆかりは、涙を流しその屈辱に耐えるしかない。

これは、感じる行為どころか、彼女にとって、苦痛、以外のなにものでもない行為であったのは確かであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

二分後・・・

「さて、それじゃ今度は、下の方を見せてもらおうか・・・？」

しばらくの後、先程から、ゆかりの胸をいのように玩んでいた鎌田であったが、今度は、彼は、その行為にも飽きたらしく、そのもみしだいていた手を徐に止ると、次には、ゆかりの股間の辺りに目を這わせ、さらなる楽しみを見つけたように、目を光らせ始めてしまっている様子だった。

次の行為は、おそらく、ゆかりの陰部を攻めるつもりなのだろう。

そこは、女性にとって、もっとも羞恥に値する部分であり、そして感じる部分でもある。

その為、鎌田の期待は、相当のものであるらしく、彼は、今以上に、喜びをその顔に浮かべると、これからゆかりがどう反応するかを思い浮かべて、陶醉しているかの様子でもあった。

「よし、それじゃ脚を開かせろ。これからが更にお楽しみだぜ。たっぷりといたぶって濡らしてやれよ、でないと、後で抜けなくなったら困るからな」

その時、磯貝は、鎌田のボルテージに同調したらしく、ニヒヒと卑猥な笑いをその顔に浮かべて、気を急かせていた。

磯貝は、鎌田以上に、好色な色餓鬼だ。

その点から考えると、次の行為が待ちきれない様子で、頻りに鎌田に対し早くしろとその行為を促していた。

だが・・・

「ちょっと・・・もうやめて・・・・・・・・それ以上、変なことするなら、私、舌嚙んで死ぬわ！　もう放してよ・・・！！」

すると、ゆかりは、さらなる身の危険を感じて、悲痛な叫びを洩らしていた。

二人の会話から察するに、次にどんなことをされるかは、明らかだ。

だからゆかりは、その行為をどうあっても、避けなければならなかった。

「まあ、そう泣くなよ。今すぐ下の方もグショグショに濡らしてやるから。しっかり濡らした後は、一番奥までねじ込んでやる。だから大人しくしているよな・・・」

しかし鎌田は、そう言うと、ゆかりの言い分など無視して、その彼女の脚に手を掛ける。

そして、強引に、その脚を開かせようとして、手に力を込めていた。

が、その時・・・

ゴガッ！

突然、いやに鈍い音がしたと思った、次の瞬間、ゆかりの脚を開かせようとしていた鎌田が、あろうことか、そのままの位置から横へと猛烈に吹っ飛び、その後、ベットの上から硬い床へともんどり打って真っ逆様に落ちていく光景が現出されていた。

「・・・・・・・・」

それを見て、啞然とする磯貝、

だが、次に彼が目にしたのは、ハンカチで口を塞がれたまま憤怒の形相で目の前に立っている、ナオの姿であった。

「て・・・テメエ、どうやって・・・・・・・・？」

磯貝が、ナオの登場に驚き、その目を惚けたように丸くすると、次の瞬間、ハッと気付いて、彼女の後を覗き見る。すると、ナオの立つ位置から少し後方で、先程まで彼女を押さえ付けていたはずの野坂と清水が、床に倒れて気絶している様子が目に飛び込んできていた。

それを目にする、磯貝は、

「テメーが、野坂と清水をのしたのか?!」

といて、ナオを凝視し、その目を見開く。

彼としては、信じられなかったが、この女が、鎌田も含め三人の男をのしたのだと、その時初めて気付いていた。

ナオは、どうやら、磯貝と鎌田がゆかりにちゃちをいれている最中に、見張り役の二人の男を床に沈めて、その拘束から逃れ、更に、その後どうやったかは判らないが、おそらく蹴りで鎌田を吹き飛ばしたのだろう。

それを知ると、磯貝は、驚異の目でナオを見据えて絶句していた。

とても、一人の女が、出来る行為とは思えなかったからだ。

・・・・・・・・

「うっ・・・うげえええええええええツ」

しかし・・・

その直後、唐突に、磯貝が苦鳴をあげ始める。

それは、息苦しく搾り出されるような、苦鳴であった。

見ると、磯貝の首に、細い綺麗な脚が巻き付いている。

女の脚だ。

それに、磯貝は、首をギュッと締め付けられて、彼は手足をバタバタ泳がせて、暴れると、悶絶するようにもがき苦しんでいた。

「あなた達、よくも私を玩んでくれたわね・・・容赦しないから！！」

そう、ゆかりがいつのまにか、ベットから身を起こし、磯貝の首を自分の両脚の間に挟むと、そのまま息が止まるぐらいの力で、その首を巧に締めあげていたのだ。

それを見ると、磯貝は、ナオに驚き不用意にゆかりを押さえ付けていた腕の力を緩めたことを、この時、初めて後悔していた。

「うげえええええ、やめろ死んじまう・・・放してくれ・・・放せよ！」

磯貝は、見る見るその顔色を変え、頻りに悶絶する。

だが、ゆかりは、情け容赦なくその磯貝の首を、脚に渾身の力を込めて締め付けてやっていた。

これはある意味、逆襲である。

彼女、ゆかりは、どうやら胸を玩ばれてもみしだかれたことに、相当腹を立てている様子で、磯貝という男が暴れようと、その行為をやめようとはしない。

ゆかりは、女として憤慨しているのだ。

昨日や今日、会ったばかりの男に、いいように玩ばれて黙ってられる訳がない。

だから、彼女のその行為は、男がたとえ死のうと、そんなことはお構いなしに容赦がなかった。

(さっきの恨み、ここで晴らしてやる！！)

それが今現在の、ゆかりの心境だったからである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

すると暫くして、磯貝の顔がだんだん血の気を失い青ざめてくる。

最初は鬱血して、赤い顔をしていたその面貌が、次には青から紫へ・・・・・・・・

そして、頻りに暴れるその動きも、ピクピクと痙攣したような、まるで瀕死の状態にある重傷者のように変化して、よく見ると、磯貝は、口から白い泡を吹き出し始めていた。どうやら、彼はさすがに、落ちた様子だ。

それもそうだろう、たとえ女の力とはいえ、首を締め付けられたのでは逃れる術はない。

これである意味、形勢は逆になったと、いうべきでもあった。

ゆかりは、泡を吹きだす磯貝の姿を見ると、更にもう一息とばかりに脚に力を込める。

すると次の瞬間、磯貝は、ピタリとその動きを止め、ガクッと首を折ると意識を失い気絶してしまっている様子だった。

(まったく、ザマは無いわね。これでお相子よ、あの世で閻魔さまに断罪してもらいなさい。あなた達のような下種な男達は、地獄で絞首刑がお似合いよ。二度と、私の体に触らせないのだから・・・・・・・・)

ゆかりは内心、心の中でそんな悪態を男に吐くと、その男、磯貝が気絶したのを確認して、彼の首を挟んでいた脚を解放していた。

そして、気絶している彼の頭に、追い打ちとばかりに、踵落としをお見舞いする。

すると、ゴキッ、という鈍い音がして、そのまま磯貝は白目を剥くと、滑る様にして

ベットから床へと落ちていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ゆ、ゆかり大丈夫……？」

その後、心配そうにしたナオが、ゆかりの傍に駆け寄ってきて、肩を抱く様にしてゆかりを慰める。

するとゆかりは、剥き出しの胸を押さえながら、ナオの体に身を預けるようにすると、その時、啜り泣くようにして咽び始めてしまっていた。

どうやら、悲痛な感情が極まっていたらしい。

それと同時に、男たちに玩ばれたことが相当ショックだったらしく、プライドの高いゆかりでも、今はそうすることしか、他にこのいいようのない余韻を、慰めることは出来ない様子でもあった。

第七節

「本当に、あの女たちが、鎌田や磯貝をやったのか市ケ谷？ オレには、いまいちそれが信じられないんだが、確かなんだな……」

監禁室の隣の部屋、見張り役の男が詰めるその一室で、いま、あの宮坂義行と支配人の新見川が、驚きの声とともに疑問の表情をその顔に呈し市ケ谷に問いただしていた。

先ほど、ナオとゆかりが鎌田や磯貝をのした後、丁度よいタイミングで、そこに宮坂と新見川が現れていた。

彼らはその時、監禁している女たちの様子が、どうなっているかを見に来たのだったが、そこで見た光景は、四人の男が気絶して倒れている姿であった。

見張り役の市ケ谷の話によると、赤越という女が、鎌田を含め野坂と清水を強引な回し蹴りでしとめ、黒川が強烈な蟹ばさみで磯貝に泡を吹かせたということである。

それを聞いて、宮坂と新見川が、驚いたのは言うまでもない。

それに、怪訝な表情も浮かべていた。

野坂や清水はともかく、鎌田という大男まで気絶させたとなると只者ではない。

たかがパートの清掃員として、ストリップ劇場に勤めるようになった普通の女に、果たしてそんなことが出来るのか？

鎌田は、彼らの仲間内のなかでも、剛勇として知られる男なのである。

その彼が、一撃で気を失ったとなると、宮坂と新見川が驚くのも無理はなかった。

しかし、その気を失った男たち四人は、今、どうなっているのかというと、先程、宮坂の命令で、倉庫内で仕事をしていた男たちを呼び出し、女たちのいる監禁室から、気

を失ったままの格好で不様にも運び出されていたのだ。そして、同じく、この倉庫の二階の別室で、いま介抱されているといった具合なのだ。

だが、彼らには、この後、宮坂の方からきついお叱りが待っている様子だ。

宮坂は、自分がここに居ない間に、鎌田と磯貝が馬鹿な気を起こして、ナオとゆかりにちょっかいを出したことに腹を立てている様子で、先程から、不機嫌に苛立ちを見せていたからであった。

彼にしてみれば、ウォンに売り渡す大事な商品に、傷を付けられるのは、その商品の価値を下げることになると思っただけで、見張り役の市ケ谷に、『どうして鎌田や磯貝に勝手な真似をさせたんだ！』と、怒鳴り散らしていたのだ。

そして宮坂は、その数時間前にも、女たちの脱走騒ぎがあったということを知ると、それにも激怒し、その部屋にあった机を蹴飛ばしてその怒りを顕わにしていたのだ。

「どうしてお前たちは、オレの命令も聞かず、勝手なことをしているんだ。これじゃ、オレの部下として忠実さに欠けることは甚だしいぞ。もっと真剣に仕事をしろよ！ 幸い、大事には至らなかったが、もし逃げられでもしたらオレたちの身が危うくなる。その事を、よく考えて行動しろだ、判ったか！？」

そして宮坂は、その場に居合わせた、市ケ谷に対しても憤る。

市ケ谷としては、自分に言われても他にどうすればいいのだと、その時、そう思ったが、宮坂には口答えできる訳でもなく、黙ってうなずき口を接ぐむしか無かった。

悪いのは、スケベ心を起こして、女にちょっかいを出した鎌田と磯貝だ。

それなのに、自分が叱られるのは割りに合わない。

しかし宮坂は、そんなことおかまいなしなのか、隣に控えていた新見川支配人にも、「もっと教育を徹底しろ！」と、念を押す様にして当たり散らしている様子だ。

だが、十分もすると、宮坂の怒りもおさまり、彼は、市ケ谷に監禁室の鍵を開けると命じると、その部屋の中に足を踏み入れ、ナオとゆかりを含めた十二人居る女たちの前に立って、彼女たちの顔をジロジロと見渡していたのだ。

特に赤越（ナオ）と、黒川（ゆかり）には、念入りに視線を注ぐと、彼は、他の男たちに命じて、服を持ってこさせるとそれを二人に投げ渡して「これを着ていろ！」と言って、その辺に置いてあった丸椅子に腰を掛け座り込んでいたのだ。

そして徐に、女たちに対して、こう話し掛けたのだ。

「しかし、君たちには悪いことをしたな。うちの部下が、君たちにちょっかいを出したことについては素直に謝ろう。オレとしても、君たちには無理矢理監禁しているとはいえ、傷は付けたくないんだ。こう見えても、オレは英国に憧れる紳士なんだ。特に、女性の扱いには気をつけている心算だ。だけどね、今回のことに関してはお相子だ。君たちは、聞くところによると脱走を企ててそれを実行にうつしたそうじゃないか。君たちの気持ちも判らないでもないが、君たちはオレたちにとっての大事な商品なんだ。だから、今回のような脱走騒ぎを起こすと、次には君たちを容赦なく傷つけてしまうかもしれないから気をつけな。オレたちとしても、それほど甘くはない。もし脱走されて警察にでもタレ込まれたら、大変だからな。だから、つぎ馬鹿な気を起こせば、迷わず君たちを撃ち殺す。まあ、そうなりたくなかったら、今後も大人しくしているんだ。ここに居る分には悪いようにはしないからな・・・」

だが、すると……

「宮坂さん？ 私たちを、いつまでここに閉じこめておく気？ こう言っちゃ何だけど、わたし達は仮にもか弱い女性なのよ、それなのに、もう何時間も暖房なしの部屋で監禁されているなんて、耐えられないわ。いい加減、私たちを商品にしてウォンという男に売り渡すことは諦めて、ここに居るみんなを家に帰してもらいたい。そうすれば、何事も万事がうまく解決し、何もこれから問題は起こらないで済むと思うわ。だからどう、この提案、受け入れる気にならない、これはいい話だと思うけど？」

だが、そう言っていたのは、ナオである。

彼女は、先程のこともあり、少し険悪な顔をしていたが、宮坂に対し、怒る風でもなくまた笑う風でもなく、ただ淡々として真面目な顔で、ダメはもともとと分かっていたが、一つの提案をしてみせていたのだ。

それは、一方的な提案であったが、今の自分たちのおかれている状況を考えると、そういう言葉が出たとしてもおかしくない、妙に頷ける部分がありそうな提案でもあったのだ。

だが宮坂は、それに冷笑し、まったく取り合う気にはなれなかった様だ。

「悪いがね、赤越君、私どもとしても金が欲しいんだよ。だから、今回もそうだが、今後とも人身売買の取り引きは重要なうちの資金源になってくるのでね、それをやめる訳にはいかない。だから、君たちは、このまま家に帰ることは出来ないね。残念だけど……」

だが……

だがそう、それはやはり、宮坂の冷たい宣告であった。

口では、丁寧な言い方をしている宮坂だが、黒峰会の準幹部だけありその腹は黒い。おそらく彼は、組織の資金を集めるための仕事をしているのだと思われるが、金のことになると冷徹に撤するようだ。

だからナオ一人の提案は、敢えなく却下され、彼女たちの自由が解放される兆しはなかったのである。

「あっそうそう、それとね、君たちを、ウォンさんに引き渡す日時が決まったよ。当初の予定では三日後だったが、その時期が早まって明日には彼の船が港に着く。だから、君たちにとっては不運だが、あと少しの間この部屋で監禁させてもらおう。だから、それまで、せいぜい日本に別れを告げて大切な思い出にひたっておくんだね。海外にいったら、更に自由な行動がとれなくなる可能性が高いからそうしておいた方がいい……君たちにも、一身上の都合というものがあるだろうから……」

だがしかし、その宮坂の話は、唐突である。

それを受けて、ナオと他の女性たちは、顔色を青くして絶句する。

「なんですって？ 明日？」

そう、それは、万事休すなのだ。

ナオは密かに、二度目の脱出を計画していたのであったが、明日、ウォンという男に自分たちが引き渡されてしまうとすると、残りの時間は少ない。

今回、このような騒ぎがあったあとでは、更に、監視は厳重になると予想される。

そうすると、逃げ出せる機会はまだ絶望的だ。

だから、このまま、自分たちの身が売り飛ばされてしまうとすると、怒りを乗り越し

て、落胆に近い思いがわいてくる。

それはある意味、屈辱であるが、捕まっている以上、どうすることも出来ないことは確かで、非情でもあった。

「それじゃ、あなたはどうしても私たちをウォンと言う男に、売り渡すというのね？
それってちょっと、非人道的と思わないかしら？ 私たちは、何の罪もない一般人なのよ。それに、まだ若いし日本でこれから人生を謳歌できるのに、それを人身売買のネタにされるんじゃ、これからどうすればいいのよ」

だがそれは、ナオとしては、ちょっと弱気な発言を含んだ宮坂に対する痛切な抗弁だ。彼女としてみれば、たまったものではないのだ。

人身売買の商品として異国へ売られていく、それはもう、二度と日本へ帰ってこれられないことと同じ事を意味しているではないか。

それに、見ず知らずの男の愛妾に、無理矢理させられることなど我慢がならない。

だがしかし、どうあがいても今の状況は打破できないし、ナオでさえ弱気になるのも無理はなかったことなのかもしれないのだ。

だがすると、それを察してか、宮坂が言う。

「まあ、まあ、まあ、そう余り悲観的になるな。前にも言ったように、愛妾にさえなれば、多少、身の自由がきかなくなるとはなるが色んなものを買って与えられるかもしれない。ウォンさんが売り付ける先は、金持ちばかりと聞かからね、まあ、ここは覚悟を決めて諦め給え。決して悪いようにはならないからな・・・」

だがその言葉に、ナオは押し黙る。

それに、他の女性たちも同じであった。

宮坂は、悪いようにはならないと自信をもって言うが、そんなこと信じられる訳がない。

こうして捕まり、監禁されていること自体、悪い状況であるというのに良くそんな口がきけたものだと思う。

だからこれから、ゆかりも含め、女たちはこの先どうするか話し合わなければならないと、宮坂の思いをよそに、そう心に思うしかなかった。

このまま身売りされるのは、御免なのである、絶対・・・

「ああそうそう、それとね赤越くん？ 君も、そうなんだけど、黒川くんと君は、以前、武術でもどこかで習っていたのかね？ あの鎌田を一発でのしたとなると、空手かテコンドウでも習っていたのかと思ってね。試しに聞いてみたんだが、どうなんだい？ 少しぐらい、嗜みはあるのかい？」

「いいえ、わたしはただの何も出来ないか弱い女よ。昌代も、わたしも、武術なんか一切習った覚えはないわ。あの下種な男たちがのびたのは、相当、気がゆるんでいたからでしょう？ だから、気絶しようとして、そのまま死のうと私たちの知ったことじゃないわ。もうあんな男たちを、私たちに近づけさせないでね。でないと、また必殺の回し蹴りをお見舞いしてやるから・・・」

そう、

だがそうその時、ナオは嘘を言っていた。

本当のところは、特務機関に入隊してから、柔道と合気道とテコンドウの指導を受け、

今では、有段者としての称号を持つ。

その為、たいていの男を床に沈めることは、お手のものなのだ。

しかし、彼女が宮坂に嘘を言ったのは、自分たちが特務機関の隊員であることが、バレるのを恐れてのことである。

もし自分たちが、潜入捜査でストリップ劇場に潜入していたということがバレれば、何をされるか判らないからでもある。

だから、ここはなんとか嘘を言って、宮坂を誤魔化しておく必要がある。

あえて、こちらから、自分たちの素性を明かすことは、避けたほうがいいのだ。

だがすると、それを聞いて宮坂は、意外とナオの言葉に納得し、それ以上は話を追求してくる事はなかった。

彼は、多少は疑問気な顔をしてはいたが、大して、その事に興味はなかったらしく、一頻り頷くと、椅子から立ち上がって踵を返していた。

おそらく、話を終わりにするらしい。

「それじゃ君たちは、ここで大人しくしているんだぞ・・・」

そして彼は、女たちに、一言そう言うと、監禁室の扉を開けて徐にその部屋を後にした。

そして、見張り役の市ヶ谷に、その部屋の鍵を掛けさせると、支配人の新見川とともにどこへともなく消えていってしまう。

彼らは、これから何をするのか疑問だったが、残された女たちは、その後、一ヶ所に集って、話し合いを始めたのは言うまでもない。

残された時間は、後わずかなのだ。

だからその前に、なんとかここから脱出を計りたい、それが彼女たちの本気の願いの話でもあったのだ。

第八章 貨物船で . . .

第一節

「ええっ！ 拉致！？」

その時、特務機関のデスクフロアーで、その声を上げたのは、驚きに目を丸くする柏木モモであった。

今、モモには、課長の佐渡の方から、昨日、ナオとゆかりが勅使河原によって攫われてしまったということが、重々しく告げられている。

一月四日の夕刻、二人は拉致されてしまった。

それを聞くと、モモは、手に持つコーヒーカップを、つと落としそうになって慌ててそれを握り直していた。

何か変だ、と前々から思っていた。

佐渡課長もそうだが、潜入捜査に参加していた関谷莞爾も、昨日からナオやゆかりのことについて、口をつぐみ話さなかった。

その日の夜から、ナオとゆかりは、ストリップ劇場の潜入捜査から帰ってきていないのだ。

それから察すると、二人に何かあったことは確かだと思っていた。

しかし拉致とは、これは一体どういった了見なのか？

その時の柏木モモは、一時、理解不能の状態に陥っていた。

「課長、課長、拉致されたって、一体、どういうことなんですか？ それは、誘拐されてしまったということなんですか？ その事を、はっきりしてください。これは、一大事ですよ一大事・・・どうして、攫われてしまったんですか！？」

「まあ柏木、そう慌てるな・・・関谷の報告によると、ナオと二階堂はおそらく人身売買のネタにされて拉致されてしまったらしいんだが、今、その行方を警視庁の方が血眼になって探している。だから取り乱すなよ、お前が慌てると、この特務機関が大騒ぎになるからな・・・」

「人身売買？ そ、それって、人を売り買いするということですよ？ それじゃ、ナオ先輩と、ゆかり先輩は、どこかへ売られてしまうっていう事じゃないですか？ こうしちゃ居られません、早く手を打たないと二人にとも一生会えなくなってしまうですよ・・・」

柏木モモは、そう言うと、慌てふためくようにして、特務機関員用のジャンパーを事務員の制服の上に着だし、特務一課のデスクフロアーを慌てて飛び出していこうとしていた。

どうやら、佐渡の話聞いて、パニックになっている様子だった。

だが、それを佐渡が止める。

「何やっているんだ柏木、お前は、どこへ行く心算なんだ?! お前が慌てても、何の解決にもならないんだぞ。少しは落ち着け、いいか、ここでじっとしているんだ……」
「でも……でも課長、早く二人を捜さないと大変ですよ。二人が誘拐されてしまったんじゃ、何されるか判らないじゃないですか? 勅使河原たちに、変なことされる前に探し出してあげないと万事休すですよ。だから課長、わたしを止めないでください。私一人でも、探してきます。早くしないと、二人ともどっか遠くへ連れていかれてしまいますよー!」

モモはその時、真剣である。

二人が攫われ、拉致されたとなると、その二人と仲のいいモモには、天変地異が訪れた位、それは大変なことだった。

だから、こうしてはいられない、何か自分に出来ることがあるのならば、いま直ぐ、それを見付けだして行動に移したかった。

ジツとしては居られなかったからでもある。

しかし、それを聞くと関谷は、

「まあ、まあ、まあ、モーちゃん。君が一人で行動しても、どうにもならないだろ。ここは課長の言うとおりに、ここにジツとして落ち着くんだ。何度も言うように、今、警視庁は二人を捜すために、捜査員を動員して都内の主要な港をしらみつぶしに当たっている。だから、心配はないよ。それにね、特務機関と警視庁は次の手を打つ心算なんだ。だからそう慌てず、騒ぎを大きくするなよ。君も一応、特務機関の隊員だろ、いいかい判ったか、とにかく落ち着くんだ……」

彼は、そう言うと、モモの肩を押さえて落ち着かせようと努力していた。

「えーっ、判りましたよ……でもそれじゃ、次の手って、一体何をするんですか? その手を打てば、ナオ先輩とゆかり先輩を探し出すことが出来るんですね? それ、私に教えてくださいよ。私、そんな話を聞くと、二人が心配で心配でたまらないんです。だからどんな手を打つって言うのか言ってみてくださいよ。そうしないと納得いきません、ねえそうでしょ?」

それに答えて、佐渡一課長がモモに言う。

「それはな柏木、この前、ナオと二階堂が潜入捜査で仕入れた情報に、勅使河原が、銀座で偽ブランド商品を売り捌いているという、重要な情報があったんだ。そこで、警視庁は、ナオと二階堂が拉致されたという緊急の事態でもあり、その勅使河原が経営していると思われる、銀座ブルームントという店を、緊急摘発することになったんだ。当初、その報告を受けてから警視庁は、銀座にあるそのブルームントと言う店を張り込んでいた。そして判ったのは、やはりその店が、黒峰会の息のかかった店であるということが濃厚となってきたんだ。だから、その店をこの際、緊急摘発し、その店で働いている勅使河原の部下に、勅使河原やナオ、二階堂の所在を問い詰めれば、二人が拉致された場所が判るかもしれない。柏木、お前が一人で探し出すより、そっちの方が確実に一挙両得にもなるんだ。だから、お前はここで大人しくしていろ、ナオみたいな勝手な行動は赦されないんだからな……」

その課長の言葉を最後に、その日の三人の話は終始していた。
そして、次の日を迎えるのである。

所変わってここは、鉄材が剥き出しになった、寒い部屋、暖房がたかれない、その一室で、今、十二人の女性たちは、冷たい床に腰を落とし、それぞれに与えられた毛布に包まってじっと過ぎ行く時間を耐えていた。

あれから更に、どれくらいの時間が経ったであろうか？

今は夜、八時間ぐらい前に夕食が運ばれてきて、それを食した後の時間帯である。

だから、今は、深夜の二時か三時頃、見張り役の市ヶ谷によって、もう既に監禁室の部屋の蛍光灯は消され、淡い小さな白熱球が一つ灯されているだけであった。

しかし、その白闇の中で、密談が交わされる。

ナオやゆかりを含め、今、十二人居る女たちの中で、就寝についている女性の姿はなかった。

それもそうだろう、昼間、宮坂に明日ウォンという男の船が港に着き、女たちの身柄が引き渡されるのだと告げられていた。

それを考えると、悠長に、寝ていられる場合ではなかったのだ。

「ねえ、どうします赤越さん、私たち、このままじゃ、夜が明けたらよいよ売り渡されてしまいます。そうなる前に、どうかしてこの部屋を抜け出さないともう後がありませんよ・・・」

今、そう言っていたのは、ここに捕らえられている中の一人、高坂美緒という女性だった。

彼女は、ファミリーレストランで、働いていて騙され、ある都内の公園からここへ連れてこられてしまった宮坂の犠牲者の一人だ。

その彼女が、ナオに対して、少し焦燥に近い顔を浮かべながら問いただしてくる。

それを受けて、ナオは、隣に居るゆかりの顔を一度覗き見てから、こう言ってその場を仕切っていた。

「そうね、確かにそうかもしれないけど、私としても、これ以上どうやってここを抜け出せばいいか思いつかないわ。前使った手はもう通用しないし、それに見張り役があ市ヶ谷って男じゃ、用心深すぎてへたな小細工は通用しないような気がするわ。だから、ある意味、お手上げね。誰か、他にいい方法を考えてくれればいいんだけど、どう、いい考えはあるかしら？ あるなら、私に話してみて、どんな方法でもいいわ。この際だから、選り好みはしてられないし、上手くこの場を脱出できればそれでいいの。だからよく考えてみて、明日になってからでは遅いからね・・・」

そう言うと、女たちはしばらく押し黙る。

ナオの言葉を受けて、真面目に考えている様子だ。

彼女たちとて真剣である。ここから脱出する方法を考えださねば、身の危険に晒されるのは必死なのだ。だから、時間を気にしつつも、それからかれこれ十分近く、各自が頭を悩ませつつ、一生懸命になって脱出方法を模索していた。考えを搾り出している様子でもある。

「あの、こんな方法はどうでしょう？」

すると、暫くして、そこへ口を開いていたのは、葛城幸恵という女性だった。彼女は、眉の秀麗な輝くような目を持つ女性で、その鼻梁もつんとして形よく勝ち気な感じのする美女だった。

その彼女が、思い立ったかのように口を開くと、ナオやゆかりを見て一度髪を掻き上げる。

そして、女たち全員が、彼女に注目する中、また口を開いていた。

「あのですね、私たちの誰か一人が、見張り役の男にトイレに行きたいと言ってこの部屋を出してもらうんです。幸い、今の見張り役は、あの市ケ谷って言う男一人だけだし、他の男はいません。だから、その時なんとかして、その市ケ谷という男から、この部屋の鍵を奪って脱出するんです。この方法はどうでしょう？ 他に良い方法が思い浮かばないから、ちょっと難しいかも知れませんが、赤越さんか黒川さんがこの役を買って出てくれれば上手くいくんじゃないかと思うのですよね。それじゃ、ダメでしょうか？」

葛城幸恵の意見は簡単な話だが、上手くいけば、脱出の可能性が見いだせるかも知れない、そんな意見であった。

トイレのある場所は、この監禁室の隣の監視室の中だ。女たちは、ここに捕らえられてから、何度か用をたす為にそこを使わせてもらっている。

そこから考えると、葛城幸恵の意見は、なかなか良い案のようにも思える。

武術の心得のあるナオかゆかりが、この部屋を出、市ケ谷の隙をついて彼を気絶させるか、捕まえるかして監禁室の鍵を奪う。そうすれば、脱出できる可能性が無く無くもない。

これは、ここに集う女たちにとって、最後の手段とも言える脱出方法でもあった。

それを聞くと、ナオとゆかりは、腕を組む様にして思案し始める。

それが果たして、可能かどうか、考えている様でもあった。

「確かにそれはこの際だから、良い方法かもしれないわね。でも、あの男に騒がれたら終わりよね。今は、夜中だから、他の男たちは倉庫内で仕事をしているはずはないと思うけど、何人かは、隣の監視室以外にも居るんじゃないかと思うわ。だから、この方法を実行に移すのなら、なんとか騒がれない様に、事を起こすしかないわ・・・どう昌代、この方法試してみる？ いちかばちか、実行にうつしても良いかもしれないわね・・・」

ナオはそう言うと、昌代ことゆかりを見て意見を求めていた。

これは、一人では決められない、重要なことだと思ったからだ。

「ウーン？ それじゃ、いちかばちか、その方法を実行にうつしてみましようか？ 可能性があるのならば、何もしないよりはマシかもしれないから、試してみないと損よね。でもリエ、私とあなたどっちがその役を引き受ける？ これは重要な役目よ、だから私がやりましようか？ あなたに任せると、騒ぎが大きくなって大事になりそうだからね。どうする？ そうしてみる？」

「いいえ、その役は私がやるわ、昌代じゃちょっと役不足よ。私に任せてくれれば、あの男を一撃でのしてみせるわ。だから、この方法を実行にうつすなら、早くやりましよう。なるべく、時間は早いほうがいいわ。もたもたしていると、夜が明けてしまうから・・・」

そんなことで、葛城幸恵という女の提案は、ここに捕らえられている全員に認められ、実行に移されることになっていた。

果たしてその作戦が、上手く行くかどうかは問題である。

市ケ谷は、その時、深夜放送のテレビを見ていた。

4チャンネルで、放映されている映画である。

その映画は、白黒の映画で、字幕スーパーの西部劇であった。

彼の居る監視室には、市ケ谷、以外だれもいない。

だから、市ケ谷は、机に足を放り出して、椅子に背をもたれ掛け、至極寛いだ格好で映画鑑賞に没頭していた。

今は、深夜であるため、物音一つしない。そんな中で、薄暗い部屋に意味不明な英語の台詞が流れているのは、何か簡素な気がしないでもないが、そんなことは気にも止めず、彼は、テレビ画面に夢中になっている様子だった。

「ねえ、ちょっとあなた、私トイレにいきたいんだけど、この鍵開けてくれないかしら？

早くしないと漏れちゃうわ。ねえ開けて、いいでしょ？」

そんな時、隣の監禁室の覗き窓から、一人の女性が声をかけてきていた。

ナオである。

彼女は、少し青い顔をしてそう言うと、その場で、モジモジしながら尿意を訴えて、足踏みしていた。

「何だ、便秘か？　しかし、こんな夜中によく小便が出るな。判った、いま開けてやるから、待ってろ。まったくしょうがないな・・・」

市ケ谷は、ナオの言葉を聞くと、テレビから目を背け少し面倒臭そうに床に立ち上がると、カツカツと足音をたてて扉の前に近付いて来ていた。

そして、腰から鍵を取り出して、監禁室のドアを注意深く開けると、中で他の女性が寝ているかどうかを確かめてからナオだけをその部屋から出してきていた。

どうやら彼は、ナオたちの計画に、気付いてはいない様子だ。

これならば、隙をついて、市ケ谷を気絶させることが出来るかもしれない。

ナオはその時、彼に気付かれないように、小さくほくそ笑んでいた。

市ケ谷は、ナオだけを監視室に入れると、またそのドアの鍵を閉めてしまう。そしてナオに対し「早く済ませろよ」というと、彼女の手を掴んでトイレまで連れていく。

それから、ナオがトイレに入ったのを確かめると、そのトイレの扉の前に立ったまま腕組みして、待っている様子だった。

二分後・・・

ナオは、水洗トイレの水を流しながら、そこから出ると待っていた市ケ谷にまた手を引かれて、監禁室に戻されようとしていた。

しかし、そこでナオが、一芝居をうつ。

「あ痛たたた・・・ちょっと待って。私、急にお腹が痛くなっちゃった。もう一度トイレに行かして、お腹が、お腹が痛い・・・だから、ちょっと待って・・・」

そう言うと、ナオは、その場に腹を抱えて屈みこむ。

そして市ケ谷が、彼女の顔を覗き込むのを待っていた。

「腹が痛い？　まったくしょうがない奴だな。それじゃもう一度、トイレに行ってこい。俺は、ここで待っているから早くしろよ」

市ケ谷は、腹を抱えて蹲るナオを案の定覗き込むと、意外にも心配そうな顔をして屈み込んできていた。

だが、その瞬間を、ナオは見逃さなかった。

べきっ！

屈み込んだ状態から、ナオのアップercutが、市ケ谷の顎に炸裂する。

それは、瞬殺だった。

それを受けると、市ケ谷は、ウゲツと言う苦鳴を唐突に発してよろめいていた。

しかし、そこへすかさず、立ち上がったナオの踵落としが彼の脳天に再び炸裂する。

ドッ・・・

それで市ケ谷は、無残にも気を失って、その場に卒倒していた・・・

(やりー)

これで上手く、この場から脱出が出来るかもしれない。

ナオはそう思うと、急いで倒れている市ケ谷の腰から、監禁室のドアの鍵を取り外す。

そして、監禁室に駆け寄ると、出来るだけ音を立てない様にして鍵を徐に開けていた。

「さあみんな逃げるわよ。早くして、あいつが気絶しているうちに、脱走しないとせっかくのチャンスが、台無しよ。さあ、早く早く・・・」

しかし・・・

パン・・・パン

今や、逃げだそうとしている、ナオたち十二人の女性の耳に、突然、銃の発砲音が響いていた。

ナオがその音に驚き、後をふりかえる。

すると、そこには見覚えのある男が、一人立っていた。

支配人の新見川だ。

彼が、右手に銃を持ち、それを天上に向けて掲げていた。

その光景を見て、ナオと他の女性たちは、この二度目の脱出作戦が、脆くもこんな早い形で失敗に終わったことを、その時、否応無しに悟らねばならなかった。

第二節

「まったくあの女、只者じゃないですよ宮坂さん。こう言っちゃ何ですが、あいつの素性を、調べたほうがいいんじゃないですかね？ 絶対あの女には、何か裏がありますよ。普通じゃ、あんなこと出来る訳がないですからね・・・」

今ナオたちが監禁されている部屋と、同じ二階にある別の部屋では、宮坂と新見川が向き合った形で話をしている最中であった。

先程から、新見川が話題にしているのは、あの赤越リエことナオのことである。

新見川は、昨日の夜、ナオたちが二度目の脱出計画を執行して逃げ出そうとした時、彼女の行動に対して不審を抱くようになり、今、その事を宮坂に忠告しているところであるのだった。

何せ、あの女は、鎌田や野坂、清水、そして市ヶ谷まで、どうやったのか判らなかったが、気を失わせ卒倒させるほど、その男達を完膚なきまでにのした暴力女なのだ。

そこから考えると、ナオには、何か、普通の女にはない特別な裏があるのだと思われる。でも、致し方なかった。

普通、パートの清掃員志望の、女ごときに、屈強な男たちを気絶させ、床に沈めることが果たして出来るであろうか？

常識で考えれば、そんなことできる訳がない。

しかしあの赤越という女は、それをやってのけたのだ。

それも、あつという間の出来事として・・・

だから、それを聞くと、さすがに宮坂も黙ってはいられない。

彼としてみても、新見川が疑問に思うように、彼女、赤越に対して警戒の色を浮かべなければならないと思える。

だから宮坂は、新見川の言葉を受けて、腕組みをするように考え込むと、思い立ったかのようにこう言ってその問い掛けに答えていた。

「確かにそうだな・・・こういうことが続くと、あの赤越という女には、お前の言うとおりの普通じゃない、何か胡散臭い匂いを感じる・・・しかし、一体あいつは何者なんだ？

俺としても、そこんところがいまいち判らない。だから新見川、あの女には、今後、気をつけろよ。あいつの正体が判るまで警戒しておくんだ。また、問題を起こされたんじゃ、たまったものじゃないからな・・・」

・・・・・・・・

コンコンコン・・・コンコンコン・・・

だが、二人で話している、その時、宮坂と新見川が居るその室内のドアが、唐突にノックされ、そして徐にそのドアが開かれると、一人の男が室内に入って来ていた。

「なんだ坂田か？　一体なんの用だ。挨拶もなしに入ってくるな、いつも言っているだろ・・・」

それを受けると、坂田と呼ばれた男は、急いで頭を下げ宮坂を見据えてこう言っていた。

「すいません、宮坂さん。ですが、ウォンさんがやっと港に着いたんです・・・それを早く、宮坂さんに報せようとして、飛んできたんですけど失礼しました。今度から、気をつけますので、今回はどうかご容赦ください、軽率でした・・・」

だが、その言葉を聞くと、宮坂は、

「何、ウォンさんが港に着いたのか？　それならそうと早く言え。それで、今どこにいるんだ？　此方に向かっているのか？　それとも、まだ港で荷下ろしでもしているのか？　どっちなんだ？　早くその事を言え、気のきかん奴だな・・・」

そう言って、先ほど顔を見せた坂田という男に対し、気が急くようにそう問い正していた。

坂田は言う。
「それなんですがね、宮坂さん。ウォンさんはまだ港にいます。ですから、こちらからウォンさんの方に出向くか、それとも彼を此方にお呼びするのか、どっちにすればいいかを、一応、宮坂さんに指示を仰ごうと思って、今、ここに来たんですけど、どうします？ 此方に、お呼びした方がいいですよね？」

坂田は、そう言うと、宮坂の指示を真面目腐った態度で待っていた。

どうやらこの男は、意外と律儀な男の様でもあった。

すると宮坂は、
「判った、そうか？ それじゃ、此方にきてもらおう。悪いがお前、ウォンさんを出迎えて来てくれ。彼には、女たちの品定めをしてもらわなければならないからな、だから、長旅で疲れていると思うが丁重に此方にお迎えしろ。くれぐれも、粗相のないようにしろよ。彼の機嫌を害ねると後々やっかいだからな、判ったか？」

そう言うと彼は、坂田に対し、ウォンをここへ連れてくるようにと指示を出していた。
「ハイ判りました、宮坂さん。それじゃ、これから俺は港にいて、ウォンさんを出迎えてきます。ですから、しばらく待っていて下さい。直ぐ行ってきますので……」

男は宮坂に軽く一度頭を下げると、早々と、その場を立ち去り、小走りで駆けていく音がその後に聞こえていた。

しかし、いよいよ人身売買の取り引きがこれから行われるらしい。

それは、監禁されている女性たちには、不運であったが、宮坂にとっては待ちに待った一種のイベントの様なものでもあった。

彼らにとっては、前々から計画されていた、黒峰会の資金調達の良いチャンスだ。

それを逃す手はない。

その為、宮坂と新見川は、男が去った後、お互い顔を見合わせると、陰湿な笑いを交わしてその顔を意味深長に綻ばせる。

そして、その場を徐に立ちだすと、ナオたちが監禁されている同じ二階の部屋へと、踵を返して足を運びだすのであった。

監禁室の一室、その部屋で捕らえられているあの十二人の女性たちは、その着ている服を脱がされ、今は下着姿だけの格好となり、その狭い監禁室の中に、横一列になる形で整列させられていた。

そんな彼女たちの顔は、今現在、ふてくされているような不機嫌な表情を呈し、ある男の視線に先程から耐えていた。

その男とは、背の極端に低い、小太りの丸い眼鏡を掛けた、髭面の男であった。

彼の名は、ウォン、今年で五十二になる陰険そうな中年である。

その彼が、顎に手を当てて、唸るように女たちを値踏みすると、時にはにやけたり、時には神妙な顔をして、女たちの顔や体つきをジロジロと舐め回し、しきりに時間をかけて品定めしている最中でもあった。

「どうですか、ウォンさん。今回は前例に無い良い品ばかり揃っているでしょう？ これでも私たちは、品選びには慎重をきたして、三ヶ月近くの時間を掛け厳密な人選をお

こなったんです。だから今回のところは、私たちの言い値で取り引きしていただけないでしょうかね？　かなりの、お買い得だと思いますよ・・・」

ウォンという男が、女たちの品定めをする中、宮坂こと勅使河原は、彼に、極力愛想笑いを呈してみせるとそんなことを言って、話を切り出していた。

するとウォンは、宮坂の方を振り返りつまらなそうな顔をする、ついでまた女の方に向き直り、そのままこう言って宮坂に対し答えていた。

「確かにあなたが言うとおりの、いい品が揃っていますな。顔もよし、スタイルもよし、それに年令的にも若い娘ばかりだ。特にこっちの背の高い二人は、目を見張る上物だよ。しかし、よくこんな良い娘ばかりを、揃えられたね。私としては感心する、称賛に値するね・・・」

ウォンは、そう言うと、二人の女を指差して徐に手を叩いていた。

その指差した二人の女とは、ナオとゆかりのことだ。

どうやら、宮坂と新見川の思惑どおり、ウォンもこの赤越と黒川という女に目を付けた様で、しきりに彼女たちをまた舐め回す様にして値踏みを繰り返していた。

「ウォンさん、さすがはお目が高い。その二人はですね、最近、手に入った上物でして、私どもとしては一番お薦めできる商品だと思っているのですよ。ですから、その二人に関しては、これくらいの値段でどうでしょう。これだけの商品なのですから、こちらとしても頂くものは、頂かないと割りに合いませんからね・・・」

そう言うと、宮坂は、人差し指を一本立てて、ウォンにそれとなく指し示していた。

それは、どうやら一千万という意味らしい。

ナオとゆかりの二人あわせて、二千万、それで取り引きをしようという心算のようだった。

すると・・・

「ほ～う、宮坂さん。あんたは、この二人をそんなに安く取り引きしていいのかね？　私としては、一人三千万は出してもいいと思っていたんだが、意外だね。それに、この二人以外の他の娘に関しては、一人五百万が相場とっていいね。それならどうだい？　君たちとしては、文句ないだろうと思うが何か不満な点でもあるかね・・・？」

ウォンは、そう言って、宮坂に相変わらずつまらなそうな顔を呈したまま、尋ね返していた。

彼は、どうやら、ナオとゆかりを高く評価しているようで、その顔からは窺い知れなかったが、その口調からは二人を高価な値段で取り引きしてもいいという思いが、如実にあらわれていて、意外にも、金銭的余裕を見せているようにも思われていた。

「一人、三千万・・・！？」

そのウォンの言葉を聞くと、宮坂と、その隣に控えていた新見川は、目を丸くし驚きを顕わにしていた。

どうやら、それほどの高値がつくとは、さすがに二人とも思っていなかったらしく、そう確かめるように口ずさむと、宮坂と新見川は顔を見合わせてお見合いをしてしまっている様子だった。

「ウォンさん、それは本当ですか？　その赤越と黒川をそれぞれ三千万で買ってくれるというのは、冗談じゃないですよね？　まさか、私どもとしましては、それほどの値が

つくとは思っても見なくて少々驚いているのですが、どうなんです？ 三千万で買ってくれるのですか？」

「うむ、そうだね？ 君たちが、一千万でいいというのなら私としても安い方がいい。しかしね、これだけの上物だ国へ帰って金持ちの貴族に売り付ければ、相当の値になるから、ここは三千万でもいいと思うよ。私としてはね宮坂さん、是非ともこの二人を国へ連れて帰りたい。だから、この二人はともかく、他の女たちは五百万で手を打ってくれ給え。それで文句はないだろ？」

それを聞いて、ほくそ笑んだのは宮坂と新見川であった。

まさか、つい昨日おととい、手に入れたばかりの二人が、此れ程の高値で売れるとは思っても見ない。

その為、宮坂等にとっては、ニンマリの商談だった。

赤越という女に対しては、不審な疑惑があるが、これで、組織の資金源は調達できる。

それに、自分たちの懐にも、ガッポリと札束が舞い込んでくることを意味している。

まさに、それは一石二鳥の好条件が、提示されたといっても過言ではなかった。

ただ女たちをカッさらってきただけで、此れ程の、取り引きが出来るということは人身売買のブローカー、ウォンという男の存在あつての事だ。

その点からすると、宮坂と新見川は、その彼に感謝しなければならず、彼に対する対応はへり下った頭を降ろす低姿勢のものであつた。

「それではウォンさん、さっそくですがこの女たちの名簿リストを作りましょう。引き渡すときに、しっかりとした書類がないと商品としての扱いに困ると思いますからね。しめて、十二名、この女たちを、あなたにその名簿リストを付けて譲渡しますから、後は、そちらで良いようにお扱ってください。今回は、私どもにとってもいい取り引きが出来たとそう感じております。ですから、今後とも我々をご贔屓にして頂き末長くお付き合いして頂きたい。それと、出航の日まで、色々とうちの部下にそちらの仕事を手伝わせますから、心配なさらないようお願いします。では、さっそく女たちを船の中に移しましょう。これから、彼女たちは長旅になるから、少しでも、船に慣れておく必要がありますからね・・・」

「ちょっと、待って・・・！」

だがその時、ニンマリ気分で話す宮坂に対して、声がかかっていた。

ナオだ。

ナオが、もちろん下着姿のまま、宮坂とウォンを見据えると険悪な表情をその顔に浮かべて、二人の間に首を突っ込んできていた。

「ちょっとあんた達ね、恥ずかしくないの？ あなた達のやっている事は、法に触れる犯罪行為なのよ。それを、なんの罪悪感もないように平気でこんなことできるなんて、気が狂っているとか思えないわ。恥を知りなさい恥を、私たちとしても冗談じゃないのよね、こんな馬鹿げた取り引き。今すぐ、こんなこと止めて、私たちを解放しなさい。でないと、天下の特務機関が黙っていないわよ！」

不機嫌な顔で、語る、ナオのいい分は尤もであった。

人身売買は、それほど頻繁には行われる犯罪ではないが、重罪である。

それを、なんの悪怯れた様子もなく、当たり前のように取り引きのように行う、それが、ナ

オには我慢ならない。

それに、自分たちの身の運命もかかっているのだ、このまま黙ってなんか居られる訳がなかった。

だが……

「おうおう、相変わらず君は威勢がいいね。でも、もう諦めたほうがいいと思うよ。君たちは、捕らわれている以上、ウォンさんの大事な商品なんだ。まあ、君たちがおれたちの思惑にピッタリ合う、魅力的な女性だったということでここは納得してはくれないかね？ これでも、私たちとしては君たちを評価しているのだよ。女としては、最高級の一品としてね……」

「冗談、言わないでよ！ 誰がそんなことで喜ぶものですか。所詮、あなた達は、私たちをお金の目的で評価しているだけでしょ。私たちはね、それぞれ個人に人格が備わっているのよ。それを無視して、ただ物みたいに商品として扱われるのは我慢ならないわ。そう言う戯言は、寝てから言って、そんな言葉、聞く耳は私たちは持ち合わせていないのよ！」

宮坂の、まるで無責任な発言を受けると、今度は、ゆかりが顔を赤くするほど怒って、そう捲し立てていた。

すると、それに同調したかのように、他の女性たちも、口々に「そうよ、私たちを早く解放して……」とか「このまま売り飛ばされるのは、嫌よ……！」と言って、宮坂に対して猛烈に反発を示し始める。

それを受けると、さすがに宮坂と新見川は、彼女たちをうざったいと思ったのか、物騒にも胸元から一丁の拳銃を取り出して、それを女たちに向けてこう言っていた。

「お前たち、ギャーギャー煩いんだよ。黙らないと、一発お見舞いするぞ。まだ、死にたくはないだろ。だったら大人しくしているんだな。此方だって食っていくための商売なんだ。難癖、付けるなら、この場であの世に送ってやってもいいんだぞ。だから、喚くのは止めろ。少々、甘い顔していると直ぐつけあがるから、女って奴は始末に悪い。いいか、大人しくしているんだ、そうすれば手荒な真似はしない。潔く諦めるんだな……」

すると、その宮坂の辛辣な言葉に憶したのか、女たちは怯えたように押し黙ってしまっていた。

しかし、ナオとゆかりだけは、鋭い目付きで宮坂を睨み付け、無言の抵抗を試みている様子でもあった。

第三節

時は同日、ウォンという男が港に入港して夜の事、その港に浮かぶ船の船底では、女たちの啜り泣く声が聞こえていた。

彼女たちは、十二人、その中にナオとゆかりの姿もある。

外では、夜にもかかわらず、慌ただしく荷材の積み降ろしが行われており、クレーンと思われる重機の機械音がナオたちが居る船底室の中にまで聞こえてきていた。

「もう、そんなに泣かないで、私たちが必ずなんとかしてみせるから、しっかり気を持つのよ・・・泣いてばかりいても、埒は明かないわ。だから、皆、気を取り直して元気出して、希望を捨てちゃダメよ」

ナオが、啜り泣く女たちを宥める中、ゆかりは一人船底室の中をうろちよろして、その中を調べまわしている。

「どう、どんな感じ？ 逃げ出せる余地はあるかしら？」

そのナオの問い掛けに対し、ゆかりは首を横に振る。

そして、お手上げとばかりに、手の平を返して見せていた。

「そう？ それは残念ね。でも、どうしてもここから脱出しないと、後がないわ・・・」

今、ナオたちが、閉じこめられているのは、先程も言ったようにウォンという男の貨物船の中の船底室である。そこは、さび臭い赤茶けた鉄板が剥き出しの小汚い場所で、鼠でも出てきて、残飯をあさるような衛生上よくない場所でもあった。

そんなところに閉じこめられて、しかも、その船底、特有の閉塞感が女性たちを不安にさせるのか、先程から彼女たちは、ナオの宥める言葉の甲斐もなく啜り泣き続けていた。

聞いたところによると、ウォンという男は、象牙や犀の角などの密輸も手懸けているらしく、さまざまな禁制品の荷下ろしが、今、行われ、明日までにそれを完了させるという。

そこで、ナオたちの命運もここまで来るとあと僅か、彼女たちの先には黒い暗雲が立ち籠めているのであった。

しかしここに連れてこられて、三時間近く経っている。

先程から、ゆかりが脱出口を探しているが、その努力も虚しく出口は見つからなかった。

この船底室の中には、天上に船の梁に添って、剥き出しの白熱球が配線を覗かせて、その中を照らしだしている。そして、その中の出口となっている鉄の扉は固く閉ざされて、その出入り口の上には第二食料室というプレートが垣間見えていた。

どうやらここは、船員の食料が備蓄されているところらしく、木箱が無数に置かれたその中からは、玉葱の香が匂ったり、缶詰などの食材が顔を覗かせている。

おそらく、この船底は、食料庫として使われているのであるということが、それらの物資から考えてみても明らかであった。

「リエ、やっぱりダメね。この船底の扉は、外側からしか開かないようになっているわ。それに、それ以外の扉も見つからないし、なんとかして外側から開けてもらわないと、脱出不可能よ・・・残念だけど、このまま諦めるしかないのかしらね？」

狭いようで、結構、広いその船室を丹念に調べ回しながら、ゆかりはふと弱気な発言を洩らしていた。

「そんな事言わないで、せっかくいま、皆、泣き止んだところなのに、また泣きだしたら

どうするのよ……」

そのナオの発言を受けると、案の定、また女たちは失望したかの様に泣き始める。

それには、ナオももうお手上げで、どうすることも出来なくなっていた。

「まったく、どうしてこんなことになってしまったのよ！ 冗談じゃないわ。こうなったら、力づくでぶち破ってやる。昌代、そこをどきなさい、私が、こんな扉ごとき、蹴りの一撃で粉碎してやるから見てなさい！」

ナオは、宥めていた女たちのもとから立ちだすと、いま、船底の室内のドア付近にいたゆかりを押し退けてその前に仁王立ちしていた。

そして、足に渾身の力を込めると、その鋼鉄製のドアを蹴り始める。

ドガッ、ドガッ、ドガッ……

しかし、その鋼鉄製のドアは、無機質な音をあげるだけで、到底、女一人の力ではぶち破れそうにはなかった。

ナオは叫ぶ。

「ちょっと、ここを開けなさいよ！ ここから、私たちを出しなさい！ だせって言っているのよ……！！」

だが、その叫びは虚しく船底の室内に木霊するだけで、ここから脱出できないという現実を、より一層、際立たせるだけの叫びの様でもあった。

「もうやめなさいリエ、いくらあなたの力でも、この扉は壊せないわ。悔しいけど、現実を直視しなくちゃダメよ、逃げられないという現実をね……？」

「それじゃ何、あなたは諦めろって言うの？ 私は嫌よ、このまま異国に連れ去られてしまうなんて冗談じゃないわよ。まったく、ここからだせっつーの」

ドカッ……

……………

「なんだ、うるせーな。ドアをドンドン叩くな！ 耳障りだろ！」

だがそんな時、ナオたちが居る船室内の扉が外側からギシッという音をたてて開かれると、そこへ二人の男たちが現れていた。

その男達は、両手に複数の黒いボストンバッグを抱えており、船室内に入ってくるとそのバックを女たちの前に投げ捨ててこう言っていた。

「そら、これはお前たちの着替えだ。そのバックの中には、新しい下着と服が入っている。だから、それに着替えて身だしなみをきちんとしておくんだな。それは、ウォンさんからの差し入れだ。着替えるか着替えないかは自由だが、汚い服を着ている奴もいるようだから着替えておいたほうがいいぞ。お前たちは、せっかくの商品だからな、小汚い格好のまま国へ連れていくのはウォンさんの良識に反するらしい。だから、さっさと着替えを済ませろよ、もう直ぐ飯も運んできてやるからな……大人しくしていろ」

いきなり船室内に入ってきた男たちの中の一人は、そう言うと、ボストンバッグを指し示し、意味不明な笑いを一頻り洩らす。

そして、それだけを言い残すと、また扉を開けて外へ出て行ってしまっていた。

「何が着替えよ、こんなもの持ってきたって、大した意味ないじゃない……私たちに、どうしろって言うのよ……まったく頭にくるわ！」

ナオは、男たちが去ったあと、悔しそうに歯噛みするとそのボストンバッグを八つ当

たりとばかりに蹴飛ばしていた。

蹴られたボストンバッグは、その中身を船室の床にぶちまけながら、壁にあたって転がっていた。

しかし、その行為からは、ナオの憤りというべき感情が痛い程感じられる。

果たして、このまま女たちは、何の抵抗も出来ず船で異国へと連れ去られてしまうのか？

それは、女たちにとって、風前の灯のようにも思っていた。

「宮坂さん、これを見てください、これは、高性能の盗聴器ですよ。それにこれこの身分証明書は、あの女たちが使っていた更衣室のロッカーから見つかったものです。これらの事から考えると、宮坂さん、奴らはどこかの犬ですよきっと。理由は、判りませんが、何かを探るためにあの赤越と黒川という女たちは、ストリップ劇場にパートの清掃員として入り込んでいたのではないですかね、どう思います？」

同じく、ウォンの貨物船のある一室、機関室の隣に設けられた小さな部屋では、先程から新見川と宮坂が顔を突き合わせ、ある事に関しての話がすすめられていた。

いま、宮坂が手にして見ているのは、支配人の新見川から渡された一つの免許証であった。

その免許証には、不機嫌な顔をして写っている顔写真と、その持ち主の本名それに住所、生年月日、性別が明記されている。

その氏名の欄に、《高崎ナオ》という女性の名の文字が垣間見える。

それを目にするると、宮坂は、怪訝な顔をして眉を顰めている様子だった。

免許証の顔写真は、あの赤越リエという女のもので、その綺麗な顔立ちは見間違えることはないだろう。

しかし、そこで、ある疑問が持ち上がる。

この免許証が、本物だとすると、あの赤越リエという女は偽名を使っていたのかというものだ。

だが、これは一体、どうしたものであるのだろうか。宮坂は、それを眺め腑に落ちぬ態度を示すと、やはり、新見川が先程机の上に提示した盗聴器を手に取り、不審な目で眺めまわす。

そして、首を傾げると、新見川に対してこんなことを言っていた。

「新見川、これは本当のことなのか？ この盗聴器と免許証があんな女たちのロッカーから見つかったというのは？ 何かの、間違いじゃないんだろうな」

いまいち半信半疑の宮坂———しかし、彼の顔は真剣で、少々その顔の表情は強ばっているように思えた。

「ええ、確かですよ。ウォンさんに、女たちを品定めしてもらったあと、俺は、どうも赤越って言う女の事が気になっていたもので、劇場の従業員に赤越と黒川のロッカーを調べておくようにと指示を出していたんですが、調べてみるとそれが出てきたんです。従業員の三河島によると、その黒いトランシーバみたい箱状の機器は盗聴器の受信機だそうです。それに、やはり不審に思った三河島が、店内を調べてみたところ、そこにある盗聴マイクが、事務所や踊り子達の控え室、それに応接室から見つかったそうです。だか

ら、それを仕掛けたのは赤越と黒川に間違いないと思いますよ。しかし、一体、奴ら何者なんでしょうね？　こんなことする以上、ストリップ劇場の内情に、探りを入れていたとしか思えませんよ。一体、どう思いますか？」

「う～む？　・・・」

再度、訪ねる新見川に対し、宮坂は腕組みをして考え込んでしまった様子だった。

そして・・・

「まさかとは思うがな・・・奴ら、特務機関の者じゃないか？　鎌田や磯貝、それに市ヶ谷や野坂、清水までものして気絶させた奴らだ。それに、この盗聴器と身分証明書、奴らが、履歴を偽ってストリップ劇場にパートの清掃員として志望してきたとなると、それしか考えられん様な気がする。今までは、単なる仕事にあぶれたOLくずれの女たちだと思っていたが、どうやらこんなことがあると、その見方を変えなければならないようだ。ある意味、おれ達は騙されていたといってもいいだろ、あの二人にな・・・」

すると・・・

「ええっ！　特務機関って宮坂さん。それじゃ、あいつらハード・ガンの隊員だって言うんですか！？　そ、それがもし本当だとしたら、大変じゃないですか。理由は判りませんが、特務機関なんかがウチのストリップ劇場に入り込んでいたとなると、何かしらの目を付けられたといってもいいですよ。何も無いのに特務機関が動くわけないですからね・・・」

新見川は、宮坂の言葉に驚きを示すと、慌てたようにそう言って宮坂に対し身を乗り出していた。

新見川のいい分は尤もだ。

特務機関が、ストリップ劇場に乗り出したとなると、何かしらの目的があって隊員を送り込んできたという確率が高い。

しかし、一体、それは何のためであるのか？

その事に関しては、頭を悩ませるしかなかった。

「宮坂さん、もしあの二人が、特務機関の隊員なら、特課は、おれたちの商売の裏を嗅ぎ付けて、隊員を送り込んできたんじゃないでしょうか？　ストリップ劇場は合法的な経営を行っている店ですが、銀座ブルーメントや、今回の人身売買の件に関しては、違法行為ですし、それを摘発か何かする為に捜査でもしているとしか思えませんよ。特務機関がその件に乗りだしたのならば、おそらく警視庁の方も動いていると見た方がいいと思いますから、今後、気をつけないとヤバい事になりますよ。おれ達が、黒峰会の資金源を調達している仕事をしているということがバレたら、組織の存続にも関わりますからね。だから、あの二人の処置は、どうしますか？　このまま、放っておくことは出来ませんか？」

「うーん、そうだな。しかし、特務機関や警視庁が人身売買の件を嗅ぎ付けているのならば、ここへ摘発に乗り出してくるだろう。だが、今は、その動きは見られないところを見ると、それほど心配することではないんじゃないのか？　確かに、あの赤越と黒川って言う女は怪しい。だからまずは、あの女たちを呼び出して、事の真相を確かめることの方が先決だろう。すまないが新見川、あの二人をここへ呼び出してくれ。おれが、直々に奴等が何者なのか問い詰めてやる。事と次第によっては容赦しないからな———それ

ともう一つ、お前には、あるところに電話をかけてもらう。そうすれば、あの女の素性も掴めるだろう。だから、それが済んだらよろしく頼むぞ。おれは、ウォンさんと話をしてくるからな、三十分経ったら、この部屋で、あいつらの素性を暴露させてやる。疑惑は、はっきりと暴いておいた方がいいからな・・・」

第四節

時間は、少しさかのぼって十分前、ウォンという男の、貨物船の船底に閉じこめられた女たち十二人は、しんみりとした空気が漂う中で、いま何をするでもなく持て余した時間をただ漠然とした感覚の中で過ごしていた。

彼女たちは、もう逃げられないのではないかという、現実には、直面している為かどうかは判らないが、無口だ。

それと同時に、先程から、皆、小汚い船室の床に腰を下ろし、寒さに身を震えさせてちぢこまっている。しかし、幸い、先程男たちが小型の石油ストーブを運んできてくれたので、その暖房にあたり始め、今は、大分寒さをしのぐことが出来ていた。

そんな中・・・

ナオは、先程から、仏頂面を隠さず、不機嫌な顔を表に出すと、誰に言うという訳でもなく独り言の様にして悪態をつき始めていた。

その内容はこうだ。

「まったく、あいつ等ときたら、女の扱い方も知らない連中なのかしら？　こんな寒いところに閉じ込めて、こんな小さなストーブ一個置いていくだけで他には何もなし。それに、食事はどうなったのかしら？　私は、さっきからお腹が鳴ってペコペコだって言うのに、パンの一切れも差し入れてこない。こんな待遇じゃ、文句の一言や二言も言ってやりたいわよ。一体、何しているのかしら、本当頭にくるわね。次に顔を出したら、絶対、殴ってやるんだから、覚えていなさいよ、女の恨みは恐いんですからね・・・」

その内容からして、ナオの我慢の限界は、尽きかけているようにも思えた。

短気なナオのことだ、約二日前から続く監禁生活にも、もうほとんど嫌気がさしてもおかしくはない。

しかも、今いる船室の中は、あのどこだか判らない監禁室とはまた違って、ナオの神経を逆撫でするように無機質な場所だった。

その為、ナオでなくても、文句が出て仕方が無い環境といえる。

こんな状態が、いつまで続くのかということは、正直のところうんざりしているところであった。

「でも私たち、これから、どうなってしまうのでしょうかね？」

だがその時、一人の女性が、ナオの言葉に感化された為かポツリと呟いていた。

その女性は、牧田香奈という、今年で二十一になるOLだった女性だ。

彼女は、今、至極心配そうな顔を見ると、ナオとゆかりの顔をちらりと見て、その後、何を思ったか、おもむろに自分の身の上話を他の十一人の女性に語り始め、今現在の不安な心境を吐露して涙ぐむのであった。

その話はこうだ。

「私にはですね、今年で十七になる病弱な妹が居るんです。名前は、牧田千香といい、私は、その妹と小さい頃からよく二人で遊んだものです。そして、その他に、私には牧田豊和という父が居るのですが、母に関しては私がまだ小さい頃に病気で亡くなって、それ以来、妹の面倒は自分が見てきたんです。何度も言うように、妹は病弱で、今では高校生なんですが、病院に入院していて学校へは通っていません。ですから、私がこのまま異国に連れていかれてしまうと、妹の面倒は父に任せなければならなくなってしまいます。父は、男である以上、不器用な人として、まだ、多感な時期の妹の面倒を見るのは荷が重すぎるでしょう。ですから、私はどうしてもここから逃げ出して、妹と父のもとに戻ってやらなければならないんです。妹は、私が居ないと何も出来ません。それを考えると、心配で心配で、いてもたっても居られないというのが正直なところなんです。それに、私は結婚を約束した彼が居るので、このままだと、その彼とも別れなければならなくなってしまいます。だから、皆さんも気持ちは同じだと思いますけど、ここから早く逃げ出したいんです。今の現状を考えると、とても無理な気がしますけど、ここから逃げ出すいい案はないですかね？ 私は、今、神様にでもすがりたい気分です。だからどうか皆さん、ダメはもともとだと思いますけど、なんとか逃げ出せる方法を考えてみてください。私一人じゃ、こんな状況どうしようも出来ないのでからね・・・」

彼女の話は、他の女性たちからすると、切実な話のように思っていた。

母がなく、病弱な妹の母親代わりをしているこの牧田香奈という女性にとっては、その妹を日本に残してこのまま異国へと連れ去られてしまうということに、無念さを感じるのかもしれない。

たしかに、家族を残して異国へ売り飛ばされてしまうということは、彼女だけでなく、他の女性たちにとっても辛いことになるだろう。

誰だって、馴れ親しんだ関係の人間と、別れることになれば神妙になるのも致し方ない。

だからその話を聞くと、ナオやゆかりも含めて、他の女性たちも、その牧田香奈に少なからずの同情の気が芽生えてくるといってもいい。

皆、どんな理由があれ、今の境遇は同じなのだ。そうである以上、共感を示すことはごく自然な成り行きであるといえたのだ。

すると、

「香奈さん、貴女の気持ちは判るわ。私だって、家族を残してこの日本から見ず知らずの国に連れていかれるのは嫌よ。私にも、結婚を約束して今年の二月に挙式をあげる事になっていた、男性がいたの。でも、ここに連れてこられて、その人にはもう二ヵ月近く会っていないわ。だから私としても、早くここから逃げ出して普段の生活に戻りたい。だ

から、なんとかしてここを抜け出す方法を、皆で一緒に考えましょう。もう、時間はないといってもいいかもしれない、でも、諦めちゃダメですよね皆さん？ まだ、チャンスはあると思ったほうが、良いですよね・・・？」

牧田香奈が話し終えて、その後を引き継ぐ形で口を開いたのは、やはり、ここに居る十二人の女性のなかの一人、東翔紀恵という女性だった。

彼女も、牧田香奈という女性に親近感を覚えるのか、少しだけ自分の身の上を語ると、そう言ってこれからの状況を、出来るだけ打破したいという心境を如実に顯していた。

その言葉を受けると、ここに顔を突き合わせている女性たちは、皆それに頷き、同調している様子だった。

早く、ここから逃げ出したい、それが、彼女たちにとっての共通の願いだったからである。

だが・・・

「うーん？」

それを先程から聞いていたゆかりは、その時、これ以上はないという難しい顔をしていた。

確かに、ここを逃げ出したいのは山々だ。

しかし、あの監禁室と違って、今居る場所は、船の船倉の中である。それを考えると、状況は前より良くはない。

強いて言えば、難しい状況にあるとっていいだろう。

前は、監禁室の隣に、見張り役の男たちがいて、それをなんとか騙して逃げ出すチャンスを作ることが出来ていた。

しかし、今は、完全に密閉状態で、その船室の中の外の状況は窺い知ることは出来ない。

その為、脱出のチャンスを作る機会さえ、与えられていない状況とっていいのだ。

だから、それが判る彼女にとっては、言いたくはなかったが果たしてここを逃げ出せるそんないい方法が考えてもあるのか、と言う事を問いただしたかった。

いくら考えても、よほどのチャンスが巡ってこない限り、それは、不可能だと思えたからである。

だからゆかりは言う。

「あのね、皆の気持ちは判るけど、それじゃ、今後どうすればいいと思う？ さっきから調べては見たけど、この船室は完全密閉で内側からはどうすることも出来ないわ。それに、この船室の外の様子もどうなっているのか判らないのよ。だから、そうなると余程の天才がこの場にいないかぎり、この状況を切り抜けることは出来ないような気がするのよね。いい考えが思い浮かべばいいけど、そんなことを考えだせる人は居ると思う？

はっきり言って、そこが疑問なのよ。出来れば、ここから逃げ出したいのは山々なんだけど、私には、あいにくいい考えは思い浮かばないわ。だから、ここは、覚悟を決める以外、他に方法がないような気がするのよね。冷たいような言い方だけどそれが現実よ。このまま船で連れ去られてしまうかもしれないわ、異国の男の愛妾としてね・・・」

.....

すると、そのゆかりの発言は、他の女性たちのささやかな希望を、少なからず打ち砕

いてしまったかのようなだった。

女たちは、その話を聞くと、認めたくはなかったが、ゆかりのその発言に首をうな垂れてしまっている。

何だかんだ言っても、ゆかりの指摘は尤もであったからだ。

「でも、それじゃ、これからどうします？ このまま、ここで諦めて時間を無駄にすることも、もう出来ないですよ？ この際だから、赤越さんなんかはどう思っているんですか？ 私たちが、頼れるのは黒川さんと赤越さんだけなんです。なんとかして、ここを逃げ出さないと、もう明日か明後日には日本から連れ去られてしまうんです。だから、勝手ないい分だと思いますが、どうかして下さい。私たちにはどうすることも出来ないですよ」

しかし、女たちの、殆どが沈痛な面持ちでうな垂れる中、少し、焦りの色を見せてそう言っていたのは、先程の東翔紀恵という女性だった。

彼女にしてみても、ゆかりにそう言われてしまうと返す言葉がないような気がしていたが、やはり、ここから逃げ出したいという思いは強いらしく、ナオとゆかりを纏るような目で見てくる。

だが、それにはゆかりも困惑して、真顔で言葉に詰まるしかなかった。

頼ってくれるのはありがたいが、それに答えられる自信がなかったからである。

「……………」

その後、女たちは沈黙すると、また口を結んで一言も言葉を発しなくなっていた。

どうやら、前よりも、更に落ち込んでしまっている様子で、先程にも増してしんみりとした空気がその場に満たされようとしていた。

……………

だが…

「まあ、まあ、まあ、皆そんなに落ち込まないでよ。私が思うに、まだ望みはあると思うのよね。ここだけの話だけど、こんな状況には必ず正義の味方といえる救いの手が差し伸べられるんじゃないかと思うのよ。神様だって居るとすれば、私たちを助けてくれない訳ないと思うわ。だから、辛気臭くなるのは止して、助かる可能性がゼロという訳では無いんだからね」

だが、このしんみりとした空気の漂う場に、いやに緊張感のない口調でそう言っていたのは、あのナオである。

彼女は、先程から黙って女たちの話を聞いていたが、女たち全員がゆかりの発言で押し黙ると、その沈黙に耐えられなかったのかどうかは判らないが、いやに、自信が有りげに助かる可能性も示唆してくる。

それを聞くと、ナオの事をよく知っているゆかりなどは眉を顰めたが、他の女性たちは、その彼女の発言に興味をそそられたらしく、少し疑問気な顔をしつつも、次にはあの牧田香奈という女性がナオに対して率直に質問を返していた。

その質問とはこうだ。

「あの赤越さん、そう言うと、誰かがここへ助けに来てくれるとでも言うのですか？

まあ、神様じゃないにしても、そんな可能性があるのなら喜ばしいことだと思いますけど、一体、誰が、助けに来てくれるって言うんです。折角ですから教えてください。私だ

けじゃなくて、皆もそれが本当ならそこに期待をかけてみたいと思います。だから言ってみてください、私としてもすごく聞きたいです。ここから助かるのであれば、どんな方法でもいいからそうしたいですからね」

牧田香奈はそう言うと、ナオの顔をしげしげと覗き込む。

そして、ゆかりを除く他の女性たちも、それに習っていた。

ナオは言う。

「あのね実を言うと、この昌代、本当のところはゆかりって言うのだけどね、そのゆかりと、私は、特務機関の隊員なのよ。私たち二人は、訳あって宮坂のストリップ劇場に潜入捜査の任で、パートの清掃員として入り込んでいたんだけど、ちょっとした油断から拉致されて捕まってしまっていたの。でもね、私たちが捕まって拉致されたという事は、もう既に、特務機関や警視庁には報せがいているのじゃないかと思うのよ。だから、これは可能性の問題なんだけど、今、両機関は私たち二人の行方を追って、捜し回っている頃だと思わ。そうなると、ここへ助けがくる可能性が、無いわけじゃないのよね。だから、それに望みを託して待つことも、最後の手段として考えておいてもいいと思わ。あくまで、他力本願的なものだけどね」

「特務機関！？」

ナオの話を知ると、その時、ここに居合わせた女性たちは、一斉に驚きを顕わにしていた。

それは、まさか、ナオとゆかりの二人が、特務機関の隊員であるとは思っても見なかったからだ。

だから、その驚き様は顕著なものである。

女たちは、ナオとゆかりの二人を見ると、まるで異界の深海生物にでも出くわした顔をして、一時、問い掛けたまま言葉を失っているようであった。

それだけ二人が、特殊な人間であるように思えたからでもあるようだったのだ。

牧田香奈が言う。

「赤越さん、それって本当のことなのですか？ 黒川さんと、貴女が特務機関の隊員だなんて、私、初耳ですよ。もしそれが本当なら、ここへ助けがくる可能性も少しはあるということなのですね？ 私、少しは、それを聞いて安心しました。それに、二人が特務機関の隊員であるというのなら、これほど心強い味方が私たちの許にいてくれるなんて幸ですよ。前々から思っていたのですが、二人は、道理で強いはずですよ。それを聞いて確かに頷けます。二人には、私たちにはない何か特殊な匂いを感じていましたもの」

しかし、それは驚きと同時に、少しの期待に喜びを感じた女性としての発言であった。

その牧田香奈に限らず、他の女性もその時、ナオやゆかりに対し安心感を覚えたのは確かだろう。

特務機関の隊員といえば、一般市民の身の安全を守る国家公務員だ。

その公務員が、捕らわれているとはいえ、自分たちの身近に居てくれるということは、これ程、心強い味方はないといっても過言ではなかった。

だから女たちは、その少しの望みに縋り付きたいのは言うまでもない。

頼れる人が居ると居ないのでは、大違いであるからだった。

これで、可能性が低いといっても、ここから脱出できる可能性が、まだ無いわけでは

ないと思えば少しは安心できる。

だが、そんな女性たちには、この後、それとは少し違った形で、脱出の絶好のチャンスが訪れるとは、その時、誰も思っていなかった。

それはまさに、天の取り計らいでそうなったのかと、後になって思ったかも知れない。

第九章 脱出、そして追撃

第一節

脱出の絶好のチャンス、ナオとゆかりにとってその機会が訪れたのは、やはり三人の男たちが、女たちの食事を運んできてしばらくしてからのことであった。

先程からの会話で、幾分、気が紛れたとはいえ、ナオやゆかりを含めた十二人の女性たちが、気が滅入る中、運ばれてきた食事を渡々たべだして五分が経った頃、二人は船室の食料庫に顔を出してきた新見川によって、貨物船内のある一室に呼ばれ、今そこに立たされているところであった。

だがさっき、新見川が食料庫に顔を出したとき、ナオとゆかりには気付いた点がある。それは、彼がナオたちを、今までにない冷たい態度で扱ったという点だった。

それから察すると、呼び出され、これから一体何が行われるのであるのか、疑問に思ったのは言うまでもない。

しかしそんな訳で、いま目の前には、あの宮坂義行こと勅使河原が居る。

そして、ナオとゆかりを挟む形で、両脇には二人の男が控えていた。

そのどちらの男も、スーツ姿の目の鋭い男たちで、彼らの胸元には銃が携帯されている。

そして、その男たちも含め、新見川や宮坂も、今までにない真剣な顔をしてナオとゆかりを見つめ、その狭い一室で相対することになっていた。

そんな中で宮坂が、徐に口を開く。

その発言は唐突なものだった。

「しかしまあ、それにしても君たちには、まんまと騙されていたよ。まさか、君たちが国に雇われていた犬だなんて、思いもよらなかった。よくもまあ、おれ達を今まで騙していてくれていたね。その演技には、感服する、まったくその事に気付かなかったんだからね・・・」

「国に、雇われていた犬？」

ナオはその時、怪訝なものを感じて、宮坂の言葉に対し眉を顰める。

そして、そっと隣に居るゆかりの顔を、覗いていた。

「そう君たちは、本当のところは国に雇われている、犬なんだろう？　もう君たちの素性はバレて、こちらとしてはその正体を掴んでいるんだ。今更、言い逃れは出来ないよ。だからまずは、これについての説明を聞いてみたいね？　一体、君たちは、何の心算でこれを劇場に仕掛けたのか、おそらく君たちは、私たちの仕事の内情を探る為にしたことだろうと思うが、どんな言い訳をするか楽しみだね。いい答えを期待しているよ・・・」

そう言うと宮坂は、新見川に指示し、その部屋に置かれている机の上に、あるものを提示させていた。

それは黒い、箱状のトランシーバみたいな機器と、六個ほどの小さな丸い備品のようなものだった。

(これは、受信機に盗聴マイク・・・！)

だが、その机の上に差しだされたその機器を見て、ナオとゆかりは、その時、少しの変化であったが明らかに顔色を変えていた。

それは見覚えのある、品であったからだ。

「ふふ、どうやら君たちには、この黒い機器が、何に使われるものか判っているようだね。君たちの顔色を見れば一目瞭然だ。しかし、なぜ君たちは、これをストリップ劇場のなかに、仕掛けていたんだね。まず赤越くん、いや本名は高崎ナオさんだったかな？

まず君に対してその事を伺いたい。この際だから話してくれるよね、何度も言うように、言い逃れは出来ないよ」

「・・・・・・・・」

するとその時、ナオは珍しく宮坂の言葉に、一瞬、口籠もり、次には怒りの念を交えて彼に対して言葉を捲くしたてていた。

「ちょ・・・ちょっと、待って。どうして、私の名前がナオだって知っているの？ あなた達、まさか、私たちのロッカー調べたわね？ 女性の私物を、あさるなんて最低ね。男の風上にもおけないわ・・・」

だが、宮坂は、その発言を受けて、その口元の端を釣り上げると、ナオに対して面白いような笑いを見せていた。

「ほおう、君は、意外と早く自分が赤越リエではなく、本当は、高崎ナオであるということ認めるんだね。これは面白い、それではこの際だから、黒川くんの本名も伺ってみたいね？ 君たちは二人とも、偽名を使って、ストリップ劇場のパートの清掃員として入り込んでいたのだろ、その証拠はこれで明らかだ。これには、正直に赤越君が高崎ナオであるということが、書き記されてあるからね、これが見つかって驚いたよ。しかし、不注意だったね、こんな物をロッカーに入れておくなんて、ある意味、嘘をついていましたと言っている様なものだからね？」

宮坂は、薄ら笑いを浮かべると、いま自分が着ているスーツのポケットから、あるものを取り出しそれを開いてナオとゆかりの前に提示していた。

それは、一つの運転免許証だ。

そこには、不機嫌な顔をして写っている、ナオの顔写真がしっかりと載っている。

だが、その免許証を見て、ゆかりはその時、顔を顰めてみせていた。

なんで免許証が、こんなところに在るのかと思ったからだ。

ナオは、潜入捜査に、本当の身分証明書を不用意に持参して、任務に当たっていたのか？

自分の本当の素性を示す、身分証明書を、不用意にストリップ劇場のロッカーに入れておくなど、特務隊員として潜入捜査の常識をまるでわかっていない。

だからゆかりは、その免許証を見て、ナオを横目で非難するようを見ていた。

宮坂がまた言う。

「さあ、これで君たちが履歴を偽って、ストリップ劇場に入り込んでいたことは明白だね。君たちは、この現実をどう受けとめているんだい。私たちはね、この盗聴器と免許証が見つかって、君たちがなんらかの目的を持って、ウチの店に入り込んだと思っているんだよ。だから、その後、君たちがどんな素性の者かあるところに電話を掛けて問い合わせしてみた。すると判ったのは、赤越リエ、君が国に雇われている犬だということだ。つまり特務機関・特務一課、第二班に勤務する高崎ナオ、それが君の素性を示す、所属先だろう？ 特務機関の電話係の渡辺という女は、君がハード・ガンの一メンバーであることをご丁寧に確証してくれていたよ。だから、君たちが、何の目的でおれ達に近付いてきたか話さないかぎり、君等二人には重い処分を与えなければならない。いいかい覚悟し給え、君たちには東京湾の海の中に沈んでもらうよ、冷たいコンクリートと一緒にね・・・」

そう言うと宮坂は、ナオとゆかりの両脇に控えていた男たちに、目で合図して二人を拘束するように命じていた。

それを受けると、男たちは、スーツの内側から拳銃を取り出して、それをナオとゆかりの胸元に突き付ける。

そして二人の腕を掴んで、ぐいっと力強く引き寄せていた。

だが、そこから、ナオとゆかりの脱出作戦が、後々から始まりを迎えるのである。

宮坂が言う。

「さあ、どうかね、これで君たちは話す気になっただろ。君たちは、一体なんの目的でストリップ劇場に入り込んでいたのかね？ それを正直に、話してくれ給え。話さないと、そこの男たちに命じてこのまま海の底に沈めるよ。これは冗談で言っているんじゃない、話す気があるのならそう言ってくれ給え。そうすれば、見逃してやらない訳でもない。だからどうかね、二者択一の選択問題だ。話す気があるのなら、くれぐれも正直に頼むよ。私は嘘は嫌いなんだ、だから洗いざらいぶちまけ給え、私たちに判るようにね」

そう言うと、宮坂は、顎に手を当てて、ナオとゆかりを目を細めた形で見据えていた。

それに同調したかのように、同じ室内に控えている新見川も、先程から興味をそそられるかのように、ニヤ笑いを繰り返す。

そして二人は、ナオとゆかりが口を開くまで、気長な心算で待っている様子だった。

すると・・・

「判ったわ。それじゃ、私たちが何故ストリップ劇場の清掃員として、その店に入り込んでいたかと言う理由を語る前に、ちょっと、私たち二人だけで話をさせてくれないかしら？ それが済んだら、洗いざらい事の真相をぶちまけてもいいわ。だから、この二人の男達をちょっと下गरらせて、そうしないと、何も私たち喋らないわよ。どう、それが出来る出来ない、どっち？」

それは、ナオにとっての、宮坂に対する一計を弄した思惑を含む一つの条件提示だった。

彼女は、胸元に銃を突き付けられながらも、それに恐れる事無く宮坂だけを見据えると、自分とゆかりの二人だけで相談をさせると彼に対して申し出ている。

それは、ナオにしてはこんな状況にして機転をきかせた発言であったが、次には宮坂によってその条件を承諾させることが出来ていた。

彼が、納得したからである。

「ほおう、それじゃいいだろう。君たちが、話す気があるというのなら、十分ほど君たちに時間を与えよう。おれ達はこれから、この部屋の外で待つことにするから、それまでせいぜい話の内容を纏めておくんだな。だが十分を過ぎたら、この部屋でまた詰問するよ。私は、それほど待てない性分なんでね・・・」

宮坂は、そう言った後、支配人の新見川と銃を携帯した二人の男たちに指示を出すと、その四人は今居る狭い一室を出て、外の通路に姿を消していた。

だが、ナオとゆかりが、その部屋から逃げ出せないように、鍵をかけていくことは忘れてはいない。

しかし、その部屋に残された二人は、その後、ヒソヒソと外に聞こえないような小声で何かを囁き合うと、かれこれ与えられた時間をフルに使って二人して計画の密談を交わしていた。

そして、時間はきっかりと十分を、過ぎていたのである。

「さあ君たち、約束の時間は十分経った。これで文句はないと思うから、君たちの目的は一体なんなのかを、ここでハッキリと打ち明けてしまい給え。私どもとしても、それを聞かないことには安心は出来ないんでね。くれぐれも、嘘は言わないでもらいたいね」

ウオンの貨物船の機関室の横に設けられた先程の一室で、ナオとゆかりは、また向かい側の机の椅子に腰を掛けて、頬杖をつく宮坂を前にしいま詰問を受けていた。

そして、先程の銃を携帯した男たちもやはり、その銃を二人に突き付け、ナオとゆかりを挟む形でその横に立ち睨みを利かせている。

そんな中、ナオは宮坂の言葉を受けて、その時、次の様に意味不明な笑いをその顔に浮かべ、軽妙に応じていた。

それはこうである。

「判ったわ、それじゃ私たちが何故、ストリップ劇場へ入り込んでいたか？ その答えを聞きたいのなら、まずこれを見てもらいたいわ。いい、これは重要なサインなの、まずは、これを見てあなた達に考えてもらいたいわ。これの意味するところはなんなのか？ どう判るかしら？ これは、何度も言うように、重要な意味が含まれているのよ・・・」

ナオは、そう言うのと、右腕を宮坂の前に突きだして、手の指を折り、ちょうどVサインを出す様にしてそれを掲げて見せていた。

すると、それを受けて新見川と宮坂、それにナオとゆかりの横に控えていた二人の男たちが、怪訝な表情をして、そのVサインを覗き込むようにして凝視していた。

それが一体、何を意味しているか？

その時の男たち四人にとっては、それはまったく意味不明のサインだったが、ナオの口調から、かなりの興味をそそられて、注意を奪われていたからである。

「一体、それになんの意味があるんだ。いまいち、俺には、その意味が良く理解できんが、率直に言ってくれ、それが一体どうだというんだ？」

だが、それを受けて宮坂が、ナオに対し問いただしてくる。

それは、まったく話の筋からして、意味の無いものの様に思えたからだった。

しかし・・・

「ええっ！？　この意味があなた達には判らないの？　それじゃねえ、しょうがないから教えてあげるわ。実はねこういうことなのよ！　良い、よく聞いて・・・」

その言葉を受けると、男たち四人は、至極、間抜けな面をして、次のナオの言葉を身を乗り出す様にして期待して待った。

だが、次の瞬間、彼らにとっては、予期していない出来事が起こったのである。

ナオの発言を受けて、男たちに一瞬の隙が生まれる。

「ゆかり、今よ！！」

すると、そのナオの掛け声とともに、突然、彼女たちがその場に身を屈めたかと思うと、次の瞬間、唐突に二人の脚が上方へと突き上がる。

そして、二人の横に控えていた男たちの顎に、その脚が届いたかと思うと、直後、ナオとゆかりの必殺の蹴りが見事に命中し炸裂していた。

そして、次に見た光景は、二人の男たちが一瞬の隙をつかれ倒れていく光景であった。

「・・・・・・・・！！」

その一瞬のことに、茫然とする宮坂と新見川———しかし、彼らがその彼女らの意図を悟ったときには、もう既に事は遅かった。

「動かないで！！」

宮坂と新見川の前には、今、黒い鉄の塊を両手で構えて、二人に突き付けてくる、やはり二人の女の姿がある。

それに二人は絶句する。

それは、今、ナオとゆかりの二人が拳銃を構えて、宮坂と新見川にそれぞれその銃口を向けて、威嚇していたからであった。

その二人が構える拳銃は、ついさっき蹴り倒した男たちから奪ったものだ。

それを掲げると、ナオとゆかりは、その顔に笑みを洩らす。

そして・・・

「さっきのVサインはね、私たちが、勝利を確信したという意味なのよ、よく判った？

これで形勢は逆転ね、動けば、これであなた達を蜂の巣にしてやるから、くれぐれもじっとしていなさいよ。まだ死にたくはないでしょ？　だから観念しなさいね・・・」

そうナオは、二人に言いつけると、彼女は、自分と同じく銃を構えるゆかりと共に、宮坂と新見川の傍に近付き、銃を突き付けて二人の男たちの身柄を拘束し、押さえ付けてしまっていた。

そして、その後、ナオとゆかりの二人は、船底の食料庫にまだ閉じ込められている他の女性たちを救出すべく、行動を開始するのである。

第二節

「さあ、モタモタしないで、さっさと歩きなさいよね」

今、ナオとゆかりは、ある男たちの背中に銃を突き付け、貨物船内の通路を一路食料庫のある一角に向かって足を運んでいた。

ナオとゆかりの前を、歩くのは、宮坂義行こと勅使河原と支配人の新見川だ。

彼らは、女たちに銃を突き付けられて、手を上にあげた状態で渋々その意に従っている。

「お前等、こんな事して、ただで済むと思うなよ！」

そんな中、宮坂が、歩きながら後を振り向きつつ、ナオとゆかりにそう言って酷く憤慨したような態度を見せてくる。

だが・・・

「ふざけないでよ、それを言いたいのは私たちの方だわ。なんの関係もない女性たちを攫ってきて人身売買のネタにする事の方が、よっぽどただじゃ済まされない行為よ。そう言う寝言は、少しでも、正しい行いをしてから言って、でないと、脳天を撃ちぬくからね！」

そんな、会話を繰り返しつつ、ナオとゆかりは宮坂と新見川を銃で小突いて誘導すると、その後、ようやく船室の食料庫の扉の前へ辿り着く。

そして二人は、更に宮坂等を威嚇すると、その二人に船室の食料庫の鍵を開けろとって命令していた。

「さあ、その扉をあけなさい。そして中の女性たちを外に出すのよ。くれぐれも、馬鹿な真似はしないでね。こっちには、銃があるんだから、私達の命令に従いなさい」

その言葉を聞くと、宮坂は、不本意な態度を如実に顕しながらも、渋々、ズボンのポケットから取り出した鍵を使って、食料庫の固い鋼鉄製の扉の鍵を開けると、その扉を徐に内側へと開いて出入り口を開放していた。

「そら、君たちの望みどおり扉の鍵を開けてやったぞ。しかし、おまえ等、これからどうする心算だ。この船の中には、おれの部下達が仕事の為に乗り込んでいるんだ。だから、オレと新見川が捕まっているということが判れば、お前たちは、ただじゃ済まされないぞ。そう簡単に、この船から逃げ出せるとするなよ。おれ達はな、そんなに甘くないんだからな・・・」

だが、それは宮坂の虚勢的な発言であると、その時ナオは思っていた。

宮坂が、たとえそんな事言おうと、こっちにはその本人を人質にとっているという現実があるのだ。

だから、ナオは、その宮坂の言葉を受けても余り意に介さず、知れっとした態度でそれをやり過ごすと、二人の男たちを食料庫内に押し込んで、中の様子を覗っていた。

今、船室の食料庫内では、監禁されていた女たちが、その中に入って来たナオやゆかりそして宮坂や新見川を見て、驚いた顔をしている最中である。

そして、ナオとゆかりが、宮坂や新見川に銃を突き付けて威嚇していることを察すると、更に驚き、目を丸くして不審がっている様子でもあった。

それを見ると、ナオとゆかりは、その顔に笑みを浮かべて女たちに目で合図を送り、次にはこう言って彼女たちに指示を出していた。

「さあ、みんな、今からこの船室を出るわよ。ようやく私たちにも、脱出のチャンスが訪れたわ。だからみんな、モタモタしないでここを抜け出すからね。早く用意をして、この船から脱出するんだから・・・」

だから、その言葉を聞くと、先程までキョトンとして状況が飲み込めずにいた女たちは、一斉にその顔がパッと明るい表情に変化すると、嬉々とした喜びをそこに表していた。

そして一人の女が言う。

「赤越さん、それじゃ私たち助かるんですか？ このまま逃げ出せるんですね!？」

だからナオは、それに対して「うん、と力強く頷くと、その女性に向かって笑みをこぼしていた。

そして、

「さあ、それじゃ宮坂さん？ これからあなたには、私たちが脱出するまで一緒に人質として付き合ってもらおうわよ。だけど新見川支配人にはここに残ってもらうわ。人質は一人で十分ですからね」

そう言うとナオは、宮坂と新見川の二人に銃を突き付けたまま、女たち全員を船室の中から外へ送りだすと、その船室内に新見川だけを残して食料庫の扉を閉め、またそこへ鍵を掛けさせていた。

そしてそこから、脱出を開始するのである。

第三節

日付は一月六日、時間は午後八時三十分、東京都内のある埠頭では、いま、特務機関と警視庁によって、一つのある湾岸倉庫の闇討ちの一斉急襲が行われていた。

その急襲に参加しているのは、警視庁の捜査員と特務機関・特務一課、第三班と第五班の隊員たちだ。その数は、総勢二十五名、その中には佐渡一課長の姿もあった。

警視庁の捜査員と特務機関の隊員たちが、その倉庫に急襲を仕掛けたのは、つい先程、五分前のことである。

彼らは、まず最初に、倉庫の出入り口を完全封鎖した後、特務機関の隊員がハンドガン装備で、その倉庫内に突入——そして、その中で荷材の管理に従事していたと思われる男たち五人を、あっという間に拘束して逮捕していた。

そして、その拘束した男たち五人に、有無を言わず即座に詰問、

その詰問の内容は、宮坂こと勅使河原と、二人のある女性の行方に関するものであった。

「おいお前、いいか、今からよく聞け。お前たちの主人、宮坂義行の居場所はどこなんだ。それを素直に吐かないと、お前の口に鉛の弾をお見舞いするぞ。俺達はな急いでいるんだ、だから素直に喋れよ、嘘をつくとは容赦しないからな！！」

今、そう物騒な、発言をともなって、一人の男に詰問していたのは、特務機関・特務一課の課長、佐渡一である。

彼は、極力、その冷静さを装いながらも、少し怒りを交えて、男を睨み付ける。

そして、少々乱暴な扱いであったが、今現在、詰問している男の胸ぐらを掴んで、自分の方へぐいっと引き寄せると、更に眼光鋭く睨みを利かせていた。

しかし今、何故、佐渡一等、他の隊員を合わせて十五名の特務機関員と十名の警視庁捜査員が、この倉庫に急襲を仕掛けたのかということ、それは、こういう事情があったからだ。

一月四日夕刻、ストリップ劇場で特務機関員、高崎ナオと二階堂ゆかりの拉致事件が発生し、その急報を受けた警視庁と特務機関は、その後、緊急的な会議を開き、その対応をどうすべきかという議論が交わされ、ナオやゆかりと共にストリップ劇場で潜入捜査の任に就いていた関谷莞爾の報告をもとに、次の日一月五日から都内の港を捜索するという捜査方針を決行していたのである。関谷の報告によると、ナオとゆかりの二人は、人身売買の商品として、どこかの港に拉致されたという濃厚な疑いがあり、それと同時に、近々ウォンという男が港に入港して、その人身売買の取り引きが行われるのではないかという可能性も示唆されていたため、事態は緊急を要していた。

その為、警視庁は、その情報の重要性を直視し、捜査員を派遣して主要な港をしらみつぶしにあたって、二人の行方を血眼になって追っていたのである。

しかし港の捜査といっても、その範囲は広い。

東京都内だけでも、船の入港する湾岸一帯はごまんとある。

そうである以上、一月五日からの捜索は難航を極め、結局、その日の夜になっても勅使河原やナオ、ゆかりの行方はようとして知れなかったのだった。

だが、そこで警視庁は、緊急を要する事態ということもあり、新たな方策を施すことにする。

それは、十二月三十一日の時点から明らかになった、勅使河原が経営しているという疑いのある、銀座ブルーメントという偽ブランドブティックの緊急摘発を決行するという事だった。

その銀座ブルーメントという店の存在が明らかになったのは、ナオとゆかりや関谷莞爾の潜入捜査が開始されて、三日後のことだった。

ナオとゆかりは、潜入捜査に従事して、ストリップ劇場の踊り子の楽屋で、女たちが話をしている会話に聞き耳をたてて聞いたことから、それが発覚したのである。

だから、当初、警視庁は、その報告を受けて、勅使河原の余罪を確固たるものとする為に、その銀座ブルーメントという偽ブランドブティックを、翌日の一月一日から張り込んでいたのだ。そして、その店の摘発を、一月十七日をメドに敢行する予定を立てていた。

しかし、何度も言うように、特務機関の隊員であるナオとゆかりが拉致されて、港に連れ去られたという事、以外、なんの手がかりもない以上、勅使河原の行方に関する情報はその店で働いている彼の部下に問い質すしかなかった。

そこで、時期早々であったが、そのブルーメントという店を緊急摘発し、その店で働いている従業員を違法商法の容疑で逮捕し、取り調べを受けさせることになったのである。

その為、今日の一月六日現在、その店の摘発は、午前十時の店の開店と同時に行われていた。そして、その店で働いていた従業員五名を、偽ブランド商品販売の疑いで逮捕、そのままその五人は、警視庁に護送され取り調べを受けることとなった。

逮捕された、その五人の男たちは、警視庁の取調室で取調官の執拗な尋問にあい、結局、自分たちが宮坂という男の部下として、偽ブランド商品を売り捌いていたことを自供し、あっさりと罪を認めることとあいなっていた。

そして、更に、取調官が、宮坂義行が今どこにいて拉致したナオとゆかりはどうなっているのか、ということ問い詰めると、それにも素直に答えていたのだった。

だから、そういった経緯があり、今、佐渡一課長を始め、特務機関員十四名、それに警視庁の捜査員が今この倉庫に急襲を仕掛けたのも、その自供により、宮坂とナオ、ゆかりが品川区の品川埠頭第三倉庫に居るといった情報があったからであった。

だがつい先程、佐渡一等がこの倉庫を急襲してみたはいいが、宮坂こと勅使河原やナオ、ゆかりの姿はどこにもなく、藻抜きの殻状態であった。

その為、今この倉庫内で働いていた宮坂の部下らしき男一人を捕まえて、問い質しているところであるのだ。

「おいお前いいか？ 俺達はだな、お前等の主人である宮坂義行を捕らえなければならない。それに、二人の拉致された女たちも助けださねばならないんだ。だから何度も言うが、早く宮坂がどこに居るのか教えろ、でないとただじゃ済まされないんだからな・・・」

佐渡一はそう言うと、また再び男の胸ぐらを掴んで、乱暴にあしらっていた。

そして、脅しとばかりに、手持ちの銃をその男の口元へ運び、引き金に手を掛けて狙い澄ましていた。

すると・・・

「あっ・・・あああ・ちょっと・・・ちょっと待ってくれ、言うよ、言う。だからその銃を引っ込めてくれないか、そんなもの突き付けられたんじゃ、喋れないだろう。だから勘弁してくれよ、素直に喋るからさあ」

佐渡に胸ぐらを掴まれ、詰問されていた男は、そう言うと銃の威嚇に屈伏したのか、素直に、宮坂の居場所を吐くことを渋々ながらも承諾していた。

だが、それもそうだろう、いま自分に対して詰問し、銃を向けてきているその男の目は、真剣であったからだ。

その目は、自分が喋らなければ、躊躇わずそのまま銃の引き金を引くのではないかとさえ思えるほど、目が据わって有無を言わせなかったからでもある。

だからその男は、その後、佐渡に対し素直に宮坂と捕らえられている女たちの行く先を洗いざらい白状すると、特務機関の連中に乱暴はしないでくれと頼み込み、そのまま警視庁の捜査員によって逮捕され本部の方へと護送されることとなったのである。

彼としては、ここで死にたくは、無かったからでもあった。

第四節

特務機関が、品川埠頭にある第三倉庫の急襲を仕掛けて、その倉庫内で働いていた男たちを逮捕した時と、ほぼ同時刻、今現在ナオたち女性十二人は、ウォンという男の貨物船の中から脱出をしようとしている時の、真っ最中であつた。

今ナオたちの目の前には、銃を持った五人の男たちが狭い船内の通路に立ちはだかつて、銃口をこちらへと向けている。

しかし、それは何故か？

それは、簡単に言ってしまうと、ナオたちが船底から脱出し、いまや船の外へと逃げ出そうとしているところを、運悪く宮坂の部下たちに見つかってしまったからだった。

その為、今ナオたちは、こんな状況になった時の為にとっておいた切り札を使って、この状況を、どうにか切り抜けようとしていた。

それは、男たちの主人である、宮坂義行を盾にするということであつた。

「さあ、あなた達、この男の頭に、鉛の弾が炸裂するのを見たくなければ、とっとと銃を下ろしてさがりなさい。でないと、本気でこの引き金を引くわよ！！」

いま、宮坂の頭に銃を突き付けて、そう言葉を発していたのは、ナオである。

彼女は、通路の先で宮坂が人質にとられている為、うろたえて足踏みしている男たちに、威嚇の視線を這わせると、その彼を、自分たちの最前列に押し立ててジリジリと押し進み、そのまま強行突破を計ろうとしていた。

相手は五人、こちらには宮坂という人質がいる。

その為、いま通路に立ちはだかつて、どうすればいいか躊躇っている宮坂の部下たちを、このままさがらせて、脱出経路を確保し船の表へと出られればしめたものだ。

だが、それを可能とする為には、どうにか、階段のある場所まで辿り着くことが先決だった。

今いる場所は、この貨物船の船倉の、第三層部に位置している機関室のある船底だ。

船の表へと出るには、この船底から船外への第一階甲板部へと通じる階段を上へ昇っていかなければならない。

階段は、今ナオたちの目の前にいる、五人の男たちの居る場所のすぐ横にある。

だから、そこまでこのまま宮坂を盾にし、相手を牽制しつつ、先に進めば良かった。

男たちは、ナオたちが、自分たちの主人である、宮坂に対し銃を突き付けて有無を言わさず前進してくるものだから、彼らとしても、そのままどうすればいいのか至極迷っている状態だ。

このまま女たちを、階段へと通し、逃げ道をあけてしまっても、良いものか？

それとも、宮坂が捕らえられているとはいえ、それを無視して、脱出を阻止すべきか、二つに一つ、それは男たちにとっての、苦肉の選択を迫られている状況だった。

このまま女たちを、逃がしてしまえば、彼らとて困ったことになるだろう。

それは、人質にされている、宮坂の心境とて同じはず。

だから、どうしても、女たちの進行を止めたかった。

しかし、宮坂に銃を突き付けている女、ナオの目は真剣だった。

彼女は、本気で男たちが通路をあけなければ、彼を撃ち殺すと思えるほど、その目は覚悟を決めた、女の目のそれだった。

だから、そうである以上、五人の男たちは、さすがに何も手が出せず、不本意であったが、渋々といった形で、階段へと通じる場所から通路を後へと後退し、ナオたちに進路を譲りしかなかった。

宮坂を、殺されては、一大事であったからである。

*

「そうよ、あなた達いい子ね。そのまま階段から離れて、私たちが上へと行ける通路を確保しなさい。でないとこの男は、一発であの世行きになるからね。そうさせたくなかったら、大人しく後へ下がって、じっとしているのよ。決して、邪魔しないでね・・・」

その後、今、ナオたちは、階段をゆっくりと下を警戒しながら昇っている。

幸いにも男たちは、何の妨害もする事無く、通路をあけてくれていた。

だから、このまま上手く行けば、階段をつたって、船倉の最上階まで脱出でき、そこから外へ出られるかもしれない。

しかし、先程の五人の男たちは、ナオたちが階段を上り始めてから、その後を遠巻きにしてジリジリと追い掛けようとして来ている。

だから、それに警戒し、一気に階段をかけ上がることは出来なかった。

そんな中で、いまナオは階段を上っていく女たちの最後尾につき、宮坂を盾にし、男たちを牽制している。

そして先頭には、高坂美緒という女性がつき、やはり彼女も下を気にしつつ丁度階段を後向きになる形で、昇っている最中であつた。

ゆかりは、女たちの列の先頭から四番目の位置について、彼女たちを護衛する形で辺りに気を配っている。手には、拳銃が握られているので、もしも、下の五人の男が不穏な行動を示せば、即座に威嚇発砲する心算でいた。

しかし、今いる位置は、船底から次の上層階の第二層に位置する非常口の近くである為、その辺りは電灯もなく薄暗い。

だから、その暗い階段を、慎重に進まなければならない、その足取りは遅かった。

今のところ、五人の男たちは、強硬手段に出る気配はない。

そうなると、このまま行けば、もうすぐ船の外に出られる筈で、この先もう何も心配

はないように思っていた。

船の外に出れば、晴れて自由の身、その為、女たちは気が急くのか、自ずとその階段を上る歩調は、少しずつだったが軽やかになりつつある。

女たちの中には、何ヵ月も監禁されていた女性たちも何人かはいるので、そこから考えてみても、脱出が成功すれば、こんなに嬉しいことはない。

監禁生活は、神経をすり減らすのでもう沢山だ。

だから、少しでも早くここを脱出し、本当の意味での、自由を回復したかった。

「ねえナオさん、ところで、もしこの貨物船を脱出できたら、その後どうするんですか？

私たちは、もちろん自由の身になれると思うんですが、警察や特務機関にこの事を報せるのですか？ 報せるのなら、早くした方がいいですよ。この船にいる人たちは、皆、法を犯している犯罪者たちなんですから、やっぱり捕まえないと、問題がありますよね。だからどうなるんですか？ すぐに報せるんですか？」

階段を上りながら、その時、ナオに対して疑問気に質問してきたのは、十人いる女の中の一人、中臣良枝という女性だった。

彼女は、まだ完全に脱出が、成功したわけではないというのに、意外にも、その後のことを心配すると、ナオに対して多少興味深い態度で、そう聞いて来ていた。

しかしそれは、至極、先を見こした何気ない質問であったので、ナオはそれに対して、頷きつつ、次にはこう言ってその質問に答えていた。

「うーん、確かにそれは、早急にしなければならない、一つの重大な事項ね。もしここを脱出できれば、それは必ずしなければならない私たちの義務だけど、でも、それはあくまでここを無事脱出してからのことであって、今は、そんなことを考えるより、上手くこのまま逃げ出せることを祈るほうが先決だと思うわ。だからその話は、脱出が成功してから言って、まだ無事ここを逃げ出せると決まったわけ、ではないんだからね・・・」

するとそれに応えて、楽観的に、また中臣良枝という女性がナオに言う。

「でもですねナオさん、此方には人質がいるんだし、このままいけば大丈夫ですよ。さっきから男たちだって、手が出せずにいることだし、あとは一気にこの階段を上ればいいことでしょ？ だから早くここから出て、警察に連絡を入れましょう。だって、私たちが長い間、監禁していたなんて、赦せないですもの。ですから、ここを早く出しましょう。私、もうこんなところに居たくありません。二度と監禁されるなんて、嫌ですもの・・・」

その言葉には、彼女としての、今現在の正直な気持ちが痛いほど現れていた。

この中臣良枝という女性も、聞いた話によると、一ヵ月前から宮坂達に捕まって監禁されていた、女の中の一人だった。

だから、今、絶好の脱出のチャンスが到来して、その気が急くらしく、慌てるわけではないにしても、今すぐこの船とはおさらばしたいらしかった。

確かにこのままいけば、この船を脱出できる可能性は高い。

こちら側が、宮坂という人質をとっている以上、それはある意味、最大の武器を持っているといってもいいからだ。

そうである以上、男たちも手がだせないだろう。

だから彼女が、船底の食料庫に捕らえられていた時とはうってかわって、楽観的になるのも頷けた。

それは、彼女だけでなく、他の女性たちにも同時に当てはまる、心理状態だったのかもしれない。

しかし・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

そこで、不測の事態が生じるのである。

*

「キャッ・・！！」

それは女性たちが、第二層目の階段のすぐ近くの非常口まで、昇った直後の事である。

その時、突然、先頭に行く高坂美緒という女性が、小さな悲鳴をあげたのだ。

それは、不意に何かにぶつかったような声だったので、ナオたちがそれに驚いて、その彼女のいる階段の上近くを覗いたとき、そこである光景に直面していた。

そう一人の大男が、いま薄暗い第二層の非常口近くに忽然と現れると、高坂という女性を捕まえて、羽交い締めにもするかの様にしていたのだ。

しかも、その片手には銃を持って、

だからその為、ナオを含め他の女性たちは、その事に驚き、一瞬、言葉も出ずその光景を凝視してしまっていた。

そして次に出た言葉は、ある一人の男の名だったのである。

「あなた、鎌田、鎌田隆治じゃない！」

そうそれは、すでに見知った男の名前でもあった。

鎌田隆治、彼は、昨日ナオによって気絶させられ、のされた男であった。

しかし、その男が、いま目の前で女性を人質にとり、銃を突き付けているのだ。

だからそれを見て女たちは、その意外性に驚かない筈はなかった。

突然の男の登場、それによって、女たちの脱出が余計困難な状況にもなっていたからである。

「ようねえちゃん達、久しぶりだな、また会えてうれしいぜ。しかしこの船から脱出しようだなんて、ふてえ奴らだな。だけど、もうそれも出来ないぜ、つい今しがたこっちにも人質ができたんだ。だから、ここから逃げようだなんて馬鹿な気は起こさず、さっさと手を挙げて降参するんだな。そうすればこの女に、手荒な真似はしないでおいてやる。このままお前たちに逃げられると、此方としても非常に困るんでね。だから、大人しく俺の言うことを聞いて、船底に戻るんだ。お遊びの時間は終わりだよ、これ以上、好き勝手なことはさせられないんでね」

突然、現れた男、鎌田はそう言うと、先ほど捕まえた高坂美緒という女性を脅して、その首に太い腕を回し、そのまま彼女を後から縄縛りでもしたかのような拘束力で拘束して、その頭に銃を突き付け不敵な笑みを浮かべていた。

彼は、なにか得意気である。

それは、今しがた女性たちの弱みを握って、此れ見よがしに面白がっているようにも思えた。

だから、それを見てナオたちは、その顔に極端な嫌悪感を漂わせて、その彼を睨み付けたのは言うまでもない。それだけその男の態度が、不遜に思えたからでもあった。

「ちょっと、あなたね。どうしてこんな時に、のこのことこんな場所に現れるのよ。はっきり言って、あなた御呼びでないお邪魔虫なのよね。本当の事言えば、あなた、まだベットの上にも横になって、おねんねしていれば良いものを、こんな時に、その汚い顔を見せて邪魔しに来るなんて、最低といってもいいわ。はっきり言ってしまえば、あなたマンガに出てくる脇役なのよ。だからその娘を、今すぐ離して路をあげなさい。でないと、今度は私があなたをあつ世へと送ってやるから覚悟しなさいよね・・・」

するとそんな状況下に、今度は、ゆかりが声を荒らげて鎌田に対し、辛辣な言葉をぶつけていた。

ゆかりの言葉には、かなりの刺があるように覗える。

彼女としては、前に、この男に胸を触られた恨みがあるらしく、その口調は何度も言うように、辛辣さが滲み出ていた。

だから、それには鎌田も少し癖々した様子で、その厳つい顔を大量に砂糖を舂めた時の様に歪めながらも、極端に嚙めてみせてきていた。

さすがに女の剣幕には、ついてはいけなかったからだ。

しかし、

「ほおお、お前たち、この状況を判っていないようだな。お前たちがなんと言おうと、此方としては宮坂さんが捕まっている以上、この女を放す心算はないんだよ。だから、この女を放してもらいたいのなら、まずそっちが宮坂さんを解放して降伏することが先決だと思っぜ。でないと、銃を使わずにこの女の首をへし折ってやってもいいんだ。だから観念しな、この際だから負けを認めることだ。おれだって、女は殺したくない。だから今すぐ手をあげて、下の男たちに降伏しろ。そうすれば、この女の命だけは助けてやる。おれだって、こう見えても少しぐらい人情を、持ち合わせているんだからな。素直に従えよ、そうすれば赦してやる。お前たちは、もう既にウォンさんの大事な商品なんだからな・・・」

鎌田は、ゆかりの剣幕に少々圧されながらも、気を取り直して一方的な駆け引きを持ち掛けてきていた。彼としてみれば、このまま、女たちを見ず見ず逃がすことは出来ないのだろう。そして、宮坂がいる手前、彼を蔑ろにすることも出来ない。だから、少々強引ないい分ではあったが、そうすることしか他に方法がないと思っているらしく、その口調は、中々の威圧感があり、その辺のちんぴらとはまた違った格の高さを見せ付けようとしていた。そして、厳つい顔の男だけありその頭も巖のように相当固そうだった。

だが・・・

「冗談じゃないわよ、わたし達はね、どうしてもここを抜け出さなければならないのよ。だから、アメーバの単細胞みたいな事言っていないで、その娘を離してとっとと消え失せなさい。でないとこの宮坂の命はないわよ！」

すると、そんな状況下に、ナオが鎌田に対して口を挟んでくる。

ナオは、鎌田の駆け引きなどお構いもなしに、至極、いらついた表情で言葉をまくしたてると、彼に対して、指をびしっと突き付けて有無を言わせぬ口調で警告を発していた。

そして、先程よりも更に手持ちの銃口を宮坂の頭にすり付けると、目で今すぐ撃つわよと、鎌田に対して合図を送り、真剣な顔をして睨み付けていた。

その剣幕からして、ナオは、本気で宮坂を撃つ心算のようである。

だから、その場に居合わせた一同は、緊張してその身を強ばらせたのは言うまでもない。

*

いま鎌田は、この状況をどうするべきか迷っていた。

それは、相手は本気で宮坂を撃つ心算でいるらしいと、そう思えたからだ。

この膠着状態がつづいて約十分、依然ナオたちは宮坂を盾にし、強行突破をはかろうとして、その頑なな姿勢を崩そうとはしていなかった。

だが、それもそうだろう、彼女たちにはもう後がないのだ。このまま、この船にとどまっていれば、人身売買のネタとして、異国へと売り飛ばされてしまう。

だから何が何でも、ここを脱出しなければならないという強固な意志が、はっきりと窺い知れ、鎌田を睨み付けているその視線からは、痛いほどそれが伝わって来ていた。

しかし鎌田とて、それはどうしても阻止しなければならない状況だった。

このまま、女たちをみすみす逃がしてしまえば、マズい事になる。

もし女たちが、脱出に成功して警察にでも駆け込んだら、それこそ、今度は自分たちの方が、窮地に立たされてしまうからだ。

それと同時に鎌田は、主人である宮坂に対して、部下としての忠義の姿勢を尽くさねばならない。

だから彼としても、ここは女たちを、どうしても逃がすわけにはいかなかった。

逃がしてしまえば、自分の面目が立たなかったからでもある。

「おい、一体いつまで、こんな状況を続ける心算だ。さっきも言ったように、さっさと宮坂さんを解放して俺達に降伏しろ。でなけりゃ、この女の助かる路はないんだぞ。こういう状況はなこっちとしても早く終わらせたいんだ。だから、いつまでも抵抗しないで、早く手をあげて降伏しちまいな、そっちの方が楽だぞ、潔く諦めるんだな・・・」

「なに馬鹿な事言っているのよ、この筋肉馬鹿！ こっちだってね、みすみす降伏なんか出来ないのよ。あんたこっちの立場をよく判っていないのね。何度いわれてもあなたに従う心算なんてないわ。この男の命を助けてほしいのであれば、まずその娘を放しなさい。でないと本気でこの男の頭を撃ち抜くからね、嘘だと思ったら大間違いよ！」

ナオと鎌田の言い合いは続く。

「・・・・・・・・」

だがその時、鎌田は、さすがにまいっていた。

どうやら女たちは、どうしても譲る気はない様子だ。

今現在の状況は、鎌田が船倉の第二層付近にある非常口の近くで、高坂美緒という女性を人質にとっている。

それと同時に、ナオたちは宮坂をやはり盾にし、階段付近の途中でそれと対峙していた。

だから、両者とも、先程からお互いに睨みをきかせるだけで、動きのとれない状況に陥っている。

そんな状況下で、お互い折れて譲り合う精神は、さらさらないといい状態であった

のだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まったくしょうがねーな、強情な奴らだけ・・・・・・・・」

だが、そんな膠着状態が続く中、その時、鎌田は唐突にはあるが、ある提案を持ち掛けていた。

それは、彼としては、このような状態を続けるのは無意味だと思っただけ、早く、この膠着状態を終わらせようとして、持ち掛けた提案であった。

それはこうである。

「よし、それじゃ判った。それならば、条件交換といこうじゃないか」

鎌田は先程から、まさに宮坂を盾にして強固な姿勢を崩さないナオたちに、突然人懐っこそうな顔を向けると、その彼女たちに呼び掛けて、そうやって話を持ち掛けてきていた。

「条件交換？」

だがその時ナオは、それを受けると怪訝な表情をする。

こんな時に、条件交換とは、一体どんなことを意味しているのかと思ったからだ。

鎌田は言う。

「いいかまず、これは同等の立場での駆け引きなんだが、俺がまず最初にこの女を離して後ろへと退く。そしたら、今度はお前たちが宮坂さんを放して下の男達に渡せ、そうすれば、お互いの人質が解放されて、この条件交換は成立できる。だからどうだ、この提案にのるか？　これはお前たちにとっても、いい話だと思うけどな。この取り引きを実行する気がお前たちにあるのなら、そう言えよ。俺だって、この際、大分譲歩したんだからな。だから、やるかやらないか、今すぐ決めろ。無駄な時間は過ごしたくないんでね」
だが・・・・・・・・

「お断りよ！」

その鎌田の提案は、即決で、あえなく却下されていた。

それを拒絶したのは、ナオである。

彼女は、その提案に、至極問題があると思っているらしく、鎌田のいい分は決して受け入れられない愚行な取り引きだと、否定していたのであった。

そんな愚行に、みすみす乗る気はないと・・・

「あなたね、馬鹿？　どこにこんな状況下で、みすみす自分たちの切り札を解放できると思っているの？　私たちがこの船を安全無事に逃げ出すには、この男を人質にし盾にする以外、他に方法がないのよ。どうせあなた達は、宮坂を解放したら、私達をみんなで一斉に捕らえる心算でしょ？　そうなのは、此方としても状況的に不利になるのよね。だから、そんな危険をおかして、条件交換なんか飲めるわけないわ。寝言は一昨日から言って、私達は、そんなにお人好しじゃないんですからね」

そう、ナオの意見は、尤もである。

自分たちが、切り札を失ってしまえば、逃げ出すチャンスがなくなってしまう。

だから、ここはどうしても、譲る気にはなれない。

せっかく、ここまで逃げ出してきたのだ、また船底の食料庫に逆戻しにされたのでは、たまったものではないからだ。

だから、ナオが、鎌田の提案を冷たく突っ放して、とうてい受け入れられない条件交換として、拒絶したのも頷ける。

このまま、そう簡単に、捕まる訳にはいかなかったからである。

*

その後、宮坂を人質にとったナオたちと、高坂美緒という女性を人質にとった鎌田たちの膠着状態はまだまだ続いていた。

ナオは、頑として宮坂を離さず、その頭に銃を突き付けて、拘束している。

そして鎌田も、美緒という女を抱えて離さなかった。

しかしこの膠着状態は、いつまで続くのであるのだろう。

もうかれこれ、こんな状態を二十分近く続けている。

だから、その緊迫感に、女たちも男たちも疲れを見せ始め、それと同時に、冬であるというのに興奮の為か、皆、脂汗をにじませ始めていた。

だが、その頃ナオも、さすがに焦りの色を見せ始めている。

豪胆で快活なはずの、彼女でも、この状況は中々難しいと思えている様子で、いかにしてこの場を巧く切り抜ければいいのかと、苦慮しているようにも思えた。

ナオは先ほどから、頻りに鎌田に対して女を放して後へさがれと要求していたが、それを鎌田は断り続けている。

そして鎌田も、ナオに対し、宮坂を放せと要求していた。

だから、この両者の対立は、まだまだ長引きそうな気配を見せているのが正直なところだ。

ナオたちにしてみれば、こんな状態を続けるのは、状況的に分が悪すぎる。

こうしている間にも、時間は刻一刻と過ぎていくのだ。

彼女たちにしてみれば、なるべく船が出航する前に、この場を手際よく脱出したかった。

しかし、高坂美緒という女性が、鎌田に捕まっている以上、それを無視して強行に脱出することも出来そうにない。

では、どうすれば良いのだろうか？

さすがに彼女たちにとっては、この状況を打破する良い考えは、その時、思い浮かぶはずもなかった。

「さあ、どうする心算だおまえ等、このままだと、時間が無駄に過ぎていくだけだぞ。この際だから潔く諦めろ。此方にも、人質がある以上、お前たちは何も手だしできないだろ。だから、このまま俺達に降伏し、ウォンさんの商品として覚悟を決めろ。そうでないと、此方もさすがに強硬手段にでるぞ。無意味な睨み合いは時間の無駄だからな」

だが、それを受けると、ナオは、

「煩いわね、あんた黙りなさいよ！！」

そう、だがそう言ってナオは、鎌田を一喝するようにそう制していた。

しかし、これから一体、どうすればいいだろう？

ナオたちが、この状況をうまく切り抜けるためには、さすがになんらかの助けが必要であるように思えてくる。

しかしこれは、漫画ではない以上、そんなに都合よく助けがここに現れるものではない。

旧代的な漫画ならば、主人公やヒロインが窮地に陥ったとき、思わぬところから正義の味方といえるスーパーヒーローが助けに来てくれるだろう。

だが、今の状況は現実だ。

それを考えると、そんな望みがあるようにはとても思えなかった。

しかし……

その都合のいい助けが、この後、訪れるのである。

それは、今現在の膠着状態を、打破する要因になるのだが、果たしてこの後どうなるのか、それは次の項以降において明かしたいと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

*

それは、女たちと鎌田が睨み合いを続けて、更に五分が経過したときの事だった。

その時、突然、船内が慌ただしくなり、どこからともなく銃撃の音と思われる音や慌てふためく男たちの声が聞こえてきたかと思うと、そこへ一人の男が駆け付けてきたのだ。

その男は、やはり宮坂の部下らしく、まだ若い二十代後半ぐらいの短髪の男なのだが、彼は息急き切って宮坂達がいるこの階段付近まで駆けてくると、こう言って警告を発していた。

「まずいぞ、みんな逃げるんだ！ 特務、特務機関が急襲を仕掛けてきたんだ！ 今、上の奴らが応戦している、だから早く逃げるんだ！！ 急いで、裏口から脱出しろ！ 逃げ、急ぐんだ！！」

(特務機関……！？)

その言葉を聞くと、そこにいた一同は、鎌田や他の男たちも含めて、ほとんどの者が驚きを示し、慌てふためいたり絶句したりして一種の混乱状態に陥っていた。

特務機関の急襲、それは鎌田や男たちにとって、降って湧いたような寝耳に水の話だ。

しかし何故こんな時に、特務機関が、この貨物船に急襲を仕掛けてきたのだろうか？

まさか、この船に女たちが捕らえられているということがどこから漏れて、その報にもとづき特務機関がここへ駆け付けてきたのか？

しかし、この船が密輸船であることや、この船に女たちが捕らえられているということは、黒峰会のメンバー以外、誰も知らないはず。

では、どうして特務機関が、攻めてくるのか？

その時、鎌田や他の者は、その事の真偽はともかくとして、とりもなおさず、ただ慌てふためくだけしか出来なかった。

だが、そこで高坂美緒を人質に捕らえていた鎌田にも、一瞬の隙ができるのである。

そして、そこで両者の間にも、動きが生じたのであった……………

・・・・・・・・・・・・・・・・

*

その時、最初に動いたのは、ゆかりであった。

彼女は、突然現れた男の急報を聞いて、驚いている鎌田と男たちの一瞬の間を見てとると、それを絶好のチャンスとして行動に移していた。

彼女は、まず、今いる階段から意を決して、脱兎のごとく高坂美緒が捕まっている非常口付近まで駆け昇ると、今、狼狽している鎌田の眼前に立ちはだかる。

そして、次の瞬間、脚を思いっきり振り上げると、そのまま目の前の男に対し、強烈な蹴りの一撃をお見舞いしていた。

ガッ！

その蹴りは、見事、鎌田が手にしている銃をふき飛ばし、あらぬ方向へと弾けさせる。

すると、その直後ゆかりは、手持ちの銃を構えて、男に対し銃口を向け有無を言わず叫んでいた。

「鎌田、そのままじっとして、動かないで！ でないと、この銃が火を噴くわよ！！」

だが・・・

「チッ！」

鎌田はそれを察すると、危険を悟ったのか、次の瞬間、ゆかりの腕を思いっきり振り払う。

それを受けると、ゆかりが手にしていた銃は、鎌田の時と同じ様に、あらぬ方向へとふき飛び、その勢いで階段の下へと転がっていた。

呆気にとられる女一同、だが鎌田は、次にゆかりにこう叫ぶと、高坂美緒を突き放して、脱兎のごとく走りだし、逃走をはかっていた。

「てめえに、捕まる訳にはいかないんだよ・・・」

.....

しかし、それに前後して、その時、宮坂も行動に移したのである。

*

彼、宮坂が、最初に動いたのは、今や、ゆかりと鎌田がまさにやりあっている時の真っ最中だった。

その時、あのナオは、二人がやりあっている現場を見て、それに気をとられ、今、自分が拘束している宮坂のことなどつい忘れてしまっていた。

だが、その隙について宮坂がナオに対し、体当たりを仕掛けたのである。

それは一瞬の出来事だった。

宮坂は、一時の間を見せている、ナオに対し、肩口から全体重をのせて突きかかると、そのまま彼女を横へとふき飛ばし階段の上へと尻餅をつかせる。

「きゃっ！」

それでナオは、そのまま起き上がれず、腰を押さえて一時悶絶していた。

しかし、その隙について宮坂は、やはり鎌田と同様、脱兎のごとく迷わず逃走をはかっていたのである。

彼はまず、体当たりを受けて尻餅をついているナオを一瞥し、フッと小さく嘲笑うと、次には一転して踵を返し、階段を第三層の船底まで駆け下りる。

すると、そこで、特務機関が攻めてきたという急報を聞いて、狼狽している男たちを即座に叱咤すると、そのまま船倉の奥へと走りだしていた。

おそらく彼らは、このまま逃げる心算だ。

特務機関が、急襲を仕掛けて来たということを知った以上、このまま船に留まっている理由はない。

彼らが、このままここに留まっていれば、その特務機関によって捕らえられることは、機をみるより明らかだ。

だから、ここはとりもなおさず、逃げるのが先決だろう。

彼らが、法を犯している犯罪者である以上、それが当然の選択のように思っていた。

だが、それを見たナオは、その時、このままではマズいと思っていた。

うって変わって、ナオの立場からすると、このまま宮坂達を逃がしてしまうのは、このような状況とはいえ納得のいくものではない。

何しろ宮坂達は、黒峰会のメンバーなのだ、それと同時に、数々の犯罪に手を染めている無法の輩でもある。

そして何より、宮坂に関しては、自分の父を殺したと思われる、高崎警視殺害事件の容疑者の可能性があるのだ。

だからそれを思うと、ここはなんとしても、その逃走を許したくはなかった。

それを許してしまえば、もうこの後、宮坂を捕らえる機会は、訪れないのではないかとさえ思えたからである。

「宮坂、待ちなさい！！」

だからナオはその時、尻餅をつきながらも、即座に声を張り上げて宮坂を呼び止めていた。

だが彼は、ナオの手を逃れたことを良いことに、そのまま船内の通路をひた走ると、そこからどこへともなく走り去ってしまう。

それを見て、齒噛みするナオ、

しかしその直後、そこへ唐突に、ダダダダと、階段を駆け下りてくる音と思われる数人の、人の足音が聞こえてきたので、それに驚き女一同は振り向く。

すると、次に見た光景は、武装して防弾チョッキを着込んだ数人の特務機関の隊員達が、ナオ達を助けに船内に下りてきて、駆け付けて来た姿であったのである。

第五節

いま貨物船の甲板上では、特務機関と武装した男たちによる銃撃戦が演じられていた。

黒いスーツを着て、リボルバー式の拳銃を掲げ、必死の抵抗を試みている男たちは宮坂の部下である。

そして、それに対抗する形で、応戦を繰り返しているのは特務機関の隊員たちであった。

特務機関は、今、その手にハンドガンを装備し、貨物船の船楼の表側から攻勢を仕掛けて、その場を占拠しようとしている。

それに対し宮坂の部下たちは、船楼の中や船尾へと逃げ込み、ひたすら物陰に隠れて発砲を繰り返していた。

しかし、特務機関がこの貨物船に急襲を仕掛けたのは、つい先程のことだった。

彼らは、ナオたちが、初めに監禁されていた品川埠頭の第三倉庫を急襲すると、その倉庫内で働いていた男たちを警視庁の摘発班と共に逮捕、そして、有無を言わず詰問し、ナオとゆかり、それから勅使河原の所在を吐かせたのだった。

そして、いざその場所にきてみると、武装した男たちと鉢合わせし銃撃戦を演じるごとと相成っていた。

宮坂の部下たちは、全部で二十人程度、何度も言うように彼らはみな黒いスーツを着込んでいるので、夜の闇に紛れその姿を隠すには、絶好のコスチュームを纏っている様にも思えた。

それに反して、特務機関の隊員は、ベージュを基調とした特務服に茶色の防弾チョッキを装着しているため、貨物船に設置された作業用のライトにそのシルエットが映え、夜であるにもかかわらずその姿は電灯の下で飛び回る銀虫の様に目立っていた。

だがところで、今現在の状況をさらに詳しく語ると、こういうことだ。

特務機関はこの貨物船に急襲を仕掛ける際、その船首に降ろされていたタラップから身をひそめて乗船していたので、最初は船で働いている船員に気付かれる事無く、即座に船尾部分に設置されている船楼へと到達できていた。そして、その船の船楼の前面部に位置する甲板上一帯を速やかに占拠すると、そこで荷材の積み降ろしをしていた船員を数人拘束していた。

急襲はまさに、不意打ち的に行われたので、貨物船のすべてではないにしても、その船楼の前面部を速やかに占拠できたことは、特務機関としての日頃のハードな訓練の賜物だといえただろう。しかしその後、やはり急襲を仕掛けた事を運悪く宮坂の部下たちに察知されてしまったので、仕方なく銃撃戦に発展してしまっていた。

銃撃戦が始まると、特務機関は勇猛に銃弾の合間を掻い潜り、宮坂の部下たちに肉薄する。

彼らは急襲のエキスパートなので、その動きは迅速だ。

そして宮坂の部下たちは、突然の急襲に慌てていたため、彼らを追い詰めるにはさして時間はかからなかった。

だが、宮坂の部下たちも馬鹿ではない。

彼らは、特務機関が一気に攻勢をしかけてくると、船楼の裏側に位置する船尾へと後退し、そこから防戦態勢を整えて、頻りに威嚇発砲を繰り返し、特務機関の急襲をなんとかやり過ごそうと懸命になっていた。

しかし、このままでは特務機関におされ、身柄を拘束されてしまうのは目に見えて

いる。

だから、彼らは仕方なく、船尾の舷側にタラップを降ろしてそこから船着き場に脱出し、逃走の活路を開こうと画策し始めていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

が、その頃、貨物船の船楼内の操舵室の下では、やはり特務機関の隊員たちと宮坂の部下である男たちによる銃撃戦が演じられていたのである。

*

その銃撃戦に参加しているのは、四五人の特務隊員、そして特務機関・特務一課の課長、佐渡一と関谷莞爾、それに高崎ナオや二階堂ゆかりであった。

彼らはいま、船尾へと通じる通信室に立て籠もっている男たちを、その入り口付近の通路から完全に包囲すると、中の様子を物見するように覗き、交戦の態勢を万全にするように期していた。

しかし、その通信室に立て籠もっている男たちは、もう後がないと思っているのか、必死の抵抗をこころみ、頻りに威嚇発砲を繰り返してきていたので、それにはさすがに特務機関の隊員もそこで苦戦を強いられ、単発的な銃撃戦に発展することを余儀なくされていた。

だが、その通信室の中に立て籠もっているのは、あの宮坂義行こと勅使河原で、それに追従する形で、鎌田や磯貝、それに貨物船の主ウォンもその中に逃げ込んでいる様子で、このまま彼らを逃してしまう訳にはいかなかったのだ。

彼らが、その通信室に逃げ込んだのは、つい今し方である。

宮坂達は、先程、船倉の第二層と三層目の階段付近でナオたちと脱出をめぐる一悶着を起こしていたが、特務機関が攻めてきたという知らせを聞いた直後、一瞬の間を見て逃げ出すと、そのまま船倉内を奔走して、結局、その通信室の中に逃げ込んで立て籠もってしまったのだ。

しかし、そんなところに、ナオと二階堂ゆかりの姿もあるのはこういう事だ。

ナオとゆかりは、先程、船内に駆け付けてきた特務機関の隊員たちによって救出されると、その助けにきてくれた隊員たちにお礼の挨拶を述べることもそこそこに、捕まって監禁されていた他の女性たち十人を隊員たちに預けると、即座に逃げた宮坂等の後を追ってこの通信室の前まで駆け付けてきたのである。

そして、やはり宮坂を逮捕するために駆け付けてきた、佐渡一や関谷莞爾率いる数人の特務隊員と、その通信室の前で合流すると、いま、宮坂を追い詰めて単発的な銃撃戦を演じている状況であった。

ナオとゆかりがすぐに宮坂等を追い掛けた理由は、このまま宮坂を貨物船から見す見す逃してしまうのは、特務機関の一隊員として見過ごすことができなかつた為もあるが、やはり、今まで自分たちを監禁して、ウォンという人身売買のブローカーに商品として売り付けようとした彼らを、どうしても許せなかつたからでもあった。

それに、特務機関がこの船に急襲を仕掛けてきたとなると、彼らをここで一網打尽にし、捕らえられる可能性が十二分にある為でもあり、そのチャンスをここで逸してしま

うには惜しい状況でもあったからだ。

だから、今、ナオたちは、単発的に銃撃戦を演じながらも、その合間を見計らって合流を果たした佐渡一課長らと、この後、どうやって宮坂等を捕らえその身柄を拘束すべきか、その方策を話し合い、先程から顔を突き合わせて考え込んでいたのである。

「ところで課長、この際だからどうします？ 奴らは、この通信室に立て籠もっている以上、他にもう逃げ場はないでしょう。だから、ここは意を決して突入を仕掛けますか？

このまま単発的な銃撃戦を続けても意味がないでしょう。ですから、ここは俺が先に先陣をきって最初に突入しますから、後は援護射撃をしてください。ここで怯んでいては、特務機関の任務責任を果たせませんからね」

今、そう少し、力み口調で言葉を発しているのは、特務機関・第五班に所属するあの関谷莞爾だ。

彼は、先程から通信室に立て籠もっている、宮坂の部下たちと牽制の銃撃を交える中で、さすがに焦れたらしく、隣に控える佐渡に対して頻りに強行的な手段にうってでる提案を申し出ると、はやる気持ちを抑えつつ課長の次の言葉を待って口をつぐんでいた。

すると、それに答えて佐渡が言う。

「うーん、確かにそうだな、このままここで無意味な銃撃を続けても埒が明かない。それに、甲板上の裏では、他の男たちも逃げる算段をこうじているらしいから、ここは、早く奴らを引っ掴まえて、その目の前に逮捕状を突き付けてやらねばならないだろう。それに、奴らも、相当慌てている様子だから、ここは一気に攻勢を仕掛け一網打尽にしてしまうのが得策だろう。多少、突入に際しては危険が付きまとうが、お前の言うとおりに、この際、怯んでいてはられない状況だからな。だから、一気に決着を付けてしまおう、時間を無駄に浪費するのも得策じゃないからな・・・」

佐渡はそう言うと、関谷の言葉に同意を示し、他の隊員たちの顔を見渡してコクリと頷いて、その旨を告げていた。

だが、その直後、佐渡が関谷の言葉を受け入れて突入の手筈を整えようとする、そこへナオが口をはさんできて、課長に対し次のようなことを言うのである。

「あの課長、それじゃ、もし突入を仕掛けるのであれば、私を関谷くんと共に突入の最前衛に加えてくれないかしら？ 私としては、拉致されて監禁されていたことの借りを返さねばならないし、それに潜入捜査を途中で頓挫してしまった失態もあるから、名誉挽回の意味も兼ねて、ここは、宮坂を第一に捕らえる役を任せてもらいたいわ。だから、ここは私にやらせて下さい、必ず奴らを手際よく拘束してみせるから、それでいいでしょ？」

だが、ナオのその申し出を、佐渡は少し悩むように考えてから渋い顔をして否定していた。

そして、ナオの顔を見据えると、彼女の願いとは逆の援護支援を言い渡すのである。「あのなナオ、これはお遊びじゃないんだぞ。正直言えば、お前は本当のところ、親父さんの仇がうちたくて突入に参加したいといっているんじゃないか？ たしかに、宮坂、いや勅使河原は、お前の親父さんを殺したと思われる要注意人物だ。しかし、勅使河原を逮捕するのに、お前の勝手な私情を持ち込むことはできないんだぞ。これは、ある意味、特務機関として、法を犯す犯罪者を逮捕する為の大事な任務なんだ。だから、お前一人の勝手な我が侷で、指揮を左右することはできないんだ。それに、お前は、助けた

されたばかりでろくな武装もしていないだろう。そうである以上、軽率に、お前を突入に参加させることは出来ない。だから、今回だけは、援護支援で満足している、お前に、怪我でもされたら後味が悪いからな・・・」

その言葉を聞くと、さすがにナオは課長の佐渡に反論ができない様子で、多少、不服な顔をしていたが、その言葉に頷くと渋々ながらそれに従うことに決めたようだった。

そして佐渡は、さっそく突入の準備をするのである。

「よし、それじゃいいか？ おれたちは、これから勅使河原が立て籠もっている通信室に突入をするが、関谷それに大間田、まずはお前たちが最初に突入の先陣をきれ。そして、奴らが次の銃撃を終えた瞬間から、室内に意を決して乗り込むんだ。だから、気を引き締めてことに対処しろよ。ここで、奴らを逃がしてしまえば、折角のチャンスが無駄になるからな、呉々も、失敗は許さんぞ。中に突入したら、即座に奴らを拘束して一網打尽にするんだ。これは、訓練じゃないんだからな決して不覚をとるなよ。おれ達は、お前たちが突入したら、援護射撃をするからな。だから、今すぐ、準備を整え踏み込む用意をするんだ。いいな判ったな・・・」

そして、突入が開始されるのである。

*

だが、それより時間は少しさかのぼって三分前――――

その頃、通信室の室内では、宮坂こと勅使河原と鎌田、それに磯貝そしてウォンが、顔を揃えてやはりそこから脱出する手筈を整えている最中であつた。

「ところでどうなんだ鎌田、船尾でのタラップの接岸は終わったか？ おれ達は、ここでこのまま何時までも立て籠もっている訳にはいかないぞ。外では、特務機関が包囲しているし、奴らが、いつ焦れて突入してくるとも限らないんだ。だから、ここは早く逃げ出す準備を急がないと事だぞ。おれ達は、こんなところでそう易々と捕まる訳にはいかないんだからな・・・」

今そう言って、言葉を発していたのは宮坂だ。

彼は、通信室の狭い室内を先程から腕組みしてイライラといたり来たりすると、その室内の非常口にあたる裏通路で外に顔を出している鎌田に対し、多少いらついた態度で応じ、脱出の準備はまだ整わないのかと言って、至極、不機嫌な顔を隠そうともしていなかった。

すると、それに答えて鎌田が、その非常口から通信室内に顔を出すと、恐縮した形で宮坂に応じ、次のような今現在の状況を述べるのである。

「あのですね宮坂さん、それなんです、船尾の裏では、今、他の奴らが急いでタラップを船着き場に接岸していますからあと少し待っていてください。あと、一二分もすれば、脱出の準備はすべて整いますから、そうしたらこの船を捨てて陸に上がりましょう。それに、外では、特務機関とウチの部下たちとの銃撃がまだ続いていますから、決して外には出ないで下さいよ。逃げ出す時は、俺がしっかりガードしますからだからあまり心配しないでください。中国の兵法でも、退きぎわがいちばん難しいといえますからね。ですから、ここはあと少しの辛抱です、必ずここを脱出してみせましょう。ここで捕まったらもともともありませんからね」

その時、鎌田はそう言うと、その顔にニッと不敵な笑みを浮かべて、宮坂に対し笑いかけてきていた。

だが、それを受けると宮坂は、鎌田の言葉に頷きつつも、その顔を不安気に曇らせて、次に、悩むがごとく独り言を愚痴り始めるのである。

「しかし特務機関のやつら、一体、何故ここが判ったんだ。奴らが、この貨物船に急襲を仕掛けて来たとなると、考えられるのはどこかでウチの内情が洩れて、この貨物船の場所が嗅ぎ付けられたとしか思えない。だが、ウチの部下に、ここでおれ達が法に触れるような仕事をしているということ、警察や特務機関にタレ込む奴がいるとも思えないし、まさかあの高崎ナオって言う特務機関の女と、もう一人の黒川がストリップ劇場に入り込んだ時、事前に、警察と連絡を取っていたんじゃないか。もしそうだとしたら、あいつらは、とんでもない喰わせアマあだ。だが奴らは、なんの目的でストリップ劇場に入り込んで来たのだろう？　ここにくと、それが一番の謎のような気がする。こんな事になるのだったら、もっと早く、奴らの正体に気付くべきだった。それが、今、いちばんの悔やまれる事態だ。ある意味、恥ずべき失態を演じたといってもいいんだからな・・・」

すると、その宮坂の独り言を隣で聞いていた磯貝が、その時、その眉根を不満げに歪めると、その語り主である宮坂に対して、忠言でもするかのように口を尖らせてその言葉を諫めに掛かっていた。

磯貝の言葉は、次の様である。

「あのですね宮坂さん、こう言っちゃなんですが、今は特務機関が何故ここに攻めてきたかって言うことよりもここを逃げ出すことだけを考えて方がいいんじゃないですかね？

はっきり言ってしまえば、おれ達は、ここでその特務機関に捕まったりでもしたら、それこそもう終わりなんですぜ。だから、そんなことを考えるよりも、今は、ここを無事逃げ出すことだけを考えてください。でないと、宮坂さんがもし捕まりでもしたら、おれ達だってただでは済まされないんですからね、その事をよろしくお願いしますよ。船尾でのタラップの用意が調ったら、すぐにでも脱出して下さい。宮坂さんは、一応おれ達の主人なんですからね」

その磯貝の言葉は、もっともな話だった。

彼の言うとおり、今は何故、特務機関が急襲を仕掛けて来たかということではなく、その特務機関から逃げることのみ考えるべき時だった。

もし宮坂が、その特務機関に捕まってしまうようなことがあれば、その部下である鎌田や磯貝にまで累が及ぶ可能性があるのだ。そして宮坂は、黒峰会の準幹部の地位にある男でもある。その為、もし彼が捕まり尋問を受ければ、その黒峰会の内情まで追求される事態になるのだ。

だからここは、どうしても捕まる訳にはいかなかったし、捕まってしまえば言い逃れは出来ないのは目に見えているのである。

そうである以上、ここは些細なことになりふり構ってなど居られないのであり、そんなことを考えていること自体無意味だった。

だから宮坂も、その磯貝の言葉を受けると、場違いなことを言ってしまったと反省し、いったん口を閉じて自重するのであった。

・・・・・・・・・・

しかし・・・

その時、宮坂と磯貝が、そんなやり取りの話をしていると、そこへ、先程まで一言も言葉を発せず押し黙っていたウォンが、二人に対して責めるようなきつい眼差しを向けてきていたので、二人はその眼力に圧かれてその場に気まずい空気が流れだしたのであった。

その直後、そのウォンが口を開く。

「あのですな宮坂さん。こんな状況に、こんな事言うのもなんなんですがね。今ね、私どもとしては、こんな事態になりはっきり言って迷惑しているのですよ。私どもは、この日本で大きな商談を成立させる為、はるばる海を越えてここまで来たというのに、その商談も買い取ったはずの女たちが逃げてしまって全てが台無しですよ。それに、この貨物船で運んできた禁制品も、このままだと特務機関と警視庁に没収されてしまうではないですか。そうなると、私は財産を失い路頭に迷うことと同じになるのですよ。この失態は、ある意味、あなた方の不手際によるものですからね、その責任はあなた方がとって下さいよ。でないと、もし私が特務機関に捕まりでもしたら、あなたや黒峰会の事を洗いざらいぶちまけますからね。ですから、それ相応の埋め合わせをして下さい。そうしなければ、金輪際、あなたがたとの縁は無しです。そのご覚悟は出来ているのでしょうか、二度とこんなことは御免ですからな！」

ウォンはその時、これ以上ないという嫌味ったらしい顔で、そう言葉をまくしたてると、あからさまに宮坂を非難してまた睨み付けてきていた。

しかし彼にしてみれば、この状況からして、そのような言葉が出たのも無理なからぬ事であるのだろう。はるばる海外からこの日本にきて、商談が無事成立したと思ったら特務機関の急襲なのだ。これに文句を付けないというのであれば、その者は、このウォンからしてみればお人好しの何者でもないと映るはずだ。だから、それを聞いた宮坂や磯貝も、それには何も返す言葉もなく、ただその場をなだめて彼を落ち着かせることしかその時は何も出来ないでいた。

彼らは、ウォンという男が強欲で、金に対する執着は万里の高峰よりも高いということを知っていたからでもある。

・・・・・・・・・・

だがその直後、その場の気まずい空気を一掃する鎌田の急報が届いたので、その時、宮坂と磯貝は胸を撫で下ろし軽いため息を吐くのだった。

「宮坂さん急いでください。やっと、タラップの準備が整いましたよ。だから今すぐ裏から出てここを脱出してください。それに、ウォンさんもさあ早く。今は、銃撃が止んでいるときでもありますから、逃げ出すには絶好の機会ですよ。愚図愚図していると、逃げ遅れては大変ですからね。まずは逃げおおせてから、今後のことについて話し合しましょう。捕まってからではぐうの音も出ませんからね」

その言葉を聞くと、ウォンもさすがに納得し、その後、鎌田、磯貝、そして宮坂と共に通信室の裏通路から脱出し、貨物船の船尾へと出てタラップへと急ぎ逃走を図るのであった。

*

しかしそれから一分後、特務機関はそんなことはつゆ知らず、意を決して突入を開始していた。

彼らはまず、通信室の室内の様子を覗くと、宮坂等の部下がそこから顔を出していないかをよく確認して踏み込む態勢を整える。

そして、相手側がたったいま銃撃を休止しているということを察すると、最初の手筈どおり関谷莞爾と大間田が先陣をきりその室内に突入を開始していた。

二人が突入を開始した直後、通信室内からの威嚇発砲がないということに、訝りながらも、佐渡一等は援護射撃をやはり手筈どおり馬鹿正直にも行い支援を開始する。

すると約十秒後に、関谷と大間田が通信室内に乱入を果たし、その中を制圧した様子だった。

だがその直後、その室内から関谷が脱兎のごとく逆走して来て、佐渡の前に姿を現すと彼は息急き切ってこう言葉を発していた。

「か、課長！　まずいです、やられました！　奴らはいさっき通信室の裏口から出て、船尾の裏甲板へ脱出したようです。ですから直ぐあとを追いましょう。このまま逃がしたら、逮捕状が無意味になりますからね」

しかしその時その言葉を聞くと、佐渡が驚くよりも早く、一人の女性隊員が即座に行動に移っていた。

ナオだ。

彼女は関谷のその言葉を聞くと、寸毫の躊躇もなく駆け出し目の前の通用路を突っ切って、その通信室のなかへ即座に乱入していく。

それはあっという間の出来事であったので、そこに居た佐渡と他の隊員たちは、一瞬、呆気にとられてその光景を見送ってしまっていた。

「あっ待ってナオ！　私も行くわ抜け駆けは卑怯よ！」

すると、それに呼応する形で、もう一人の女性隊員も動いていた。

それは二階堂ゆかりである。

彼女はその時なにを思ったか、ナオ同様、脱兎の勢いで走りだすと、その通信室に通じる通用路を一瞬にして駆け抜けてナオのあとを追いつけていく。すると、それから更にその通信室のなかに駆け込むと、やはり佐渡等、他の特務隊員が呆気にとられる中を、あっという間に後にして姿を霞のごとくかき消してしまうのであった。

それに驚き、口をつぐむ一同――――

そして、次には、佐渡一がそんな二人の挙行を見て、その場で地団駄を踏むようにして、怒りを顕わにしていた。

「な、何やってるんだ、あいつらは、ま、まったく、おれの命令もなしに勝手な行動しやがって。しかも、二階堂まで、ナオの奴に感化されておれの命令を無視するとは、何事だ！　あいつ等、今度あったら、一時間や二時間、御灸をすえるだけじゃ済まさないかな、覚悟しておけよ！！」

佐渡はそう言うと、こぶしを握り締めて歯軋りしていた。

だが・・・

「課長、今はそんな事言っている場合ではないでしょう。宮坂等は、裏口から逃げたんですよ。だから、ナオちゃんと二階堂の処置はともかくとして、まずは、奴らを追い掛けましょう。おれたちが、ここでノコノコしては逃げた奴らを取り逃がしてしまいます。だから、ここは落ち着いて、宮坂等を捕らえることだけを考えることにしましょう。今なら、まだ、奴らに追い付く可能性は十分にありますからね・・・」

そう関谷に言われると、佐渡は、罰の悪そうに頭を掻く。

そして、ナオとゆかりに一足遅れながらも、宮坂のあとを追いかけて、船楼内を通信室の裏口に向けて他の隊員たちと共にひた走るのである。

第六節

ナオは走っていた。

船楼内の機関調整室の横から、通信室を裏に抜けて貨物船の裏甲板上へ至った場所、そこでは、特務機関と宮坂等の部下たちによる、銃撃戦が演じられている中、ナオは、その銃弾の飛びかう合間を巧みに擦り抜けて、今現在その船着き場に接岸された舷側のタラップから辺りを見渡し、宮坂等が、一体、何処へ逃げたのかを確認するために首をめぐらしていた。

すると、丁度そこから貨物船の下、薄暗い夜の闇が押し包む船着き場の陸地をのぞむと、そこには、つい先程、船を脱出して下船したばかりの宮坂等やウォンの姿がかいま見える。

居た！

「宮坂、待ちなさい！！」

だからその時、ナオは、宮坂等を発見すると叫んでいた。

そして、接岸されたばかりのタラップの最上部から、遮二無二、手持ちの拳銃を構えると、威嚇の為に発砲する。

バーン、バーン・・・

するとその銃弾は、遠く船着き場にいる宮坂等の足元のアスファルトをえぐり、宵闇のなか四散すると、火花を散らして地面に吸い込まれるように消えていく。

「チッ！」

だが、そのナオの威嚇発砲は、彼ら、宮坂等を足止めするには不十分な遠距離射撃であったため、彼らを焦らせただけで引き止めることは出来なかった。

しかし・・・

「宮坂さん、特務機関のあの女が追ってきます。ここは一先ず、コンテナ置き場の中に逃げ込みましょう。奴に、追い付かれると厄介ですからね・・・」

そう彼らは、特務機関、つまりナオの追撃を恐れると、船着き場の狭路を抜け、そのまま五十メートル先にあるコンテナ置き場まで走り、その物混みの中に姿をかくして逃げ込んだのである。

「待ちなさい、宮坂！ このままそう簡単に、逃がしはしないわよ！！」

だから、その直後ナオは、舷側のタラップを速攻で駆け降りながら、船着き場まで疾走すると、逃げた宮坂等を追って奮走し、彼らと呼ばい止める為また叫んでいた。

(このまま、逃がすものですか……)

そしてナオは、心の中で独語しつつ、船着き場の狭路を一路コンテナ置き場の眼前まで奮走すると、その山と積まれたコンテナ置き場の入り口に立ち、逃げた宮坂等の姿を捜してその奥を覗き込んでいた。

しかし、彼らは、何故、こんなところに逃げ込んだのであろうか？

宮坂等は、貨物船を下船すると、あらかじめ逃走のルートを探索していたかどうかは判らないが、迷わず港のコンテナが累積してあるこの場所へととりもなおさずひた走っていた。

品川埠頭は、広い港、十三年前の未曾有の大震災で、その様相は昔と様変わりしているとはいえ、港である以上、無数の倉庫が立ち並びその要所要所には荷材の上げ下ろしを待つコンテナが、山のように置かれているのは何ら変わりはない。

しかし、宮坂等は、いま目の前にある、そのコンテナ置き場の中に逃げ込んだ。

それは、船を下船して陸へ逃げたはいいが、他に隠れる場所もなくそこを選んで姿をくまます心算なのかもしれないが、ナオにしてみれば、彼らを追う立場として厄介な状況に直面してしまったといっても言いすぎではなかった。

何故なら、コンテナ置き場内は、一種の深い迷路のような場所だからだ。

重い鉄製の箱が、何重にも積み重ねられ、港の広範囲にわたって置かれ、コンテナとコンテナの間は密集し碁盤の目のように規則正しく整列させられてある。

だが、いったん中に入ると、そそり立つコンテナの壁に阻まれて、人が通れるスペースはあるにしても、入り組んだその通路は幾重にも絡み合い複雑な様相を見せる。

その為、中に隠れてしまえば、なかなか彼らを捜し出すことは困難だ。

見通しの利かないその中は、身を隠す場所は豊富で、まさしく追跡をまくには絶好の場所だった。

だからナオは、そのコンテナ置き場の前まで辿り着くと、そこで一度足を止め、次にはどうしたものかと一時考え込んでしまっていた。

宮坂等は、確かに、このコンテナ置き場のなかに逃げ込んだ。

だが、彼らを追跡するには、ナオ一人では無理がある。

そうなると、ここは、佐渡課長や関谷莞爾等の援軍を待つかと、一瞬そんなことを考える。

多人数で彼らを追えば、迷路のようなコンテナ置き場に逃げ込んだとはいえ、追い詰めて身柄を拘束することは可能であろう。

しかしそこで躊躇する。

何故なら、このまま佐渡課長たちを待っている隙に、宮坂等がコンテナ置き場を抜けて何処へともなく逃走してしまえば後の祭りだ。

今すぐ、課長等、他の隊員がここへ駆け付けてくる気配はない。

そうなると、ここはたとえ一人でも、このコンテナ置き場内に入って追跡を試みるべきだろう。

そう思うと、ナオは、時早ければ尚更いいと感じ、意を決してコンテナ置き場内に足を踏み入れようと体を動かしかける。

するとそこで、突然に呼び止められていた。

「ちょっと待ってナオ！ 私を置いていかないでよ！」

その声は、甲高い響きを呈した女性の声であった。

ナオは、それに驚き、踵を返して後を振り向く、

するとそこには、息をハアハアと大きく呼吸しながら、膝に手をあてて立っている、二階堂ゆかりの姿があったので、ナオは、そのことに意外性を感じて不思議そうな眼差しを彼女に向ける。

そして、彼女に駆け寄ると、疑問気にこう問いただすのであった。

「ゆかり、どうしてここへ来たの？ あなたが課長を差し置いて、駆け付けてくるなんてめずらしいわね。でも、課長はどうしたのよ、まだ、船の上で、男たちとやりあっている訳じゃないでしょうね？」

そのナオの言葉を受けると、ゆかりは、まだ荒い息を吐きながらも、一拍おいてナオに真剣な眼差しを向ける。そして、「ちょっと待って」といい、呼吸を整えると、唾を飲み込むようにしてこう言うのであった。

「それなんだけどね、ナオ、課長たちは、まだ、貨物船の裏甲板で宮坂の部下たちの銃撃を受けて足止めを食らっているわ。だから、ここへは、直ぐに駆け付けて来ないわよ。私は、あなたが走りだした後、すぐ、そのあとを追いかけていたから今ここへ来られたけど、課長たちは、駄目ね。でも宮坂等は、このコンテナ置き場のなかに逃げ込んだんでしょ？ そうとわかれば、早くこの中に入って、奴らを追跡しましょう。ここで愚図愚図しては、その隙に、遠くへ逃げられてしまうかもしれないからね・・・」

すると、ゆかりは、ナオより遅くここへ来たくせに、彼女の服の袖を引っ張って催促すると、コンテナ置き場の中へ足を踏み入れようとして、右手に銃を構え追跡の姿勢を見せていた。

だからナオは、その勢いにつられ、ウンと頷くと、それから二人は二手に分かれてコンテナ置き場の中を、奥へ奥へと進んで行ったのである。

第十章 コンテナ置き場での死闘！？

第一節

そのコンテナ置き場は、中に入ってみると、やはり、入り組んだ迷宮のような様相を呈していた。長さ十二メートル、高さ三メートルもあるコンテナが、幾重にも山積みになされ、上を向くと、漆黒の闇の夜空さえ遮る壁のような威圧感をそこに与えていた。

月は朧気にでている、しかし、その淡い白絹のような散光は、コンテナの合間に走る無数の通路には届かず、そこに暗い影を落としているのである。

だが、今、その中を、ナオは先ほどから、霧中の玉泉を捜すがごとく、奔走し、宮坂等の行方を追ってひた走っていた。

奴らは、一体、どこに居るのだろうか？

その広いコンテナ置き場は、ナオの追跡の行く手を巧みに阻んでいる。

その為、宮坂等を捜して身柄を拘束するには、非常に困難な境地に身を躍らせてしまったのではないかとそんなことが頭をもたげてくる。

しかし、このまま彼らを、見す見すここで逃すことも出来るはずはない。

何故なら、彼らは、法を犯した狡猾な犯罪者である。

だから、そうである以上、いくら宮坂等がこのコンテナ置き場に身をひそめて逃げ出す算段をこうしようが、その奥の手を遮って必ず彼らを拘束し逮捕する手立てを実行に移さなければならなかった。

今は夜である。

その夜中には、人間にとって、不都合な要因が付きまとうことになるだろう。

ナオには、今、コンテナ置き場の合間にいる以上、その視界は猫科の動物である以外、全くの常闇に身を託しているような錯覚さえ受けていた。

それはつまり、眼前の先、五メートル以外の場所は、黒の幕がかかったごとく見えな
いのだ。

だから、その中で、逃げた宮坂等を追跡し、その気配を感じるのは、針の穴に毫毛なる糸を通すぐらい困難な状況を与えられているといってもいい。

そうなると、先ほどここへ逃げた宮坂等を追い詰めて、その身柄を拘束するのは、彼女にとってとても困難な状況ではないのかと思われた。

しかし、喩えそうだとしても、それを諦めてしまえば、すべての願いは水泡に帰すことになるので、それは、どうしても彼女にとって受け入れがたい正直な事実であった。

だが、そんなことを思いつつ、ナオが宮坂等の後を追いつつ、コンテナ置き場内を奔走していると、そこで、幸運にも、彼らの所在を示す手掛かりとなる事態が発生していたのであった。

それは、ナオが丁度、目の前のコンテナの角を曲がり、一際、狭い通路の末端に到達したときのことである。

そこは、相変わらず薄闇が支配し、暗がりのなかに埋没していたわけだが、そこからコンテナを二つほど挟んだところで、何ものかの声が漆黒の夜空に木霊したのであった。「止まちなさい、止まらないと撃つわよ！！」

その声は甲高い女性の声で、よく聴けば、聞き覚えのある声———そう、同僚の二階堂ゆかりの声であった。

新来の春風がそよぐようなその声質は、ナオにとって、聴き違えるそれではなかった。

だから、ナオはその時、ゆかりが逃げた宮坂等の内の誰かを発見して、呼び止めたのだと直覚的に悟っていた。

その声のニュアンスからして、それに察しが付いたからでもある。

しかし・・・

その直後、更に、突発的な事態が起こったのである。

バーン、バーン

それは、耳朶に突きささるような、銃声の音であった。

その音は、冬の乾いた空気の中に、拡散するかのように響き渡ると、静寂な夜の帳を打ち破るがごとくナオの耳にまで届いていた。

そして、あっという間に掻き消えると、辺りは、水をうったような静けさにつつまれて、また静寂を取り戻していた。

(なに、何が起こったのかしら?)

だがその時、ナオは、その銃撃音が、一体、何を意味するものであるのかと、疑問を感じられずにはいられなかった。

確かにさっき、近くから、ゆかりの制止の声が聞こえてきていた。

しかし、その直後、銃撃があったということは?

まさか! ゆかりが撃たれたのではないのか?

ふと、そんな予感が頭をよぎる。

もし、そうだとすれば、ゆかりの身が危険であると、そう判断するしかなかった。

だからナオは、その時、脇目もふらず、ゆかりの姿を捜して、コンテナとコンテナの間を擦り抜けて脱兎のごとく走りだしていた。

ナオの、嫌な予感は、意外と的中するからだ。

「きゃあああああ！！」

だがその時、またどこかで、夜の闇に奇声が発生していた。

それは女の悲鳴、確かにゆかりのものであった。

「ゆかり！！」

だから、その時ナオは、更に、ゆかりは危機的状況に追い込まれたのではないかと直覚し、その声の発生源へと、急をようするがごとく駆け付けていた。

すると、丁度、今いる場所から、目の前のコンテナの角を曲がったところで、突然に、地面へと倒れているゆかりの姿を発見することになるのである。

彼女は、コンテナの脇に位置する場所で、仰向けになって倒れていた。

そして、ナオが見たかぎりでは、苦鳴を洩らしながら頭を押さえている。

だから、それを見たとき、ナオは、まさかゆかりは頭を撃たれたのではないのかと錯覚し、とりもなおさず、彼女のもとへ即座に駆け付けて、その体を抱き起こし慌てた様にして顔を覗き込んでいた。

すると、

「あ痛タタタ、石ふんづけて、転んじゃった・・・」

と、ゆかりが、ナオに支えられて後頭部を擦りながらも、ポロリとそんな一言を洩らしたので、その時ナオは「はああ???'という顔をして、惚けてしまっていた。

そして、改めて、ゆかりの顔を覗き込むと、彼女は、別に何事もなく平然とした顔をしていたので、ナオはそれに疑問を感じてこう矢継ぎ早に問いただしていた。

「ゆかり！　ゆかり！　あなた、頭、撃たれたんじゃないの？　さっき悲鳴あげていたでしょ?!　だから私、ここに急いで駆け付けてきたのよ。でも、とにかく大丈夫？

今、救急車呼んであげるから待って、早く傷の手当てしなければ死んじゃうものね・・・」

すると、ゆかりは、ナオのその真剣な顔を見て、次にはどうしようもなく可笑しくなったらしく、「ぶぶぶぶ」と、口を押さえて笑いだしてしまっていた。

「な？　何が可笑しいのよゆかり。あなた、撃たれて倒れたんでしょ？　それなのに、なんで笑ってられるのよ。まさか撃たれて、頭うって、どこか気が可笑しくなったわけじゃないでしょうね？　ねえゆかり、なんとか言いなさいよ、撃たれたんでしょ!？」

すると、ゆかりは更に「クククク」と、腹を押さえて、笑いくすかのようにナオに対して意味ありげな視線を送ると、

「あのねナオ、私、撃たれてなんかいないわよ。よく見てご覧なさい、どこにも傷はないでしょ？　ただ、おっきな石ふんづけて、転んだだけなのよ。だから、そう真顔で心配しないで、あなたが真剣な顔していると、可笑しくて笑いが止まらないわ」と、言うので、ナオはその時、「ええ!？」と、やはり惚けた顔をして、少し頭が混乱したかのように戸惑うのであった。

だが、その直後、ようやくナオは、ゆかりの謂わんとしている事が判ったらしく、今度は、血相かえて怒りだすと、途端に、彼女を抱きかかえていた手を放して、ゆかりをアスファルトの上に突き放してしまう。

ゴッ!

すると瞬間、ゆかりはまた仰向けに倒れ、地面のアスファルトにしたたか頭をぶつけて悶絶する。

そして、しばらくして起き上がると、ナオに対し抗議の声をあげるのである。

「いたッ！　痛いじゃないナオ。何も、私が自分でずけ転んだって言うことが判ったからって、そう邪険にすることはないじゃない！　それは、あなたが、私のこと心配してくれて笑ったことは悪かったと思うけど、何も怒ることはないでしょ！　私はね、さっき、磯貝って言う男を見付けて、追いかけてしようとしたら足元が暗くて石が落ちていることなんてわからなかったのよ。だから、そう血相かえて怒らないでよね。一応、私は、頭うって、とっても痛かったんだから・・・」

だが、ナオは、そのゆかりの言葉も、ろくに聞かず、ただ「あっそう」と、冷たく、しかも素っ気なくそう答えただけで、その後、ポンポンと怒ってそっぽを向いてしまっていた。

だからそれを見ると、さすがのゆかりも、まずいと思ったらしく「御免なさい・・・」と極力頭を下げて謝ると、その場に立ち上がってお尻についていた砂埃を誤魔化し半分には払ってみせていた。

そして、もう一度ナオに謝ると、逃げていった磯貝を彼女と二人して追いかけるのである。

*

その時、磯貝は逃げていた。

もちろん、コンテナとコンテナが密集した、その合間を縫ってである。

彼は、先ほどゆかりに発見されると、威嚇の為の発砲をして逃走していたが、どうやら、ゆかり達は、彼の後を追いつけて近くまで来ている様子だった。

その証拠に足音が聞こえるのであった。

女の足音、それは聞き覚えがあるわけではないが、確かに、あの特務機関の赤越と黒川のものであると思えたのである。

だから磯貝はその時、このままでは捕まると思って、必死になってコンテナの合間を奔走していた。

何故なら、相手は銃を持っていると判っていたので、見つかったら手出しが出来ないと思ったからだ。

さっき磯貝は、黒川という女特務機関の隊員に、二発の銃弾を発砲したことで、もう、その手持ちの銃には残弾は残されていなかった。

その為、見つければ万事休すである。

だから彼は、追跡を極力恐れると、コンテナとコンテナの間を走り抜け、逃げることに全神経を集中していた。

だが、彼が、そうして逃げ、あるコンテナの一角に、さしかかった時、そこで磯貝はこっちに逃げてきたことを後悔していた。

何故なら、闇雲に、コンテナ置き場内を走ってきたので、自分が、いま海に面した岸壁の突端の方へ追い込まれてしまった事を悟ったからだ。

いま磯貝が居る、その辺り一帯は、丁度、コンテナが海の方にまでせり出して置かれている奥まった場所で、その先には夜の闇に蠢くような波寄せる海面しかない。

その為、このままだと、自分は逃げ場を失い、追い込まれるしかない状況に直面してしまったと言ってもいい。

だが、今更、引き返しても、どうすることも出来ない。

引き返せば、必ず女たちに見つかるからである。

しかし、そんなことを考えつつ、磯貝が立ち止まったときだった。

ふと、その時、小声だが、囁く様にして男の声がかかったのである。

それは聞き覚えのある、凶太い男の声であったので、その時、磯貝は警戒しながらもその声のする方へと踵を返していた。

すると、丁度、コンテナの陰になっている、ある暗がりから、一人の男が顔を見せたのである。

「磯貝、磯貝、こっちだ、早くこっちへ来い！」

磯貝がその声につられて、よく見ると、それは、自分のよく見知った男、鎌田隆治であったので、その時、磯貝は警戒していた胸をホッと撫で下ろし安堵していた。

そして鎌田が、先ほどから頻りに手招きして、自分を呼び込んでいるので、怪訝に思い彼の許へ近付くと、鎌田は磯貝の腕を引き寄せてこう囁くのであった。

「磯貝、おまえも失敗ったな。さっき、別れて、別々に逃げたが、結局おれたちもここに逃げてきて追い込まれちゃった。だから、ここは、あの特務機関の女たちを待ち伏せして、ここで振じ上げてしまおうぜ、そうしないと万事休すだ。だから、お前はそっちの陰に隠れて待機していてくれ、おれは、こっちで奴らが来たら飛び掛かるから。でもいいな、決して抜かるなよ、相手は、一応、女といっても特務機関の隊員なんだからな……」

すると磯貝は、

「判った、それじゃ、ここで奴らをのしてやろうぜ。でも鎌田、宮坂さんはどうしたんだ、一緒じゃないのか？」

というので、鎌田はそれを察すると、親指を立てて後方を指し示し、コンテナの陰に隠れて、こっちを覗き込んでいた宮坂とウォンの所在を教えていたのであった。

*

ナオとゆかりは、いま、先ほど逃げた磯貝の後を追って、コンテナ置き場を奔走していた。

入り組んだ、コンテナとコンテナの間を擦り抜け、その姿を探して左右に首を巡らす。だが、なかなか、その男の所在は突き止められなかった。

今は夜だ、辺りは当然薄暗く、月明かりがあるとはいえ、コンテナの壁がそそり立ち、視界は五メートル先になるとまったくの常闇であった。

しかし、だからといって、このまま彼らを見逃す訳にはいかなかった。

何せ、彼らは、法を犯した犯罪者なのだ。

それに、自分たちが、特務機関の隊員である以上、任務は放棄出来ない。

一応、ナオたちにも、特務機関の隊員としての、使命を貫徹しようという強い気概があったからでもある。

しかし、それは別として、先程の磯貝は、一体、何処へ逃げたのだろう。

ゆかりが、見たかぎりでは、コンテナ置き場を南の方に逃走していったはずだ。

だが、先程から探してみても、なかなかその姿は見つからなかった。

まさか、コンテナ置き場を大きく迂回して、別の方角に逃げたのではあるまいか？

ふと、そんな疑問が、あたまをよぎる。

しかし、ゆかりが言うには、ナオが彼女のもとに駆け付けて、そのあとすぐ彼の後を追いつけたのでそれはないだろうということだった。

では何故、見つからないのか？

磯貝は、確かに、こっちへと逃げたということだ。

だがその姿が、いくら捜しても、見つからないということは、二人が疑問に感じて

無理はなかった。

だからナオは、そんな状況の中、早くも焦れて、隣を走るゆかりに對しこう言って話し掛ける。

「ねえ、でもゆかり、本当に磯貝はこっちの方に逃げたの？ なにかの間違いじゃないでしょうね？」

すると、ゆかりは真面目な顔をして、
「そうよ、ここに逃げたのよ！」

と、ナオの顔を見てマジマジと言うので、
ナオは『本当なのかしら？』と、内心、ゆかりの言葉を、疑うかのように訝ってみせていた。

しかし、ゆかりが嘘を言うわけではないので、ナオは、仕方なく磯貝の姿を捜して奔走してみる。

だが、相手は、巧みに隠れて逃げている為か、やはり、その姿はなかなか見つかることはなかった。

ナオは言う。
「ねえ、やっぱり駄目じゃない、本当に、ここに逃げたんでしょうね？ 暗くて、逃げた方向、見間違えたんじゃないの？」

しかしゆかりは、
「だから、こっちだって言ってるでしょ。そう短気を起こさないで、いいからもっと真剣に捜しなさいよ！」

と逆に怒りだすので、ナオは、ゆかりがそこまで言うのなら仕方がないと思い、その後、渋々ながらも磯貝の姿を捜してコンテナ置き場内を走り回ってみていた。

だが、ナオの疑問は肥大する。
ゆかりの言い分によると、先ほど磯貝は、彼女に向けて二発の銃弾を発砲すると、そのまま脇目もふらず逃げていったという。

そして、今、二人が捜している方向へ、姿を隠してしまったということだが、でも、ナオとゆかりの二人が血眼になって捜してみても、なかなかその姿は見つからなかった。

そうなる、先ほど疑問に思ったように、彼、磯貝は、コンテナ置き場内を迂回して別の方へ逃げたのではないかとやはり疑いたくなってくる。

もしそうだとすれば、こっちを捜しても意味はないのではないかと・・・
だが、いくら捜しても、その姿が見つからないと苛立ちは募る。

ナオは、ゆかりと違って短気なので、それは尚更だ。
速攻や突入が、専売特許のナオにしてみれば、このような追跡は、早く結果がでないと言われてられない気分なのだろう。

まあ、それはそれでナオの性格からして、当然の事であるのだが、でも、だからといってこのまま見つからなければ、やはりそれはそれで重要な問題でもあった。

何故なら、それは宮坂を始めとし、その彼に関係しているすべての男たちには、警視庁の方より、正式な逮捕要請が出ているからだ。

これは、先ほど佐渡課長に会った際、知らされた情報なのだが、警視庁は、既に宮坂の余罪に関する証拠を確固たるものとして掴んでいるということだった。

ナオとゆかりが、数日前から宮坂等に監禁されていた間、警視庁と特務機関は緊急にして銀座にあるブルメントという、偽ブランド店を立ち入り検査し摘発していたのだ。

そして、そこで働いていた従業員を逮捕、店で陳列されていたブランド商品を押収して、鑑定し、それが確かに偽物であるという事がはっきりしていた。

また、その後、逮捕した従業員に取り調べを行うと、その店の経営者は確かに宮坂こと勅使河原洋二であるということが判明、その為、警視庁は、その鑑定して偽物とされたブランド商品を証拠とし、偽名を使っている宮坂に対する逮捕状を裁判所から取ったのだ。

そんな経緯があるから、勿論その宮坂に追従して、部下となっている黒峰会のメンバーにも、緊急逮捕要請が出ている。

それは、ウォンという男は別として、鎌田や磯貝にも同じ事が言えたのだ。

だから、そうである以上、いま捜している磯貝一樹を、このまま逃がすわけにはいかず、やはり、宮坂同様、その身柄を拘束して逮捕しなければならなかった。

この際だから、必ず引っ掴まえて、捕縛するしかないのである。

.....

そんな訳で、今ナオとゆかりは、コンテナ置き場を更に南に向かって磯貝を捜している。

だが相変わらず、磯貝の姿は見つからなかった。

しかし、こうなるとナオには、逆に、なんととしてでも見付けだして、とっ捕まえてやるという気概が芽生えてくる。

そのような心情になるのは、彼女ならではの事だろう。

何せ、ナオは、逆境に強い女だ。状況が困難であれば、それを物ともせず突き進んでいくという性質をもつ。だから、磯貝が見つからなければ、尚更、遮二無二になるのは必然だった。

ナオの性格上、彼を逃がすことは、絶対許せないことだからである。

「ねえゆかり、ところで私たちはやっぱり別々に行動して、奴を追ったほうがいいんじゃないかしら？ このまま二人で一緒になって行動しても、なかなか捕まえられないわ。それに、課長たちの援軍も未だ来ないことだし、今、私たちに出来ることは二人でまた手分けして捜し出すことよ。そうすれば、なんとか奴を追い詰めることが出来るんじゃない。この際だから、そうしましょう。いつまでもこれで時間を潰すわけにもいかないから・・・」

「た、確かにそうね。これだけ捜しても、見つからないとなると、宮坂や鎌田達も、遠くへ逃げてしまう可能性が高いから、ここはもう一度、二手に分かれて捜しましょうか？

これ以上、二人で捜しても意味はないし、確かにここで時間を潰すのも得策じゃないものね」

「それじゃ、ゆかり次の角を曲がったら、二手に分かれて磯貝を追い込みましょう。あなたは、このまま右の方を捜して、私は左を迂回してみる。でも、見付けたらすぐ合図するのよ、その時は、すぐ駆け付けてひっ捕らえてやるから・・・」

ナオとゆかりの二人は、そう話し合うと、目の前のコンテナを右へ曲がり、そこから二手に分かれようとして丁度、大、小、型の異なるコンテナが置かれている、より複雑な一角に足を踏み入れ辺りを見回していた。

そこは複雑に入り組んでいる割には、通路がひろく、少し開けた感じがするところだ。

そこで、ナオとゆかりは一度立ち止まり、手分けする方向を再確認する。

そして、ついさっき話し合ったように、二人は、それぞれの向かうべき方向へ踵を返し追跡を開始しようと足を踏み出しかけていた。

だが、意外にも、そこでナオとゆかりの二人には、予期していなかった、突発的、事態に遭遇することになるとは、その時の二人には、当然、予測することが出来なかった。それはまさに、不意打ち的な突然の急襲であったからだ。

第二節

その事態に、二人が直面したのは、ナオとゆかりが磯貝の姿を捜して、手分けしてそれぞれの方向へ足を踏み出した時だった。

ザッ・・・

その時、突然に、コンテナの暗がりから、二つの影が躍り出たのである。

その影の一つは、大柄な男の影、そしてもう一つは、細身のひょろりとした体躯の男の影、そう、あの宮坂の部下である鎌田隆治と磯貝である。

その二人が、入り組んだコンテナの陰から、突然、躍り出ると、ナオとゆかりの虚をついて、不意打ち的に襲いかかってきたのである。

・・・・・・・・

最初に、殴り掛かってきたのは、鎌田だった。

彼は、突然、目の前に現れた男に面食らって、今、惚けた顔をしているゆかりを第一の標的に定めると、その筋骨逞しい右の剛腕で彼女に一撃をお見舞いしていたのである。

ブン！

それは強烈な横殴りの一撃、

「キャッ！」

鎌田は、容赦なく、ゆかりの体にその剛腕をヒットさせると、彼女を後方へと吹き飛ばし、そのまま背中からコンテナの壁へと激突させる。

「ぐぐっ・・・」

ゆかりは、その一撃を受けると、したたか背中と後頭部をコンテナの鉄壁に打ち付けて、鈍いうめきを洩らし苦悶する。

しかし、ゆかりは、鎌田に殴られたとき、咄嗟に両腕を胸の前に組んでガードしていたので、強烈な一撃の直撃は避けていたが、それでも、体は紙人形のように吹っ飛び、コ

ンテナに激突すると、一瞬、意識を朦朧とさせ夢遊病者のようにふらつくことは避けられなかった。

「ゆかり！！ 大丈夫ゆかり?!」

するとそこへ、その一部始終を見ていたナオが、彼女のことを心配して声をかける。

だがその時、突如、ナオの体数センチのところを、何か堅い棒のようなものがブオンという、風きり音と共に掠めていたので、ナオはその時、やはり咄嗟的に横へと身を反らし、その一撃を避けていた。

「チッ！」

しかし、軽い舌打ちと共に続け様、今度は、上方からナオにその何か棒のようなものの攻撃が襲いかかっていたので、ナオは今度は、まるでサーカスの軽業師の様に、その場で後転をすると、ぎりぎりのところでその攻撃を回避する。

そして彼女は、後転したあと、正面に向き直り躍り掛かってきた相手を見据える。

すると、そこには何を隠そう、長さ一点五メートルもの鉄パイプを持って、にやけ面をたたえた磯貝が得意げに立っていたので、その時ナオは、カッときて憤怒の形相をその顔に浮かべ、その磯貝に対し、突然、非難の言葉をぶつけていたのだった。

「あなた磯貝じゃない！ こんなところで待ち伏せして、急襲を仕掛けてくるなんて卑怯ね、男の風上にもおけないわ。あんたね、一応、男なら正々堂々とわたり合いなさいよ。しかも、そんな物騒な凶器まで持ち出して、このナオ様と立ち合おうなんて十年早いわ。そっちがその心算でも、こっちは容赦しないんだから、覚悟しなさい。絶対、返り討ちにして捕まえてやるんだから・・・」

すると、

「へへっ、よく言うぜこのアマ。テメーにはこっちとしても、痛て一借りがあるんだ。不本意だったが、監禁室でテメー等にのされたことは忘れちゃいねーんだよ。だから、この場で、その借りを返させてもらうぜ、そうしねーと、腹の虫がおさまらねーからな」

磯貝は、ナオを見据えながらも、手持ちの鉄パイプを振りかざすと、ペッとアスファルトに唾を吐いて啖呵を切ってみせる。

そして、即座に身構えると、中腰姿勢から、ナオを覗くように鉄パイプを玩んでくる。

しかし、それを聞いたナオは、磯貝のその言葉にもなんら挑発された様子もなく、平然として身構えると、そんな磯貝の顔を憐れむかのように、至極、軽蔑した眼差しを向けてその言葉に応じるのであった。

「あなたね、もともと変な欲情を起こして、私達に手出ししようとしたのはそっちでしょ。それなのに、私達を恨むなんてお門違いよ。恨むのなら、自分の愚かさを恨みなさい。でないと、この銃であなたの体を蜂の巣にしてやるから、覚悟しなさいよね。こっちだって、あなた達には頭にきているのよ！ ゆかりが、嫌らしいことされた事は忘れてはいないんですからね！」

ナオはそう言うと、右手を前に突きだして、手持ちの銃で磯貝に狙いを澄まそうとする。

だが、そこで「あれ？」とナオが訝しがる。

なぜなら、突き出したはずの右手には、銃が握られていなかったからだ。

そこでナオは、先程のことを思い出す。

そう、ナオは、先程、磯貝に襲われて咄嗟的に後転したときに、手に持っていたはずの銃を不用意に落としてしまっていたのである。

だから、ナオが右手を磯貝に突きだしても、それは、無意味な威勢を演じている、情けない女の愚挙の様にしか思われなかった。

優位に立てるはずの、道具を、見す見す落としてしまうとはなんて馬鹿なのだろう。

ナオはその時、自分の失態を、自虐するしか出来なかった。

「ははっ、テメーは馬鹿か？ 銃なしで、俺とどうわたり合おうって言うんだ。俺は、こう見えても格闘には自信があるんだ。だから、特務機関の女ごとき、あの世におくのは朝飯前なんだよ。だから、格好付けずに、俺の前に跪いて命乞いでもしな。そうすれば、許してやらない訳でもないぜ。それに、あとで一発やらしてくれれば、このまま逃がしてやる。だから、意気がるのはよすことだ、その綺麗な体に傷つけられたくなかったら、素直に尻尾まいて逃げるんだな・・・」

「なんですって、この髭面色餓鬼男！ あなたなんかに、お尻振るぐらいなら、肥だめの糞尿を食ったほうがましよ。でなけりゃ、ここであなたを、ギッタンギッタンのポッコポコにしてやるから覚悟しなさい。頼まれたって、あなたなんかに身売りすることはしないわよ！」

「何、この腐れアマ！ テメーの頭、この鉄パイプでかち割ってやる。覚悟しろよ、ズベタ！」

そんなやり取りが交わされると、二人は、敵愾心を剥き出しにして、お互い身構え対決の姿勢を示すのである。

・・・・・・・・

だがその頃、ゆかりは悶絶していた。

首が・・・首が、軋むのである。

武骨な男の手が、咽を締め付ける感覚———そう、ゆかりは、いま鎌田にその首を締めあげられ、とても不本意な状況に陥っていたのだ。

ゆかりが、その状況に陥ったのは、鎌田に剛腕の一撃を喰らってすぐの事だ。

コンテナに、背中を強打し、彼女は息を詰まらせたあと、そこへ鎌田がすかさず手を延ばし、ふらついていたゆかりの体をもものともせず空中へと突き上げたのだ。

ゆかりの首を、両手で締めあげてである。

それは丁度、喉輪釣りの状態といえば、いいかもしれない。

鎌田は、ゆかりの咽を両手で締めあげると、その剛腕でそのまま彼女を軽々と持ち上げ、自分の顔の位置より、より高い上方へ突き上げそのままゆかりの細い首をこれでもかというような馬鹿力で締めあげる。

だから、それには流石にゆかりも手がだせず、ただ締め付けられる首元を手で掻き毟りながらも、空中に浮いたままの足をじたばたと前後に泳がせるしか他に方法がなかった。

それだけ、苦しい状況に、陥っていたからである。

「ぐぐうううう・・・苦ししいい・・・放してえ・・・」

ゆかりが苦悶の声を洩らす。

だが鎌田は、そんなゆかりを見てニヤリと嘲笑うと、苦しんでいる女の姿を楽しむかのように、更にその手に渾身の力を漲らせ、締めあげる手をより強固にする。

だからゆかりの顔は、首の上から見る見る青ざめて、次第に鬱血すると、呼吸すること自体も困難になり、その綺麗な顔を苦悶に歪めてもはや悶絶すること以外他になにも出来なくなっていた。

まさに、万事休すの状態なのである。

そんなゆかりに鎌田は言う。

「ははは、どうだ苦しーだろ。俺はな、特務機関ていう国の犬みて一な組織に飼われている奴は気に入らなくてしょうがねーんだよ。特に、女となるとなおさらだ。女はな、家で洗濯でもして、飯作っていればいいんだ。それを、のこのこと俺達を追い回しやがって、目障りでたまんねーぜ。だからお前は、ここで潔く死んじまいな。そうすれば、もう苦しい思いをしなくて済む。これはある意味おれのお情けだ、早く死んじまった方が楽でいいからな！」

鎌田はそう言うと、またあざ笑い、ゆかりに対し冷笑を浴びせ掛けていた。

そして、もう一度その手に渾身の力を漲らせると、容赦なくゆかりの首を締めあげる。だがゆかりは、その剛腕に対し、頻りに暴れて抵抗を試みる。

しかしそれも虚しく、徒労に終わるしかなかった。

第三節

風が吹く。

冬の夜空に吹き抜けるその風は、人の体には冷たい。

一月初旬のその気候では、染みいる夜の星空のもとと謂えど、海から吹き付ける湿った空気の流れを阻むことは出来ない。

人の吐く息は白く、骨まで凍結してしまうかの様な、その寒さは、立っているだけでも酷な零下を下回る気温だった。

そんな中で、防寒対策のまるでない、薄手のセーターとジーンズだけを纏っているナオには、その夜の夜風はこたえるはずである。

何故なら、彼女は、そのセーターとジーンズだけで、気のきいた厚手のオーバーなど身につけてはいなかったからだ。

そう、ゆかりにしても同じなのだが、今ナオが着ている服は、彼女が一番最初に監禁されていた、第三倉庫の二階の部屋で、鎌田や磯貝に嫌らしい行為を迫られたあと宮坂の部下によって差し入れられた服だった。

ゆかりは、ピンク色のセーターとジーンズ、そしてナオは、ベージュのセーターとやはりジーンズ、その服を差し入れられて、二人は、やっとまともな服を着られることになった訳だが、はっきり言ってそのセーターは秋物の薄手のものだ。

編み目が荒く、九月下旬から十月にかけては、快適に着られるものであったが、今は新年明けて一月初旬、あきらかに時季はずれの代物とっていい。

だから、たとえ服を着ていても、その機能性はまいち。

そんなことで、普通この寒さなら、凍えて身震いするのも当然なはずである。

だが、そんな境遇にありつつも、今のナオにとって、その寒さは大して気にならないものになっていた。

それは、今、ナオの目の前に、あの色鬼男、磯貝が鉄パイプを持って構えているからだ。

彼は、先程からナオを小馬鹿にするような目付きで、相対峙すると、その顔に嫌らしい好色的な笑みを浮かべて得意げに笑っている。

だからナオは、寒さとは別に、違う意味でいま体を堅く硬直させていた。

別に磯貝など恐くはなかったが、彼が手にしている鉄パイプに、危険性を感じていたからだ。

「へへ、どうした特務機関のねーちゃんよ、俺を逮捕するんじゃないのか？ 捕まえてみるよ。それとも怖じ気づいたのか？」

磯貝は言う。

彼は、右手に持つ鉄パイプを、左の手のひらでポンポンと叩くように玩ぶと、その口元をつりあげてニッと残忍な笑みをその顔に浮かべる。

だが、それは明らかに、ナオを挑発した物言いだった。

おそらく彼は、ナオを挑発して、相手の出方を覗いているのだろう、彼、磯貝は、一応ナオのことを警戒しているのだ。

相手は素手とはいえ、やはり特務機関に所属する人間だ。格闘に対する訓練は、受けてきているはず。だから磯貝は、ナオと対峙しながら、薄ら笑いを浮かべても不用意には討ち掛ってこない。

どうもナオの推測から察するに、彼は、少なからずナオを恐れている様子が感じられていた。

・・・・・・・・

「さあ、どうしたねーちゃんよ。俺と、やるのかやらないのか、はっきりしろよ。折角、ここで一对一の対決ができるんだ、特務機関の女隊員の実力が、どんなものか見てみて一しな。それに俺は、女をいたぶるのが最高の趣味なんだ。だから、ここで俺と対決して、決着をつけようぜ、どっちが勝つか見ものだと思わねーか？」

そう言うと磯貝は、ナオが立つ位置から、約五メートルほどの間合いを置いて待ち構え、鉄パイプを刀のように正面に突きだして、その先端をチラチラと揺らしてきていた。

だが、強気な発言をしている割には、その腰は、少しばかりひけている様な気がする。

だから、ナオはそれを見て「ふっ」と冷笑すると、今いる場所から一歩前へ出て磯貝の前に仁王立ちする。

そして、彼を馬鹿にするように、こう言っていた。

「あなたね、さっきから聞いていると、まるで自分の方が強いと言いたいらしいけど、果たしてそうかしらね？ 今のあなたを見ると、少し怖じ気づいているのはそっちの方じゃないかって気がするけど気のせい？ 口では、強気なこと言えても、実際は腰がひ

けて見えるわよ。そんなんじゃ、私とやりあっても、ものの十秒も保たないわね。男のくせにいい笑い者だわ」

「な？　なんだと！」

すると、その言葉を聞いた磯貝は、血相をかえて怒りだす。

どうやら、ナオの「男のくせに・・・」という言葉が、カンにさわった様子だ。

だから磯貝は、逆にナオに挑発されて、敵愾心剥き出しな顔をその髭面に浮かべると、鉄パイプを大きく振りかざし今にも討ち掛ってきそうな気配を見せていた。

男として、あとにはひけない、そう思ったのかもしれない。

「テメー、よくも言ってくれるじゃねーか。そんな事、言うなら、テメーはもう覚悟は出来ているんだろうな。女のくせに、でかい口たたくと、そのすました顔をボコボコにしてやる。泣いたって、許してやらねーんだからな！　覚悟しろ！！」

そう言うとき磯貝は、何の前触れもなく、突然、右足を踏み出し、ナオに対して躍り掛かってくる。

そして、鉄パイプを頭上から振り下ろすと、ナオの脳天を狙い一撃で相手を粉碎しようとして討ち掛ってきていた。

ブォン・・・ガッ・・・

だが、その磯貝の一撃は、狙いに反してあえなく空をきる。

何故ならナオは、そのすました涼しげな顔で相手の攻撃を見切ると、軽く身を横へと反らし避けていたからだ。

磯貝は、ナオを躍りになってうちのめそうと躍り掛かっていたから、彼女が、その攻撃を避けると、標的を失い鉄パイプで地面を強打——そして、前のめりになってそのままつんのめる。

だからナオは、そんな磯貝の足元を、同じく自分の足で引っ掛けてやるだけでよかった。

それだけで、勢いづいていた磯貝は足元をすくわれ、前のめりになり顔面からドッとアスファルトの上に激突、地を舐める辛酸を味わう。

顔面をアスファルトに強打した磯貝は、その後、地面に突っ伏したまま顔を押しえろと、擦り剥いたおでこで潰れた鼻を掻き毟り苦鳴をあげる。

だが、気丈にも倒れた時、その手にしていた鉄パイプだけは、右手にしっかりと持ち放すことはなかった。

そんなに、大事な物でも、なかった筈だが・・・

「テ・テメー、もう容赦しねー、ぶっ潰してやる！」

磯貝は、地面に倒れたあと、血の滲んだおでこを擦りつつ立ち上がると、今度は踵を返して、恨みがましい目でナオを睨み付ける。

そして、憤慨しているのか、カッと目を仁王のように見開くと、手にしていた鉄パイプを滅多矢鱈に振り回しナオに対してまた討ち掛ってくる。

だからナオは、軽くステップし後方へと退避、磯貝が踏み込んでくる間合いを見切って、横へ、そして後へひらりと躲す。

しかし磯貝は、屈辱を受けたことで、頭に血が上っているのか、その矢鱈な攻撃を止めようとはせず、鉄パイプをブンブン振り回すと、ナオの間近に肉薄し何度も彼女の胸

元すれすれのところを掠めさせていた。

だが・・

「チッ、クソう、逃げるなこのアマ。いい加減、死にやがれ・・」

磯貝は、何度もナオに対し、うちかかっても、巧みに躲かれてしまうので、さすがに焦れて舌打ちする。

だからナオは、そんな磯貝に対し、フンと冷たく嘲笑うと右の中指をたてて挑発していた。

彼女からすれば、磯貝は、盲目的に突進する猪のように見えたのだろう。

そんな奴に、やられはしないと・・・・・・・・

「あなたね、馬鹿？ そんなに、ブンブン振り回したって、当たらないものは当たらないのよ、このブンブン丸！！」

すると磯貝は、やはり頭にきて、今度は、横へと大振りし渾身の一撃をお見舞いする。

しかしその振りは、無理矢理の攻撃であったので、彼はその後バランスを崩すと大きく横へとよろめく。

それを見たナオは、チャンスと思い、その隙をついて、間髪いれずに彼の鳩尾めがけて強烈な蹴りの一撃をお見舞いする。

「うげっ！」

その蹴りは、見事磯貝をとらえ、後方へと吹き飛ばしていた。

「どう？ これで判ったでしょ。あなたじゃ、私の相手にならないわ。闇雲に鉄パイプを振り回したって、持ち主がアホじゃ宝の持ち腐れだわ。この際だから、そんな物騒なもの捨てて、私に降参してしまいなさい。そうすれば、もう惨めな醜態を晒さなくてすむわよ。どうせあなたは弱いんだから・・」

そのナオの物言いは、これ以上やりあっても、意味はないという宣告的な意味が多分に含まれている。たとえ磯貝が、鉄パイプで討ち掛ってきても当たらないのでは意味がない。

まあ、それはナオが、彼の動きを完全に見切って、避けているわけだが、磯貝が頭に血が上って無闇に猛進してくるのにも原因がある。

挑発を受けて、それに怒りを顕わにしているようでは、磯貝に勝ち目はないだろう。

冷静になればまだしも、怒りにまかせて視野が狭くなるのは、戦いのかげひきがよく判っていない素人の挙行だ。

もちろんナオは、それを見越して磯貝を挑発したわけだが、その挑発にのって来るのは、頭の悪い馬鹿かもしくは単純なのだろう。

それを考えると、磯貝など、ナオが手玉にとるのは簡単だったといえる。

ナオの方が、一枚上手なのである、こと戦いに関しては、

・・・・・・・・

しかし、

「ナ、ナオ、助けて苦しい・・」

ナオが、磯貝の鳩尾に蹴りを放って、彼を吹き飛ばすと、その直後、ゆかりのものと覚しき声が彼女の耳に聞こえてきていた。

「ゆかり！？」

それは、助けを求める悲痛な声で、ナオはその声につられて後を振り返る。

するとそこでは、今、ゆかりが鎌田に首を絞められて「ぐぐうう」と唸っている状況が目に見え込んでくる。

だから、それに驚き、ナオが今現在の状況を忘れて、彼女を助けようと注意を奪われたとき、そこで後に殺気を感じたので振り返ろうとする。

ガッ！

だが、そこで唐突に、右肩に何かがぶち当たる。すると、その直後、ナオは弾かれたように横へと横転すると、そのままアスファルトの上に不意にも投げ出されてしまっていた。

しかし何故？

「はははっ、ざまあねえな。俺と戦っているときに、仲間に気をとられるなんて馬鹿だぜ。でもこれで判っただろ、隙を見せればこっちのもんだよ。テメーがいくら強くたって、よそ見をすればこうなるんだ。以後、気をつけることだな、俺はそんなに甘くねーんだよ」

そう、磯貝である。

彼は、ナオが、ゆかりのことに気をとられて、振り返っていると、その隙をついて立ち上がり、ナオの振り向き様その右肩に痛烈な鉄パイプの一撃を殴打していたのである。

だから、それには、さすがのナオも抗しきれず、殴られた勢いで転倒すると、先程、磯貝が顔面からアスファルトに激突したように、彼女も不本意だがそこへ横転することは避けられなかった。

ゆかりに、気をとられたのが失態である。

ナオは地面に倒れると、右肩を押さえて蹲る。

そして、磯貝を見据えると、悔しそうに唇を噛み締めていた。

「へへっ、どうだ痛て一か？」

磯貝が、得意げにナオに対してそう聞いてくる。

だがナオは、それを無視すると、右肩を押さえつつ、その場になんとか立ち上がり顔を歪めて磯貝に相対していた。

「ほへう、大したもんだな、鉄パイプで殴られて悲鳴ひとつあげねーとはな」

それを見ると、磯貝は感嘆の声をあげる。

だが、ナオを、内心では、馬鹿にしているのは見え見えだ。

その証拠に、口元が内なる哄笑の為、つりあがっている。

だからナオは、右肩の痛みをこらえつつも、嫌悪感を漂わせた目付きで、磯貝を睨み付けると数歩うしろに下がって防戦の構えを見せる。

そして気丈にも、無言のまま磯貝を手招きすると、かかってきなさいという合図を送り身構える。

「テメー！」

だから磯貝は、その挑発にのり、また鉄パイプを大振りすると、ナオに一撃をお見舞いしようとうちかかってきた。

しかし、飛んだのである。

ナオが？

いや磯貝がである。

磯貝は、ナオの挑発にのると、彼女をまた一撃しようと横殴りに鉄パイプをふるう。だがナオは、右肩の痛みを堪えながらも、身を屈め、その一撃を間一髪のところ避ける。

するとその直後、ナオは磯貝の懐に飛び込むと、彼の腕を掴んで背負い投げの要領で投げ飛ばしたのだ。

それで磯貝は空中を一瞬飛遊すると、背中からアスファルトに叩きつけられ悶絶する。だがナオは、磯貝をアスファルトに叩きつけると、直ぐ様、彼の胸ぐらを掴み上半身を引き起こす。

そして、彼の首に後から手を回すと、その顔を九十度、いわゆる直角方向に捻りあげる。

すると、ゴキョッという鈍い音がして、磯貝の頭部は自分の背中を向くようにねじ曲がる。

その瞬間、磯貝はおちたのである。

首を右へ九十度以上、ねじられて即座に気絶。

ナオに対して、抵抗する暇もなかった。

意外と呆気ない最後である。

少々、手荒な行為だったが、気絶した磯貝は一時間や二時間は目をさますことはないだろう。ナオは磯貝が気絶したのを確認すると、即座に彼が手にしていた鉄パイプを握り踵を返す。そして鎌田に首を絞められているゆかりのもとへ、猛ダッシュ————

彼女のことが心配であったからだ。

第四節

(このまま、自分は死んでしまうのか?)

ゆかりは、その時、ふとそんなことを考えていた。

意識がおぼろげに遠退く中で、息苦しい感覚だけはまだ感じられる。

だが、目は霞み、鬱血して血がたまっているのか、頭は張り裂けそうな膨張感をともなっている。それに、四肢には力が入らず、脱力してもう既に、二三分、ほぼ忍耐力の限界に近づいていた。

(どうか、この状況を切り抜けなければ・・)

しかし、そんな思いとは裏腹に、焦っても事態は好転することはない。

なぜなら、鎌田は本気でゆかりの首を絞めて、あの世におくる心算らしい。

その、情け容赦のない絞首感からは、その殺意が如実にあらわれていた。
首を締め付ける感覚は、痛いほど伝わってくる。
武骨な手が、首に食い込み、気道を締めあげる。
そんな中で、ゆかりはさすがに死を意識する。
このまま、鎌田に首を絞められて、窒息死してしまうのだろうか？
ゆかりにとって、それは納得いかない状況でもある。
でも、現実には今、鎌田に首を絞められ瀕死の状態だ。
こんなところで死ぬのは、真っ平御免だったが、現実はやはり死に近付いている。
それは、避けられない、予感めいたものだった。
でも、なんとかして、この状況を脱せないものか、意識が遠退くその臆気な頭でゆかりは懸命になって考える。
しかし頭に浮かぶのは、自分の死のイメージしか湧いてこない。
自分が、海の底に沈んで、溺れるようなイメージ。
どこからそんなイメージがわいてくるのか、解らなかったが、そんな不吉めいたものが湧いてくる以上、自分の死を受け入れなければならないのかと、その時、ゆかりは本気で思ってしまった。ゆかりの目の前では、鎌田が楽しそうにニヤ笑いを浮かべている。
だから、こんな男に殺されるのなら、自分で舌を嚙んで死んだほうがましのような気がする。
だが、それすらも出来ないほど、ゆかりの体はマヒしたように動かない。
ちょうど、マラソンランナーが、フルマラソンを終えてゴールし、気力とも体力とも使い果たし倒れこむ時のそれに似ている。
まさにそれと同じなのだ。
ゆかりの体力には限界があり、そして気力も尽きかけようとしていた。
(もうこれで、終わりなのね?)
その時の、ゆかりには、もうそれしか考えられなくなっていた。
鎌田は、そんなゆかりを見て、容赦なく首を締めあげる。
本気でゆかりを殺す心算で・・・
だが、そんな時である。
「鎌田！ ゆかりを放しなさい！！」
その突然に響いた声にゆかりは反応した。
臆気なる意識の中で、聞こえたその声は、確かにナオの声だ。
涼やかな張りのある声、そうナオが助けにきてくれたのだ。
しかし、その喜びの反面、ゆかりはもう落ちかけていた。
「ナオ、助けて・・・」
搾り出されるように出たその声とともに、ゆかりの意識は混濁する。
そして、深い冥府に誘われるがごとく、そのまま意識を失っていた。

*

「鎌田、ゆかりを放しなさいよ・！！」

その時ナオは、鎌田の眼前に立ち声を荒らげてそういつていた。
目の前では、ゆかりが鎌田に首を絞められて、ぐったりしている。
その光景を見て、更にナオは、血相をかえて鎌田に勧告する。

「放しなさいって言っているのよ！！」

ナオのその声は、冷涼とした夜空のもとコンテナ置き場内に響く。

だが、そんなナオに対しての、鎌田の対応は飄々としたものであった。

「ほーう、テメーがこっちに来たってことは、磯貝をのしたのか？ それは大したもんだな。けどなもう遅かったぜ、ほれ見ろ、この女は今さっきあの世にいったばかりだ。残念だが、仲間の冥福でも祈ってやるんだな・・・」

そう言うとき鎌田は、両手で首を締めあげていたゆかりを、無造作にアスファルトの上へとドッと放り投げる。

そして、哄笑するかのように、口角をつりあげ残忍に笑いたてていた。

ゆかりは、鎌田に投げだされ、無防備にアスファルトの上に転がる。

ナオはそれを見ると、一瞬、不快げに眉を曇らせ、非難めいた眼差しを鎌田に向けたが、ともかくまっさきにゆかりのもとへと駆け寄る。

そして彼女の、上半身を抱き起こし呼び掛ける。

「ゆかり？ ゆかり大丈夫？！ しっかりして。私よ私、ナオよ、聞こえる、ねえゆかり？」

だが、意識なく、ぐったりとしたゆかりからは、何の反応もかえってこない。

「ねえ、ゆかりったら・・・」

ナオがもう一度、ゆかりに対し呼び掛けを行う。しかし彼女は、ナオの腕の中で脱力し、ものいわぬ人形のように力なく身をあずけるだけだった。

「鎌田！！ あなたよくもゆかりを・・・」

ナオは、ゆかりが意識がないのを確認すると、激昂したように鎌田を睨み付ける。

どうやら、ゆかりがこうなった責任を、鎌田に問いているのだ。

が、そんな眼差しを向けられても、当の鎌田は、悪怯れた様子もなくただ淡々とナオとゆかりを見下ろしている。

そして次には、つまらなそうに大あくびをすると、学生が朝礼で休めの格好をするように、足を斜め前に突き出しその顔にまたニヤ笑いを浮かべていた。

「鎌田、あなた、赦さないわよ！！」

そんな鎌田にナオは、食い付くように言葉を言い放つ。

だが鎌田は、腕組みすると、ナオを嘲笑って惚けた顔を見せるのであった。

「そう怒るなよ特務機関のねーちゃん。こっちだって、今お前等に捕まる訳にはいかないんだ。たかが、一人女が死んだからって、こっちは憐れんでいられない立場なんでね、とにかく、その女の死体を抱えてこの場所から早く立ち去ることだな。そうしないと、お前もその女と同様、首を絞めてあの世に送ってやるぜ、女ごとき振り伏せるのは簡単だからな・・・」

鎌田はそう言うとき、ナオに対して野良犬でもあしらうかの様に、シッシッと手で追い飛ばすと、早くどこへでもいっちなえというような素振りでも合図を送ってきていた。

しかし、その飄々とした態度に、ナオはカチンときたのか、その後、意識のないゆか

りをアスファルトの上に寝かすと、徐に立ち上がって鉄パイプを握りしめる。

そして、交戦の構えを見せるがごとく、鎌田の前に立ちはだかって決起していた。「ほ～う、特務機関の高崎だったかな、お前は、俺とやり合う心算か？　だがな、止した方がいいと思うぜ。俺は磯貝よりも、手練れを自負している。いくらお前が磯貝をのしたって、俺にかなうはずがねえ。だから尻尾まいて逃げな、もうひとつ死体が地面に転がるだけだぜ」

「うるさいわね、あなたはただ馬鹿力があるだけで、他には何も出来ないんじゃないの？　そんな凶体して、頭の中身は単細胞なんですよ。筋肉馬鹿って言う言葉があなたには一番お似合いよ。あなたこそ、手をあげて私に降参しなさい、でないとその頭にこの鉄パイプお見舞いしてやるから・・・」

「ははっ、それじゃ俺が筋肉馬鹿なら、お前はひよっ子だな。特務機関に所属しているからってしょせん女だ、決戦に際しては男の方が有能なんだ。いくら訓練を積んでいるからって、男と女の能力の差は埋められないぜ。せいぜい意気がるのも止した方がいいんじゃないのか、か弱いお嬢さんよ」

「何ですって?!」

その鎌田の言葉を聞くと、ナオは、激昂しないまでも、明らかにその挑発を不快と受け取って憤怒している様子だった。

それは、鎌田の巧みな挑発だと判っていても、女を差別したその物言いはナオに敵意をつのらせる。

確かに、女は男よりも戦いに関しては、ひけをとるだろう。しかし、だからといって、ナオは、こんな筋肉馬鹿みたいな男には負けられないという自信がある。

鎌田は、磯貝などよりは、戦いに精通しているかも知れない。

だがナオにも、女としてのプライドがある。

それに、ゆかりをこんなにされて、黙って引き下がるわけではない。

ここは一騎打ちあるのみ、ナオの負けず嫌いな性格はそれを推奨していた。

「とにかく鎌田、つべこべ言っていないで、ここは私とあなたの一对一の対決よ。ゆかりの仇は、私がうつわ、いい覚悟しなさいよね」

すると鎌田は呆れた顔して、

「・・・ったくしょうがねー、ネーちゃんだな、そっちがその気なら、少しだけ相手にしてやるか、でも泣いたって知らねーからな」

そう言うと、鎌田は面倒臭そうに、ナオに対して応戦の構えを見せるのだった。

「よーし、それじゃ早くかかってこい。だが言っとくが、俺は磯貝の様にはいかないぜ」

鎌田はナオに対して斜かけに身構えると、ニヤッと笑ってその自信の程を見せ付ける。

だがナオも負けじと、手持ちの鉄パイプを上段に構え、対決の姿勢を明らかにしていた。

どちらが勝つのかこれは見ものである。

第五節

「てえええええええい！！」

鎌田とナオの対決は、ナオの奇声を発する一撃で、幕をあげていた。

ナオが手に持つのは、そう鉄パイプ、磯貝が所持していたものだ。

それをナオは、鎌田を狙って上段から振り下ろす。

ブオン・・・

その一撃は、渾身のものではなかったが、鎌田の胸元すれすれを掠めて下に抜けていた。

ナオの一撃目は不発、しかし、それは計算のうち、最初から相手にきまるとは思っていない。

そこでナオは、鉄パイプを引き寄せると、今度は横なぎに一閃、軽妙に打ち放たれたその斬撃は、やはりブオンという風きり音とともに横へと抜ける。

鎌田は、ナオの繰り出す斬撃を、ぎりぎりのところで避けている。

しかし、思いもよらないナオの鋭い攻撃を受け、鎌田はその時、面食らっていたのは確かだ。

(この女、口先だけじゃないようだ・・・)

ナオの斬撃を躲しながら、鎌田はその時、彼女に対する見方を少しだけ改めなければならなかった。

ナオの攻撃は鋭い。

弩弓から放たれる、矢のようだ。

しかも、鎌田の動きをなかば予測して、鉄パイプを振るうものだから、彼女が二撃目を繰り出したその直後から鎌田は徐々におされ始める。

三撃目、今度は、中段からのひねりを利かせた迅速な殴打、それにはさすがの鎌田もその重い体を跳躍させ危機一髪後方へと身を退く。

その直後、鎌田の脇腹辺りを、鉄パイプの風圧が掠める。

あと少し反応が遅ければ、肋骨に当たって罅が入っていたかもしれない。

ナオは本気のようなのだ。

鎌田を完膚なきまでに叩きのめす、その心情が如実にあらわれていた。

四撃目、今度は鎌田との踏み込む間合いを考慮にいれて、夜陰を走り抜けるような鋭い突きをお見舞いする。

突きは、本来、剣術でも相手の出鼻を挫く常套手段———この場合、鎌田はナオに対して突進してきた訳ではないが、彼の反撃への牽制にもなったであろう。

鎌田がナオに対して、不用意に近付けば今のように鋭い突きが待っている。

それを予感させるための、布石にもなった。

そして五撃目、ナオは今いる場所から意を決して突進すると、鎌田の眼前で大きく跳躍、その頭上にジャンプするとそのまま渾身の一撃で下に振り下ろす。

ガキヤ！！

だがそこで、信じられない光景を見る。

鎌田は、ナオの攻撃を避けきれないと思うと、次には何を思ったか、両腕の前腕を盾にして鉄パイプの斬撃を受けとめたのだ。

しかも、鉄パイプと何か硬いものがぶつかる音が響くと、ナオの手がビリリと痺れる。

そして、あろうことか、ナオが手にしていた鉄パイプが、打撃点から先四十センチ、グニャリとひしゃげたのだ。

そう、鉄パイプが、曲がったのである。

こんなことが、あるだろうか？

確かにナオが放った斬撃は、鎌田の腕にぶち当たり、その腕の骨を砕いたかと思われた。

しかし、現実には、鉄パイプの方が曲がったのである。

いくら鎌田が筋肉馬鹿で、強靱な肉体を持つからといっても、鉄パイプに勝る肉の鎧を纏っている筈はない。これは何かの間違いではないのかと、ナオは手持ちの曲がった鉄パイプを凝視する。しかし、現にそれは、三十五度近く折れ曲がっている。

「あなた化け物！？」

だからナオは、次の瞬間、鎌田を見据えると、思わずそう言って驚きを顕わにしていた。

こんなこと、ありえる筈はない、そう思ったからである。

「はははっ、どうだ、たまげただろ？ 俺はな、鉄パイプごとき屁でもねえのさ、そんな物振り回したって俺には通じねんだよ」

鎌田はそう言うと、得意げに右の前腕部を擦ってみせる。

何ともないみたいだ。

ナオの一撃は、渾身の一撃であった。しかし、その攻撃を受けても、その腕に何も損傷がないとすると、これは尋常ではない。

この男はやはり、筋肉馬鹿でも、その前に大のつく`大筋肉馬鹿、なのかと一瞬思う。

普通、常識では、考えられないだろう、鉄パイプより強靱な腕が存在するとは、

しかし、鎌田を見ると、ケロリとしている。

だが、ナオは次の瞬間、鎌田の腕の袖からかいまみえた、ある物に目を奪われ、何故、鎌田が鉄パイプを受けても、平気でいられるかの納得がいった。

そう、鎌田の腕の袖に垣間見えたものは、銀色に光る防具のようなものだったからである。

「あ・・・あなた、腕に何か仕込んであるわね！？」

おそらくそれは、彼の前腕を覆うように装着されているのだろう、服を着ているからその事には容易に気付かなかったが、よく見ると、その前腕の部分だけ服が盛り上がっている。

それを見ると、確かに何か仕込んであるのは確実に、それは見逃せない事実であった。「ほ～う、バレちゃったか、実はな、この腕には、鋼鉄製のリストバンドが仕込んである

のさ。これはな、俺の特注の愛用品で、いつも身につけている防具さ。人を殴り倒すときなんか、腕に重みがついて、素手で殴るより数倍の威力を発揮したりする。それに、今みたいに鉄パイプで殴られようが、びくともしね一代物さ。だから、そんな鉄パイプごとき何の役にもたたねーんだよ。残念だが、俺とやり合おうなんて考えねーことだな」

すると鎌田は、やはり得意げに腕まくりし、その腕に装着された防具をナオに対して見せ付ける。

そして、もう一度、豪快に「ハハハハハ」と笑い飛ばしていた。

「さあ、どうする？・・・ねえちゃ・・・ん？」

しかし直後、鎌田がその言葉を言い終わらぬうちに、突然、衝撃が走っていた。

ドガッ！

鎌田の胸元である。

そうそこに、唐突に何かが炸裂すると、鎌田はどうっと後に吹き飛ばされたのである。

「ぐえッ！」

鎌田は苦鳴をあげ、コンテナに背中から激突、後頭部をしたたか打ち付けていた。

ナオである。

ナオは、上を向いていい気になり、笑いたてていた鎌田の間をつくと、速攻で飛び蹴りをかましたのだ。

その蹴りは、見事なもので、靴の踵に打点を集中させた渾身の一撃である。

だから鎌田は、油断していたものだから、その攻撃をまともにくらい、何度も言うが彼は後方へともどりうって吹っ飛び、コンテナへと激突する事を余儀なくされる。

そして、背中を強かコンテナの角に打ち付けると、ゲホッ、ゲホッ、ゲホッと、何かを吐き出すかの様に咳き込んでいた。

「うがぁぁっ」

そして、胸元を押さえて、前かがみになる。

どうやら彼は、かなりのダメージを受けた様子だ。

丁度、コンテナの角にぶち当たったのが、いけなかったのだろう。

鎌田は俯くと、息を整えようとして胸元を上下させる。そして、その後、ナオに目を向けると、怒り心頭した形相でまなじりをつり上げる。

その目付きは、非難の意図がありありだ。その思いを示すかのように、鎌田が言ったナオに対する言葉は次のようなものだった。

「テ・・・テメー、俺の話も聞かず、飛び蹴りかますとは、卑怯だぞ！！ それでも特務機関の一員なのか！ 正義の味方が意表をついて悪辣な手段を使うなら、国家公務員失格だぞ！ 不意打ちなんていう姑息なことするなら、こっちだって容赦しねーからな、覚悟しろこのメスブタ！！」

だが・・・

「ふん！ 何がメスブタよ、あなた馬鹿でしょ！？ あなたが、いい気になって今の状況を忘れてるから、いけないんでしょーが。今はね戦いの最中なのよ、それをよそ見して馬鹿じゃない？ あなたに、卑怯だなんて言われたくないわ。だいたい、最初に不意打ちを仕掛けてきたのは、そっちじゃない。それを卑怯だなんて言うのは、アホよ。これはね、歴とした戦法なのよ、そんなことも解らないなんて、単細胞にも程があるわ。子

供じゃないんだから、文句言わないで！！」

ナオはそう言うと、不敵な面構えで鎌田をねめつける。

その態度は、相手を見下した冷徹なものであったため、鎌田はその時、こめかみに青筋を立てて憤慨する。

「何だとテメー、もう一度言ってみろ！！」

そして次には、蹴られた胸元を押さえつつも、その場に立ち上がり、ナオを正面から見据えると臨戦態勢の構えで相對する。

どうやら彼はかなり憤慨している様子だ。

その血走った目が、それを物語るようにぎらついていた。

「テメー、容赦しねーからな。最初のうちは、美人だから手加減してやろうと思ったが、そっちがその心算ならもう手加減なんかしねー。いいか、これからが本当の勝負だぞ、姑息な駆け引きなしの一発勝負だ。俺も本気出して、テメーを徹底的ののしてやるぜ。その覚悟は出来ているんだろうな、ええ？ 特務機関のねーちゃんよ・・・」

「上等じゃない、そっちがその心算なら、私も手加減なんかしないわよ。私の強さがどれ程のものか、ここはいい機会だから見せてあげるわ。後になって、逃げ出そうとしても、そうは行かないんだから呉々も気をつけることね。女を馬鹿にすると、酷いんですからね。その事をよく覚えておきなさい、この筋肉ダルマ、絶対あなたになんか負けないんだから」

ナオはそう言うと、手にしていた鉄パイプを投げ捨てる。

そして、素手で鎌田に身構える。

彼女もやる気十分だ、ナオは深く息を吸うとそれをスーッと吐き出し自分の呼吸を整える。

そしてジーンと、鎌田を見据えていた。

するとその直後、二人は二メートルほどの間合いを置いて、お互い向かい合い相對峙する。

そして、二人とも、険悪な眼差しを相手に向けると、無言の火花が散るように鬼気迫る臨場感をその場に現出させていた。

二人は、お互い相手の動きを覗くと、踏み込む態勢を整える。

そして次には、鎌田の方からナオに対し、怒りにまかせた突然の攻撃を仕掛けていた。

「うりゃああああ！！ これでも喰らえ！」

鎌田は右の剛腕を振りかぶると、それを容赦なくナオに浴びせ掛ける。

それは、ナオの左頬を狙ったフック、剛腕は唸りをあげるかのようにナオの顔面に飛来する。

しかし、そこはナオも、それを予期している。

鎌田が殴りかかると、彼女は一度上体を起こし一歩後退、そして、彼の拳をナオは手のひらで「びしっ」と弾くと軽く受け流していた。

「このやろ逃げるな！！」

だが、そこで鎌田がわめく。

彼は、一撃目を避けられると、次には左腕を突き出して、ナオの首を掴もうと手を延ばす。

しかしナオは、後に後退しながらも、その腕を足で蹴り上げて鎌田の意図を挫く。

そして直後、体をひねると、地面に両手をつきちょうど逆立ちするように足を上方へと蹴りあげる。すると、蹴り上げられた足は、鎌田の下顎に見事ヒットし「ガッ」という打撃音とともに真上へと抜けていた。

ドッ！！

これは、鎌田がアスファルトへと、仰向けに倒れる音だ。

その音が響くと、ナオはくると一回転、逆立ちした状態から身を起こし地面へと着地する。

そして、鎌田がどうなったかを、後を向いて確認、

すると・・・

「ぐああああっ！！」

そこには、顎を押さえて、のたうちまわる鎌田の姿が垣間見えた。

してやったり。

彼は、ナオの軽業師のような攻撃を受けると、地面の上で顎を押さえ苦鳴を洩らしている。

それだけ、ナオの変則的な蹴りの一撃が、強烈であったことを意味しているが、それを顎に喰らった鎌田は憐れである。

彼、鎌田は、倒れたときの衝撃よりも、蹴られて顎が外れてしまったかのような衝撃に、のたうつと不様にもじたばたと足をばたつかせていた。

しかし、不用意に、ナオに近付いたほうが悪いのだ。ナオは、特務機関では一二を争う格闘家だ。そのナオに、何の警戒もなく殴りかかり、その体に触れようとする事自体、自殺行為とっていいだろう。

それに、ナオは性格がねじ曲がっているのか、男に対しては容赦がない。だから、鎌田にとっては、いい勉強になったかもしれない。こんな女が世の中には存在するのだと・・・

だからナオは、その時、悶絶してのたうつ鎌田を見据えながらも、意地悪く彼を小馬鹿にする言葉を、その時、贈ってやっていた。

それは、先ほど大口をたたいていた鎌田への、報復的な意味合いも多分に含まれていたが、結局のところ、意外に鎌田が弱かったのでそれに対する不満も含まれていたのだ。

とにかくナオは、このままこの戦いを終わらせる心算はなかった。ここはいい機会だから、徹底的に黒峰会の一員を叩きのめしてやる。そして、ゆかりの仇を討つのだと、ナオはその時、真剣にそう思っていた。

そうでないと面白くない。それはある意味では、ナオの悪い癖が出たのかもしれない。「さあ、鎌田ちゃん、どうしたの？ もうおしまいなの？ つまらないわね・・・私、せっかくここで大暴れができると思ったのに、あなたがそんなに弱いんじゃ燃焼不足もはなはだしいわ。それに、このまま終わるんじゃ、私の圧倒的な強さが示せないじゃない。お願いだから起きて、さあ私と戦いましょうよ。子供じゃないんだから立てるでしょ？ さあ起きなさい。起きないと、お尻ペンペンするわよ～。ナオ先生は、怖いんですからね・・・」

それは、何とも言えない口調である。

ナオは、鎌田を子供のようにあしらうと、極力、馬鹿にして相手の闘争心をたきつける。

もちろん、それには、鎌田を憤慨させて挑発する意図も含まれていたが、ほとんどはナオの性格の悪さが露出しただけの物言いだった。

だから、それに鎌田が、食い付いてこない訳がない。

鎌田は、地面に倒れてのたうちながらも、その言葉を聞くと、ぴたりと動きを止め猛然と怒りを顕わにする。

そして、次にはふらついて立ち上がりながらも、顎を押さえて喝破していた。

子供扱いされたことが、彼の自尊心を打ち砕いたようだった。

「て・・てめー！！　ふざけるな！！　こうなったら、なりふり構ってられねー、俺の本当の力を見せてやる。ふざけた事ぬかしてると、テメーを殺したあと、死んでも裸にしてその体をオモチャにしてやるからな、覚悟しろ！！　殺したあと、たっぷり鬨って楽しんでやるからな、死んでも俺の怒りはおさまらねーんだ！！　覚えておけ！！」

鎌田は、そう言うと、自分の前腕に装備していたリストバンドを憎らしげにむしり取る。

そして、着ていた上着を無造作に脱ぎ捨てると、この寒い夜空の中、緑色のタンクトップ一枚だけの格好になっていた。

それから、猛烈な形相をして、ナオを睨み付けると息をはぁーと吐く。そして猪突猛进、そのまま何の前触れもなく猛然とナオに対して躍り掛かっていた。

ブン！

鎌田の横殴りの一撃が、飛来する。

だがナオは、その一撃を察知すると、やはり後方へと退く。

しかし、そこで重要なことに、気付いていた。

それは、鎌田の動きが、先程より数倍早いということだ。

先程まではナオにとって、その鎌田の動きはさして素早いとは思えない、そんな程度のものであった。

だが、今の鎌田は、その巨漢に似合わず、動きにキレがあるのだ。

それは、両腕に装着していた、重そうなりストバンドを外したからそうなのかは解らないが、明らかに今までとは違った動きを見せている。

だからその時、ナオは、警戒して殴り掛かってくる鎌田から距離をとり、少し離れようとして左へと飛びのいていた。

それは、ナオの危険を察知する神経回路が働いたわけだったが、今の鎌田には、何か不気味な威圧感を感じたのも確かだったからだ。

だからここは、一先ず間合いをおいて、相手の出方を待つ。それが最良の手段だと、そう感じて左へと飛びのく。しかしそこに、不意をついた一撃がヒットしたのである。

それはナオが、何度も言うように、左へ退避しようとして飛びのいたときだった。

その時、やはり鎌田の左から、強烈な剛腕の一撃が飛来したのだ。

直後、その剛腕は、うなりを上げてナオの右肩を殴打、その破壊力はすさまじくそのままナオを左へと吹き飛ばしていた。

「きゃっ！」

ナオは、その一撃を受けて地面へと急転——しかし、地面のアスファルトに激突する寸前、自ら手を突いて咄嗟に前転すると、その激突を避ける。

そして、そのまま一回転すると、器用に着地、難なく激突の危機から脱していた。

しかしその直後、右肩に鈍痛が走っていた。

殴られた瞬間は、それほどでもなかったが、ほんの数瞬たってから痛みが襲ってきたのだ。

その痛みは、鈍く重苦しいもので、切り傷のような鋭い痛みではなかったがナオの顔を歪めさせる。しかも、その右肩は、磯貝との戦いの際、鉄パイプで殴られた箇所と同じだったので、そのダメージは馬鹿に出来ないものである。

おそらく、この鈍い痛みからすると、毛細血管が切れて内出血しているかもしれない。

それほど鎌田の剛腕は、インパクトのある大砲のような一撃であった。

ナオはその痛みを知覚すると、一度後方へと、二三歩さがって間合いをおく。そして、打撃された肩を押さえると、鎌田の姿を捜して首を巡らす。

だが、ナオが首をめぐる方向には、不思議にも鎌田の姿はなかった。

たしかに鎌田は、殴りかかってきた時に、その方向にいたはずである。

しかし、その姿が忽然と消えていたのだ。

その為ナオは、不思議に思い、肩の痛みを堪えながらも別の方向に首を巡らす。

すると、突然ナオの背後で、殺気を感じていた。

その直後である。

首に太い腕が巻き付いたかと思うと、ナオはそのまま引き倒されて、アスファルトに仰向けに倒れていたのだ。

そして、倒れた直後、重い何かがナオの前方からのしかかってくる。

それは人の影だった、しかも巨漢、

そう鎌田である。

彼が、倒れたナオの上から馬乗りになると、そのまま彼女の肩を地面に押しつけて、力任せに押さえ付けてきたのである。

それは突然のことであり、ナオには回避する術はなかった。

ナオは殴られた肩の痛みにも悶絶しながらも、そのまま地面に釘づけ、「しまった！」と思ったが、すでに彼女の目の前には鎌田の顔がある。

しかしその顔をまじかに見たとき、ナオは別な意味で、身の危険をその時、悟っていた。

鎌田が、勝ち誇った顔で、好色な笑みを浮かべていたからである。

このままでは乱暴される。

それを予感させる、彼のにやけた笑いだった。

第六節

「へへっ、どうだ、これで身動きできねーだろ」

その時、鎌田は、ナオをアスファルトの上に押し倒した格好で、勝ち誇ったようにそう言っていた。

仰向けに倒れて、無防備なナオの上に、鎌田は馬乗りになっている。

その構図からすると、彼女が不利な状況にあるのは歴然だ。

相手は巨漢、それに筋肉馬鹿ときている。

そして、今の意味ありげな卑猥な顔、それから予測するに、この状況はこの後どう展開するかの察しはついていた。

ナオ一世一代の身の危機、そう強姦である。

それを示すかのように、鎌田は沸き上がる喜びを隠しもせず、哄笑してこうほざいていた。

「ハハハハハ、さあ、これからが楽しみだぜ。さすがにもうこうなったら、お前も最後だな、俺を怒らせちまったお前が悪いんだ。しかし、こうなるのを俺は待っていたぜ。テーマの性格は、気に食わねーが顔と体は別だ。さっきは殺してからオモチャにしてやるといったが、この状況だと、それは大幅な変更を余儀なくされるって事だな。今の状況を考えて、ここで乱暴したほうがよっぽどおもしれー。それに生きたままの方が、さすがにそそるからな、そうなるとお前も風前の灯だ、覚悟はできているんだろうな？ 今からたっぷり可愛がってやるからな、覚悟しろよ。そして徹底的に玩んでやる、そのすました顔を、苦痛で歪ませてやるからな！」

そう鎌田は、このままナオに乱暴し、その貞操までも奪う心算なのだ。

鎌田にしてみれば、それを待ち望んでいたのかもしれない。

ナオは、性格はともかく美人だ。

それに、男にとってはその体は、むしゃぶり付きたくなる、しなやかで柔らかな曲線美を有している。

そうである以上、このような状況で、その獣欲を満たす行為にうって出ることも不自然ではないような気がする。

それだけ、ナオは贗物にはない、不思議な魅力を呈している。

それに、男を寄せ付けないような、きつい性格からも、その希少価値的な存在が際立つのだろう。強いて言えば、このような状況、鎌田ではなくても、新鮮な初魚を求める好色な輩ならば手を打って喜ぶかもしれないのだ。

その状況にあって、ナオは貞操の危機に見舞われていた。

だが・・・

そんな中であってもナオは、このような状況に対し意外と冷静だった。

このままでは犯されて、身を危険にさらされる事態にあるにもかかわらず、さして抵抗する気配も見せないのである。

それどころか、その顔に慈愛に満ちた女神のような安らかな微笑みを浮かべると、鎌田を目の前にして、じっとその目を見つめ笑い返しているのだ。

だからその時、鎌田は、一瞬気圧されて、茫然とするようにナオを凝視していた。

この女、頭がおかしいのか？

そう思ったからだ。

ナオは慈愛のこもった、優しい声で言う。

「そう？ あなた、私のことがそんなに欲しいの？ それならば、私は構わないわ。でもひとつだけ注意して、私はまだ男を知らない体なの、だから乱暴はよくないわ。女性を相手にするときにはね、優しく接するのが紳士としての常道なのよ。それを逸脱して獣欲的な行為にうったえるのは恥ずべき行為だわ。だから優しくして、そうすれば私の全部、見せてあげる。見たいのでしょう、私の体が？ それならさあ手を出して、私があなたを誘ってあげましょう、女性の体に触れる方法を……」

そう言うとナオは、落ち着いた態度で、おもむろに鎌田の右腕をとる。

そして、その手を自分の左頬にそっと触れさせると、ニコリとそれはもうとろけてしまう様な聖母的ほほ笑みを満面に浮かべて笑い返していた。

それを見ると、誰もが安らぎ、喜悅するのではないかと思われる、神々しいほほ笑みであったので、その時、鎌田は惚けた顔をしてナオの顔を凝視していた。

しかし、それがナオならではの、悪魔の囁きだったことに、鎌田は気付いていなかったのである。

それが、彼の気をそらす、迫真の演技とも知らず……

ドガッ！！

直後、衝撃が走っていた！

鎌田の後頭部だ。

一条の銀光が、月の光に反射して煌めいたかと思うと、強烈な打撃となって鎌田の延髄を襲う。

それは不意の猛襲だ。

それを喰らって、倒れぬ者はいない、それだけの衝撃的一撃だった。

でもナオは何もしていない。

彼女は、鎌田に馬乗りにされて、仰向けに寝転がっているだけだ。

では誰が？

鎌田の後には、女性の人影が立っていた。

そうゆかりである。

鎌田の後に立っていたのは、ナオが先ほど手にしていた折れ曲がった鉄パイプを怒りの形相で握り締めている、ゆかりであったのである。

鎌田は、ゆかりの一撃を喰らうと、そのまま即座に気絶、白目を剥いていた。

そしてスローモーションのように気を失ったままナオの上に倒れてくる。

ナオはそれを汚いものでも避けるかのように、腕で横へ小突くと、鎌田はそのままア

スファルトの地面に前倒しのまま顔面を激突させて崩れていた。

そして、ヒクヒクと、体を痙攣させるとしばらくして動きを停止する。

完全に沈黙したのだ。

さすがに巨漢の筋肉馬鹿も、ゆかりからの不意をついた後頭部への攻撃を受けては、なす術なかりけりである。

折れ曲がった、鉄パイプの一撃であれ、ゆかりは渾身の力を込めて放った一撃だ。

それを受ければ、もう、立ち上がることも出来ない。

ここで磯貝に続き、鎌田も落ちたのである。

二人は、死んだわけではないが、気絶してその姿は不様だった。

女二人に負けたとは、さぞ心残りであろう。

しかし、それは、勝負の世界の悲しい性、負ければ惨めに苦汁を舐めるしかないのである。

気絶しては、悔しがることも出来ないが……

第七節

「ハア、ハア、ハア……」

ゆかりはその時、必死の形相で荒い息を洩らしていた。

その目は、血走ったかのように、大きく見開かれている。

彼女の目の前には、倒れ伏した鎌田の姿、そう、それを為したのは彼女自身だ。

ゆかりは必死だった。先ほど、おぼろげに目を覚まして最初に見た光景は、ナオが鎌田に馬乗りになっている光景、その光景を見たとき、ゆかりは、ともかくナオの危機を察知して、まだ目覚めてまもない不自由な体に鞭打つと、近くにあった鉄パイプを握り締めとりもなおさず、二人のもとへ駆け付けていた。そして、気付いてみると鎌田を鉄パイプで殴り昏倒させていたのである。

それは、ゆかりとしての怒りがそうさせたのかもしれない。

友の危機、そして、今まで鎌田に受けた屈辱と苦痛、そのどれもが、ゆかりの中でたとえ様もない怒りとなって爆発した結果だったのだろう。

ゆかりにとって、鎌田はとにかく許せない存在だった。

第三倉庫の監禁室で、胸を玩ばれた屈辱、それに、先ほど不意打ちを受け首を極限まで絞めつけられた苦痛、そのどれもが犯罪行為を生業にする下劣なものにされたかと思うと、ゆかりのプライドは痛く傷つく。

しかしその中でも、さらに許せなかったのが、ナオの危機だ。

鎌田は、明らかに、ナオに対して乱暴を為そうとしていた。

だから、気を失って目を覚ましたとき、第一に感じたことは、友を助けなければならぬという、ゆかりならでの義勇の心だった。

ナオを助けたい一心で、首を絞められてまだふらつく体を鞭打ち、鎌田に渾身の一撃をおみまいしていた。

だが、今はその目的を果たすと、気力もつきまた気を失いかける。

そこへ手が差し伸べられていた。

「ゆかり大丈夫?!」

ナオだ。

彼女は、鎌田が地面に昏倒したあと、立ち上がると、直ぐ様ゆかりの傍に駆け付けて、彼女をささえる。逆にナオは、ゆかりのことが心配であったからである。

ナオは、鎌田に馬乗りにされ、彼の哄笑を受けた。しかし、彼女には、鎌田の淫らな猥褻を阻止する手立てが無かったわけではないのだ。だが、それを為さず、突然、鎌田に対して慈愛に満ちた聖母然的態度をとったのは、全て、ゆかりが鎌田の後から鉄パイプを振りかざしているのが判っていたからだ。だからナオは、鎌田の気をそらすために、演技して、ゆかりの一撃がヒットするのを助長させていた。そうすることによって、ゆかりが、鎌田に対し恨みを晴らすことができると思ったからだ。

ゆかりとて、鎌田に対し、仇敵的な思いがなかったわけではないだろう。

だが、それはともかく、今は、ゆかりのことが心配だった。

彼女は、死ななかつたとはいえ、鎌田に首を絞められ相当苦しかったはずだ。

意識を失い、気絶するぐらいに締め付けられていたのだ。

だからいま、現にまた気を失いかけ、ナオに体をささえられている。

だが、ナオはゆかりが、自分を助けようとして、鉄パイプを握り鎌田をのしたことを判っていた。そして、それが嬉しかったことは確かだった。

「ゆかり? ゆかり大丈夫?」

ナオは、気を失いかけ、自分の腕の中でもたれるゆかりに対し声をかける。

それは、ナオにしては、不器用な優しい言葉使いだ。

「え? ええ・・・」

しかし、その言葉に、ゆかりは弱々しくだけれど確かに反応を見せる。

どうやらゆかりは、ナオが心配したほど、ひ弱じゃなかった様子だ。

今、ナオの腕の中で、目を向けてくるゆかりは、虚ろだったが意識ははっきりしている。

それにナオはまた安心し、ゆかりの頭を抱える様にして、その頬にそっと手をそえる。

こうしてみると、ナオは、先程、鎌田に見せた聖母然的態度をもつ聖女にもみえる。

毅然としているが、どこか優しさを備え、冷たいようだが人を気遣うときは慈愛に満ちた温か味を見せる。それは、ナオの普段見せることのない、隠された一面であったが、今は傷ついたゆかりを優しく介抱し包容するような絵画的側面を見せている。

これは、意外な光景でもある。

だが、本来それが、ナオの本質なのかもしれない。

普段は、無口で無愛想だが、友が倒れたときは、手を差しのべ労わる気持ちを如実に表す。

ゆかりが元気で、あの小うるさいモモがこの場に居れば、似合わないと言ってそれを笑われたかもしれないが、それこそがナオの本当の魅力でもあるような気がする。

ある意味、それは、成熟した大人の母性的な要素を、彼女が潜在的に有していることの証拠だろう。

ナオ自身は気付いていないだろうが、今の彼女からすると、それが容易に察しがついていた。

しかし、そんな事はともかく、ゆかりはどうしたのだろうか？

先ほど、ナオに声をかけられてから言葉を発していない。

まさか、また気絶してしまったのか？

いや、そうではない。

彼女は、ナオに抱えられる腕の中で、寝てしまったのだ。

それだけ、気力を使い果たしたからかもしれない。

鎌田に首を締めあげられて、ダメージは大きかった。

だから、今では、疲れ果て寝てしまっていたのである。

ナオは、そんなゆかりを、やはり優しく抱き抱える。

だがそこで、ふとある事を思い出す。

そう宮坂！ 宮坂はどうしたのだろうか？

鎌田、磯貝を倒したはいいが、まだ肝心の宮坂が居たのだ。

ナオはその事を思い出し、一時ゆかりを地面にそっと寝かせてから辺りを見渡す。

・・・が、その時である。

ジャリ・・・

ナオの後方で物音がした。

それは、アスファルトの上にある砂を、靴で踏ん付けた音だ。

その音に気付き、ナオが後方を振りかえると、そこにはある男が忍び足でこの場から暗黙に、逃げ出そうとしている姿が捉えられる。

「あなたは、宮坂！！」

そう彼である。

宮坂は、この近くに隠れていたのだ。

ナオには気付かなかったが、どこかの物陰に隠れて息をひそめていたらしい。

しかし彼は、今この場から、ナオに気付かれないようにして逃げ出そうとしていた。

だからそこで彼は、自分の名をナオに呼ばれたものだから、その直後、一度驚いたようにナオに顔を向けて、ギクッと体をビクつかせる。そして、そこで血相かえて慌てだしていた。彼は、ヒィと、いうナオに恐れを抱くような声を一頻りあげると、慌てた様にして突如走りだす。そして、南側辺りのコンテナの奥へ走り込むと、そのまま足をもつれさせながらも必死の態で逃げていく。

その光景を見てナオは、本来の自分の使命を思い出していた。

ここで宮坂、そう勅使河原を捕らえなければ、今までの苦労が水の泡だ。

ここは、なんとしても奴を追わなければ、

そこでナオは、ふとゆかりのことに気をとめる。

このまま、ゆかりを、このままにして置いて行って大丈夫だろうか、

だが、
「ナオ私は大丈夫よ、早く宮坂を追って・・・」
と、ゆかりが、突然、目を覚ましていたのか、ナオに対してそう言うてくる。
だからナオは驚いて、ゆかりの顔を見ると、彼女は、少し虚ろな表情であったが、その顔に笑顔を浮かべナオに対し笑いかけている顔が目飛び込んでくる。
「ゆかり、起きていたの？」
だからナオは、彼女に対し、驚いたような素振りですう問い掛ける。
しかし、
「そんな事はいいから、早く宮坂を追いなさいよ。あなたお父さんの仇を討つんでしょ？
だから早く奴を追いなさい、私のことは大丈夫だから・・・」
ゆかりは、ナオの目をじっと見据えるとそう言うので、彼女はそれに頷くと言う。
「判ったわ、それじゃあなたは、ここでジッとしているのよ」
ナオはそう言うと、その場にスクッと立ち上がって、宮坂が逃げていったコンテナの一角に目を向ける。
そして次には、地煙をあげるがごとく駆けだすと、猛然と彼の後を追いかけて疾走していたのである。

第八節

ナオが、コンテナの角を曲がると、そこは他に通路のない一本道になっていた。
近くでは海がすぐ傍まで来ているのか、波寄せる防波堤の音が聞こえる。
相変わらず、ナオが走る左右には、コンテナが壁のようにひしめいていたが、宮坂が逃げ込んだ場所はこの先にしかない。
その為ナオは、迷う事無くコンテナ置き場を疾走し、そこより先の角をおもむろに曲がる。
すると、そこは一転、様相が変化して、ガランと広い広場のような一角に、突然、躍り出てしまった。
整地されていない土が剥き出しの地面が、四方三十メートル、その場を囲むようにやはりコンテナが立ち並び、一種の、袋小路的な様相の場所だった。
強いて言えば、コンテナ置き場内に、突然、出現した空き地、西の空からは、月明かりが燦然と差し込みその場を照らしだす。
その空き地の、丁度真ん中、そこにはぽつんと人影が見える。
身長170cm程度の、黒いスーツの男、そう宮坂だ。

彼は、今、無防備に立ちすくむと、その場でおろおろと慌てている。
おそらく、逃げ場を失い、気が動転しているのだろう。
そんな彼の態度から推察して、それが如実に判っていた。
「宮坂！！　ここで遇ったが百年目よ、神妙にきなさい！！」
そこで、ナオの決まり文句が木霊する。
ナオは宮坂を目で捕捉すると、今いる場所に立ち止まり、すらりとのびた長い足を肩幅に開きそこで仁王立ちする。
宮坂が居る場所は、そこから前方十メートルの所、その為、ここからでは月明かりに照らされて彼の顔がはっきり見て取れる。
だから今、宮坂が、ナオに追い詰められて、怯えている姿が手に取るように判った。
おそらく彼は、先ほど鎌田や磯貝と格闘した、ナオの姿を見ていて、彼女に恐怖を抱いたのではないかと推察される。
いくら女とは言え、宮坂にしてみれば、鎌田や磯貝は、自分の用心棒的存在だったのだ。
それを目の前でなされては、そういった心情を抱くのもあながち領けるだろう。
さすがは、特務機関の隊員といってしまうまでもだが、とにかくナオには「百戦無敵」の称号が似合うのかもしれない。
だが、てなことはともかく、今、宮坂は、ナオの姿を捉えると、その場からおそおそとあとずさり後の方へと後退していく。
それを見ると、情けない光景のように思えたが、目の前に立つナオにそれだけ気圧されている証拠でもあると言える。
ナオといえば、先程から仁王立ちすると、不気味に沈黙を守っている。
だが、そのほんの少し、釣り上がった闇よりも黒い双眸は、しっかりと宮坂の姿をその視界に捉えはなさなかった。
ナオは、宮坂を見据えると、次には意を決したように足を一步踏み出し、そのまま彼の傍へ歩みだす。
そして、彼の二三メートル前までくると、おもむろに指をビシッと突き付けて、警告するように言葉を発し始めていた。
「さあ、宮坂、いいえ、勅使河原洋二だったかしら？　残るは、あなた一人だけになったわね。でも、これで最後ね。私は、この時を待っていた、七年前のあの日からずっと……寝ても覚めてもトイレに入っても、そしてお気に入りのスプーンが曲がっても、あなたのことはずっと忘れなかった。けど、ここでようやくあなたを目の前にして、法の裁きに突き出すときが来たってわけよ。あなたが、私の父を殺したとき、まだ私は高校生だった。都内の高校に通う普通の高校生。でも、七年前のあの日、父を殺されて私が受けた衝撃と恨みは、今も忘れていないんですからね。だからその時の恨み、いまここで痛いほどはらしてやるわ。いい、勅使河原、覚悟きなさい！！　あなたの悪業の数々ここで成敗してやる！！」
「……………」
……………
だがその時、その言葉を受けて当の宮坂は、キョトンとした顔をして惚けていた。

ナオの謂わんとするところが、いまいち、解らなかつたのかもしれない……

「…お、おい？ ちょっと待ってくれ、君は一体なにを言っているんだ？ お、俺は、キ、キミの親父さんのことなんて知らないぞ。それに、君は何なんだ、俺は宮坂義行だ、それを勅使河原洋二だなんて、とんでもない事言わないでくれ。お、俺は知らん、知らんよそんな名前……」

「な？ なんですって！？ あ？ あなた、ここにきて、しらばっくれる心算？ 私はね、あなたにバケツが引っ繰り返るくらいの恨みがあるのよ。それを、ここでとぼける気？ あなた、七年前、私の父を殺したでしょ、忘れたとは言わせないわよ！ 茂満十次郎、そう茂満が、あなたが偽名を使って宮坂義行という名を名乗っているということを、警視庁の取調室で既に白状しているんですからね。それを、今更とぼけるなんて、とんでもない奴だわ。ここで、私が成敗してやる、覚悟なさい！！」

そう言うとナオは、綺麗な顔に似合わず、これでもかという程カッと目を見開くと、拳を振り上げ喝破する。

その形相は本気だった。

ナオには、形容しがたい激情の奔流が、沸き起こっていたのである。

父を殺して今更しらをきる、この男、許しておけない、それがナオの心情である。

ここで、こいつを許せば、高崎家の家名が廃る、そう思うほど、憤慨していたのである。だが、

「ちょ、ちょっと待ってくれ、き、君は何か勘違いしている。お、俺は勅使河原洋二じゃないんだ。それに茂満なんて知らない、本当だ、信じてくれ、知らないんだよ！」

宮坂は、ナオが殴りかかろうとするところを制すると、慌てた様にして彼女を抑えていた。

しかし、

ガッ！！

その時、宮坂の左頬に、ナオの横殴りのフックが炸裂していた。

それは一瞬である。

ナオは、宮坂のいい分を無視すると、怒りにまかせ手を出していたのである。

それが宮坂の左頬に炸裂すると、彼は、横様に倒れ地べたにすっ飛んでいた。

宮坂は、地面に倒れこむと「ぐうああ」という、苦鳴を洩らしたが、数瞬して我に返ると、その直後、ナオの方へキッと顔を向け憎々しげにその顔を歪めてくる。

そして、左頬を痛そうにして立ち上がると、一転、口調がガラリと変わっていた。

「テメー、俺を殴りやがったな！！ 俺はな、生まれてこのかた一度も女に顔を殴られたことはねーんだ。それをよくも、よくもやってくれたな、この借りは倍にして返してやる。俺を馬鹿にするなよ！」

宮坂はそう言うと、ナオに向き直って、その形相を尖らせる。

良く見ると、怒りの為に、彼の額には青筋が立ち、それがヒクヒクと動いている。

それを見ると、宮坂の怒りは相当なものだ。

ナオが知るかぎりでは、宮坂という男は、紳士的で計算高い、冷静沈着な男のように見えていた。

しかし今の彼は、屈辱を受けたように怒りを顕わにすると、険悪な眼差しをナオに向けてきている。

どうやら怒ると、意外に激情家になるらしい。

ナオは、ここにきて、宮坂の意外な一面を見たような気がした。

「ふーん、やっとあなた正体をあらわしたわね。今までは、知的なポーカーフェイスを被っていた様だけど、今見れば、殺人さえ厭わない狂犬の犯罪者のようよ。だから、その顔であなたは七年前、私の父、高崎耕助警視を殺害したんでしょ？　今のあなたの顔を見れば、あなたが平気で人を殺す殺人者であるという事が良く解るもの。正体は、なかなか隠せないものね、今更、言い逃れは出来ないわよ……」

「高崎警視？」

すると、その時、宮坂の表情に、また違った変化が生じていた。

彼は、高崎警視という男の名を聞いたとたん、表情を一変したのである。

何か忘れていた意外な記憶を呼び覚まされるように、一瞬、真面目な顔になると、時間がとまったかのように硬直する。

そして、突然、何かに気付いたかのように、ハッと驚くと、ナオの顔を見てまじまじと見据える。

そして、次に出た言葉は、彼が、勅使河原洋二であるという証拠を示す言葉だった。

自分でそれを白状したのである。

「そ、それじゃ、お前は、警視庁の高崎耕助警視の娘か？」

……！！

「ようやく言ったわね。そうよ、私は、高崎耕助の一人娘、高崎ナオ。でも、これで本当に判ったわ。あなたが、高崎耕助という名を知っているということは、七年前、父とのなんらかの関係が必ずあったって言うことを示しているもの。そして、あなたが名を変えてそれに整形までして、逃げていたということも確証されたといってもいい。これだけの証拠があれば、もはや言い逃れは出来ないんですからね。あなたを、ここで逮捕するわ！！」

しかし、

「ふっふ、ふあふあ、そうか？　そうか？　それで解ったぞ。お前は、俺の過去の犯行を探るためにストリップ劇場に入り込んでいたんだな。それで解った、お前は、警視庁に協力要請され潜入捜査の任務に就いていたんだろ。なる程な、これで謎が解けた。なぜ、特務機関がウチのストリップ劇場に入り込んでコソコソと動いていたか、それに貨物船に急襲を仕掛けてきたのは、最初から俺が目的だったんだな。これは光栄だね、七年前の昔の罪をまだ覚えていてくれたなんて、そんな些細なことを……たしかに俺は七年前、黒峰会の一員として高崎って言う警視庁の警官を殺した。だが、そんな昔のことを、今頃になってもち返すとは、お笑い草だ。俺は、あの頃は若かった、だが今は、黒峰会の準幹部だ。それを今更蒸し返すなんて、遅いんだよ……」

バコーン！！

直後、宮坂の顔面に、ナオの右ストレートが炸裂していた。

宮坂は、ナオに殴られると、鼻から血を吹き出し後へとよろめく。しかしナオには、我慢ならなかった。宮坂が、父、高崎耕助を殺したことを、些細な事と言ったことが我慢

ならなかったのである。

「な、何をする！！　おおお、お前は、それでも特務機関の隊員か？　話をしているだけの人間を、突然、殴るなんて、国家公務員としての責任を問われるぞ！！」

「おだまり！！」

ナオに殴られて、それに対して、宮坂が非難の言葉をぶつける中、ナオは宮坂を一喝すると、もう一度拳を握り締める。

正直、ナオにしてみれば、こんな男に国家公務員がどうのと難癖をつけられる謂われはない。

鎌田もそうだったが、この手の犯罪者は、どうもナオが特務機関という組織に属しているだけで、国家公務員としての正当な行動規範を強要させたいらしい。

自分たちが、法を犯した犯罪行為に手を染めている癖に、ナオが少し強引な行為に出るとそれを指摘して責めてくるのだ。ナオからしてみれば、もともと自分は特務機関の問題児だ、多少の逸脱行為などに構ってなどいられない。犯罪者を相手にするときは、正道的な手続きばかりを踏んでいては、的確に対処できない時も生じてくるのだ。

それを考えると、今、無抵抗な宮坂を無下に殴っても、大して責任を問われるとは思っていなかった。いくら、特務機関の人間でも、ナオには感情がある。そこに、父をまるで馬鹿にする言葉が飛び出したとなると、容赦できないのである。

それは、宮坂にしても、不注意であっただろう。

ナオの前で、自分の犯した犯罪を、些細な事という一言で括ってしまう言葉をふと洩らしたのだ。その事に対して、ナオが怒るのも無理はなかった。

とんだ失言であっただろう。

「あ、あなたね、私の父を殺しておいて、それが些細な事だったとは何よ！！　七年前、人が一人死んだのよ！！　それを・・それを、それを！！　あなたは何だと思っているの！！」

ナオは真剣だった。

宮坂、いや勅使河原の全てが、何もかも許せないそんなふうを感じる。

ナオにとって、父は、かけがえのない存在だった。

彼女は、あまり父のことを人に語ったことなどないのだが、ナオにとって、父は、母以上になついていた存在だったのである。

ナオの母、高崎夏枝は、もちろん小さい時から、ナオの事を大事な一人娘として可愛がってくれていた。

だが、それ以上に、父、高崎耕助は、ナオの事を溺愛していたのである。

高崎耕助とその妻、夏枝が若い時分、結婚した当初、二人の間にはなかなか子供が授からなかった。もちろんそれは、父が性的不能者であったからではない。二人は、健全な生殖器官を有するごくありふれた夫婦であったのだ。

しかし結婚して五年経っても、妻が受胎した様子もない。そこで、二人は病院の医師に相談し、一度医学的な綿密な検査を受けてみようと呼びかけた。

そして、そこで得た答えは「異常なし、いたって正常」の、それであったのだ。

二人に、子供が授からないのは、体に何かしらの欠陥があつての事ではなく、単に機会に恵まれただけのことであつたらしい。

病院の先生に言われた言葉は、「子供は、天からの授かりものですからね」の一言だったのだ。

そこで、二人は納得し、それ以後も夫婦の営みを続けていた。

だが、そして検査を受けてから半年後、待望の一子が授かったのである。

それがナオだ。

だから、彼女が産まれてから、父、高崎耕助の喜び様は尋常ではなかった。

彼はまず、産まれるとすぐ親類縁者を全て呼んで、自宅で盛大な出産祝いを催したり、子の命名には、都内の高名な易者を呼んで、姓名判断をしてもらい、様々な理由からその名を「ナオ」と決定、耕助は、その後ナオを「ナオ坊」という愛称で呼ぶと、極力自分の手で彼女の世話をやいていたということだった。

たいていでは、子育ては女の仕事だ。授乳から、オムツ替え、入浴に至まで母親のやる仕事はごまんとある。そんな中で、耕助は、妻の夏枝に子育てを付きっきりで任せるのではなく、自分も率先してそれを行ったのである。

授乳はともかく、オムツ替えから入浴、夜泣きのあやしつけに至まで手を掛け面倒を見たのだ。だから、妻の夏枝が「これでは、自分のやる仕事が無いじゃない」と、冗談まじりに怒ったぐらいなのだ。男が子育てに率先的なのはいいことだが、夏枝にしてみれば自分も母親としての母性本能を満たしたい性分の女性であったので、あまりにも夫がナオの事を溺愛しているので、少々癖々していたこともあったのは事実だった。

しかし、夫婦仲は至って親密、近所から見れば理想的な仲のいい夫婦と見られていた。だから、当然、幼いナオも、父に至極懐いたのは言うまでもない。

ナオは、父、耕助を「お父ちゃま」のそれでそう呼ぶと、彼が何処へ行く時もついていこうとした。

俗に言う、お父ちゃん子だ。

そして、二三歳の年になると、都内の夏祭りによく連れていかれたのを覚えている。

出店で狐のお面を買ってもらい、それを頭にかぶりながら、父に手を引かれて雑踏の中を歩く。子供の頃のナオは、好奇心旺盛な子だったので、よくふらふらと父のもとを離れ何度も迷子になって泣いていた。

だが、必ずといっていい程、父の耕助はナオの居場所をすぐにつきとめて、探しにきてくれるので、幼いナオにはそれが心強かったのだ。

だがナオが、幼稚園に入る頃になると、高崎耕助は早くも一つの勉強机を購入し、ナオにそれを与えた。普通、勉強机は小学校一年生になったら用意するもの様だが、父の方針では、幼稚園のうちからでも、自分の聖域をもつことは早すぎはしないという考えで、その他にも自宅の二階の一部屋を彼女の為に用意し、マイルームを与えたのである。

その点から考えると、父の耕助は、ナオに甘かったように思われるが、そうではない。

彼は、与えるものは与えるが、警視庁に勤務している警察官らしく、筋の通らないことはナオにさせ様とはしなかった。たとえば、何の理由もないのに同年代の子供をいじめたりとか、必要もないおもちゃを不用意に買い与えない。それに、ナオがわがままを言って駄々をこねたときなどは、厳しく叱りつけ物の道理というものを延々と説く。優しさと厳しさをうまく使い分け、子供のご機嫌だけをとる軽薄な父親ではなかったのである。

だから、その甲斐あってか、そうではなかったかはともかく、ナオは、中学生になる

まで親に逆らったり非行に走るということはまずなかったのだ。

性格は、気の強い、ぶすっとした人見知りする子だったが、別に悪いことをするような子にはなることはなかったのである。

だがナオは、中学校に入ると、父との関係にも少し変化がでてくる。

ナオは、小学生の終わり頃までは、父とも一緒にお風呂にも入っていた仲だったが、中学生になるとさすがに一己の自我に目覚めたのか、父と仲良く会話するということもなくなっていたのだ。

だが、別に、父との関係が疎遠になったわけではないが、さすがにナオも思春期をすぎ、一人の女として成長しはじめたのだろう。だから、高校生にもなると、大抵相談ごとは、母、夏枝一辺倒になっていた。ナオは母に似て美人だ。ナオ自身あまり自覚はなかったが、やはり近所では気立てはともかく将来はモデルになるのではないかと噂されるほど、少しばかり有名な子だったのである。

父、耕助が、望んでいたナオの将来は、都内の看護学校をでて、どこかの小さな病院でもいいから、看護師としての仕事をしてもらいたいという、なぜだか解らないがそんなものだった。

ナオ自身も、将来については、それほど夢があったわけではなかったので、看護師になってもいいかもしれないと思っていた。

しかし、高校に入って、二年目の夏の夜のことである。ナオが、学校から帰って、食事を済ませ一人お風呂に入っていたとき、そこへ、突然に警視庁の方から電話での一報が届いたのだ。

その電話は、父がその日の夜、何者かの襲撃を受けて、帰宅の途中、住宅街の一角で息を引き取ったとの連絡だった。

いわゆる殉職、その連絡を受けたとき、母の夏枝は、電話の前で一時間ただ茫然と立ちすくんで、泣くこともなく放心状態を続けたという。

その時から、ナオの家族にとって、幸せだった十数年間の崩壊が、何の前触れもなく襲ったのである。

ナオは、父の死を母から告げられると、母、同様泣かなかった。

だが、それ以来、無口な性格だった彼女は、より無口になり、笑わなくなったのも事実だった。ナオの笑う姿を見たものは、それほどいるわけではないが、彼女とて、無邪気に笑うときはあったのである。

父が亡くなると、母は気落ちして、毎晩のように酒を飲むようになった。

高崎家の収入を支えていたのは、もちろん父の耕助であったが、彼の死後、母、夏枝は近くのスーパーへパートの仕事に出掛けるようになる。

しかし、父の死は、その妻、夏枝には抱えきれない程の悲しみをもたらしたらしく、心労からか体調を悪くし、病院通いを続けることとなるのである。

母、夏枝は、健康的な女性だったので、風邪などの些細な病気もあまりかかったことがなかったが、病院通いを始めると、見る見るやつれてきて体が弱り始めていた。

だから、ナオも心配して、入院をすすめたのである。

しかし夏枝は、それを受け入れず、パートの仕事を続けながらも、まだ高校生だったナオの面倒を見ていた。

だが、それも長くはつづかず、母、夏枝は三年前、父のあとを追う様にして、他界したのである。

そんな経緯があるからこそ、ナオは、二重の苦しみを受けた。

父について、母まで亡くす、彼女の思いは幾許のものであったろうか？

ナオは、二十一の若さで、父と母の二人を亡くしたのである。

かけがえのない、両親を、

そんな訳であるから、父を殺した勅使河原は、何においても許すことの出来ない存在であるのだ。父を殺したのもそうだが、母まで失ったのは、全て父の死が原因なのだ。そしてその原因を作ったのが勅使河原なのである。

警視庁に勤める健全な父、そしてナオを見守っていた母を殺したのは、彼といっても言いすぎではないのである。

だから、そうである以上、ナオは、今、目の前にいる勅使河原洋二を許すことが出来なかった。しかるべき制裁を加えねばならないとそう思っていたのである。

「あなたね、勅使河原！ 私はあなたのことが許せないのよ。あなたが、父を殺した理由は、所詮、黒峰会での昇進を狙っての事だろうと思うけど、そんな下らない事の為に殺された父は、死んでどうすればいいと思うの？

何度も言うけど、あなたの下らない出世意欲で父は死んだのよ。それを、何事もなかったように些細な事の一言でそれを済ませるあなたの精神が、蛇を生殺しにするくらい許せないわ。それに、七年間も姿を晦まして、逃げていたというその根性も許しがたい。今では、黒峰会の準幹部の地位にのぼりつめて、いい気持ちでしょうが、それは数々の犯罪に手を染めてある地位だということを、少しでも認識しなさいよね。私は、私は、絶対あなたを裁きにかけてやるんですから！！」

そのナオの言葉は、亡き父の無念を代弁したものの様でもある。

そもそも、ナオの父、高崎耕助は、当時、暗躍していた黒峰会の内情をなんとかして暴こうと、働きかけていた。黒峰会は闇の組織、その組織の摘発に乗り出そうとしていたのが、ナオの父、高崎耕助警視なのだ。しかし黒峰会は、その捜査の手を恐れ、高崎警視を目の敵にし、彼を抹殺した、その実行犯が勅使河原洋二なのだ。

そう、今日の前にいるこの男、それを思うと何もかもが許せなくなる。その顔立ちといい、服装、それに知的ぶるその態度、そしてその口調その何もかもが・・・

「私は誓ったわ、母が死んだとき、きっと父を殺した犯人を捕まえてやるって。でもようやく、その機会がめぐってきたのよ！！ だから、この機を逃さないわ！」

だからナオは言う。

ナオは、この時を待っていたのだ。

彼女が、勅使河原を絶対捕まえてやるという決意を奮起したのは、母の死がきっかけだったが、その前から悶々と思い抱いていたのも確かだ。

ナオが高校卒業後、当時、正式に開校されたばかりの、難関の特務機関養成訓練学校に記念すべき第一期生として、入学を志したのもその為だ。

全ては、父の無念を晴らすため、目的はその一点に絞られていたといってもいい。

そこで、ナオは、色々なことを学んだ。

犯罪者の逮捕術はもちろん、集団組織の何たるか、そして特務機関の運営意義、それ

は、警視庁などの、通常、都道府県警察組織での憲法上の権限では、逮捕摘発することの困難な犯罪を取り締まる、それが特務機関の存在意義だった。

それから数年、ナオには色々問題も多かったが、無事、養成学校を卒業、特務機関本部へ配属される。

それは約二年前のことである。

そして、今日、この時、この場所で、ようやく念願の勅使河原を目の前にしているのだ。

その気持ちが高ぶり、怒りが噴出してくるのも頷けなくはない。

彼女にとっては、七年越しの彼岸であったからだ。

しかし、

「ふん、だからどうだというんだ。お前の父親が死のうが、母親が死のうが、俺にとってはどうでもいいことだ・・・」

だがそう、勅使河原のナオに対する返答は、彼女の心境を逆撫でする、責任感の欠けらもない無情なその一言だったのだ。

「勅使河原！！」

だからナオは、その言葉を聞いたとき、彼に対する殺意に近い衝動が、新たに噴出したのは確かだった。

ナオが、これほどまでに、感情的になるのは稀なことだが、今の勅使河原を絞め殺したい、そんなたとえ様もない殺意が、抑えられない衝動として存在することに気付く。

だが、ここで、立場を弁えなければならないだろう。

ナオは問題はあれ、一応、特務機関という法的な国家公務員としての一員なのだ、怒りにまかせ、勅使河原を今ここで絞め殺す訳にはいかない。

それからすると、どんな理由があれ、彼を正当に逮捕しなければならない立場なのだ。「そう？　ここでよく解ったわ。あなたが父を殺した時、どんな心境でいたか。自分の組織内での出世の為に何の罪もなかった父を殺す。その短絡的かつ私利的な行為が、あなたの償わなければならない罪状だといってもいい。でも、これだけは忘れないでいてもらいたいわ。あなたの身勝手な犯罪行為のせいで、苦しんだ家族が現に存在したって言うことをね。だから、ここで私はあなたを逮捕するわ、特殊警察としての、正当な法権に基づいてね・・・」

だからナオはそう言うと、目の前で今や不敵な態度をその満面に浮かべた勅使河原に対して、引導を渡そうと、彼に近付き捕縛の意向を見せる。

厳密には、逮捕は警察がするものだが、その代行機関としての特性のある特務機関にも、犯罪者の逮捕権は認められている。

だから、今、手錠自体は、持ち合わせていなくても、これから強行的に彼をからめとって、その身柄を拘束する。それが彼女にとって、今できる引導の渡し方だった。

「さあ、勅使河原、神妙にいなさいよね。今から法の名のもとにあなた勅使河原洋二をここで逮捕します。罪状は、七年前の高崎警視殺害事件の容疑、それと銀座ブルーメントでの偽ブランド商品販売容疑、そしてその他もろもろ。とにかく、あなたの罪状は、ごまんというぐらいあるわ。それを肝に銘じて、今ここで私に逮捕されなさい。こうなった以上、逃げることは出来ないのでからね！」

「ちっ！」

だが勅使河原は、そのナオの言葉に、素直には応じなかった。

彼は、突然ナオの前で身構えると、素手でナオとやりあう心算なのか、中腰のまま敵意を向けてくる。

追い込まれた獣は、たとえ弱者と称される草食動物でも同じ事だ。勅使河原はナオを目の前にして、その隠された牙を剥き交戦意識を痛い程向けてくる。

その態度からして、そうやすやすと、特務機関に捕まる心算は微塵だにもないというような、悪あがきの態度であった。

その為、それを見るとナオには、犯罪者の容易に権力には従わない、その頑迷なる性情の一端を、ここで垣間見たような気がしていた。

それは、悪質な精神であったが、だからといって許せるもののそれではなかった。「ふっ、駄目よ勅使河原、そんな反抗的な構えを見せても。あなたが、ここで私に捕縛されることは動かないわ。だから素直に私の言葉に応じなさい、それがあなたの残された手段よ。ここで、私の手を患わせてほしくないわ。素直に従うこと、それが一番あなたにとって、今、必要なことよ。抵抗しても無意味なんですからね」

だがしかし、そうやって、ナオが勅使河原に対し動きかけると、そこで突然、勅使河原は懐にサッと手を延ばし、何かを横なぎにうちふるってきた。

「うっ！」

それは、ナオの左足の太もも辺りをかすめ、横へと抜ける。

するとその直後、ナオの穿いているジーンズの布地がパツクリと裂けて、ナオの太ももの素肌に軽傷だったが赤い裂傷が走る。

そう、彼勅使河原がうちふるったのは、鋭い切っ先を持つ一振りのナイフであったのだ。

彼は、それを今まで懐に隠し持ち、最後の防護手段として所持していたのだ。

だから不注意だったが、それを受けてナオは、左太ももに裂傷を受けてしまっていた。正確に言えばただかすっただけだが、そこには三センチ程の確かな傷が走っている。

だが、大事に至る傷ではなかったので、ナオはその勅使河原の突然の挙動に驚きつつも、少し眉を動かすだけで、さして気にすることもなかった。

唾を付けておけば治る、それ位の傷であったからだ。

「勅使河原、あなた往生際が悪いわね。ここに来て私に対抗する気？　でもね、そんな物持ち出しでも駄目なのよ。ナイフを持った犯罪者に対する対処法は、養成学校でも特務機関に配属されてからでも、飽きるぐらい訓練をうけてきているわ。だから、それで逃げる活路を開こうとしても逆に返り討ちにあうだけよ。それほど特務機関は、甘くないんですからね！！」

だが、

「ふはは、き・君は何か勘違いしているようだ。俺がナイフを持ち出したのは、これで君を刺し殺すためじゃない。これで君の動きを封じるためさ、体を痺れさせてね」

「体を痺れさせる・・・？」

だが、その言葉を聞いて、そこでナオは首を傾げていた。

ナイフで体を痺れさせるとは、一体どういうことを意味しているのか？　ナイフは切るか突き刺す道具だ。それを使って体を痺れさせるとは、いまいち道理的にも納得のい

かない言い分ではないだろうか？ ふと彼女がそう思っても不思議ではない。

現に勅使河原は、今ナオの一瞬の間隙について、脚を切り付けたではないか？ それから考えると、切ったり突く以外、他にどんな使い道があるのかと不思議に思う。

勅使河原はこの場にきて、虚言を放ってナオを何かしら攪乱しようとしているのか、そうかんぐっても致し方ないだろう。

だが、ナオが勅使河原の顔を見て、その真意に探りをいれてみても、彼の顔は、もう事がすんで自信をなびかせているような表情を呈しているのです、そこで疑問は肥大する。

ナオにすれば、勅使河原の言うことは、追い込まれた状況ではったりをかましているだけだとそう思う。

ただ単に脅しているだけだと・・・

だが、そこでふとあることに気付く、

「まさか!？」ナオがそう思って、勅使河原の顔を凝視すると、それは突然にナオの体を襲っていた。

そう、痺れ感覚である。

今は微かであったが、ビリビリと神経がマヒしはじめる、最初の兆候のようなボヤツとした鈍調感、この痺れが来て初めて勅使河原の意図に気付いていた。

「あなた、ナイフに毒を塗っていたわね!」

そう、勅使河原は、ナイフに毒を塗りこんでいたのだ。

それを裏付けるかのように、不敵な勅使河原の顔に、嘲るようなニツとした笑いが浮かんでいた。

そして彼は言うのである、勝ち誇ったように・・・

「そう、そうさ、君の言うとおり、このナイフには速効性の毒薬が塗り込んであってね。この毒薬の効果は、ほんの些細な傷口からでも人体に浸透し、その体をマヒさせることができるらしいんだ。だから、巨漢の人間ならともかく、君のように標準的な体格の女性なら、ものの十秒で、その最初の兆候があらわれてくるはずなんだよ。今の君のようにね・・・」

だがそこで勅使河原は、またニツと嘲笑うと、楽しげにナオの様子に窺いをたててきていた。

しかしナオは、そこで自分の不覚を、悟らなければならなかっただろう。

クラッ・・・

そこで、ナオに、軽い目眩のようなものが襲う。

ナオの視力がぼやけはじめ、まわりの景色が霞み始めていた。

ナオは、フラッと少しだけよろめいて、足を地面に踏ん張る。

どうやら、早くも、その効果が現れてきた様子だった。

「ははっ、どうやら、効き目が出てきたようだね。何度も言うが、この毒薬は速効性のあるものだ。だから、血液の流れを通して一度体に回れば、あと数分で体を動かすこともままならなくなってくるはずだよ。しかし、不注意だったね、まさか俺がこんな切り札を持っていたとは思わなかったら？」

「クッ、勅使河原あなた・・・」

しかしナオは、その言葉を聞くと、唇をぎっと強く噛み締めて不本意なその心境をあ

らわにする。

たしかに、不注意だった。勅使河原が、何も持たず無防備だと、はなから思い込んでいたのが失態であるといえる。

だが、徐々にだが、体がマヒしてくる感覚に身をさらしながらも、ナオは、ここを一体どうすべきかと意外と冷静な頭で判断しようとしていた。

その体の痺れに、あらがうかの様にだ……

第九節

月は、いつの時代でも、不吉な出来事の象徴のように見られる時がある。

その月が、ぼかんと一つ、西の空に浮かんでいる。

黄金色に輝く表面は、よく見ると、でこぼこな複雑な表情の様をなす。

その表面に、今、霞のごとき雲がかかろうとしていた。

それに呼応するかのように、雲の影が、地上をはう。

そして、すぐまた月は、真ん丸な、その形を空の彼方に現していた。

コンテナ置き場の一角、空き地のような場所、そこでは、先程からナオと勅使河原の二人が、合い対峙しながら睨み合いを続けている。

しかし、今の、ナオにとっては、それは不利な状況に直面していた。

体が、マヒしているのである。

鈍調な肥大感をともなう、その感覚は、足から徐々に上半身に達し、もうすぐ身体全体にまで至るがごとく浸透を見せていた。

その中で、いま勅使河原は、ナオを直視して、手の内にあるナイフを遊び始めていた。

知的でいて、その中に殺意の本能を隠した彼は、追い込まれていても優位を確信したその顔の表情をほころばせる。

彼の頭の中では、今、目の前にいるナオを、この後、どう料理して処分したらいいか模索しているようにも思っていた。

「さあ、そろそろ君の体は、自由が、利かなくなっているだろう。ここは、果たして、どうすべきか、とても迷うような、状況になってきたような気がするね。君は、体がマヒして動けなくなる。その必然的、虚をついて、私がこのナイフで、君の胸を一突きにする。そうすれば、邪魔な特務機関の手を逃れて、このまま逃亡をはかることができるだろう。まさか、このまま俺としては、君にここで捕まる訳にはいかないのね、これは、一番手っ取りばやい、解決法になるのではないかと思われる。私には、牢獄生活は、性に合わないからね」

宮坂はその時、無上な喜びをその顔に呈するがごとく、ナオに対し語り掛けていた。

彼の、いわんとしていることは明白だ。ナオが、体の自由を奪われている隙に、彼女を突き殺し、そのまま逃走を図る。それが、この場に追い込まれた者のとる、最良の手段であることはナオにも納得がいく。しかし、それは必ずしも、ナオにとっては最良とは言いかねる手段だった。

今、ナオの体は、徐々に徐々に侵食され、毒薬の痺れが全身に達しようとしている。

まだ体を動かすことは、出来ていたが、何か、異様な脱力感に襲われてくる感覚だけは、否応無しに感じられている。

ここで、勅使河原が、本気でナオに突き掛かってくれば、それを躲すことは、なかなかままならないだろう。それに、視界はおぼろげに、ぼやけ始め、近くにある勅使河原の顔さえも二重に重なり始めていた。

勅使河原がいったように、ナイフに塗られてあった毒は、やはり速効性の効果があるらしい。こんなにも早く、その兆候があらわれてくるとは、自分自身の失態を認めなければならない、状況に追い込まれてしまったといってもいい。ほんのちょっとした不注意から、このような状況を招いてしまったことに、今更ながら後悔する。

だが、体がマヒしてしまったものは、もうしょうがない。ここは、この後、どう対処すべきか、考えるほうが先決であった。

ナオは歯噛みして、勅使河原を睨み付ける・・・

「さあ、さあ、ここはどうしよう？ 俺としては、さっき二発顔を殴られた恨みもあることだし、ここは、そうだな、軽く鬩ってから、そのあと殺してやろうか？ それとも、一思いにブスリ、それがいいかな？ とにかく、ここにきて、俺は、非常にワクワクするよ。ウォンさんとの人身売買の取り引きも、ぶち壊された事だし、それに、どうも銀座ブルーメントの方も、特務機関と警察によって摘発を受けたようだ。その点からに関して、俺の立場は非常に困窮してしまったといってもいい。それもこれも皆、きみのせいのような気がするね。俺としては、非常に頭にくることだ。せっかく、これから黒峰会の準幹部から、正規の幹部へと登りつめる前段階に達したこの好期に、こんな事に、なってしまふなんて、不本意にも程がある。だから、ここは、その恨みを晴らすために、君を血祭りに上げる。これほど、ワクワクすることはない。そんな訳で君を殺す、それが一番の不満のはけ口になるだろうから、君には申し訳ないが、ここで死んでもらうことにするよ。せっかくの、美人に残念だけどね、これは致し方ない。君が私を追い込んだのが悪いのだから・・・」

勅使河原は、得意げだった。

それは、鎌田や磯貝にも無かった、かれ独特の知的ぶる口調に後押しされて、非常に嫌味ったらしい声に聞こえる。

この勅使河原に関して言えば、古代の暴君ではないが、非常に、独善的にさえ感じられるのは気のせいだろうか？

七年前の、父を殺害した責任を問われても、それに対して罪悪感など感じていないその態度を見ると、ナオは非常に落胆せざるおえない。

勅使河原が、少しでも犯した罪を悔い改めていれば、ナオとしても怒りをそれほど顕さなかったかもしれない。

だが、今や、彼は、ナオに不利な状況を強いて、まるで死刑宣告するように鬨って楽しもうとしている。

それからすると、ナオには、犯罪者の精神は、こうも屈折し歪んだ性情を持つものなのかと、改めて認識せざるおえない。

悪業を重ねた犯罪者の常として、自分の立場が優勢になれば、強気に出る。

それは、彼らが容易に権力には従おうとしない、性情の者であっても、ハイそうですかとなかなか率直に認められることの出来ない性癖に思える。

だからナオは、その痺れゆく感覚の中で、勅使河原を見つめ一人憤慨してみせたりしていた。

これが犯罪者の正体なのかと・・・

「あ、あなた、あなたって卑怯ね、そして臆病者だわ。素手で戦おうともせず、姑息な手段、毒塗りの刃を隠し持って、追い込まれた状況を打開しようなんて、これじゃ馬鹿だったけどのびた鎌田や磯貝の方が、犯罪者であってもまだ男らしかったわ。でも、あなたは違う、鎌田が倒れたとき、私の前からこそこそと逃げだそうとして、そして追い込まれれば反則的な手段を使って、その窮地を乗り切ろうとする。あなた、自分に自信が無いんでしょう？ そんなナイフを、いつも隠し持っているということは、それが無い証拠でもあるわ。それに、知性的ではあっても、地位に固執している。あなたは、黒峰会の幹部の椅子を狙っているようだけど、それが滑稽で卑しく映る。たかが犯罪者組織の幹部になって、そこに何があるって言うのかしら？ 所詮、犯罪は日の当たらない裏稼業、たえず追われる立場に身を置かなければならない。だから、そこに価値を見いだすあなたの精神が、不可解に映るわ。そして、私は職務上、多くの犯罪者の素顔を見てきているけど、どんなに狡猾であれ知謀にすぐれていても、いずれは、その罪を暴かれ逮捕されることになる。そうである以上、あなたも同じ、たとえこの場で私を殺せたとしても、それは一時的な活路を開くための、危険をとまなう逃げ道でしかない。こんなこと言っただけで、たとえあなたが、この場を逃げたとしても、必ず、あなたは法網に掛かり逮捕される。それが、あなたの命運といってもいい。でも、どうしてそれほどまでに、黒峰会の幹部の地位に固執するのか、それを今ここで聞きたいわね。一体、どうしてなのかしら？ あなたが、黒峰会の命を受けて私の父を殺したとき、あなたがどんな地位を望んでそれを実行に移したのか、それが疑問だわ。この際だから、それを話さない、分かりやすくね・・・」

ナオの言葉は、宮坂に対する批判だった。

それと質問。

彼女は、体がマヒし勅使河原にナイフをちらつかせられても、動じた気配は見せず、ただつまらなそうにそんな言葉が出ていたのである。

それは、勅使河原の真意を探りたいという、ナオの痛切的意向もあったが、父を殺した犯人の精神とは、どういうものであったのか、それが、今、一番知りたかったからでもある。

だから、今ナオは、不利な状況にあるにもかかわらず、それだけを最後に聞いておきたかったのだ。どんな打算的精神に基づいて、犯罪がとりおこなわれたか、あまり面白い話とは思えなかったが、一度聞いてみる価値はあると思ったからだった。

すると、勅使河原は、ナオのその言葉を聞いて意外そうな顔をする。

だが、次には、小さくほくそ笑むと、破顔してナオを見つめてくる。

そして、唐突ではあったが、一度ナオの言葉に対する所見を述べると、それに答えて話し始めるのである。

「ほーう、君は、私に教訓を、垂れようとしているのかね。でもまあそれはいい、俺としては、君に何を言われようと、まったく意に介さない。しかし、これは私の意見だが、君が考えている犯罪者の素顔は、ちょっと違うような気がするよ。犯罪者は、狡猾であっても馬鹿ではない、自分がいかに裏社会で生き抜いていくか、それは、それ相応の苦労があるのだよ。

君には解らないと思うが、犯罪者の殆どは、一般の社会に溶け込めず仕方なくあぶれてしまった者の、集まりでできているといってもいい。ただ単に、指向性の違いから、世間一般に白い目で見られ迫害を受ける。持って生まれた性情ゆえに、どうしてそんな事にならなければならないのか、生まれ持った性情は、自分自身でもなかなか変えられるものじゃない。それは、善人悪人の区別なく、誰だってそうではないかい？　しかし、世間とは冷たいのだよ、常識的社会の枠組みから外れるものは、全て外道のように思っている節がある。それに、偽善的正義が蔓延する社会では、ますます性情の悪辣な者の立場は、危うくなる。考えてもみ給え、「人民の為、人民による政治」を呼称する政治家にも、善人面しているが、裏では悪徳企業と連んでいる者も、ごまんという。

先生、先生と呼ばれ、民衆にちやほやされる、善人的政治家も正体を暴けばそんなものだ。

自分の政治的、政権を確立することしか考えていない。

だから、生まれ持った性情の悪さで、社会からはみ出さなければならなかったもの達に、どれ程の罪があるというのか。善人面して、あくどい事をするより、堂々と悪人は悪人らしく悪業を志したほうが、よっぽど正道的だとは思わないか？　犯罪者には、犯罪者なりの道義と秩序がある。社会からはみ出してしまった者の、行き着く先は、邪道を生業とするしかないのさ。

まあ、たまに中途半端な悪人もいる様だが、それらの連中に関しては、仲間という思いはないね。しかし、鎌田や磯貝達も、そんな社会の秩序からはみ出してきた者だ。だから俺としては、友人ではないが、そんな奴らを集めて養ってやっているといってもいい。犯罪は、確かに罪だ、だが、それはあくまで誰が造ったか解らない国家の法に基づいてある、判断基準でしかない。結局、正義面したものが、勝手な法を造り、それを世間に流布した。だが、結局のところ、人間とは、獣の性情を断つことは出来ないのだよ。弱肉強食、それが動物としての人間の本当の姿なのさ・・・」

そこまで言うと、勅使河原は、一度口をつぐんでいた。

ナオには、その話の半分は、意味が解ったが、そのあとの半分はいまいち解らなかつた。

しかし、とにかく犯罪者を悪者とだけ見られることが、嫌らしい。そこまでは、意外とよく知ることが出来た。

そしてまた、勅使河原は口を開く。

「それでだね、君が言った俺が望んだ地位に関してだが、それは、いずれは、黒峰会という闇組織全体を統率するマスターとしての、地位を望んでいたといってもいい。俺は、

小さい頃から親がいなかった。死んだわけじゃない、俺は、捨てられたんだ。俺の父親は、無類の博打好きだったらしくてね、女癖も悪かった。母親は、俺を産んですぐどこかへ失踪してしまったらしい。どうやら、親父に、失望しての事らしいが、そんなことはどうでもいいんだ。だが、俺は生まれると、父親と二人きりで生活を始めることとなる。しかし、この親父ときたら偏屈で、それに暴力的だった。乳児時代はそんなことは当然解らなかったが、二歳から三歳の年になって、俺は、子供ながらも気づき始める。(この親父は、俺を憎んでいるな)と・・・

だから、俺は、当然親父には懐かなかった。親父は、いつも失踪した母以外の女を家に連れ込んでいた。それで、俺の居る前で、平気でいちゃつきやがる。俺は、子供心に、それが何か後ろめたいもののように思っていた。

俺が、四歳の頃になると、親父との生活は荒んでいた。

親父は、何人もの女を囲って、一日中、働きもせず家に入り浸っている。日々の生活費は、その女たちに、払ってもらっていたのさ。

女たちは、居酒屋のママや、やはり飲み屋のホステス、そんな連中ばかりだ。厚化粧をし、いつも酒臭い。まだ幼かった俺には、それが退廃的な環境のように思っていたよ。自分で言うのも何だが、まだ幼かった俺にはそういった生活を嫌悪する少しばかりの思いがあったのは確かだ。しかし、そんな生活が続く中、親父は、あからさまに俺を疎んじるようになる。そう、俺に対する暴力が、始まったのさ。ある時、親父に酒をつげといわれて、俺はそれに従った。重たい一升瓶を不器用に抱えて、親父が持つコップに酒をつぐ。だが、その時、不注意で酒を畳の上にこぼしてしまった、それだけで殴られたよ、何人もの薄汚い女たちの前でね。

顔は、痣だらけになり、瀕死の状態になるまで、何度もね。しかし、それを見ていた女たちは、それを止めようとはしなかった。その後も、何度も何度も暴力を受けた。ある時は、食事の時、手を洗わなかっただけで、殴られ荒縄で家の天井に吊された。また、ある時は、親父と女たちがいちゃつく姿を見て、笑ったということで、口が利けなくなるまで蹴られたよ。

だが、俺は耐えた、誰も擁護してくれない中で、本当の母親を恋しく思ったことなどなかった。ただ俺が思っていたのは、いつか俺は、こんな親父など追い越して偉大な権力を手にしてみせるのだと、そればかりを考えるようになる。子供ながらに思ったのは、それだよ。権力さえ手に入れば、こんな薄汚い親父になんかに、殴られたりはしない。こんな子供のことを何とも思わない親父になんかに、好き勝手なことはさせはしないとね。

そんなことを思いつつ、四歳の冬を迎えたとき、俺は捨てられたのさ。

ある日、突然、親父が俺を連れだして、電車に乗せたんだ。俺は、それを不思議に思ったが、嫌々ながらも親父についていった。そして、どことも解らない遠くへつれてこられると、ある修道院の前で「ここで待っている」といわれて、親父はどこへともなく姿を消した。

そして、それっきり、戻ってこなかったのさ。

俺は、その時、捨てられたのだと悟った。

いくら四歳の子供であっても、それ位は解った。

冬の寒空のなか、俺はその後、ずっとその場に座り続けていた。

だが、そこで修道院のあるアマさんが、声をかけてくれた。

それで、俺は、その修道院で養われることになった。

修道院での生活は、厳しくもあったが、親父と一緒に暮らしていた頃よりはマシだった。

殴られて、暴力も受けることはなかった。だが、俺にとって受け入れられなかったのが、宗教という救いを叫ぶその言葉だった。

当然、修道院である以上、宗教とは縁深いところにある。

その中で、朝のミサだかしのれないが、馬鹿馬鹿しくも神に祈りを捧げなければならない。俺にとって、それが苦痛だったんだよ。俺の幼心としては、神など存在する訳がない、俺の短い人生経験上、そんなことがあるはずがないと思っていたからね。だから、俺は朝、昼、夜、馬鹿の一つ覚えのように繰り返される、祈りの時間を拒絶しつづけた。宗教などクソくらいと、思っていたからだ。だから、当然、その修道院の院長には、怒られ叱られたよ。しかし、俺はたとえ怒られても、その後ずっと神に対する祈りなど捧げなかった。

そして十五歳の年になったとき、俺は、その修道院を出て、犯罪の道に進むことを決意したんだ。その手始めに、まず修道院で前から目を付けていた一人のアマさんを無理矢理犯してからそこを出たよ。その時の、喜びと云ったら、まずなかったね。宗教という名の盲信的理念に酔った、若い女を犯したときの、快感は今も忘れない。俺にとっては、偽善的仮面をかぶった連中は、へどが出るくらい許せなかった。だから、そのあと俺は、東京の街に出ると裏界隈で、不良たちと連中で、様々なあくどい事をして金を稼いだ。

そして、そんな生活がしばらく続くと、ある男たちに目を付けられるようになる。

それが、今の黒峰会の連中だった。

俺は、誘いをかけられたんだ、東京の街でチンピラ紛いのことをしていたおれたちに、黒峰会は「ウチで働かないか？」と誘いをかけてきたんだ。

だから、おれはその誘いにすぐに乗った。これはいい機会だと、思ったからね。黒峰会といえば、東京の裏事情では、影の黒幕といわれていた組織だ。その組織に、構成員として入れば、その後の出世は自分の力次第と思ったから、おれは、その話にすぐOKしたよ。そして、はれて、黒峰会の一員となった。

その後、おれは、どんな汚い仕事でも、不満を洩らす事無く率先して行ったよ。

それもこれも、いつかは黒峰会でナンバーワンの地位に登りつめることを夢見ていたからだ。

だから、高崎警視を殺せといわれた時も、俺は躊躇うことはなかった。いや逆に、これはチャンスだと思ったよ。

その時、おれが約束されたのは、幹部第十五位の地位だった。

その地位は、黒峰会の二十人いる幹部の中でも、十五番目に位置する相当割りのいい地位だったと云っていい。だから、俺はそれを引き受けたよ。そして高崎警視を、あの日の夜、殺した。

何せ、警官殺しは、犯罪組織では、名誉なこととされていたからね。

犯罪者にとっては、出世をもっとも早道で登りつめることのできる手段だ。

だから、俺は高崎って言う警官を殺したとき、何の同情も罪悪も感じなかったことは

確かだ。

しかし、しかしだよ、その時、黒峰会は、俺に幹部十五位の地位を約束しておきながら、それを先のぼしにしてきた。それはまだ若く、組織の一構成員でしかなかった俺には、幹部の椅子は、まだやれんということなんだ。たしかに、高崎警視を殺せといわれた時、幹部の椅子を約束された筈だった。しかし、いざ殺してみると、もう少し働けば準幹部に昇進させてやるというものだったんだ。

俺は、裏切られた思いをしたね。だが、それでも俺は、黒峰会を脱会もせず上の方針に従ったよ。今は駄目でも、いつかは、幹部になって思ったからね。そして、そのナンバーワンに必ず登りつめてやると、

それから俺は、茂満の援助を受けて海外へ逃亡した。

もちろん、海外で逃げていたばかりじゃない。黒峰会には、海外にも支部があり、俺はそこで地道に働いていたんだ。そして、ほとぼりが冷めると、日本へと帰ってきた。日本で用意されていた俺の地位は、準幹部の地位だった。まあ、七年近くも海外にいてもらった地位が準幹部の地位だと聞いたときは、少し落胆したが、俺は、まだ若いから多少不満はあったが納得したよ。しかし、幹部の椅子に座ることは捨てきれなかったがね……」

勅使河原は、そこまで言うと、ニッと笑っていた。

それは、どこか皮肉めいた笑いだったので、ナオはその時、嫌悪感を漂わせ彼を見据えていた。

しかし、その話を聞いて同調はしなかったが、なるほどと思う気持ちも確かにあったのは事実だった。犯罪者、全てに言えることではないが、勅使河原も恵まれない人生を歩んできたことらしい。特に、父親に虐待を受けていたということは、この前、逮捕した米川克彦と共通している部分がある。彼も小さい頃から虐待を受けて精神がねじまがってしまった犯罪者の一人だ。

その事からすると、勅使河原も、幼少の頃より様々な葛藤のなかに沈んでいたのだろう。

幼少の頃に受ける虐待は、その人間の健全な精神を破壊してしまうというような話を、聞いたことがある。

だから、勅使河原が、異様に地位に執着するのも、解らないではない。

だが、それが何だ、というような、突っ放した思いがわいてくるのも確かだ。

どんな事情があれ、犯罪者は大抵利己的である。

全ての行為が、自分の利益に還元される生き方を、好むのも事実だ。

もちろん、それは、全ての犯罪者がそうとは限らない。

だが、この勅使河原は、どんなに不幸なおいたちがあろうと、その利己的なしかも打算的な部類のそれを脱しえない。

やはり、罪に問われるべき、立場の人間であるのだ。

そう思うとナオは、今までにはない冷徹な思いで、宮坂を見下していた。

そして、ふと洩れ出た言葉は、これだったのである。

「陳腐ね……」

そうそれだ。

勅使河原のおいたちを聞いて、思ったのがそれなのである。

「何！」

だから勅使河原は、その時、一瞬、顔色を変えてナオを食らい付くような目付きで、睨み付けていた。

聞き捨てならない言葉と、思ったのかもしれない。

プライドの高い男として――――

「おまえ、お、お前！ 陳腐とは何だ！ 俺の話聞いて、笑いたいのか？ 俺はな、ここまでになるのに、苦勞を重ねてきたんだぞ！ それを陳腐とは、何だ！ その言葉を撤回しろ！！」

だが、

「ふん、何が苦勞よ。ただあなたは、どんな理由があれ、罪もない人々の行為を踏み躪ってきただけの男じゃない。それが陳腐じゃなくて、何なのかしら。あなたの行為の全ては、自分の小さい頃に抱いた権力を手に入れるということに、根ざしているのでしょ？

だけど、それは哀れだわ。私も、マトモな神以外、例えばオカルト的な神や悪魔なんて信じないほうだけど、あなたには、まともな道に進むべきチャンスは修道院で生活を始めたときからあった筈でしょ。それなのに、結局、犯罪の道に走った。それは、あなたが一時的、小さな思いにとらわれていただけの、結果のような気がしてならない。あなたは、どうして修道院に拾われたとき、今までにない別の世界があるのだっていうことに気付かなかったの？ それは何もかも、あなたの中に馬鹿な実の父親に対する、恨みと憎悪だけを持ち続けてしまっただけのことだからじゃない。たしかに、恵まれない環境で育ったということは、同情に値するわ。でもね、修道院であなたは変わろうと思えば、変われたはずよ。でも、それが出来なかったって言うことは、それだけ、あなたが前の生活にとらわれすぎたからなのよ。結局、馬鹿な父親を恨んで、そんな父親をいつかはどこかで見返してやろうという、チンケな思いにとらわれ過ぎてしまった結果なんじゃないの？ 不幸な人はね、あなただけじゃなくて、世間にはいっぱいいるのよ。だけど自分が不幸だからって、犯罪行為に走ってしまうのは、結局、弱い精神しか持ち合わせていないからだと思うわ。不幸でも、それに負けずに、正しい道を歩もうとしている人だって一杯いるのに、あなたは、そんな人たちを見習うべきなのよ。だから、所詮あなたは、陳腐な思いにとらわれた、とるにたらない犯罪者といってもいいわ。どんなに悪辣な精神者でも、変わろうという思いがあれば、変わる時だってあるのよ。その事をよく覚えておきなさい、この馬鹿！！ 所詮あなたは、精神が弱いよ・・・」

「何！？ 何だと！！」

その言葉を聞いて、勅使河原は怒りを顕わにしていた。

それは、何よりも、まだ自分より年が若い、しかも女にそんなことを言われたのだから、自分の自尊心がそれを許せなかったのだろう。

自分が誰よりも苦勞を重ねて、成長してきたんだという自負がある者にとっては、ナオの言葉は挑戦的に聞こえたのかもしれない。

自分の歩んできた人生を、否定され、陳腐などといわれた日には、聞き流すことは出来ない。

だからその時、勅使河原は、ナオを目の前にして手持ちのナイフを振りかざし、その目に殺意を浮かべて身構えていた。

そのまま例えば一突き、そうすれば、この講釈じみた事を言う女一人を黙らせる事ができる。

それを実行すべく、次には、彼は有無を言わさず動いていた。

そのナイフを、かざして。

シュッ！！

勅使河原の腕がナオの胸元へと走る。

だが、その一振りには敢えなく空を切る。

避けられたのだ。

ナオは、痺れる体を何とか横に動かすと、ぎりぎり反転、横へ素早くとはいかなかったが、ナイフの一撃をやり過ごす。

しかし、その一撃を避けたはいいが、何せ体が痺れているのでバランスを崩し、その場でヨタつく———そこへ二撃目が来た。

勅使河原は、最初の一撃が空を切ると、そのかえす勢いで、ナオの右側面を狙う。だから、ナオは、その一撃を完全には避けきれなかった。

シュッ！

ナイフは、ナオの右側を掠めると、その右の二の腕に赤い裂傷を走らせる。

そう、またナイフが、ナオの体を掠めたのである。

それは、深い傷ではなかったが、右腕のセーターの編み目を切り裂いて、横へと抜けていた。

それを受けて、顔を少しだけ顰めるナオ。

だが、その時、勅使河原はナオを見据えて笑っていた。

身動きがままならない、ナオを馬鹿にするように・・

「はははっ、どうだい、ナイフで傷を付けられる感想は、君のような美人が、傷ついていくのを見ると、とても楽しいよ。しかも、君は特務機関だ、おれたちの宿敵といってもいいからね。でも、体がマヒしている割には大したものだね。まだ、おれの攻撃を躲せる余力が残っているのは見事だよ。だけど、次の一撃は躲せるかい、もうすぐ君はどうあがいても、身動きがとれなくなる。だから、ここが正念場だろうね。だが、おれを侮辱したことを謝れば、許してやらない訳でもないよ。でも、手をつけて土下座しないと、許してやる訳にはいかないからね。君にそれが出来るかい？ おれの目の前で・・」

しかし、

「ふん、そんなの願い下げだわ。あなたに頭下げるぐらいなら、死んだほうがマシよ。でも、絶対、負けないけどね！」

だが、この状況にきて、その言葉は、勅使河原には強がりとしか聞こえなかった。

現に、ナオは、体の痺れの為ふらついているのだ。

おそらく、視神経もマヒして視力を保つのも、ままならないだろう。

そんな中で、ナイフを持った自分と、ナオが渡り合える筈はないと思っていた。

しょせん、ナオは虚勢を張っているだけだと、

だから、勅使河原は恐れを抱かなかった。

彼は、一頻りナオを嘲笑うと、もう一度、中腰姿勢で構えてナイフを振りかざしていた。

次の一撃で、止めを刺してやろうと――――

だがその時、ナオはまずいと思っていた。

自分は、宮坂の言うとおりに、徐々に身動きがとれない状況に、追い込まれてきていると解っていた。さっきの勅使河原の一撃、そして二撃目を躲せたのも、ナオにもって与えられた天性の勘によるものが大きい。しかし、今度、突きかかって来てでもこられたら、さすがに躲す自信はなかった。

相手との間合いが掴めないのだ。

体の痺れとともに、視力自体も低下しているように思う。

足が正座して痺れた時のように、ガクガクと力なく笑う状態――――そして、奇妙な脱力感、もう少しすれば立っていること自体もままならなくなる。

これは万事休すだろう。

しかし、勅使河原は、そんなナオに止めを刺そうと、ナイフを固く握り締めている様子だ。

そして次には、躍り掛かってくるだろう。

勅使河原は、ナオの顔を冷たい目で見つめると、やはりニッと一つ薄笑いを浮かべて、その直後ナイフを一突きにしてきた。

ナオは、それに、察知能力だけは反応したが、体がついてこなかった。

だから、そのまま刺し殺されると、覚悟した。

バーン、バーン

だがそこに、二発の銃声が、とどろくのである。

そして、

「勅使河原洋二、お前をここで逮捕するぞ！！」

聞き覚えのある男の声が響いた。

それに驚き、ナオは、後をふりかえり、声の主が誰かを確かめる。

すると、丁度、空き地に至る入り口付近に、課長が立っていたのである。

特務機関・特務一課、本部課長、佐渡一だ。

彼が、手にハンドガンを持ち、峻険な顔をして立っていた。

そう、助かったのである。

「課長！？」

「うヴッ！」

ナオが課長に気をとられて、うめきの声を聞き、また勅使河原に振り向くと、そこでは、肩に銃弾を喰らって血を流している彼の姿があった。

そう、勅使河原は、課長の銃弾を受けて負傷していたのだ。

「く・くそう・・・」

勅使河原は、思わぬ援軍の登場に悔しく歯軋りすると、手にしていたナイフを地面に落としてしまっていた。

右肩に銃弾を受けたからだ。

そして、さっき迄の、交戦意欲はどこへやら、そのままナオのいる場所より逆方向に走りだすと、そのまま逃げ出そうとしていた。

しかし、どこへ逃げるといふのか？

勅使河原の向かう先は海だ、そこは、ちょうどコンテナの壁が途切れ、どす黒い海面が開けている、逃げ場などないはず。だが、ナオがその場所を、暗い闇のなか、目を凝らしてみると、そこには一隻の手漕ぎボートがつながれていた。

(まずい・・・！)

勅使河原は、それを使って、海面へ逃げるつもりのようなのだ。

その為、ナオは、それを察知すると、動かぬ体を鞭打ってなんとか彼の後を追い駆けた。

それは、必死だった、からかもしれない。

このまま、彼、勅使河原を、逃がす訳にはいかないという思いが、痺れているはずの体を何か、底知れない魔力でも授かったかのように動かしていた。

そして、追い付いたのである。

彼の後へ・・・

「勅使河原、逃がさないわよ！！」

そして、ナオは、彼にそう言い放つと、咄嗟的に足を大きく振り上げていた。

直後、「ドガッ！」っという音が炸裂すると、勅使河原の脳天には、ナオの踵落としが決まっていたのである。

そして、勅使河原は地面へと何も言わず昏倒、それでようやく全ての決着がついたのであった。

ナオの一撃は、黒峰会の準幹部の地位にあった、勅使河原を完全に沈黙させ引導を渡すことが出来ていた。

結末としては、あっけない最後であるが、これで勅使河原は、しばらく起き上がれないだろう。それだけ、ナオの踵落としは、見事に決まったからである。

おそらく、勅使河原が、目をさまして気付いたときには、既に警視庁の留置所の中だ。

まあ、それは当然の、行く末だが、同情などしてられない。

彼は、父を殺した犯罪者、申し開きの余地はなかったのである。

しかし、それはいいのだが、頭がくらくらする。

どうやら、痺れが、全身にまで達してきた様子だ。

「ナオ、大丈夫か？！」

そんなところに、佐渡一課長の声が聞こえてくる。

だがナオは、その声を聞くと、安心したかのように、その場に座り込んでしまっていた。

そして意識が昏倒、そのまま仰向けに倒れ意識を失う。

だが、死んだわけではない。

その証拠に、ナオは気を失っても、その胸元ははっきりと上下し息をしていた。

ナイフに塗られていた、痺れ毒が、全身に回ったことによる一種の酩酊だ。

しかし、気を失って倒れているナオの顔は、意識がなくても、晴れやかな清々しい顔をしていた。

父の仇を討てた、その事が、彼女の達成感を呼び起こしたのかもしれない。

ようやく報われた思いとして・・・

エピローグ

エピローグ

ナオが、自室で目をさますと、時間は十時を過ぎていた。

なぜ、目覚まし時計が、鳴らなかったのだろうか？

起きたとき、最初に思ったのがそれだ。

しかし、ふと、そこで思い出す。

そうだ昨日、仕事を終えて、自分も含めた、ゆかりとモモの三人で宴会を開いたのだ。

それは、祝・勅使河原逮捕の達成パーティー、その為に、夜おそくまで飲み明かしたのだ。

もちろんナオは、お酒は飲めなかったが、ゆかりはともかく、あの騒がしいモモに、「少しだけ飲んでみたら？」とそそのかされて、コップ三分の一ぐらい飲んだ、それがいけなかったのだ。

その後、ナオは悪酔いしてダウン、ゆかりとモモに介抱されたが、そのままベットに潜り込んで、ゆかりとモモが帰った後も吐き気をもよおす感覚に癖々し、そのまま寝てしまったのだ。

そして目が覚めると十時、約束の時間は、とうに過ぎていた。

だが焦っても仕方がない、とにかくナオはベットから身を起こすと、下着姿になり、鼻歌を謡ながら外行きの服に着替えを始めていた。

そして顔を洗い、歯をていねいに磨くと、時間は十時二十分———だが、それでもナオは、焦らなかった。

とある駅、そのホームの三番線では、今や、ゆかりとモモが、今か今かとある女の登場を待ちわびていた。

約束した時間から、もう既に四十分はすぎている。

このままだと、忍耐力の限界が近付く。

あの性格破綻娘、一体何をやっているのか！？

そう叫びたくなる。

時間にルーズな、ナオの事だ、どうせまた、鼻歌でもうたってのんびり待ち合わせの場所へ、顔を出すつもりなのだろう。

大体、あの女の行動パターンは、予想がつく。

ナオが、約束の時間をオーバーして、ひょっこり顔を出すのは、今日に限ったことではない。

しかし今日は、ナオがめずらしく、自分から三人で出掛けようと言いだしたのだ。

そのいいだしっぺが、遅刻するなんて、以ての外であるように思う。

「ナオ先輩、遅いですねー？」

しかしその時、モモは、ゆかりが不機嫌にいらついているところへ話し掛けてくる。

だからゆかりは、その時、まるでナオみたいな口調で「そうね」といって、腕時計を憎らしげに睨み付けていた。

ゆかりは、待たされるのが嫌いな質なのだ。

しかも、ナオは、今の時点で四十分も遅刻しているのだ、遅刻にだって限度はあると思う。几帳面なゆかりからすれば、人を待たせることに、申し訳なさを感じるものだが、あのナオという女はそうではないらしい。

特務機関に、出勤してくるときは、遅刻などしないのだが、いざ勤務外のこととなると時間の感覚がマヒするのかもしれない。

でもとにかく、今は待つことしか出来なかった。

「はい、お待たせ、待った？」

するとそこへ突然、女子高生ぶった声色で、一人の女がひょっこりと姿を見せる。

そうナオだ。

やっと来たのである。

「やだナオ先輩、やっとあらわれましたね。もう遅いですよ、遅い遅い、私待ちくたびれましたよー」

だが、その時の柏木モモの反応といえば、やはり幼稚じみた、あっけらかんとしたものだ。

普通、遅刻してきた人間には、怒るのが当然の反応だろう。

しかし、この柏木モモという女は、馬鹿なのか、ナオが現れるとまるで甘えて擦り寄る猫のようにナオに頬摺りを始めている。

まあ、これは、いつもの光景だが、ゆかりにはそれが恥ずかしく思えた。

しかし、それはともかくとして、今は怒るときである。

だからゆかりは、ナオを見据えると、少し目くじらをたてて注意していた。

「あのねナオ、何が「はい、お待たせ、待った？」よ、あなたいま何時だと思っているの？ 十時四十五分よ五分。あなたには、良識って言うものがないの？ 普通、自分で外に出ることをさそつといて、自分が遅刻してくるなんてどういう神経しているのかしら。こう言っちゃ何だけど、子供だって、遊びの約束の時間には遅れずに来る子だっているのよ。それをもう、二十四にもなる大人が、遅刻するなんて……ん？ ……ん？？」

だが、ゆかりがナオに対して、言葉をまくしたてたとき、そこですつとナオがゆかりの目の前に何かを差しだしてきた。

それに、気をとられるゆかり——その時、ナオは普段見せないニコニコとした顔つきで、ゆかりにその何かを手渡してくる。

それは包装され、紐でくくられた、お土産屋さん等で見られる土産箱である。

その箱の包装紙には「仁木氏田屋名物」と書かれている。

ゆかりはそれを見て、何かに気付く。

そして・・

「こ・・・これって、仁木氏田屋の羊羹じゃない！」

そう言うゆかりは、その土産箱を手に取り、しげしげと凝視していた。「そうよ、それ仁木氏田屋の芋羊羹、ゆかりあなたが欲しがると思って買ってきてあげたわ」

ナオはそう言うのと、また、にっこり笑って、ゆかりのご機嫌をうかがう。

すると、

「こ、これ私にくれるの?!」

ゆかりは、突然すっとなきような声を上げて、ナオの顔をまじまじと見つめていた。「そうよ、いらぬならいいけど、あなた、前から仁木氏田屋の羊羹、食べたいって言うていたでしょ。だから買ってきてあげたのよ、でもそれで、何も文句はないわよね。いらぬなら別だけど・・・」

「えーっ、いるわ、いる・・・ありがとナオ」

だがそこでゆかりは、ナオの策略に、はまってしまっていた。

そうナオは今日、遅刻して、またゆかりが青筋たてて怒るのではないかと思ひ、その布石として、待ち合わせの場所にくる途中その芋羊羹を調達してきていたのだ。

仁木氏田屋の芋羊羹は、羊羹好きの者の間では、死ぬ前に一度は食べてみたいという老舗の一品なのだ。

ゆかりは、その仁木氏田屋の芋羊羹を、前から一度食べてみたいとナオとモモの二人に話していたことがある。

彼女は、無類の羊羹好きで、両親や親戚がどこか旅行に出掛けたときなどは、必ず羊羹を土産に買ってきてもらうらしい。

だから、目の前に幻の一品といえる、仁木氏田屋の芋羊羹を見せ付けられると、ナオが遅刻してきたことなどつい忘れてしまい、そのあと、目くじらをたてて遅刻してきた責任を問うということにはならなかったのだ。

今、ゆかりは、ナオに羊羹をもらって、ほくほく顔である。

だが、それを隣で見ていたモモなどは、ゆかりを羨ましそうに見つめているのだった。たぶん、彼女の本心としては「どうして私にはないの?」という思いがあったかもしれない。

だからモモは、それを見ると、ナオの計略に気付いて、ゆかりに対しこう言うのであった。

「あのですね、ゆかり先輩、これは罠ですよ罠。ナオ先輩はね、ゆかり先輩をその仁木氏田の芋羊羹で、ご機嫌をとる・・・でえ！」

しかしその時、モモが最後までその言葉を言いおわらぬうちに、ナオの平手打ちがモモの頭に炸裂していた。

ペシッという小気味よい、音を立てると、モモは脳天を押さえて「いててて」と俯く。

しかし、その後、キッとナオに対して鋭い眼差しを向けると、モモは非難めいた口調でナオに対しわめき散らすのであった。

「ナ、ナオ先輩、痛いじゃないですか！ 私は、ゆかり先輩に本当のこと言おうとしただけなのに、それは口封じですか？ 何も頭をひっぱたくことはないでしょ。でも依怙最良ですよ、依怙最良。ゆかり先輩にだけ羊羹あげて、私にはなにもないなんて、これは

依怙最眞のなにものでもありません。だからゆかり先輩、騙されてはいけませんよ、これはナオ先輩の策略ですからね・・・」

だが、そんなモモの言葉を、ゆかりは聞いていなかった。

ゆかりは、羊羹入りの箱を抱えると、至極幸福そうな顔をして惚けている。

どうやら、夢にまで見た羊羹をもらって、夢心地になっているらしい。

たかが、羊羹一箱もらったぐらいで、遅刻のことなど忘れてしまうなんて、現金な気がしないでもないが、モモとしては不満たらたらだった。

ナオが遅刻して、それを待っていたのは、ゆかりだけではないのに、モモがもらったのはナオの平手打ちだけ、これでは割りに合わない。

それにモモは、ナオやゆかりと親しくなってから、一度も何かもらったことはないのだ。

特にナオは、人に何かをあげるといような事はしない、ケチンボな女性だ。

だからゆかりが、ナオに羊羹をもらったことが余計羨ましく思えた。

ナオに、何かをもらうということは、滅多にないからだ。

しかし、まあ、よく考えてみると、しょうがないのかもしれない。ゆかりの気をそらすには、好物でつる、それが一番効果的なように思える。

ゆかりが怒りだすと、またナオとの唾み合いが始まって、口を利かない状況に突入する恐れがある。

もちろんナオは、ゆかりが怒ろうと、意に介さない質の性格だが、今日に限ってはそれを避けたかったのだろう。何せ今日は、ナオ自らめずらしくも、ゆかりとモモを誘ったのだから。

だから、仕方ないので、モモは羊羹のことなど忘れることにした。

「ところで、ナオ先輩、今日は、一体どんな用事で私たちをここに呼びだしたんですか？

買い物？ それとも映画鑑賞？」

モモは、羊羹をもらって喜んでいるゆかりを尻目に、ナオに対して、今日の予定を聞いてみていた。

すると、

「そうね、まずは花屋にいくわ。そしたら歩いて公園を散歩よ。とにかく今日は、私に黙ってついてきて、どうせ二人とも暇なんだから・・・」

「花屋？ 公園？」

モモはその言葉を聞くと、疑問げに首を傾げていた。

「そうよ、とにかくみんな揃っていることだし、そろそろいきましょうか」

ナオはそう言うと、ゆかりとモモを引き連れて、駅のホームを後にしていた。

ゆかりとモモの二人が、ナオによって連れてこられたのは、都内のある公園だった。

そして、今三人は、公園の花壇近くにあるベンチに腰を下ろして、アイスクリームを食べている。

冬にアイスクリームとは、少々寒気がする光景であるが、今日は、一応、冬でも比較的ぼかぼかとした珍しい陽気だったので、冷たいアイスクリームは結構おいしかった。

だが、先程からゆかりとモモは、ナオに対して怪訝なものを感じていた。

ナオは、この公園にくと、無口になっていた。

もちろんナオは、お喋りではないが、今のナオはちょっといつもと違う様に思える。

何かしらの躊躇いが、その表情に浮かんでいるのだ。

「ねえどうしたのナオ、さっきから黙って、どこか具合でも悪いの？」

だからゆかりは、ナオの事を心配して、覗き込むようにして声をかけていた。

「う？ うん、別に・・・」

しかし、ナオのこたえは、なまず返事、別にどうってということない顔をしている。

だが、やっぱりおかしいのだ、やはり何か躊躇っているような気がする。

だからゆかりとモモは、先程から気になっていた、ナオの手をしている新聞の包みを凝視していた。

ナオは、待ち合わせの場所にきたときから、その新聞包みを持っていたのだ。

そして先ほど、駅前の花屋で菊の花を二十本も買っている。そうすると、一体、何しにこの公園にきたのかと疑問に思う。

まさか、あてもなく、ただ公園を見回るためではないだろう。

だからゆかりは、不審に思い、その新聞包みの中身は、何なのかをナオに問いただしていた。

「・・・これは線香よ」

すると、ナオは少々、照れた笑いを浮かべながら、その新聞を開いて中身を見せていた。

そこには、ナオの言うとおりの線香が一束とライターが無造作に顔をのぞかせている。

そして、さらによく見ると、仏壇に置かれる位牌が一つナオの手に握られていた。

「ナオ、あなた・・・？」

それを見るとゆかりは、一瞬、怪訝な顔をしたが、ふと思い当たる節があるのでピンと来ていた。

「あなた、もしかして、お墓参りにきたの？」

そう、線香とライター、それに花、これだけのものを持参したということは、お墓参り以外、考えられない。

「でも、どうして、お墓参りなんか」

モモが言う。

今は、別に彼岸やお盆でもないのに、この時期、どうしてお墓参りなんかとモモが思うのも不思議ではない。しかも、それほど関係のない、ゆかりやモモを誘ってなんて、どうしてなのかと怪訝だろう。まあ、ゆかりとモモにしてみれば、どうせ暇なのだから、ナオに対して付き合っただけでもないが、今日、墓参りにくるその本心が聞きたかった。

だがその時、ゆかりはともかく、モモはあることに気付いていた。

そう、ナオは、亡き父母に、報告をしにきたのではないかと、

「もしかして、ナオ先輩、死んだお父さんとお母さんに、今回の事後報告をするつもりなんですか？」

だから、モモはそう言って、ナオの真意を確かめていた。

すると案の定ナオは、ウンと頭をうなずき、それを肯定していた。

「そうよ、私ね、勅使河原をようやく捕まえて、引導を渡したでしょ。だから、仇を討つ

ことが出来たって、一応、報告しようと思ったんだけど、やっぱり、ここまで来てやめようかなって思ったわ、なぜか息苦しいのよね。父と母のお墓は、この公園の外れにあるお寺の墓地にあるわ。でも、勅使河原を捕まえることが出来たって、報告しても、あまり意味ないんじゃないかと思うのよ。どうせ二人は死んでもうこの世には居ないことだしね」

そう言うとナオは、まるで落胆するかのように、俯いていた。

しかし、あれから勅使河原と鎌田、磯貝、ウォンとそれら他の一味が、その後一体どういう事になったのかをここで明かすと実はこうだ。

品川埠頭の貨物船で、特務機関と銃撃を交えていた宮坂の部下たちは、その後、結局のところ、特務機関の隊員に拘束され逮捕されてしまっていた。

宮坂の部下たちは、特務機関に対し、必死の抵抗を試みたのだが、長引いた銃撃戦の中で最終的には弾切れになり手を挙げて投降することしか出来なかったようだ。

しかし、全員を手際よく、逮捕できたわけではない。

宮坂の部下たちと、特務機関が銃撃戦をしている最中、その中の何人かは、船尾の舷側に設置されたタラップから逃走を図っており、そのままどこへともなく姿を晦ましてしまった者も何人か居たのだ。

だが、それであっても、ほぼ八割方の確率で、黒峰会の一味を逮捕できていたのは幸運だったのかも知れない。

それから、鎌田や磯貝、それにウォンに関してはこうだ。

鎌田、磯貝は、コンテナ置き場でナオとゆかりによって、気を失い仕留められていたが、その後、そのコンテナ置き場に駆け付けてきた佐渡一本部課長と関谷莞爾、そして数人の特務隊員等によって発見され、やはり身柄を拘束されていた。

彼らが発見された時、鎌田と磯貝は不様にも気絶して、白目をむいていたが、その後、課長の報せによって応援に駆け付けた警視庁の刑事に、その身柄は引き渡され、そのまま救急車で運ばれていったのだ。

そして、その後も、関谷莞爾がコンテナ置き場一帯を他の隊員たちとともに、見回っていると、薄暗い月の光も差し込まぬ小さなコンテナの影でうずくまって震えているウォンの姿を発見したのである。

ウォンは、発見された当時、追い詰められた恐怖の為か、失禁して自分のズボンを濡らしていた。

ナオとゆかりは、その事を知らなかったが、彼はどうやら意外と気の小さい男であっただらしい。

人身売買のブローカーという犯罪行為に手を染めている割りには、情けない末路だが、やはり逮捕されることは免れなかった。

そして肝心の宮坂こと、勅使河原である。

彼は、コンテナ置き場内の、奥まった空き地のようなところで、ナオと決着を付けることとなったが、ナオをナイフに塗られた痺れ毒で体の動きを封じても、結局のところ彼女の踵落としを最終的に喰らい地を舐める屈辱を味わった。

しかし、それは、ナオ一人で成し得た事ではない。ナオが勅使河原に、止めの一撃を喰らう寸前、そこへ現れた佐渡一課長の銃撃で助けられた。それがなければ、ナオはその時、死んでいただろう。

その時ナオは、仲間、しかも日頃、口うるさい上司のありがたみが痛い程判っただろう。

それで勅使河原には、引導を渡すことが出来たのは事実だったが、本当の意味での決着がついた訳ではない。

なぜなら、逮捕後は、取り調べとその後の展開によっては、裁判が待っているのだ。

それは犯罪者を裁くには、必要不可欠な段取りだ。

その過程があつてこそ、全ての決着がつくといつても過言ではない。

そして今現在、勅使河原は、取り調べの為、警視庁の留置所に拘留されている。

とにかく、後は警視庁側に、全てを任せるしかなかった。

てな訳でナオは、その報告をするために、今ここでゆかりとモモにその胸のうちを語った。

だが、その公園まで来てみて、そこで躊躇いが生じているのである。

ナオにしては、珍しいことであるが、彼女が、どんな思いを抱えてそれを躊躇うのかは判然としなかったが、その時モモはこの時期、墓参りすることは非常に賛成であった。

だからモモは、ナオが躊躇う中、こう言って勇気づけていたのである。

「ナオ先輩、いいじゃありませんか。たとえ、お父さんやお母さんが、今は亡くなって天国に行っているとしても、お墓の前で報告してあげるのは大切なことだと思いますよ。勅使河原も無事捕まって後は取り調べを待つだけだし、その考えはきっと鎮魂の一つになりますよ。だから、そう言う理由なら、早くお墓参りしてあげましょう。私たち、ナオ先輩について行ってあげますから、ねえそうしましょうよゆかり先輩？」

「ええ、」

するとモモに、同意を求められ、ゆかりも頷く。

だがナオは、やはり躊躇いがちに言うのであった。

「でも、私嫌なのよね。ここまであなた達をさそつといて、言うのも何だけど、果たして、これが供養になるのか疑問だわ。ホント言うと、母だけでもこの世に生きていてくれれば、報告のしがいがあるけど、何か虚しい気がするわ。それに怖い・・・」

だが、

「何、言っているんですか、ともかく墓参りいきましょうよ・・・」

そんなふうに、モモが半ば強引に言うので、その時、躊躇いがちなナオも、仕方なく今いる公園から足をすすめて両親が眠るお墓へと向かって歩きだすのであった。

ナオの父、高崎耕助とその母、高崎夏枝が眠っている墓は、真言宗で有名な寺の共同墓地にある。

その辺一帯は、針葉樹の木々が群生し、慰霊の場所にはぴったりだ。

今日は、平日でもあり、ナオたち三人以外、お墓参りにくる人の姿は見られなかったが、別に行楽地に来たわけではないのでそれは気にすることではない。

ナオたち三人は、その寺までくると、住職のお坊さんに許しを得て、水受けを借り受ける。

そして、寺の敷地内にある水道で水を汲むと、そのまま墓地に向かっていた。

両親の墓は、その墓地の中程にある。

この墓地は、寺の人間によって管理されているので、草が生えて荒れた状態にはなることもない。

ナオの両親が眠る墓石の場所も、例外ではなく、綺麗に管理されていた。

そして、その墓石の前に、今ナオは屈みこんで線香を焚いていた。

墓石の前には、そっと父と母の名が記された、位牌が置いてある。

それを前にして、あとは拜むだけなのだが、その時、ナオは、やはり躊躇いがちに墓石を見つめているだけだった。

「ナオ先輩、手を合わせて拜まないの？」

だから、それを見兼ねて、モモが声をかける。

しかしナオは、それには答えず、沈黙を守っていた。

「ナオ、どうしたの？」

これはゆかりの声だ。

ナオは、その声を受けても、ただ位牌を見つめているだけ。

だが、しばらくすると、ナオに変化が生じる。

鼻をすすり、微かにだが、咽び始めているのだ。

泣いている？

泣いているのだろうか？

その時、ゆかりとモモの二人は、意外な考えを思い浮かべていた。

ナオが咽んでいるということは、そうとしか考えられないような気がする。

だが、それが本当だとすると、これは事だ。

あのナオが、泣くなんて・・・

だからその意外な思いを確かめるべく、ゆかりとモモの二人は、一度顔を見合わせると、屈みこんでいるナオの後からそっと近付いてその顔を覗いてみていた。

すると、その意外な思いが的中したかのように、確かにナオは目を赤くして泣いていたのである。

幼子がシクシク泣くように、

「ナオ先輩、泣いているの？」

その為、モモは驚く反面、口で確かめるがごとく、そう言ってそっと話し掛けていた。

すると、しばらくの間があって、ナオは、それを肯定するようにさらに大きく咽び始めるのだった。

やはり泣いているのだ。

だがここに来て、ゆかりとモモの二人は、あることを思い出していた。

先ほどナオはここへ来る前、公園のベンチで、ぽろりともらした言葉がある。

それはこの時期、墓参りするの虚しいという事と、それが怖いということだ。

ゆかりとモモの二人は、その言葉を聞いた時、大して気にもとめていなかったが、今その言葉が判ったような気がした。

それは、こうなることが、ナオには、判っていたのではないかという事だ。

つまり、ナオは、父や母が死んで、その仇が討てたことを喜ぶ反面、その両親が死んで以来抱き続けていた悲しみが、堰を切って噴出してしまうのではないかという恐れだ。

ナオは、父と母が死んでも、泣いたことはなかったということ、ゆかりとモモは聞いたことがある。だが、それは悲しくなかったからではなく、泣けない思いが心の片隅に固まりとなってつかえていたからではないかと思える。

そして、そのつかえがとれて、今おそらく噴出したのだろう。

突然、父を亡くし、そして母までもが他界して、やはり突然にいなくなる。

そんな中で、ナオは、その淋しさと悲しさに耐えてきた。

つらい経験も、したかもしれない。

しかし、その境遇に埋没してしまうのではなく、ナオは、絶えずその心にいつか父と母の仇を討つ日がくるのを待ち望んでいた。

そして勅使河原の逮捕で、その目的がようやく達成されたのだ。

だが、今ナオが両親の前でその報告をするにあたって、今までの思いが走馬灯のように蘇ってきたのかもしれない。

気の強いナオの事だ、人に涙を見せることは、なかなかあるものではない。

しかし、今ここで、彼女が泣くのは、当然のことなのかもしれない。

ゆかりとモモには、その心境が痛い程よく解る。

だから、ゆかりとモモは、その時何も言わなかった。

気のすむまで、ナオには泣かせてやろうと、思ったからだ。

ナオの咽び泣く声は、だんだん強くなる。

しかし、声を上げて、泣き叫ぶことはしなかった。

そして五分後、ナオはようやく咽び泣くのを止め、やっとお墓と位牌に手を合わせて小声で何か報告している様子だった。

きっとナオの事だ、簡単な事後報告だっただろう。しかし、その報告を終えて、もう一度手を合わせ、ゆかりとモモの方に振り向いたナオの顔にはもう涙はなかった。

晴れやかな、顔をしていたのである。

だが、そこに、少し照れた観があるのは、泣いたせいだろう。

しかし、それは、恥ずかしいものではない。

ゆかりとモモの二人は、その時、そう思っていた。

「二人とも悪かったわね、こんなことに付き合わせて。でも私、すっきりしたわ、これで明日からもぼりぼり仕事に専念できる。でも、私が泣いたことは内緒よ、ここに居る三人だけの秘密にしてね」

すると、ゆかりとモモの二人は、首肯いて、

「判っているわ・・・」、「わかってまーす」と、同時に言うと、ナオの手を取りニコリと笑いかける。

するとナオもやはり照れながら、恥ずかしげに、小さく微笑んでいた。

だが、その笑い顔は、全てのウヤムヤを晴らす、あどけない笑いだったので、ゆかりとモモはその時、ナオもこんな笑い方をするのだと一瞬感じ入ったのは事実だった。

しかし、その顔は、ゆかりとモモの二人を安心させる顔だったことは、言うまでもない。

無邪気な幼子の、ように・・・

自認認証：表明表記

自認認証：表明表記

小説タイトル：ハード・ガンズ① 特務機関E X X P：下巻

著者：秋月しょう一郎

初期考案年日：1989年～1990年頃

執筆期間：2002年01月中旬頃～2002年06月中旬頃まで・・・

備考：第八回スニーカー大賞 応募作品の一作品の一つ。

(多分、選考外失格作品・・・でも当時の選考委員の先生や当時の最前衛で活躍していたプロの作家陣やスニーカー文庫編集部の方等が読んだ作品であると思う)

※画像借用：Photo by Thomas Def on Unsplash

ハード・ガンズ① 特務機関EXXP：下巻

著 秋月しょう一郎

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
